

DRAGON BALL D改

榛猫(筆休め中)

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

一星龍との死闘の末、なんとか勝利を収めた悟空。

その際、悟空は神龍と共にどこかへ飛んで行ってしまう……。

そして百年後、自身の子孫の戦いを見て悟空はその世界から姿を消した。

これはその後の悟空にありえたかもしれない話である……。

*この作品は前作、DRAGON BALL Dのリメイクです。

前作とはちよこちよこ設定が異なりますので、そのあたりはご了承ください

目次

番外編！

遂に潜入！大英雄の今！（本編関係なし）

孫悟空活躍記（本編）

異世界の英雄！孫悟空爆誕！

冥界からのSOS！少女を救え孫悟空

天界を救え！魅せろ本場のかめはめ波

！

悟空転生！憑依先は高校生！

！

新たな出会い！イツセー、悪魔たち

と出会う

！

二度目の転生！甦れサイヤの力！

64

麗しのシスター！追放の魔女アーシ

ア・アルジエント

はぐれ悪魔討伐！バイサーVSイツ

セー！

アーシアの危機！友人を救え兵藤一誠

！

今を楽しめ！アーシアの希望の一日！

！

攫われたアーシア！立ち上がれ孫悟空

！

友を救え！敵地へ乗り込め兵藤一誠

！

！
——
141
因縁の再開！アーシアを救えイッ
セー！
——
147
目覚めよサイヤの力！月夜に響く大猿
の咆哮！
——
157
神龍の秘密！アーシア悪魔に転生！?
179
卒業の二人！使い魔デビューのイッ
セーとアーシア！
——
200
リアスの乱心！そして現れる謎のメイ
ド！
——
217
リアスの婚約者!?ライザー・フェニッ
クス登場！
——
235

十日後に備えろ！イッセー流の山修行
！
——
262
探せ亀石！見つけられなきやご飯抜き
!?
——
273
本格開始！悟空とやる体術修行！
280
ゲーム当日！リアスvsライザー！
291
見せつけろ！イッセーと小猫のコン
ビネーション！
——
296
小猫散る!?怒りに燃えろ兵藤一誠！
——
306
超覚醒！目覚める伝説の最強戦士！

一時の平和、紅髪のお嬢様の決意
325

芽生える憎悪、壊れ始めた日常！

336

復讐魔木場！イツセーの幼なじみ登

347

他勢力の来訪者！幼馴染は聖剣使い

！?
363

サイヤ人VS聖剣！勝利の女神はどち

らに微笑む!?
375

聖剣を破壊せよ！悪魔と聖剣使いの

共同戦線！
384

悪魔vsはぐれ悪魔払い！登場は

まだか！兵藤一誠！
394

迫り来る危機！駒王を護れグレモ

リー眷属！
407

壮絶バトル開幕！赤龍帝vs墮天使幹

部！
419

二天龍の会合！
429

戻ってきた平和。保護者グレイフィア

の授業参観！
434

始まる授業参加！魔王少女との初会合

?
453

魅惑の魔法少女!?その名はマジカル★

レヴィアたん！
463

- 下級V S 魔王!! 氷の魔王セラフォル
レヴィアタン!! 471
- 授業参観終了! そしてやってくる紅髪
の家族! 481
- もう1人の僧侶! 目覚めよ眷族一の稼
ぎ頭! 487
- 新戦力は女装つ子? 戦力強化だグレモ
リー眷属! 493
- 後輩を知れ! ギヤスパ一の持つ神器の
力! 498
- 心の壁をぶち破れ! 物語る銀髪従者
510
- 長年越しの再会! 一誠と天使長!
510
- 三会谈開始!! 動き出す影の組織!!
524
- 最悪の襲撃! テロ集団禍の団!!
556
- 反旗の白龍! 赤V S 白! 561
- 結んだ平和と新たな来訪者!
冥界の夏休み!! 修行は後だ!! 586
- 冥界にきたぞ! どこでも変わらない
兵藤一誠 614
- 謎のちびっこミリキヤス、リアス母親
に挨拶だ! 619
- ヴェネラナの特訓!! マナーを覚えよ
619

兵藤一誠!!

627

若手悪魔会合!! リアスの従兄弟サイ

ラオーグ・バアル!!

637

一誠大絶賛!! ソーナの夢と悪魔の学

校

647

修行だグレモリー! 亀仙流修行の開始

!!

654

昼は先生! 夜は修行! 兵藤先生は大忙

し!

667

番外編！

遂に潜入！大英雄の今！（本編関係なし）

「皆様、おはようございます！今回は以前から何度もMr.サタンと共に世界を救った英雄！孫悟空さんの今を本人には知らせず、周りに聞いていこうと思います！
では、早速行きましょう！」

【リアス・グレモリーの場合】

記者「孫悟空さん：失礼、兵藤一誠さんに出会ったきっかけは何ですか？」

リアス「そうですね、彼が死に際に私を呼んだので召喚に応じて行ったときでした」

記者「ほ、ほう：なるほど、では、なぜ一誠さんをスカウトしようと思ったのです

か?」

リアス「あの子の持つ力に興味があったからですわ、今はあまり見せてはいないけれど将来大きく伸びそうですから」

記者「ふむふむ、では次です。一誠さんは貴女にとってどんな存在ですか?」

リアス「可愛い下僕ですわ」

記者「下僕ですか…。では最後に一誠さんに一言お願いします」

リアス「イツセー、もつともつと強くなつて最強の兵士ポーンになりなさい」

記者「ありがとうございます。では次の方お願いします」

【姫島朱乃の場合】

記者「質問です。兵藤一誠さんと出会ったきっかけは？」

朱乃「オカルト研究部の部室ですわ、部長がと共楽しみにしていたのが印象に残っています」

記者「ふむふむ、一誠さんは普段何をしているのですか？」

朱乃「そうですわね、依頼があるときは町中を走り回っていますけれど、暇なときはよくトレーニングをしているのを見かけますわ」

記者「こちらでも欠かさないのですね、次です。貴女から見て一誠さんはどんな存在ですか？」

朱乃「可愛い後輩であり大切な仲間ですわ」

記者「ありがとうございます。では最後に一誠さんに一言」

朱乃「イツセーくん、頑張るのは良いですけどあまり無理はなさらないでください
ね」

記者「ありがとうございました。では次の方に移ります」

【木場祐斗の場合】

「まず初めに普段の兵藤さんはどんな感じですか?」

木場「誰にでも気さくで楽しそうに話してますよ、後はトレーニングですね」

「ふむふむ、では一誠さんと出会ったきっかけは?」

木場「部長に頼まれて兵藤くんを迎えに行ったときです」

「なるほど、次です。貴方は一誠さんをどう思っていますか？」

木場「大切な仲間であり友人だと思ってます。彼がどう思っているのかはわかりませんけどね」

「ふむふむ、では最後に一誠さんに一言」

木場「兵藤くん、まだ知り合ったばかりだけどこれからよろしくね」

「ありがとうございます。では、次の方に移ります」

【塔城小猫の場合】

「兵藤一誠さんと出会ったきっかけは何ですか？」

小猫「…… 祐斗先輩が部室に連れて来た時です」

「ふむ、一誠さんは皆さん暇があればトレーニングをしているとお聞きしましたがどんなことをやられているのですか?」

小猫「…… 主に筋トレです。後、校舎裏でよく素振りをしていますのを見かけます」

「なるほど、次です。あなたは一誠さんをどう思っていますか?」

小猫「…… 努力家の修行馬鹿です」

「な、なるほど…… では最後に一誠さん一言お願いします」

小猫「…… スケベ癖が治ったのはいいことですけど、その修行癖をなんとかしてください」

「あ、あはは…… ありがとうございます。これにて取材を終わらせていただきます」

「皆さま如何でしたでしょうか？孫悟空さんの今は…」

私は少し信じられないであります。それでは、またどこかでお会いしましょう！」

孫悟空活躍記（本編）

異世界の英雄!孫悟空爆誕!

ナレーション【界王】

龍王神界…。

そこは神々ですら立ち入ることのできない神龍達の世界である。
そしてそこに件の青年、孫悟空はいた。

「ダッ!ダリヤアツ!!デエリヤアア!!」

【ヒュウウウウ…ドゴオオオン!!】

「がはっ!!」

悟空の蹴りで相手をしていた者が地面に叩きつけられる。

「へへへっ今回はオラの勝ちだな！パイカーハン」

地上に降りてきた悟空が組み手相手にそう声をかける。

パイカーハンと呼ばれた青年も立ち上がると軽く笑って答える。

「ああ、だが次は負けんからな」

「ああ、楽しみにしてっぞー！」

そう笑い合う二人に近づくものがいた。四星龍だ

「また組手か？お前達」

そう声をかけられて悟空が四星龍の方に振り向く。

「おお！パイカーハンの奴、メキメキ実力付けてきてっからな！四星龍も組手すつか？」

「いや、止めておく…それよりも悟空、一星龍がお前を呼んでいたぞ？」

「オラをか？なんかあったんかな？」

と、そこでパイカーハンが話に入ってくる。

「また地球でヤバい奴でも出たのか?」

しかし四星龍は首を横に振り否定する。

「いや、別段そう言ったことは聞いていないが……どうやら悟空、お前に重要な話があるらしい」

「そうなんか?分かった!んじゃ、ちつと行ってくる!」

四星龍達に別れを告げ、悟空は一星龍の元へと向かうのだった。

ある建造物の中に入った悟空は中で待っていた人物に声をかけた。

「オッス!一星龍!」

「…来たか、悟空」

一星龍はゆっくりと悟空の方へ顔を向ける。

「ああ、話は少し四星龍から聞いてる、オラに話ってなんだ？」

「なに、大したことは無い、お前に地球に行ってもらおうと思っただけ」

その言葉を聞いた悟空は驚きの声を上げる。

「ち、地球って… また悟飯達に会えるってことなんか？」

しかし、一星龍は首を降って否定する。

「いや、お前の知っている地球ではない…。いうなれば別次元、パラレルワールドの地球だ」

「ば、パラレルワールドオオオオ?!?!? ってなんだ？」

【ガクッ】

流石の一星龍もこれにはズッコケる……。

「ま、まあ、行ってみればわかる……」

「んゝゝ。そつか!ならいつか!」

理解したのかしていないのか分からないが納得する悟空。

「ならばさっそく向かってくれ、行き方はその穴から落ちれば行けるからな」

「ち、ちよつと待ってってくれよ!今から行くんか!」

「そうだが?」

「ぜめてパイカーハンに一言言ってからさ」

「あやつには私から言っておくから問題ない」

「おお、それもそっか！分かったんじや行ってくる！」

そうして悟空は金色に光る穴の中へと飛び込んでいくのだった。

side out

sideミカエル

飛び交う魔力弾にブレス……。

私達は今戦争の真ただ中にいます。

相手は神にも匹敵するといわれている二天龍。

どうしてそんなものの相手をしているのか、それは……。

天界、グリゴリ、冥界の三大勢力が大戦争をしている時でした。

突如現れた二匹の龍が暴れまわりながら戦場を引つ掻き回し始めたのです。

二匹の争いに我々は戦争どころではなくなり、先にあの二匹をどうにかしようとする手
結ぶことになりました。

三勢力が団結して二匹に挑みにかかるると二匹は『たかがカラスや蝙蝠の分際で調子に
乗るな』と逆切れを起こし我々を屠っていききました。

「おい!どうすんだ?!このままじゃ俺達全滅だぞ!何かいい案はないのか!」

必死に攻めながら墮天使総督のアザゼルが叫びます。

それにこたえるように叫ぶのは魔王ルシファア、それに我らの神、ヤハウエ様でした。

「そんなのがあんならとつくにやっている!何かないのか!天界の神!」

「倒すのは難しそうですが…封印ならば可能でしょう、ですがあんなに暴れられて
は……」

「それじゃあどうしようもねえじゃねえかよ!!クソッ!ここで終わりなのか?」

私達が絶望に吞まれたその時でした。

二天龍の前に立ちふさがる者がいたのです。

「おめえ達！これ以上暴れんじゃねえ！まだやるってんならオラが相手になつぞ！」

そう話すその者は青と黄色の道着上下にカンフーシューズそして尻尾を生やした奇抜な格好をした青年でした。

その言葉を聞いた二天龍はイラついたように話します。

「お前が相手になるだど？ふざけるな！消し炭にしてくれろ！」

赤い龍、赤龍帝ドライグが紅蓮の巨大なプレスを青年に向けて放ちます。

「ありやまずいぞ！おい！そこのお前！避ける!!」

アザゼルが青年に叫びます。ですが青年は微動だにせず……

「こんなもん避けるまでもねえ！んぐぐツツ!!」

なんと赤龍帝のプレスを受け止めたではありませんか!!

「んぐぐぐぐツツ!!ダアアアア!!」

【バチイイイインツツ!!】

「おいおい、何て野郎だ… 赤龍帝のブレスを叩き潰しちまいやがったぞ…」
私達が呆然としているなか、青年は二匹を睨みつけて言います。

「やるってんだな? ならオラも全力で行くぞ!! はあッ!!」(ドンッ)

青年が叫ぶと一瞬の内に青年の姿が変わっているではありませんか!

髪は金色に染まり後ろに伸び、顔は先程とは比べ物にならないほど厳ついものへと変わっていました。

「さっさとカタアつけてやる、だりやああああ!!」

掛け声とともに青年の姿が消えます。

「なっ?! 消えた! どこだ!!」

赤龍帝が慌てて青年の姿を探します。すると…

「こつちだ! だりやああああ!!」

赤龍帝の頭の上に現れた青年は勢いよくその頭を蹴り落とします。

「ぐおおおつ…!!」

「まだだ！だりやつ！でりやりやりやりやッツ!!」

今度は赤龍手の真下に現れるとその巨体を蹴り上げ凄い勢いでラッシユを叩き込んでいきます。

「人間風情が調子に乗るな！」

呆気にとられていた白い龍、白龍皇アルピオンも青年にプレスを放ちます。

しかし青年は赤龍帝を力いっぱい蹴り落とし白龍皇へぶつけた後に両手を構える
と……

「かあ…」

「めえ…」

「はあ…」

「めえ…」

そこまで言うとうと青年の手の中に蒼い光が灯り出します。

「波アアアアアツツ!!」

両手を着きだして青い閃光のようなものを放ちそのブレスを消し去るとそのまま二天龍に命中させました。

『グオオオオオオ…!!』

二天龍が青い閃光に吞まれてがき苦しんでいます。

「こいつで終わりだ!龍拳!!爆発!!」

そう青年が叫んで二天龍に突っ込んでいきます。

すると、どうでしょう?青年の身体が黄金に輝く龍へと変わり、二天龍を呑み込んだではありませんか!!

『グアアアアアアア!!!』

中からは二天龍の断末魔が聞こえていました。

そして龍が消えると、そこにはぐったりとして動かなくなった二天龍の姿が……

「今が好機です！二天龍を封印します！」

ヤハウエ様も指示で私達は即座に二天龍の封印を始めました。

そして封印が終わった頃、お礼を言うためにあの青年を探してみました但那姿はどこにもなかったのです。

一体あの青年はなんだったのか、それにあの黄金の龍は……

私達はあの龍に敬意を表し……こう呼ぶことにしました。

『神龍』……と

冥界からのSOS!少女を救え孫悟空!

あの大戦から五十年が経ち、悟空はある森の中で目覚めていた。

「くあ…にしても、変わったもんだなあ…前までポロツポロだったのに」
そりゃあ五十年も経っていれば復興もするわい…お主が寝過ぎなんじゃ…。

「ひっでえなあ…界王さま…仕方ねえじゃねえかよ…ん!？」

どうかしたのか？悟空

「気配を感じんだ…つてか界王さま、ナレーションは良いんか？」

おお、そうじゃったわい…。

「しつかりしてくれよ…界王さま……」

お前に言われたくはないわい!

ゴホンツ……悟空が気配に気づき正体を探っていると、目の前を傷だらけの女が走り

去っていった。

「待て！逃がさんぞ！」

「旧魔王派は残らず始末する！」

そう言いながら、後ろから数人の男達が走っていく。

「なんだありや…あれじゃまるで弱いものいじめじゃねえか、オラがいつちよ懲らしめてやる！」

そう言うのと悟空は男達の後を追っていくのだった。

s i d e o u t

s i d e g u r e i f i a

もうどれほど戦い続けただろうか……

私、グレイフィア・ルキフグスは旧魔王派として新魔王派と戦っていた。

しかしある時敵の策略に嵌ってしまい、仲間が深手を負ってしまう。

私は仲間を逃がすため、敵の注意を引きつけるべく……一人囲をかって出た。

だが、その最中、私自身も敵の攻撃を受けてしまい深手を負ってしまう……。

それでも何とか生き延びて数日後、私はある森の中で身を隠していた。

傷を癒すためだ……もう、身体も心もズタズタだった。

新魔王派にだけは殺されてなるものか……と、それだけを心の支えにして生きてきた……。

しかし、運悪く新魔王派の追手に見つかってしまい逃走を図った。

だが、もう魔力は底をつき、体力ももうほとんど残っていない……。

「くっくっ!!」

「待て!逃がさんぞ!」

その声と共に一発の魔力弾が私に被弾する。

「アグッツ!!」

その痛みと勢いで私は吹き飛ばされ倒れてしまう……。

近づいてくる男たち、その顔は下卑たものだった。

「へへっ手間取らせやがって」

「これでお前はお終いだ、旧魔王派は根絶やしにする！だがその前に…」

「お前で楽しませてもらうぜ…グへへ」

こんな所でこんな男たちの慰み者になるくらいなら舌を噛み切って死んだほうがマシだ…。

と、舌を噛み千切る準備をしたところで一つの影が私の前に立ち塞がった。

それは青と黄の上下道着にカンフーシューズ、ボサボサの髪をした青年だった。

しかし私が驚いたのはそこではない…

その青年の腰辺りから生えている尻尾、私はそれを見てある光景を思い出した。

それは先の大戦の時…。

二天龍を相手に壊滅的な被害を受けていた私達^{三天勢力}を颯爽と現れ圧倒的な実力で二天龍に鉄槌を降り私達を助けてくれた伝説の龍戦士…。

その英雄の姿に酷似していたのだから…。

だが、あの英雄がいたのは五十年も前……人間であるならば彼はとうの昔に寿命で亡くなっているはずなのだ。

私が混乱しているなか、その青年が男たちを睨みつけて話し出した。

「おめえ達何してやがんだ!コイツもうボロボロじゃねえか!」

青年の言葉に男たちはあざ笑うかのように答える。

「何をしているだと?見てわからんのか、悪を肅正しようとしているのだ」

「悪だと?何言ってるんだ!コイツが何したってるんだ!」

「ほう、どうやらそいつの事を知らないようだな、そいつは旧魔王派、言うなれば悪人だ」

「コイツが悪人?」

青年が不思議そうに私を見てくる。

「誰だか知りませんが早く逃げなさい……巻き込まれないうちに……」

そうだ、関係のない者を巻き込むわけにはいかない。

私は青年の眼を見据えてそう言った。

すると、青年はニツと笑むとまた男たちに向き直った。

「分かったか？ならばさっさと退け」

これでいい、青年は巻き込まれることはない……。

私が心中で安堵していると、次に青年の口から出た言葉はとんでもないものだった。

「……嫌だといったら？」

「ほう、ソイツが何者かを知ってなお断るか、いいだろうその女共々消してくれる!!」

そう叫ぶと男の一人が魔力弾を青年に向けて放つ。

「やめなさい！無関係な者を巻き込まないで！」

私は叫ぶがもう遅い……。青年は避ける素振りも見せず、飛んでくる魔力弾に当たった。

「ツ!!」

吹き荒れる爆風……それを防ぐように私は手で顔を覆う。
間に合わなかった……無関係な者を死なせてしまった……。
私が悲痛に苦しむなか、男たちは高笑いをしていた。

「はーっはっはっは!馬鹿が!我らに逆らうから悪いのだ!次はおm……ツ!」

高笑いしていた男たちが不意に笑うのを止めた。

そして驚いたように先程の爆煙を見つめている……。

何があったのかと私もそちらを見る、すると……。

「……ニッ!」

爆煙が晴れそこに立っていたのは先程魔力弾に呑まれたあの青年だったのです。
しかも体には傷一つ付けず、不敵な笑みで男たちを見ている青年。

「チッ一斉にかかれ!!」

男の一人の指示で男たちは一斉に魔力弾を青年に放ちます。

しかし青年はやはり避けようとはせず、片手を魔力弾に向けて構えると……?
?

「ハッ!!」

その一言の掛け声と共に青年の手から見えない何かが放たれると魔力弾達は綺麗に消失してしまう。

「な、なんだと!？」

「今度はこっちからいくぞ! だりやあああああ!!」

そう言うとき青年は男たちとの距離を瞬時に詰め、一人を一撃で沈めてしまう。

「ガッ・・・!!」

「まだまだいくぞ!」

そう言うとき青年は残像ができるほどの速さで動き、追手の男たちを全て一撃で沈めてしまった。

「まったく、んな馬鹿なことやってねえで働け!」

そう最後に呟くと青年は思い出したように私のもとに来た。

「よっ！おめえでえじょうぶか？」

その青年を見上げて私はなんとか答える。

「ええ、お陰様で。それより、何故助けたのですか？」

私は疑問を素直に投げかけてみる。

「ん？どうしてって。目の前に困ってる奴がいたら助けんのは当然だろ？」

「ツ!？」

その言葉に私は驚愕していた。

悪魔は基本、自身の欲に忠実だ。

助ければそれ相応の見返りを要求してくるものだ

しかしこの青年にはそれが無い、混乱しないわけがない。

と、私が戸惑っていると青年は思い出したように懐をゴソゴソと弄り出すと何かを差し出してくる。

「ほれ、コイツを食え」

そう言つて差し出された物は一粒の小さな豆だった。
こんなものを食べてどうしろというのだろうか？

「あの、これは？」

疑問をそのまま口に出して聞いてみる。

「そいつは仙豆つつつって一粒食えば元気いっぺえになるすげえ豆だ！まあ、とにかく食つてみる」

訝しみながらも青年に促されるままに私は仙豆と呼ばれた豆を口に含み呑み込む。

するとどうだろう、あれだけ重かった体が嘘のように軽くなつており、あちこちに出ていた傷も綺麗に塞がっているではないか！

「ツ!?、これは…!?」

私が驚くのを他所に青年は満足そうに頷いて話す。

「おー！元気になったみてえだな、んじや、オラはもう行くぞ！またな！」

そう言うのと私に背を向け歩き出していく。

私はその背中に慌てて声をかける。

「あの一！お待ちください！」

「ん？なんだ？」

足を止めて振り返る青年に私は続ける。

「助けてくれたお礼がしたいので私の家にいらつしやいませんか？」

そう誘うと青年は困ったような顔をして言った。

「悪い、オラ、そんな時間ねえんだ……。もしまた今度じゃ駄目か？」

「そうですか……。では、あなたのお名前を教えてください」

どうしてもこの方の事を知りたい……。そう思ったら自然と口にして出していた。

「名前か？オラ、孫悟空だ！」

その直後、突風が吹き荒れ私は目を閉じてしまう。

風が止み、再び目を開けるとそこに青年の姿はなかった。

『またな！今度は掴まんじやねえぞ？』と、どこからか青年の声が聞こえた気がした……。

辺りを見回しても見つけられなかった……

まるで一瞬にして消えてしまったかのように……。

「孫悟空様ですか……いつかまた会えるでしょうか……」

その言葉に帰ってくる返事はなかった……。

その日を境に私は旧魔王派を脱退し、悟空様の事を調べたが何も見つかることはなかった。

そんな私と悟空様が再開するのは遙か未来での話である……。

天界を救え! 魅せろ本場のかめはめ波!

少女との一件から十年の月日が経ち……。

悟空はある場所で目を覚ましていた。

キョロキョロと辺りを見回し首を傾げる悟空。

「あり? オラなんでこんなところにいるんだ?」

現地にいるお前さんが分かっておらんのか……。

「仕方ねえだろ? オラだってこんなところ来たことねえんだからさ……!!」

そんなことをしていると悟空がある気配を察知したようにある方角を見て呟く。

「……この気……まさか!」

そう一言呟くと、悟空は弾かれたようにその気配を感じた方向に向かって飛ぶのだった。

悟空が気の感じるその現場にたどり着くとそこにはボロボロになり倒れる数人の人間と膝をつき、敵を睨みつけている羽を生やした女と、悟空のよく知る者がいた。

緑と黒の体色に蟬のような外見の人型生物……。

その者の名は人造人間セル。

セルは目の前の膝を突いている羽の生えた女に向けて手を構えている。まるで今にも止めを刺そうとするかのように……。

「ッ！間にあってくれ！」

その叫びと共に悟空は気を解放し一気にセルとの距離を詰めると気を纏った拳で勢いよく殴り飛ばす。

「でりやああああ!!」

【バキィッ!!】

「なにつ!?グオツ!!」

勢いよく吹っ飛んでいくセル。

それを見て悟空は少し振り返り女に声をかける。

「よかった、なんとか無事みてえだな」

「あ、貴方は?」

「詳しいことは後だ... おめえ達離れんだ!アイツはオラがなんとかする!」

それを聞いた女は驚きに顔を染める。

「ツ!?いけません!そんなことをしては!」

「いえ、ここは彼の言う通りにしましょう、私達がいては彼の足を引つ張つてしまう...」

「ミカエル様!?!」

不意に話に入ってきた羽の生えたミカエルと呼ばれた男は言う。

「信じましょう、彼ならきつとなんとかかしてくれと…。」

「はい…。」

男の言葉で女も渋々ながら納得してくれたようだ。

そんななか、ミカエルが悟空を見て話し出す。

「天界を…この世界をお願いします…。」

ミカエルの言葉に悟空は小さく笑んで返す。

「ああ…。」

それを聞いたミカエルと女は仲間たちを連れてその場を離れていく。

ミカエルたちが離れたのを確認すると、悟空は再びセルへと視線を向けた。

「なあにやら覚えのある気を感じると思っていたら、やはりお前

だったか孫悟空」

「ああ、セル、おめえ、なんでここにいてる?おめえは地獄にいたはずだ」

「さあな?私もよく分あからん…気が付いたらここにいたのでね…それで暇つぶしに先程の奴らと遊んでいたのだよ…張り合いがなさ過ぎて一人二人殺してしまつたがね…」

「…やっぱおめえは相当な悪人だな…もう二度と生き返えねえようにオラがぶつ倒してやる」

「ほう、いいだろう、私もお前には積年の恨みがあるのでね…今ここで晴らさせてもらうでしょう」

そう言うや否や、悟空とセルの姿が掻き消える。

否、高速でぶつかり合っているのだ…。

【ドンドンドンドンドンドンドンドン!!】

二人がぶつかり合うごとに周りに衝撃波が生み出されていく。

「へっやるじゃねえか…。」

「お前もな…。」

ぶつかり合いを止め、互いに構えを取りながら言葉を交わす。

その顔はどちらも戦いを楽しんでいるようだ。

「やはり、戦いはこうやってある程度実力が近くなければ面白くない」

「ああ、オラもそう思う、だが、これで終わりだ！はあッ!!」

悟空は超サイヤ人^{スーパーサイヤ人ブル}青に変身してかめはめ波の構えを取る。

「ほう、ならば私も応えなくてはな…。」

そう言つてセルも同じくかめはめ波の構えを取り、技の名を唱え始める。

『かあ…』

『めえ…』

『はあ…』

『めえ…』

「波あああああ!!」

「波アアアアアアアアアツ!!」

悟空とセル、互いの両手から青い閃光が迸りぶつかり合う。

「ぬううううう… ツツ!!」

「はあああああツツ!!」

悟空の叫びと共に悟空のかめはめ波が勢いを増し、セルのかめはめ波を呑み込んだ。そしてかめはめ波はセルをも飲み込む。

「なん…だとツ!!チグジヨオオオ…:…」
そんな断末魔の叫びと共にセルは光の中へ消えた。

「…ふい〜」

悟空は変身を解き、額の汗をぬぐっていると…:

「あ〜」

「ん?」

背後から声をかけられ悟空は振り向く。

するとそこに立っていたのは先程の羽を生やした女だった。

「もしかして… 倒したのですか?」

「セルをか? おお、倒したぞ!」

悟空の返答に女はまたしても驚いた顔をする。

「まさか本当に倒してしまわれるなんて…」

「アイツは一度戦ったことのあるやつだったかな
(まあ、奴を倒したんは悟飯だったけど)」

「そうだったのですねー、そうそう、少し確認したいことがあるのですけどー
と、ここで悟空の姿が一瞬ブレる。

「つとお、悪りい、もう時間がねえみてえだ、そいつはまた今度にしてくれ!またな!
そう言うのと辺りに強い光が差し込んでくる。

「ツ!!」

慌てて目を覆う女達…。

光が収まり再び目を開けるとそこには悟空の姿は無くなっているのだった。

side out

「不思議な人でしたねー。：。」

突然現れて突然いなくなる。何とも不思議な人物だった。：。：。

「用件は聞きましたか？」

そんな声が聞こえて振り返るとミカエル様がいました。

「いえ、時間が無いと行って消えてしわれましたのでー」

「そうですか。：。きちん確認しておきたかったですが残念です」

ミカエル様がそう話している中、私は別の事を考えていました。

(せっかく助けてもらったのにお名前聞けませんでしたわ)

私は空を見上げてポソリと呟きます。

「今度会ったらお名前聞かないといけませんねー」

それが数百年後になるなど、今の私には知る由もないのでした。

悟空転生！憑依先は高校生!?

天界での一件から数千年……。

悟空はある空間にいた。

「ん？なんだこりゃ？」

現在悟空がいるのは冥界でも天界でも、はたまた人間界でもない。
あるのはただ真つ白な空間だけ……。

「どうなつてんだこりゃ、オラ夢でも見てるんかな？」

そう呟きながら悟空は考え込む。

通常、悟空の眠りは夢を見ることはない。

それは体の機能全てが休眠状態に入るからなのだ。

所謂、仮死状態という奴だな。

その悟空が今夢を見ておる、これは何かありそうじゃのう……。

「ん、ま、いつか!とりあえず進んでみるとすつか!」

一人呟き、悟空はその空間を進み始める。

少し歩くと、前方に大きな影が見えてきた。

「ん?あれって…」

悟空が近づいてみるとそれは超ドラゴンボールから呼び出されるはずの超神龍であつた。

「おめえ超神龍じゃねえか!どうしてこんなところにいるんだ?」

すると超神龍は静かに喋りだす。

『私がお前をここに呼んだのだ…』

「え？おめえがオラをか？何かあったんか？」

スーパーシエンロン
超神龍の言葉に首を傾げる悟空。

『用があるのは私ではない、この者だ…』

そう言つて超神龍スーパーシエンロンは下を見る。

「ん？下のモン？」

そう言われて悟空も超神龍スーパーシエンロンの足元を見る。

するとそこには、未来トランクスくらいのツ少年が立っていた。

「ん？おめえ誰だ？」

「初めまして孫悟空さん、俺、兵藤一誠つて言います！すげえ本当に空孫悟そつくりだ
！」

「お、おお、初め…まして…」

兵藤一誠と名乗った少年は興奮しながらもにはペコリと頭を下げる。

その勢いにたじろぎつつも、悟空も慌てて下げ返す。

「それで、おめえ、オラに用ってなんだ?」

「はい、悟空さん、実はあなたにお願いがあるんです」

少年、一誠は真面目な顔になりながら話す。

「実は俺、ついさつきある奴に殺されちゃったんです…」

「なっ!?なんだって!?!」

一誠の口から出た言葉に悟空は驚きの声を上げる。

「落ち着いてください、話はまだ続きがあるんすよ」

そう言われ、悟空は口を閉じる。

「それで俺は殺されちゃったんですけど、俺の身体の寿命はまだかなり残ってるらしいんです」

『らしい』と曖昧な表現に悟空は少し首を傾げる。

それを無視して一誠は話を続ける。

「それですね、悟空さんにはその俺の身体で転生してもらいたいです」

「て、転生？」

『簡単に言うならばお前がこの者の身体で生き返るという事だ』

言葉の意味をよく理解していない悟空に超スーパー神龍エンロンが補足する。

その言葉でようやく意味を理解したのか悟空は再度驚きの声を上げる。

「いつ!? お、オラがおめえの身体でか!? 出来ねえよ、そんなこと..」

「お願いします! 俺はもうあの身体で過ごすことはできないんです!」

土下座しそうな勢いで一誠が頭を下げる。

『私からも頼む.. この者はまだやらねばならないことがたくさん残っているのだ..』

「どうか、お願いできないだろうか?」

「そこまで言われてしまえば悟空も断ることなど出来ない。

しばらく考え込んだ末、折れたように頷いた。

「分かった!おめえの願い引き受けてやる!でも、本当にオラでいいんだな?」

「!ありがとうございます!はい!悟空さんだからこそです!」

首が挽げそうなほど嬉しそうに縦に振る一誠。

「そっか、なら、おめえの残りの人生オラが後悔なく生きてやる!まかしといてくれ!」

「本当にありがとうございます!」

『私からも礼を言う、ありがとう、孫悟空』

「いいって!気にすんなよ!」

『これではお礼には足りないかもしれないが、転生先の身体でも気のコントロールがで
きるようにしておいた』

「お！サンキュー！スーパーエンロン超神龍！助かつぞ！」

『それでは早速お前をその体に憑依させるぞ』

「ああ！よろしくな！」

「すみません、どうか、俺の身体のこと、よろしくお願いします」

「ああ、まかしとけ！んじや、またな！」

一誠の言葉に悟空が返していると超神龍スーパーエンロンの瞳が赤く輝き、悟空の姿がその場から消えるのだった。

一誠は先程まで悟空がいた場所を眺めて呟いた。

「・・・本当にそっくりな人だったな・・・」

『空孫悟にか?』

超^{スーパーエンロン}神龍がその眩きに返す。

「はい、まさかあそこまで似ているなんて思ってませんでしたから・・・でも、最後の最後に憧れに会えてよかったです・・・」

『そうか・・・』

そう話す一誠の顔には一片の悔いもないほど清々しい顔をしていた。

「さて、俺は十分満足しましたし、そろそろお願いしていいですか?」

『分かった、では行くでしょう』

「お願いします」

そう言うのと、一誠は超^{スーパーエンロン}神龍の背に飛び乗り、超^{スーパーエンロン}神龍と共に天高く昇っていき消え

るのだった。

悟空は微睡みのなか、重い身体を動かし起き上がった。

「・・・どうやらうまくいったみてえだな」

身体の調子を確かめるため、軽く手足を動かしてみる。

そしてハタと気づく。

「うわ・・・コイツは酷つでえな・・・血だらけじゃねえか」

傷は超スーパージョシニコロ神龍が気を聞かせて直しておいてくれたようだが、どうやら血を流しすぎたらしく身体はかなり重たい。

「……ッ!…こりや、早めに帰って休まねえとな」

そう言つて体の記憶を頼りに家に帰ろうとした時だった。

「ど、…どうということなの?これ…」

そんな言葉が聞こえ、ふと後ろを振り返ると、そこには紅の髪をした女が驚きの表情を浮かべて腰を付いているのだった。

新たななる出会い！イツセー、悪魔たちと出会う

sideリアス

私は今の目の前で起きている状況の困惑していた。

つい今しがたまで死んでいたはずの少年がまるで何事も無かったかのように起き上がったのだから……。

こんな状況になったことを説明するには三十分ほど時間を遡る。

学校が終わり放課後、私が部室で依頼が来るのを待っていると、一件の私宛の依頼が飛んできた。

私はその依頼主のところに行くために依頼主に手渡した簡易魔方陣の元に転移した。

しかしそこにいたのは依頼者ではなく、すでに殺され血まみれになって地面に倒れている少年の姿だった。どうやら家の学校の生徒らしい……。

と、そこで私は面白いものに気が付いた。それは少年の中に眠るその力だった。

「へえ、面白いじゃない…。あなた私の為にいいk…。」

そこまで言いかけたところで目の前の少年に異変が起きた。

なんと、先程まで確実に死んでいたはずの少年がまるで何事も無く起き上がったのだ…。

少年は私には気づいていないのか、自身の身体の調子を確かめるように手足を動かしている。

「うわ…。コイツは酷つでえな…。血だらけじゃねえか」

自身の事であるはずなのにどこか他人事のように呟いている。

そう言つて動き回る少年、でもどこか動きが鈍い、

どうやら出血の影響で体は本調子ではないらしい…。

「くっつ…。こりや、早めに帰って休まねえとな」

そう言つて歩き出そうとする少年に声をかけなくてはと思考を巡らせる。

「ど…どういふことなの？これ…」

とつきに出てきたのはそんな言葉だった。

バカあ！もつと他に言うことがあるでしょう!!なんでよりもよつてそんな事しか言えてないのよ！

私が内心で盛大に頭を抱えていると、少年が私に気づいてこちらを振り向くのだつた。

side out

声がかえり振り向くと、そこには紅髪の女が座り込んでいた。

「どうやら一誠が生き返るところを見られたらしい。」

しかし、一誠はそんなことはどうでも良いのか別の事を考えていた。

(この紅けえ髪って…)

そう、一誠にはこの人物は見覚えがあつた。

否、正確には身体の記憶が覚えていたというのが正しいだろう。

一誠はその女に近づき手を差し出す。

「大丈夫か? おめえ、ほれ」

「?え、ええ...」

女は最初こそポカンとしていたが、すぐに意味を理解したのか一誠の手を取り立ち上がった。

「ありがとう、それよりあなたに聞きたいことがあるのよ」

「ん?なんだ?」

「私が駆けつけた時、貴方は確かに死んでいた、でも、あなたはこうして生き返った...
悪魔の駒も無しにね。いったいどうやって蘇ったのか... 教えてちょうだい」

「え、えつとな...」

女の言葉にさしもの一誠も困惑して考える。

(素直に教えてもいいんか？それとも適当に誤魔化した方がええんかな…？)
と、どうしたものかと悩んでいると不意に…：

【グ、グウウウウウウウ…】

一誠の腹が盛大な音を立てて鳴った。

その音に困惑の表情を隠せない女。

「はははっオラ腹減っちゃった、悪りいリアス先輩、その話はまた今度でいつかな？」

「分かったわ、それじゃあまた明日の放課後に遣いを出すからその時に教えてちょうだい」

「分かった！んじゃ、またな！」

それだけ告げると、一誠は記憶を頼りに自身の家へと帰っていくのだった。

(両親か：： なんだか懐かしいな、じつちゃんと過ごしてた時を思い出すぞ：：)

そんなことを考えながら家に入っていく。

遅い時間という事もあり、両親はもう就寝しているようだった。

(腹減ったけど寝てる母ちゃんたち起こすんは悪りいもんな：：)

二人を起こさぬようそつと自身の部屋であろう部屋まで行き、一誠は空腹に耐えながら眠りつくのだった。

翌朝、一誠が目を覚ました時には二人とも起きていた。

「オッス! 母ちゃん、父ちゃん」

生前と同じように挨拶してみる。すると二人は特に気にした風もなく。

「あら、もう起きたの？今日は早いのね」

「おお、おはようイツセー」

と返してきた。

（あり？なんもなかつたぞ？なんでだ？）

一誠は帰ってきた返答に困惑し、少し思考する。

少し考えていきついたのは超スーパーエンロン神龍だだった。

どうやら超スーパーエンロン神龍だは一誠の周りの認識も整えてくれていたらしい。

（コイツはありがてえ、どう説明すつか迷ってたかな）

その後、母親の用意してくれた朝飯を食べ、一誠は学校へと向かった。

学校では兵藤の友人だったのだろう松田と元浜という男たちが一誠に話しかけてき

た。

「なあ、イッセーまたあの楽園を覗きにいかないか?」

「楽園?なんだ?それ」

松田の言葉に首を傾げる一誠。

「なについて女子剣道部の着替えを覗きに行くんだよ!」

その言葉に一誠は呆れてしまう。

(女の裸なんか見て何が楽しいんだ?)

「おめえ達、んなアホなことやろうとしてねえで、勉強しろよ?」

んなことしてつから女の一人も出来ねえんだろ?」

一誠の言葉に松田と元浜以外にもクラス全員が驚いた表情をする。

「うそ... あの兵藤があのだ二人に説教してる!」

「いつも三人そろって変態行為しかしてねえあの兵藤が……」

「お、おいどうしちまつたんだ？ イツセー、頭でも打ったか？」

「？ おお、オラちつちえ時に頭打ったけど、どうかしたんか？」

その言葉に二人は困惑の表情をしながら何を言ったらいいのか分からないようだった。

そんな一件も終わり放課後。

一誠がリアスの遣いを待っていると、一人の男が話しかけてきた。

「やあ、兵藤一誠くんだよね？」

話しかけてきたのは二年の有名人である木場祐斗であった。

「おお、そうだけんど、なんか用か?」

「リアス先輩の遣い、と言えばわかるかな?」

そう言われて一誠は納得する。

「おめえがそうだったんか、んで、オラはどうすりやいいんだ?」

「僕についてきて」

そう言って木場が歩きだしたのを見て、一誠も後を追う。

その際、周りが何やら騒いでいたが、一誠にはさっぱり理解できなかつた。

木場の案内で連れてこられたのは校舎から少し離れた場所にある旧校舎だった。

「なあ、どこまで行くんだ？」

「もうすぐ着くよ」

旧校舎の中に入り、ある部屋の前で木場が立ち止まるとその戸をノックする。

「部長、連れてきました」

すると、那珂から聞き覚えのある声が聞こえてきた。

『入ってちょうだい』

その言葉に中へと入っていく木場、後に続いて一誠も入っていく。

中に入ると、そこには昨晩であった紅髪の少女、リアス・グレモリーが妖艶に微笑んで座っていた。

「ようこそ、兵藤一誠くん、私達は貴方を歓迎するわ……」

そう言うと、リアスの背から禍々しい羽が飛び出す。

「悪魔としてね♪」

二度目の転生!甦れサイヤの力!

「そういうことか…おめえ達から感じる気が違ったんはそういうことだったんか」
特に驚くこともなく話す一誠にリアスは感心したように言う。

「気付かれていたのね、それじゃあ本題に…入る前に一つだけ聞きたいことがあるのよ」

「ん?オラにか?」

「あなたの呼び名よ、一誠って少し堅苦しいでしょ?だからもう少し呼びやすいものはないかしら?」

「うーん…呼び名かあ…はは…良く思い浮かばねえからリアス先輩達が呼びやすいやつにしてくれていいぞ」

そう言われ、リアスは少し考え込むとやがて口を開いた。

「そうね、それじゃあイツセーって呼ばせてもらうわ。さて、そろそろ本題に入りたいのだけど…」

「ああ、何でも聞いてくれ！」

「それじゃあーつめに、貴方は何者なの…？」

最初からこれが聞きたかったとでも言うように
リアス先輩は手を組んで聞いてくる

「オラか？オラ孫g…じゃなかった…。オラ兵藤一誠だ！」

聞かれたとおりに答える一誠。

「…なぜ言い直したのか気になるけれど…」

それは置いておいて、名前を聞いた訳ではないの…

聞き方を変えるわね、貴方の正体はなに？」

「オラの正体? オラ普通の人間だぞ?」

「そうなのね、百歩譲ってその返答に納得してあげる。

じゃあ、あの時の事について説明してもらえるかしら?」

「ん? あん時ってなんかあったっけか?」

【ズコツ…】

一誠の間抜けな返答にさしものリアスもずっこける…。

「……… 昨晚の出来事よ」

「昨晚? ああ! あん時のことか! うーん… 何て言えばいいかな……」

おい、悟空よ… お前どう答えるつもりだ? 素直に話してしまったらややこしくなるんだぞ?

『そんなこと言われなくても分かかってっさ界王さま…』

なら良いが…お前はたまに物事をきちんと理解していないときがあるからな…。

『でえじようぶだつて…界王さまもしつけえなあ……』

お前がそうさせとるんじゃ！

……と、そんなやり取りをした後、一誠は少し考えてから話し出した。

「簡単に説明すつと、オラはある奴に頼まれてこの身体で生きけえつたんだ。別のある奴の力を借りてな」

「ということとは、あなたはただ生き返つたというわけではないのね？」

「ああ、オラは元々幽霊みてえなもんだつたかな…ソイツに頼まれるまでこんなことになるとは思つても見なかつた……」

「そう、じゃあその力を貸してくれた別の方はどんな人なの？」

リアスの問いに一誠は首を横に振る。

「悪りいけど、それは教えらんねえんだ…そういう決まりだよ」

「そう、出来たらその方のことも聞きたかったけれどそういう事なら仕方ないわね」
リアスもそれ以上は聞こうとはせず、部屋の中に沈黙が降りる。

「なあ、昨日の話はしたし、オラもう帰っていいか?」

そう言って一誠が帰ろうとした時だった。

「少し待って、まだ用があるのよ…。」

「ん? まだあるんか?」

その言葉に足を止め振り返る一誠。

しかし次に飛んできた言葉はとんでもないものだった…。

「ええ、あなた、悪魔になってみる気はない?」

その言葉を聞いて、一誠は警戒を高める。

そう、一誠は過去に悪魔と呼ばれる者達と三度戦ったことがあるのだ…。

一人は神の悪の心が分離した、ピッコロ大魔王…。

もう一人は父のあとを継ぎ、世界を征服しようとしたガーリックJr. …。

そして最後は自身を悪魔と言ひ、自らの親に手をかけ、悟空達に襲いかかってきたサイヤ人、ブロリー…。

そんなやつらと戦ってきたことがある一誠からすれば、悪魔には良い印象は持っていない。

警戒しながらも一誠は聞いてみる

「…悪魔つちゆうんは、世界を征服しようとしたり、見境なく人を殺したりするんか？」
それを聞いたリアスは嫌悪の表情を浮かべて言う。

「そんなわけないじゃない…私達悪魔はそんな通り魔みたいなことはしないわ」
その答えに一誠は警戒を解く…。

「そっか、オラは強えやつらと戦えんなら悪魔になつてもいい」

一誠の言葉にリアスは笑顔で頷いて

「ええ、その辺りは保証するわ、

じゃあ、少しじつとしていてね」

そう言つてリアスは立ち上がると懐から小さな小物を取り出して一誠のもとまでやつて来る。

よく見ると、それはチェスで使われる駒だった。

そしてそれを一誠の胸辺りにを当てながら話す。

「これは、イヴァル・ヒリス悪魔の駒というものよ、今からこれであなたを転生させるわ」

そう言つてリアスは何やら呪文を唱え出した。

すると一誠の足元に魔方陣が浮かび上がる。

「我が名リアス・グレモリーによって命ずる…

この者を悪魔へと転生したまえ」

すると、悪魔の駒が少し紅色の光を放つたがすぐに光は消えてしまった。

「一個じゃ足りないのね…」

それなら、とリアス先輩は駒を二個、三個と数を増やしていき、八個目になった。

「まさか、兵士の駒全部使うことになるなんてね…

まあいいわ、我が名、リアス・グレモリーによって命ずる…

この者を悪魔へと転生したまえ」

そう言つて再度呪文を詠唱するリアス

すると今度は光が消えることはなくスウツと

一誠の中へと入つていった。

すると同時に一誠の身体も金色の輝きを放ち出す。

「な、なに?！」

驚いているリアス達を他所に場面はどんどん進んでいく…。

金色の輝きが一層強まり部屋全体を包み込む…。

【ポポポポポボンッ!】

まるで何かが射出されるような音がすると、光は唐突に収まる。

「いったい、なんだったの?」

困惑するリアスにポニーテールの女がある物を見つけてリアスに見せる。

「部長、これを…」

「え? 何…これ?」

それは悪魔の駒程イザイル・ピリスの大きさのオレンジ色をした小さな玉であつた…。

良く見ると、なかに小さな星が幾つも描かれている

更に困惑するリアス達を他所に木場達も困惑していた。

「あの…君、一誠くん…なんだよね?」

「…まるで別人」

「ん? 何言つてんだ? おめえ達」

一誠は気付いていないようだが、その姿が変わっているのだ…。

体つきや顔立ち等は変わってはいないが、髪型が前世での悟空のものになっているの

だ…。

「……大丈夫ですか？先輩、すごく光ってましたけど…ッ!?」
小柄な少女がそこまで言いかけて言い詰まる。

「?どうかしたんか?」

「……せ、先輩…それ…」

信じられないものを見るかのように一誠の腰辺りを指す少女…。
一誠も疑問符を浮かべながら腰の辺りに目をやる…。

【フリフリッ】

なんと、そこにはとても見覚えのあるものがついていた…。

「いいっ?!し、尻尾だ!なんでこいつが?!」
驚く一誠の頭に不意に声が聞こえてくる。

『おい、孫悟空、聞こえるか?』

と、なんとも聞きなれた声が聞こえてきた。

(この声は一星龍か、どうしたんだ?)

『ようやく繋がったか: スーパーサイヤン超神龍から話は聞いている…。お前がそちらに向かってから

何度も連絡を入れたのだが全く繋がらなかったのだ…。

とりあえずは繋がってよかった』

一星龍が安心したように話している。

(そんなことよりどうしたんだよ? 何かあったんか?)

『いや、お前の今の身体についての説明だ…』

いいか? 一度しか言わんからよく聞け』

そう言つて一星龍はゆっくりと話し出した。

『まず、今のお前は人間ではあるが

もう1つ眠っている力がある』

(もうひとつの力?)

『お前もよく使っていたらサイヤ人の力だ…

その力は人としての生が終わると自然と覚醒するようになっていく…因みに尻尾の方は収納可能にしてある

それが外に出ているときは大猿化出来るが
理性は保てるようにしておいた』

(ひえっ!?大猿化しても理性がとばねえんか!

すっげえなあ!)

『そのくらいの細工などワシにかければお手の物よ

では、そつちでの生活を楽しめ』

(ああ!ありがとな!)

それだけを伝えると、一星龍の声は遠ざかっていき消えた。

一誠が意識を戻すと少女がが心配そうに
一誠の事を見ていた。

「……あの、本当に大丈夫ですか?」

「ああ、大丈夫だ問題ねえさ!」

そう言つて一誠は少女の頭を軽く頭を撫でる…。

「えっと…イツセー?その腰から生えているものはいったい何?」

リアスが不審げに聞いてくる…。

一誠は転生は上手くいったこと、そして、サイヤ人として覚醒した事、なぜ駒が飛び出したのかを説明した。

「なるほどね…イツセーの中にはまだ他にも眠っている力があつたのね、その力が悪魔の駒の力を弾き飛ばしたのね…」

朱乃、少しイツセーを調べてみてもらえる?」

リアスは納得したように頷いてから朱乃先輩に告げた

「はい、部長 うふふ、一誠くん少しだけじつとしていてくださいね」
そう言うのと朱乃と呼ばれた女が一誠に近づいて何かを探り始めた。
何かを調べていく朱乃、しばらくして手を離し…。

「部長、分かりましたわ。一誠くんは確かに人間に良く似た種族と悪魔になっていますわ、ですが、少しだけ違うところがありました」

朱乃の言葉に首を傾げる一誠…。

「どういうことかしら?」

リアスの問いに朱乃は真顔で答える。

「一誠くんは九割がサイヤ人で一割が悪魔になっていますわ…。簡単に言ってしまうと今の一誠くんは限りなく悪魔に近い人間といったところなのですわね」

「??」

一誠が良くわからずに首を捻っていると

「要するに一誠くんは悪魔という定義には当てはまらないのですわ。あくまで悪魔に近い人間ということですよ」

それは一誠が完全に悪魔にはなっていないということだった。

「こんなことは始めてよ…まさか転生したのに

悪魔にはならないでそのメリットだけを持った

人間になるなんて…いえ、サイヤ人だったわね」

リアスが頭を抱えて溜め息をついている…。

「とりあえずグレモリーの眷属にはなっているのよね?」

「はい、部長の下僕にはちゃんとなってますわ」

朱乃のその言葉にリアスは頷いて一誠の方にみる。

「イツセー、転生は成功よ、とりあえず悪魔としての仕事を覚えてもらうからこのチラシ配りをお願いね」

そう言つて一誠に大量のチラシの束を渡してくる

「いいっ!!これ全部配るんか!?!」

「これも立派な仕事よ?お願いね」

可愛げにウインクをしながら話すリアス

「仕方ねえ!いつちよやってくつか!と…その前に朱乃…先輩、悪りいんだけどこの服と同じ柄で重い物を作ってくれねえかな?」

「え?この制服と同じ柄で重い物…ですか?」

「ああ、出来つか?」

「ええ、出来ますわ…。どのくらいの重さにすれば良いかしら?」

「そうだな、とりあえず二十キロくれえで頼む」

「分かりましたわ」

そう言うのと魔力で二十キロの制服を作り上げる朱乃。

「はい、これでよろしいですか?」

「サンキューー! そんじゃ、こいつに着て…んぐぐッ!! やっぱ重めえなあ…ッ!!」
制服の上から更に制服を着ると

一誠は二十キロ制服とチラシの束を抱え夜の町へと走っていくのだった。

麗しのシスター！追放の魔女アーシア・アルジエント

一誠が悪魔に転生して一週間が経とうという頃……。

「よしーんじや、部長！オラ行つてくつぞ！」

大量のチラシの箱を背負い、二十キロ重り制服を着込んだ少年、兵藤一誠が立ち上がる。

しかし、それはすんでの所でリアスに呼び止められる。

「イツセー、待って……もうチラシ配りはしなくていいわ」

不意にそう言われイツセーは足を止め振り返る。

「チラシ配りしねえでいいって……じゃあオラ何すりゃいいんだ？」

頭に疑問符を浮かべながら問いかける。

「あなたにもそろそろ契約を取ってもらわないとね♪それに、本来チラシ配りは使い魔の仕事なのよ…。イツセーは悪魔になりたてだったから慣れてもらうためにやってもらってたけれど…。」

「そうだったんか、つちゆうことはあれか？オラもうチラシ配んなくていいってことか？」

「まあ、そういうことになるわね」

「そっか、アレ結構良い修行になってたんだけどなあ…。」

「一誠がそんなことを眩くとリアスは苦笑、朱乃はクスクス笑って話す。

「あらあら、相変わらず修行が好きなんですね…。」

「あはは…さすがは戦闘民族…だね」

「…修行バカです」

三者三様に好きなことを言っている。

「ひつでえなあ！おめえ達……」

まあ、お主の事じゃからあながち間違つてはいないがの……。

『界王さまもかよお……』

と、そんなやり取りでひとしきり笑った後、リアスが不意に切り出した。

「それじゃあ、そろそろ本題に入るわね、今回イツセーに行つてもらうのは依頼なんだけど、実は小猫宛のものだったのよ……。けど、小猫の方も先に依頼が入つてしまつていからあなたにお願いしたいのよ」

「そうなんか？わかつた！」

「…… よろしくお願ひします。先輩」

「おお！任せとけ！」

「それじゃあイツセーくん、この上に立ってください」

呼ばれて朱乃の方を見ると、そこには大きめの魔方陣が展開していた。

「ん?ここに乘ればいいんか?」

「はい、それで依頼主の所まで一息で飛んで行けますわ」

「へえ!!すつげえなあ!んじゃ、行ってくる!」

そう言うと、一イツセーの姿は魔方陣の光に包まれ見えなくなる。

「ツ!!」

あまりの眩しさにイツセー自身も目を瞑る。

しかし、次に目に写り込んだの依頼主の部屋ではなく、困ったようにしているオカケンメンバーの姿だった。

「: : あり?」

事態がよく理解できず首を傾げるイツセーにリアスが説明してくれる。

「イツセー、残念だけれどあなたは転移できないみたいなの…。」

「へ？つてことはオラはどうやっていけばいいんだ？」

「…歩いて向かうしかないわね」

申し訳なきように言うリアスだが、イツセーは大して気にした様子はない。

「そっか、ならそうすっかな！んじゃ、行ってくつぞ！」

まるで何事も無いかのように窓の方へ向かうとおもむろに窓を開け足をかけるイツセー。

「い、イツセー？何をし…。」

そこまでリアスが言いかけたところでイツセーは窓から飛び降りる。

「「「イツセー（くん）（先輩）!」」」

メンバーたちは驚いて慌てて窓の所に駆け寄る。

すると、今しがた落ちたはずのイツセーがフワフワと浮かんで窓の所まで上がって来ていた。

それを見たメンバーは驚きで声が出ない。

「飛んだ方が早そうだからな、んじゃ、またな!」

それだけ言うといツセーは夜の空に飛んで行くのだった。

しばらく飛んでいたイツセーは依頼主の家に到着した。

家の前に降り立つと戸を軽くたたいて声をかける。

「えっと、リアスんとこの使いで来た悪魔だけんど! 開けてくれっか?」

声をかけてから少しして戸が少し開いて中から男が一人出てきた。

「・・・なんだって？」

「オツス！だからリアスの使いで来たんだって・・・ おめえ、悪魔呼んだんだろ？」

「キミが悪魔だって？嘘つけ！悪魔は魔方阵から来るはずだろ？戸を叩いてくる悪魔がどこにいるんだ」

「んなこといわれても仕方ねえじゃねえか・・・ オラ転移できねえんだからさあ」

そう話すイツセーに男はため息を吐きつつ話す。

「はあ、とりあえず入ってくれ・・・ 中で話を聞くから」

「ああ、サンキュー！」

男の後に続いてイツセーも中へと入っていく。

「それで？君が悪魔だというのは百歩譲って納得するとして、僕が呼んだのは小猫ちゃ

んだ。君じゃない」

「小猫はちつと別の仕事が入っちまって来られねえんだよ、だから代わりにオラが来たんだ」

「別の仕事か、それなら仕方ないか… それより君は何ができるんだい？」
その言葉でイツセーは少し考え込んでから答える。

「オラ気なら使えっぞ」

「ツ!? 気… だと! じゃ、じゃあドラゴン波は使えるのか!？」

『気』という単語に食いついてきた依頼主。

「ドラゴン波? どういう奴だ？」

「こういうものだよ!」

若干興奮気味に依頼主は一冊のマンガの一ページを見せてくる。

そこには悟空そっくりの青年とベジータそっくりの青年がエネルギーの打ち合いをしているというものだった。

「どっちのがドラゴン波なんだ？」

「ボサボサ髪の方だよ」

どうやらドラゴン波を撃っているのは悟空似の方の人物らしい。

「おお、これなら多分できつぞ？」

「ほ、本当かい！是非見せてほしい！」

「分かった！なら外に行こうぜ、ここだと危ぶねえかな」

「ああ、それもそうだね」

そうして二人は外に向かうのだった。

二人が訪れたのは近くの空き地であった。

「……ならいいか、そんなじゃ、ちつと離れていてくれ」

依頼主に指示を出し、先程漫画で見た通りの動きをしていく。
構えながら手に気を集中させていく。

思い描くのは先程の一場面……。

あの作品の主人公になりきってイツセーは叫ぶ。

「いくぞー!ドラゴン波!」

その台詞と共に左腕を空へと突き出す。

【グオオオオオオオオオオオツツ!!】

すると、真つ赤な竜の形をしたエネルギー波が夜の闇を照らすように放たれる。

やがて龍は雲を突き破り空の彼方へと消えていった。

「おお…これが本場のドラゴン波… 凄い…」

近くで感動している依頼主の声がある。

「なんとかできたみてえだ、んでおっちゃんこれでいいんか？」

「ああ、満足だよーぜひ契約させてくれ」

こうしてイツセーの記念すべき初契約は見事成功に終わった。

余談だが、その後イツセーがいきなり契約を取ってきたことで部員たちはかなり驚いていた。

それからさらに数日後のこと…。

イツセーが依頼主のもとに着くと依頼主はなんと漢女であった。

漢女、自身をミルタンと呼んだその男は魔法が使えるようになりたいと言った。魔法の心得がないイツセーは変わりに気の使い方を教えた。

その特訓が気に入ったのかイツセーはミルタンに朝方までその特訓に付き合わされてしまった。

おかげで無事に契約は取れた様ではあるが……。

「くあ…… 眠みいなあ…… まさか朝まで続けるなんて思わなかったぞ」

契約の帰り道、イツセーは欠伸をしながら部室へと戻っている最中だった。

「早く帰って寝ねえと…… はわうっ！（ドサツ）」ん？」

イツセーが足を速めようとした時、声が聞こえてきてイツセーはそちらを向く。

するとそこには盛大にズッコケているシスターの姿があった。

「うう…… 何故転んでしまうのでしょうか……」

涙目になりながらもなんとか立ち上がりとしてまた転ける。

あまりに盛大に転ぶせいでスカートの中が見えてしまっているシスター。

「おーい、おめえでえじょうぶか？」

その姿に流石に見かねたのか、イツセーは声をかける。

「え？は、はい！大丈夫です！」

イツセーに気が付いたシスターが立ち上がり振り向く。

しかし、その拍子に被っていたローブが風で飛んで行ってしまう。

「あっ！」

「おっとお！（パシッ）」

イツセーは一跳びで跳び上がりそのローブをキャッチしてシスターに渡す。

「ほれ、おめえんだろ？」

「あつ！ありがとうございます！助かりました」

「気いつける？オラはいいけんどさつきみてえなこと他の奴にやったらどうなるか分

「かんねえかな」

「さっきの事…?」

ピンとこないのかキョトンとしているシスター。

「おめえさつき盛大に転んでたろ? そんな時に下着が丸見えだったぞ」

「へ? ……// // (ボンツ)」

瞬く間に顔をトマトの様に染め上げるシスター。

あせあせとスカートを押さえるとはにかみながら言った。

「あはは… お見苦しいものをお見せしました…」

「おお、気にすんな! …にしてもおめえ見ねえ顔だけど、どこから来たんだ?」
そう聞いたところでシスターは思い出したような顔をする。

「えっと、実は私、イタリアから来たばかりで右も左も分からなくて…」

「イタリアア!? つてどこだ?」

と、ここですかさずイツセーのポケが投げ込まれる。

「え、えつと…。ここよりずっと遠くにある大きな町です」

そんなイツセーの天然のポケに健気に説明してくれるシスター。

「へえ! そんな遠くから来たんか! そんなじゃどこかに行く途中だったんじゃねえか?」

「はい、この街の協会に行きたかったんですけど、道を聞こうにも言葉が通じなくて…」

「教会? ならオラ一個知ってから案内してやつぞ!」

その言葉に目を輝かせるシスター。

「本当ですか!?! これも主のお導きですね!」

そう言つて祈るように手を合わせる。

普通の悪魔ならばここで頭痛に苛まれるはずだがイツセーは別段気にした風ではな

くそれを見守っていた。

「…………… それでは行きましようか、案内お願いします」

「ああ！」

そうして二人は教会へ向けて歩き出すのだった。

しばらく歩いていた二人は町外れの教会の前にいた。

「あ！ここにです！間違いありません！」

「お、そりゃあ良かったぞ」

「はい！お礼をしたかったので中でお茶でも」

そこまで言いかけたところでシスターの言葉はイツセーによつて遮られる。

「悪い：：。オラ用があつからさ：：。そいつはまた今度にしてくれ」

そう言うとしスターは残念そうに肩を落とす。

「そうですか：：。それは残念です：：。じゃ、じゃあ！あなたのお名前だけでも教えてください」

「オラか？オラ孫ご：：。じゃねえやオラ、兵藤一誠だ！イツセーって呼んでくれ！」

「イツセーさんですね、私はアーシア・アルジエントと申します。いつかまた必ずお会いしましょう！イツセーさん！」

こうしてイツセーはアーシアと別れ今度こそ部室へ戻っていくのだった。

はぐれ悪魔討伐!バイサーVSイツセー!

「二度と教会に近づいては駄目よ…」

オカ研の部室でイツセーはリアスに叱られていた。

「い?なんでだ?オラ別に何ともなかったぞ?」

イツセー自身なぜそのようなことを言われるのか見当がつかないらしく首を傾げている。

そんなイツセーを見てリアスは軽くため息を吐いて答える。

「いい?イツセー、教会というのは元々神聖な者たちが集う場所なの、そんなところに私達のような悪魔が立ち入ればどうなると思う?」

そう聞かれてもイツセーには全くピンと理解出来ないのか首を傾げる。

「そもそも私達悪魔は教会に近づいてはならないの、もし近づけばすぐさま光の槍が身

体を貫くわ…… 私達にとって光は猛毒…… 掠ってしまうだけでも致命傷にもなりえるのだから…… あなたも下手をしたらその場で光の槍に貫かれていても不思議ではなかったのだから……」

そこまで言われてようやくイツセーは自身がどれほど危険な綱渡りをしていたのかを理解する。

「ひえっ！オラそんなに危なかったんか……」

「今後は気を付けてちょうだい、あなたは悪魔ではないけれど、それでも刃物で体を貫かれれば死んでしまうのだから…… 本当に、あなたが無事でよかった……」

そう言つてリアスは優しくイツセーを抱きしめる。

「…… すんません」

流石のイツセーもここまで心配されているとは思わなかったのか若干頬を赤くしながらも素直に謝っていた。

その言葉を聞いたリアスはそつとイツセーから離れると不意に口を開いた。

「そういえばあなたに聞いておきたいことがあったのよ」

「?オラに聞きてえこと?なんだ?」

「ええ、これを見てくれるかしら」

そういつてリアスは自身の机の上から小さなオレンジ色の小さな玉を持ってきてイツセーに見せる。

「ツ!?そりゃあ…」

それを見たイツセーは驚愕をしたように表情をする。

「やっぱり知っているのね… これはあなたを転生させたときにあなたの中から飛び出したものよ、多分、転生の時に使った悪魔イツイルビリスの駒が変異したものだと思うのだけど… こんなものに変わるなんて事例が過去にないのよ、あなたなら何か知っていると聞いたけれど、それで間違いなさそうね、知っているのでしょうか?この球の事」

リアスの言葉にイツセーは表情を引き締めて神妙に頷き話し始めた。

「ああ、オラは確かにソイツの事を知ってる…。ソイツの名はドラゴンボールつちゅうて七つ集めて呪文を唱えつとどんな願いでも一つだけ叶えてくれる不思議な球だ」
あまりの予想外な答えにリアスは目を見開く。

「どんな願いも叶えてくれる…。ですって？」

「ああ、だが、ソイツはもうずーつとめえ前に消えちまったはずなんだ…。それがどうしてこんなところに…」

イツセーが続けてそう話すがリアスの耳には届いていないようであった。

「願いを…。なんでも…」

うわ言のように呟きながらじつとドラゴンボールを眺めるリアス。

「?おい部長?聞いてつか?」

リアスの様子がおかしいことに気づいたイツセーが顔を近づけ、少し大きめに声をかける。

「キャッ!な、なに?」

声をかけられ正気に戻ったりアスはイツセーはの顔が近くにあることに小さく悲鳴を上げるが、すぐに冷静さを取り戻しそう問いかけた。

「いや、なんか様子が変だったから声かけたんだけどよ... でえじようぶか?」

そう告げられてリアスは今しがたの自分の行動にハッとする。

しかしそれを表には出さずあくまで冷静の応える。

「大丈夫よ、少し信じられない話で考え込んでいただけだから... それで、そのドラゴンボールがなぜあなたの中から出てきたの?」

その問いにイツセーは首を横に振って答える。

「それはオラにもわからねえ... なんでこんなことになってんのかさっぱりだ」

「そう、それじゃあ仕方ないわね... とりあえず、この球は私が預かっておいていいかしら?」

「おお！そんなに小つせえとオラ無くしちまいそうだかな！」

「じゃあ私が預かっておくわね、これが必要な時は言つてちょうだい」

「わかった！」

そうしてドラゴンボールはまた机の上に戻される。

そのすぐ後に声がかげられた。

「あらあら、お話は済みましたか？」

二人は声のした方を振り向く、そこにいたのは副部長の朱乃であった。

「あら、朱乃。どうしたの？」

リアスが問いかけると朱乃はニコニコした笑顔から一転真面目な表情となつて言つた。

「大公から依頼が届きました…。」

その日の夜中……。イツセー達はある廃家に来ていた。奥に進んでいくとオカルト研究部のメンバーであり、イツセーの後輩である塔城小猫が不意に足を止めボソリと呟いた。

「…………… 血の匂い」

それを聞いたイツセーもそれには気づいていた。

転生してサイヤ人としての力が目覚めたからだろうか、イツセーは生前の孫悟空であつた頃の嗅覚が戻っていた。

気を引き締め、辺りを警戒する。

するとリアスが不意に声をかけてくる。

「イツセー、良い機会だから悪魔としての戦いを経験しなさい」

「悪魔としての戦い?」

「そう、悪魔は基本的に戦い方に役割があるのよ、今日はあなたは見学ね、他の子たちの戦いを見て覚えなさい。ついでに下僕の特性も教えるわ」

難しい単語ばかりでイツセーの頭はもはやパンク寸前だった。

だが、それは奥から感じ取った気で一瞬の内に覚める。

「こつちに何かいる…」

「ちよっイツセー!? 待ちなさい! どこに行くの!」

リアスの制止を無視し、イツセーはどんどん奥へと進んでいく。

最奥の部屋に來るとそこには得体のしれないナニカが蠢いていた。

ナニカはイツセーに気が付き不気味な低い声を漏らす

「不味そうな匂いがするぞ?でも、遠くに旨そうな匂いもするぞ?甘いのかな?苦いのかな?」

そう話すナニカの言葉は一切無視してイツセーは辺りを見回す。

そこには、夥しい血だまりやおそらく人間だったのだろう肉片が転がっていた。

「...これはおめえがやったんか?」

「うん?ああそうさ...私が全部食い殺してやった...」

下卑た笑みを浮かべ、ナニカは笑う。

イツセーは何かを睨みつけると叫ぶ。

「罪のねえ奴を次から次に殺しやがって...許さんぞ!貴様ああ...!!」
イツセーは憤怒の形相でナニカに向けて突っ込んでいく。

「界王拳!!」

【ドンツ!!】

『Boost!!』

突っ込みながら界王拳と無意識に己の中に宿る神器を発動させ、全身を赤く光らせながら渾身の力で何かをぶん殴る。

「だりやあああツツ!!」

【ドゴンツ!!】

「グオアツ!」

下品に笑っていたナニカは勢いよく吹っ飛ばされていく。

【ギユンツ!!】

『Boost!!』

二回目に機械音と空気がこすれる音がした直後、イツセーの拳がナニカの背中に突き刺さっていた。

「ふっ!でりやああああ!!」

【ドゴオツ!!】

「ゴハツ!!」

何が起こっているのかも理解できずにナニカは再度吹っ飛んでいく。その後もイツセーによる界王拳ラツシユは続き…。

「…なんなの…これ…」

「あらあら、イツセーくんがパイサー相手に無双してますね」

「はぐれ悪魔相手が手も足でないなんて…」

「……あっちの方が化け物です」

後から来たオカルト研究部のメンバーたちはその光景を驚愕、または唾然としながら見守っていた。

「でえりやりやりやりや！だりやあああああ!!!」

「ガッハア!!」

ラツシユを決めていたイツセーが不意に天高くバイサーを殴り飛ばす。
そして両手を腰のあたりで構え……。

「かあ……」

「めえ……」

「はあ……」

「めえ……」

すると、イツセーの手に蒼く輝く光球が現れる

「っ!みんな!急いでここから離れて!」

リアスが何かを感じ取り、急いで指示を出しメンバーは離れた場所へと非難する。

「波あああああああッ!!」

【ドンッ!!】

イツセーが両手を空に向けて突き出すと、青い巨大な閃光がその手から撃ちだされる。

その先にいるのははぐれ悪魔パイザー。

先程までイツセーに下卑た笑みを浮かべていた残忍な悪魔…。

「グッ!ガアアアアア!!」

パイサーはいとも容易く閃光に呑み込まれその体ごと消し飛ばされていくのだった。

閃光が止み、イツセーは両手を降ろすと肩で息をしながら空をじつと眺めているのだった

アールシアの危機！友人を救え兵藤一誠！

sideイツセー

オツス！オライツセー！

バイサーの一件（部室に戻ったらかなり問い詰められて焦ったぞ…）

から数日が過ぎ、オラは今まで通り契約を取るため夜の街を飛んでんだ。

オラは部長が言うには魔力？つちゆうもんが足りねえらしくて

てん… てん… なんつったかなあ？… たしか… 天井とかいうんが使えねえか

らこうして飛んで向かってんだよ…。

んで、修行も兼ねて走って行こうとしたら部長に『依頼者を待たせるのは論外よ、早

く向かってちょうだい』

って言われちまったからこうして飛んでむかってんだ。

と…。んなこと言ってるうちに目的地付近じゃねえか！

オラは辺りを見回す…。

「お！あったあった！あそこだな？」

目的地である依頼主の家を見つけてオラは降下していった。

「こんちわー!リアス・グレモリーの遣いなんだけどよ!開けてくんねえかあ?」扉の前に降り立ち、そう声をかけるが誰も出てくる気配はない。

つかしいなあ…。いつもならこれで誰か出てくんのによ…。

でも中に二つほど気は感じるし、留守つちゆうことはねえみてえなんだよな…

もしかして勝手に上がれてことなんか?

そう思っただアノブに気を付けて手をかけると、ノブは容易くに回った。

「…?開いてる?」

勝手に上がるんは気が引けっけど仕方ねえ!

「邪魔すつぞ〜?」

オラは恐る恐る扉を開けて中へと入っていく。

中は暗く、近くに人がいる気配はなかった。

少し進むとオラの鼻がある匂いを嗅ぎつけた!

ん!?!この血生臭え匂いは!?!

すると今度は遠くから声が聞こえてきたんだ。

『い、いやあああああ!!!!』

この声!まさかアーシアか!?

「待ってるよ!すぐ助けっぞ!」

オラはすぐさま悲鳴の聞こえた部屋へと走っていった。

sideアーシア

私はレイナーレ様の言いつけである家へと来ていました。

「そんじゃあさつさとお仕事しちまいますかねえ〜アーシアチャンは結界の方よろしく」

そう言つて中へと入つていくフリード神父様……。

「あ、はい!」

いったい中で何をなさるのでしょうか……。

私は少し疑問に感じながら家の周りに結界を張り始めるのでした。

結界を張り終えた私はフリード神父様に報告するために中へと入りました。フリード神父様を探して歩いていると、ある部屋にたどり着きました。

しかし、部屋に入った私が見たものはとんでもないものでした…。それは無残に切り裂かれ半ば貼り付けに近い形で壁に縫い付けられた死体だったのです…。

「きゃああ… つー… これは…」

私は思わず悲鳴をあげてしまいます。

「おんやあ？ 助手のアーシアチャン結界は張り終わったのかなあ？」

すると、近くにいたであろうフリード神父様が悲鳴に気が付いてそう声をかけてきます。

「ふ、フリード神父様… これはいったいどういうことですか…」

「ん？ ああ、アーシアチャンはこの手の死体は初めてでしたなあ。んじや軽く説明すると、これが俺らの仕事♪ 悪魔に魅入られたダメ人間をこうして始末するんす。ちなみにこの殺し方は俺の趣味でござんす♪」

そう楽しげに話すフリード神父様は狂ったように笑っていました。

「そんな…」

それを聞いた私はその場に崩れ落ちてしまいました…。

「なんだなんだよなんですかあ? そんなにショックだったんかよ…。ま、無理もねえか、ちつと前までこんなことは無縁の生活してきたんじやなあ…」

「……もう、止めてください…。フリード神父様! こんなことは間違っています! 種がこのようなことをお許しになるはずがありません!」

それを聞いたフリード神父様は苛立ったように眉を歪ませます。

「はあ!?! おいおいマジですか? 馬鹿こいてんじやねえぞ!」

【ザシュツ!】

フリード神父様が私に光剣を振りぬくと、私のローブの上半分が下着ごと切り裂かれ、上半身が露出してしまいました…。

「いやあああッ!!」

私は慌てて身体を両手で隠します。

フリード神父様はそのまま私の腕を持ち上げると光剣で壁に拘束してきました…。

「堕天使の姐さんに傷つけないよう念を押されてるけどお、これはちよっ…げぶらっ
!!」

そこまで言いかけたところでフリード神父様は勢いよく吹っ飛んでいきました。

その拍子に光剣が抜けて私は地面に倒れ込んでしまいます。

「でえじょうぶか?アーシア、おめえは下がってろ」

その声に顔を上げるとそこには山吹色の道着を着込んだボサボサ頭の男の人が立っていました…。

しかし、私はその人にとっても見覚えがありました。

「… イッセーさん?」

「ああ、助けに来るのが遅れてすまなかつた…。アイツはオラがなんとかする。アーシアは下がってるんだ」

イツセイさんは振り向かないままそう言ってきました。

私はそれに素直に従うことにしたのでした。

s i d e イツセイ

オラは警戒していた。今しがたふっ飛ばした奴に…。

奴は壁を突き破り吹っ飛んでいったがまだ気を感じる。

コイツは相当強えな…

しばらく奴が飛んで行つた方を見ていると、奴は少しふらつきながら戻ってきた。

「痛つてえな… 何しやがるんですかねえこの… ん？お前何モンだ？悪魔の気配もすつけど大まかには違う… まあどうでもいいんでその首チョッパ―しますかね！」

そう叫び、飛びかかってくる奴にオラは残像拳で背後に回り込む。

それに気づかない奴はオラの残像に斬りかかっていた。

そして勢いよく剣みてえな奴を振りぬいた。

「……………？あり？」

「こつちだ！だりやああああ!!」

呼ぶと同時に突きをお見舞いする。

「ふぎゃっー！」

しかし今度は剣の柄で攻撃を防いだらしくすぐさま体勢を立て直していた。

オラはそこで初めて死体があることに気が付いた。

「これはおめえがやったんか…」

オラの問いかけに奴は狂った笑みを浮かべて話す。

「はい、そうでごごんすよく俺つちがそのクソダメ人間を始末しちゃって上げたのさ!
お前もすぐああなんだよおお!!」

「またも飛びかかってくる奴…。」

「許せねえ…!」

「アーシアを襲っただけじゃなく、何の罪もねえ奴まで手に掛けてやがるなんてツツ!!」

「許さんぞ!!貴様ああああ!!界王拳二倍!!だりやああああ!!!」

「オラは界王拳の二倍を発動し、奴を正面から殴り飛ばした。」

「ゴブガアツ!!」

「まだだあ!!でりやりやりやりやり!!」

飛んでいく奴の背後に瞬間的に回り込むと勢いよくラッシュを加えていく。

「がつぐがつごはっ!!なんだよクソがアアアア!!」

「だりやああああああっ!!」

と共と言わんばかりに渾身のアームハンマーを叩き込む。

アームハンマーを叩き込まれた奴は地面に叩きつけられ気を失った。
それを確認しオラは界王拳を解く……。

「……ふう」

「イツセーさん!!」

ガバツと抱き着いてくるアシア。

余程怖かったのか、その体は震えていた。

「遅くなつて済まなかったなアシア、でえじょうぶだったか?」

「は、はい：： イッセーさんのおかげで：： でも、どうしてイッセーさんがここに？」
キョトンと首を傾げるアーシアにオラは事情を説明する。

「オラの依頼者がコイツだったんだよ：： 間に合わなかったけどな：：」
オラは礫にされた死体を見る。アーシアも悲しそうに俯いていた。

「すみません：： 私がもつと早く気づいて止めていれば：：」

申し訳なさそうに俯くアーシアに腕を頭へと伸ばし、ワシワシと撫でまわす。

「え？：え？ イッセー：： さん？」

突然のことに困惑しているアーシア。

「なに、おめえの所為じゃねえさ、悪いんはコイツを殺したアイツだ、おめえはそれを止めようとしてくれたんだろ？ それだけでも十分さ」

と、そんなことを話していると部屋の隅に魔方陣が現れ、中から部長たちが現れた。

「イッセー！ 大丈夫!? って：： どうして神父の方が倒れているのよ：：」

「あらあら、うふふ… どうやらイツセーくんが倒してしまったようですね」

「…… 人外、いいえ、規格外です」

「あはは… さすがは兵藤くんつてところかな？」

来て早々に呆れたようにオラ達を見て話す部長たち。

「おめえ達酷つでえなあ… そこまでじゃねえだろ？」

「「いやそれはない」」

ははは！ 即座にツッコまれちまった……

ん!!!

そこでオラは大量の気がこちらに近づいているのを感じ取った。

「おめえ達、早く逃げんだ… でけえ気たくさんがこっちに向かってきてる」

それを聞いて朱乃も気付いたようだ。

「部長!大変ですわ!墮天使の軍勢が此方に迫ってきています!」

「チツ.: 今はイツセーの回収が先決ね朱乃、転移の用意を」

「分かりましたわ.:」

すぐさま転移の準備に取り掛かる朱乃を見てオラは部長に問いかける。

「なあ、部長アイツは一緒に連れてけねえんか?」

オラはアーシアを指して言う。

しかし部長は首を横に振った。

「それは無理よ、この魔方陣は私の眷属しか転移できないの」

そうか、それならオラはいけねえ!

オラは魔方陣から抜けだし言った。

「なら、おめえ達だけ先にけえつていてくれ… オラはアーシアを連れて後からいく」

「ちよつ！待ちなさいイツs…」

そこまで言いかけて部長たちの姿は消えた。

「さて、アーシア、オラ達も脱出すつぞ！オラに掴まれ」

「え？あ、は、はい！」

恐る恐るといった風にオラの肩に手を置くアーシア。

それを見てオラは額に手を当て部長たちの気を探り出す。

と、そこで乱入してくる奴がいた。

「フリードやったのはお前か？」

黒い翼を生やした乱入者は場の状況を理解するとオラにそう問いかけてきた。

「ああ、オラがやった…」

「そうか、ならば死んでもらおう!」

言うや否や手に光の槍みてえなモンを手に突っ込んでくる。

しかしそれより早くオラは部長たちの気を捕らえることに成功した。

「見つけた!」

その言葉と共にオラはその場からアーシアと共に瞬間移動していくのだった

s i d e 墮天使

私は驚いていた。

ついさつきまで目の前にいた小僧とアーシアが瞬時に消えてしまったのだから…。

「なっ!?!消えた?」

辺りを見回しても心配すら感じられない。

「探せ！まだ近くにいるはずだ！」

私は部下を伴って付近の搜索に当たるのだった。

今を楽しめ!アーシアの希望の一日!

sideアーシア

今私はげえせん?というところにイツセーさんに連れてきてもらっています!

あの後、墮天使様から逃げた私達が向かったのはあの紅い髪の悪魔の女性の方の所でした。

そこでイツセーさんが悪魔だという事を初めて知りました…。

あ、正確には違いましたね… 悪魔の力を持った、さ、サイヤ人?という種族なんだとか…。

私がこのことで驚いている間にイツセーさんはその悪魔の方に話意を付けてくださいました。

紅髪の悪魔の方は私にイツセーさんの家へと行くように言ってくださいました。

私はそれに従ってイツセーさんのお家にお邪魔させてもらうことになりました。

イツセーさんお家のご両親は急に来た私を快く受け入れてくれました…。

時間的にはかなり夜遅くに帰ったはずなのですが、イツセーさんのご両親はまだ起きていらしたのです。

お二人はイツセーさんがサイヤ人だという事を既に知っている様子でした。だからあんなに遅くに帰ったのに怒られていなかったんですね……。

その日は空いているお部屋を使わせてもらい私は就寝するのです。

その翌日、イツセーさんが『アーシア、おめえどっか行きてえとこあつか？』

と、声をかけてくださって私は楽しく遊べるところがいいとお願ひしたところ、イツセーさんはウンウン考え込んだ後、私をげえせんに連れてきてくださいました。

げえせんの中はととも賑やかで初めて見るものばかり置いてありました。

ハサミのようなものが上からついていて下にあるぬいぐるみやお菓子などを取るガラスの箱だったり、

お金のようなものを入れて中に入っているそのお金のようなものを落とす不思議な機会があったり、

硬貨を投入すると動く大きなテレビのような機械などがありました。

その中で私があるぬいぐるみの入っているガラスの箱を見ていたら、イツセーさんがそれに気が付いてそのぬいぐるみを取ってくださいました。

私は嬉しさと申し訳なさでお礼しか言えませんでした……。

私、このぬいぐるみ……一生大切にします……。

だって……イツセーさんが私の為にと取ってくださいだったので……。

s i d e o u t

s i d e 界王(ナレーション)

アミューズメントを出た二人は近くの公園を散歩していた。

「今日は楽しかったです! イッセーさん、本当にありがとうございます!」

そう言っても嬉しそうにぬいぐるみを抱きしめながらアーシアがお礼を言う。

「ははは! そいつは良かったぞ、オラも連れてった甲斐があったな!」

「はい! 実を言うと... 夢だったんです。こうしてお友達とこんな風に遊ぶことが...」

「? そうだったんか?」

イッセーの言葉にアーシアは一つ頷くと少し寂しげに語り出した。

「はい、この力が主から与えられたのはとても光栄なことです。でも、それと同時にだか

ら私に課せられた使命だと思って生きてきました…。だから今日は主が私にほんの少しの褒美を与えてくださったんだと思います…。」

それまで黙って聞いていたイツセーはそこでふと口を開いた。

「そいつはちつとおかしいぞ」

「え…?」

「いくら力を持って生まれてきたからってよ、それで友達も作らねえで一人で生きていくつちゆうんはオラ間違ってると思う!それによ、オラとアーシアはもう友達じゃねえんか?」

すると、アーシアはその顔をクシヤクシヤに歪ませて涙を流していた。

「いいつ!?ど、どうしたんだ?オラなんか悪いこと言っちゃまったか…?」

流石のイツセーも驚いたらしく慌てておろおろとしている。

「いえ…その、違うんです…。嬉しくて…。ありがとうございますイツセーさん!」

涙ながらにそう笑顔を浮かべアーシアは微笑んでいた。
そう、心からとても嬉しそうに……。

しかしそれはあるホトことにより壊されることとなった。

「それは無理よ、あなたは私と来てもらうわ、アーシア」

そう言った女は黒い翼を生やし怪しげな笑みを浮かべて二人を見ているのだった。

攫われたアーシア！立ち上がれ孫悟空！

sideイツセー

「折角殺したのに悪魔になってオメオメと生きてるなんてね……馬鹿みたい」

そう言いながらさげすんだ視線を投げかけてくるその女には黒い翼が生えていた。

「誰だおめえ!!オラおめえなんて知らねえぞ!」

「はあ?なにその口調、っていうか、元カノの存在忘れる?普通殺されたって言う思い出まであんのによく忘れられるわね」

殺された……?つちゆうことはアイツを殺した奴なんか?
兵藤一誠

「おめえがアイツを殺したんか!」

「そんなことも覚えてないの?ええ、そうよ?私があなたを殺してあげたの……。彼女と

してね」

そうか、コイツの所為でアイツが死んじまったんか……
アイツを殺してアジアにも何かする気らしい……。

「……………さん……」

「は?」

「許さんぞ!!貴様アアアツ!!」

【ドンツ!!!】

オラは高めていた気を一気に開放するのだった。

s i d e o u t

「い、イツセーさん？」

イツセーの身体から溢れる白いオーラにアーシアが戸惑いの声を上げる。

「へえ、随分変わったことが出来るようになったみたいね、少しは楽しませてみなさい！」

そう言うのと翼の女は虚空から光の槍を作り出し構える。

「アイツを殺すだけじゃなくアーシアにまで手を出そうとしやがって……おめえはオラがぶっ倒す!!ハアアアアア!!」

『Boost!!』

エネルギー波を放とうとして左腕を突き出すと、そんな音声と共に赤い籠手がイツセーの左腕に出現した。

そして放たれたエネルギー波は普段よりも大きいものとなり女に向けて飛んでいく。しかしエネルギー波は容易く光に槍に切り払われてしまう。

「そんなこともできるようになったのね、面白いじゃない!」

「なっ!なんだこいつ...」

女が面白そうに言うもイツセーはそれどころではないらしく左腕の籠手を眺めていた。

「なんだかわかんねえけど力が沸いてくるみてえだ!いくぞ!!だああああ!!」
勢いよく女へと突っ込んでいくイツセー。

「馬鹿正直に突っ込んでくるなんて... 今度こそ完璧に消滅させてあげるわ!」
女がそう言ってイツセーに光の槍を投合する... が。

【シュンツシュンツシュンツ!!】

イツセーは光の槍を消えるように避けながら女との距離を詰めていく...。

「チツ... 生意気な! 悪魔のくせに避けんじやないわよ!」

その言葉と共に連続で光の槍を投げ始める女。

これが元の兵藤一誠であれば避けることは叶わないであろう。だが、このイツセーは数々の死闘を潜り抜けてきた百戦錬磨の英雄である。迫ってくる複数の光の槍を難なく躲し、一気に女との距離を詰めるとその速度を利用して渾身の肘打ちを叩き込む。

「フンツ!!」

「か……っはあ……ツ!!」

【バシャーんツ!!】

女は軽く腹部を押さえながら吹き飛び後ろの噴水の中に叩き込まれる。

「はあっ…… はあっ…… 悪魔風情がやってくれるじゃない」

「おめえはオラには勝てねえ…… アーシアの事は諦めてさっさとけえれ、そうすりや見逃してやる」

そう言つてイツセーが女に背を向けた時！

「イツセーさん!危ない!」

「: : : ?ぐつ: : : !」

鋭い痛みを感じ足を見ると、そこには一本の光の槍が突き刺さっていた。

「卑怯だぞ: : : おめえ: : : !」

言ってイツセーはその槍を引き抜く。

その様子に女は不思議そうな顔をする

「あら、そんなに痛がらないのね、悪魔ならこれは猛毒のはずなんだけど」

「へ、へへっ: : : 悪りいな: : : オラは普通の悪魔じゃねえんだ: : :」

「ふうん: : : まあそんなことはどうでもいいわ、これで終わりだもの」

女は光の槍を大きく振りかぶる。

「これで…消えろ！」

巨大な光の槍がイツセーの首に振り下ろされ……

「やめてください！…分かりました、あなた達に着いていきます。だからもうイツセーさんには手を出さないでください」

「そう、それでいいのよ…ならこっちに来なさいアーシア」

「……はい」

「アーシア！駄目だ！行くんじゃねえ！」

「イツセーさん…ごめんなさい、私なんかを友達と言ってくださって本当に嬉しかったです…私なら大丈夫ですから」

「うふふ、いい子ね…今夜の儀式が済めば、悩みも苦しみも全てから解放されるわ…アーシアに感謝することね、もし次会ったら殺すわ」

「… ツ!!おめえ…!」

「さようなら… イッセーさん…」

その言葉を最後にアーシアと女は虚空へと消えていった。

イツセーは女たちが消えていった方をしばらく見つめ続けていた…。

「ちつくしよ—— ツツ!!」

その叫びは悟空がナメツク星で吠えたものと全く同一のものであった。

友を救え！敵地へ乗り込め兵藤一誠！

「駄目よ、彼女のもとに行くことは許さないわ」

開口一番のリアスの言葉はそれであつた…。

「なんでだ！あのままじゃアーシアが殺されちゃうかもしれないぞ！頼むよ…オラ、アーシアを見捨てるなんて出来なえんだ！」

【パンツ】

乾いた音が部屋に響く。

リアスがイツセーの頬を叩いたのだ…。

「何度言えば分かるの？駄目なものは駄目よ、彼女の子とは忘れなさい…あなたはグレモリー家の眷属なのよ」

それを言われたイツセーは怒気を露にしながらゆっくりと口を開いた。

「……眷属?アーシアがシスターだから?だからどうした!オラはイツを友達として助けてえんだ!眷属だから駄目だつてんなら、オラはおめえの眷属を止める!そうすりやおめえ達にも迷惑はかけねえ」

「出来るわけないでしょう、勝手なことを言わないでちょうだい」

「おめえがなんと言おうとオラには関係ねえ…。早くしねえと儀式つてのが始まつちまうかしんねえんだ」

するとある単語にリアスが反応する。それ

「儀式?あなた今儀式と言ったの?」

「ああ、それがどうしたつてんだ!」

イツセーの言葉を聞いたリアスは不意に立ち上がると言った。

「用が出来たから少し出てくるわ…。」

「どこ行く気だ！まだ話は済んでねえぞ！」

「イツセー、あなたを転生する際に使った駒、あれがなんの駒か知っている？」

「……知らねえ」

「あなたに使った駒は兵士^{ポイン}。チェスでは兵士の駒は敵陣地の最横まで駒を進めれば王以外の他の駒に昇格できるの……。私がそこを敵陣地と認めればね」

「イツセーにはリアスが何をいつているのか半分も理解できていないのか首をかしげている……。」

「つまり、私が教会を敵陣地と認めればあなたは朱乃や優斗の力を使うことができるの」

「オラが木場や姫島の力を……？」

「自身の身体を見つめるイツセーにリアスは頷いて続ける。」

「ええ、それとあなたの中に宿っている神^{セラクリッド・ギア} 器……あなたの左腕に着いていたあの赤い籠

手のことだけど、セイクリッド・ギア 神 器は持ち主の想う力で動くの…その思いが強ければ強いほど必ずその思いに応えてくれる…だから、思いなさい…。セイクリッド・ギア 強く神 器に想うの…それであなただけ言うとりアスは朱乃を連れだつて出ていってしまった。

「……………よしー!」

しばらくなにかを考え込んでいたイツセーは不意に立ち上がると部屋を出ていこうと歩きだす。

そこに声をかける者がいた、木場である…。

「行くのかい?」

「ああ、アーシアを助けに行つてくる!おめえも止めるのか?」

「殺されるかもしれないよ?」

「ニツ…殺られねえさ、アイツなんかにはオラは負けねえ!」

自信満々に答えるイツセーに木場はやれやれと苦笑する。

「確かに、はぐれ悪魔を一人で消し飛ばした君なら心配いらないかもしれないけど、僕だってグレモリーの一員だ、もしもの為に一緒に行くよ」

「良いんか？部長に大目玉くらうかもしんねえぞ？」

「大丈夫、部長ならきつと手伝わなかった方が大目玉を食らってしまうよ」

と、二人がそんなやり取りをしていると今まで黙っていた小柄な少女、搭城小猫が口を開いた…。

【ブンツ】

どわあ！なんじゃなんじゃ!?!危ないじゃないか!!!

「……小さい言うな……。」

む？おお、すまんすまん…。

少女、小猫が口を開いた。

「……………私も行きます…。二人だけでは不安ですから」

「おめえ達、ありがとな!んじゃ、いくぞ!!」

こうしてイツセー、木場、搭城の三人は夜の教会へと乗り込むのであった…。

因縁の再開！アーシアを救えイツセー！

部室を出た三人は教会前へとやって来ていた。

「ここにそのアーシアさんがいるのかい？」

「ああ…微かにだがアーシアの気を感じる…。急ぐぞ」

そう言つてイツセーが教会の扉を開け放つ…。すると？

「おんやあく誰かと思つたらいつぞやの悪魔君じゃあ、あくりませんか？今度は仲間まで一緒かい？」

「おめえは！あん時オラにぶつ飛ばされた！」

以前イツセーに叩きのめされた白髪のはぐれ悪魔払いが待ち構えていた。

「イエスイエス♪そうでござんす、お前には個人的にかなり恨みがあるんで仲間共々首

「チヨツパーしてやるよお!!」

「そう叫びながら三人に飛び掛かってくるはぐれ悪魔払い…。」

「すかさず回避するように散らばる塔城と木場…。」

「だがイツセーはその場から動かずはぐれ悪魔払いを睨み付けながら言う…。」

「おめえに構ってやつてる暇はねえんだ!プロモーション!戦車!おまけにこいつだ!

「界王拳二倍!!だりやああつ!!」

「飛び掛かりながら光剣を振り下ろしてくるはぐれ悪魔払いめがけて赤いオーラを纏い、攻撃力、防御力共に底上げされた拳がはぐれ悪魔払いの顔面に吸い込まれていった。

「がげぼっ!!」

「ヒューンッ!ドツゴンツツ!!」

「勢いよく教会の壁に吹っ飛んでいくはぐれ悪魔払い…。」

「しかしイツセーの表情は硬い…。」

「…流石だな、今の一瞬で剣の柄で防ぎながらも衝撃を殺すために自分から後ろに飛んでいきやがった…。」

。。。　　そう言いながらも、油断無くはぐれ悪魔払いの飛んでいった方を見つめるイツセー
。。。　　しばらくすると暗闇からフラフラとそのはぐれ悪魔払いが現れて言う。

「つてえな…：防御したのにこんだけダメージ与えてくるとか、お前ナニモンだ？」

「オラか？オラは半分悪魔のサイヤ人だ…！」

聞き覚えの無い単語にはぐれ悪魔払いは一瞬だけキョトンとするがすぐに憎悪と怒りの表情をイツセーに向ける。

「サイヤ人だか悪魔だか知んねえがよ…：お前だけは殺すわ、マジで、俺ちゃんに攻撃するとか許されることじゃねえから」

血走った目でイツセーを見るはぐれ悪魔払い。

「いいぜ？けど、この状況でまだやるんか？」

「ああ…？」

そこまで言われてはぐれ悪魔払いはようやく自分の状況を理解する。

そう、はぐれ悪魔払いの周りには木場と搭城がはぐれ悪魔払いを包囲するように囲んでいた。

「んぐ…こいつはちつと不味いつすねえ…腹が立ちますけどここは退散させてもらいましようかね」

「逃がすと思うかい？」

逃げ出そうとしたはぐれ悪魔払いに木場がすかさず斬り込む…だが…。

【ボンツ…カツ!!!】

はぐれ悪魔払いがなにかを地面に叩きつけると眩い閃光が破裂した。

「ぐっ…!?!」

あまりの眩しさに両目を庇うイッセー…。

二人も同じように顔を覆っている…。

光が収まり再び目を開けるとそこにはぐれ悪魔払いの姿はなかった。

気を辿り気配を追うとはぐれ悪魔払いは教会の窓辺に立っていた。

「そのクソ悪魔…えーとイツセーくんとか言ったっけ？俺お前にフォーリンラブ、ぜってえ殺すから…それと、アーシアちゃんを助けるんならその下から行けるぜ？そんじやチャラバ！」

そう言うとはぐれ悪魔払いは姿を消した。

「……くざ」

その言葉ではぐれ悪魔払いの言っていた場所へと潜っていく三人……。

しばらく気を辿っていくと、ある部屋から複数の気をイツセーが感じ取った。

「この中にアーシアがいる…おめえ達気いつけろよ」

『…（コクツ）』

二人が頷くのを見てイツセーはその扉を開け放った。

「アーシア!助けにきたぞー!」

しかしイツセー達の目に飛び込んできたのはとんでもない光景であった…。

部屋の中には複数のはぐれ悪魔払い、そして部屋の奥には夕方頃戦った墮天使と十字架に磔にされたアーシアの姿であった…。

「……イツセー…さん?」

「あら、ようやく来たのね、でも一足遅かったわ、もう儀式は終わるところよ」

【ズズズツ…!!】

墮天使がそう言うのとアーシアの胸辺りが輝きだし淡い光を放った何かが出てくる。

「いやあああああ…っ!!」

アーシアが苦痛の叫び声をあげる。

「アーシア!止めろおお!!」

「悪魔は叩き斬……ふぁ……っ!!」

イツセーは気を一気に解放し、斬りかかってきたはぐれ悪魔払いを殴り飛ばすと一瞬でアーシアのもとへと飛んだ。

しかし時すでに遅し……アーシアから出てきていた何かは完全にアーシアの身体から抜け出し墮天使のもとへと渡っていた…。

「クフフフツ残念だったわね、これで計画は完了よ。その子はもういらなから好きにしたら?もうどっちにしても死ぬけどね…」

「っ……どうしたら助けられる?」

イツセーの問いにはぐれ悪魔払いを切り伏せていた木場が大声で教えてくれる…。

「兵藤くん! セイクリッド・ギア 神 器を抜かれた者は死んでしまうんだ! セイクリッド・ギア 早く神 器を戻さないと手

遅れになってしまう!」

その事実を聞き、イツセーは驚愕を顔にする…。

「なにつ!?なら、おめえさつさとアーシアの神器けえせ!」

「ふふっ何を言っているのかしら? 折角手に入れたものを態々返すわけないじゃない」

「っ…おめえ…っ!!」

「…イツ…セー…さん…」

怒りに震えるイツセーにか細いながらもイツセーの名を呼ぶアーシアの姿があった…。

「アーシア!? しっかりしろ! すぐに助けっかなな!」

「駄目…です…。 イツ…セーさん…逃げ…て…」

死にかけながらもイツセーを逃がそうとするアーシアにイツセーが叫ぶ。

「何言ってるんだ! おめえを置いて逃げるわけねえじゃねえか! ちつと待ってる、オラがすぐにおめえの神器を取りけえしてきてやる…。 木場! 搭城!」

「なんだい?」

「……なんですか？」

あらかたはぐれ悪魔払いを片付けた二人から返事が返ってくる。

「アーシアを連れて遠くに逃げてくれ、ここはオラがなんとかする！」

「それは無茶だ！いくら兵藤くんでも墮天使相手に一人でだなんて……」

「……出来ません」

「でえじょうぶだ、オラはコイツなんかには負けねえ、アーシアのこと頼んだ……」

頑として譲ろうとしないイツセーに二人は折れたようだった。

「分かった、けど、必ず生きて帰ってくるんだよ」

「……信じてますからね？イツセー先輩」

そう言う二人はアーシアを抱えて部屋から出ていった……。

「あんたが私と闘るの?ならお望み通り跡形もなく消滅してあげるわ!」

「アーシアをあんな目に逢わせたおめえなんかにはオラは負けねえぞおおおツツ!!!
やがれえ! セイクリッド・ギア 神器 ア!!」

『Boost!!』

そんな機械音声と共にイツセーの右腕に赤い籠手が装着される。

「コイツもいくぞ!界王拳二倍だああ!!」

【ドンツ】

イツセーの周りに赤いオーラが纏われる。

「おめえだけは許さんぞ墮天使いい!!」

遂に…墮天使との最終決戦が幕を開ける…。

果たして勝つのは墮天使かイツセーか!!

目覚めよサイヤの力！月夜に響く大猿の咆哮！

【ドンツドンツドンツドンツドンツ…!!】

夜の教会に二人のぶつかり合う音が響き渡る。

「ハアアアアアアツ!!」

「でりやああああつっ!!」

【ドゴオンツ!!】

一際大きな激突音と共に二人がぶつかり合う。

「はあっ… はあっ… はあっ… はあっ… 中々やるじゃない」

「はあっ… はあっ… フツおめえこそ…」

お互い自身の持てる全力でやり合っているためか肩で息をしている。加えて今のイツセーは界王拳を使用している。その疲れは尋常な者ではないだろう……。

イツセーは油断なく墮天使を睨みつけるのであった。

ナレーション
界王 side out

sideイツセー

「でりやあああああつっ!!」

オラは叫びと共に墮天使へと突っ込んでいく。

早くコイツをぶっ倒してアーシアの神器を取りけえさねえとなんねえ!

じゃねえとアーシアが死んじまう!

だが、そう考えれば考えるほど焦りが動きを悪くする……。

自覚はしてる……けど、それを直しているような余裕はねえ!

そんなことを思索していると不意に墮天使の姿が消え、頭に強い衝撃が走る。

何が起きたのかはすぐに分かった、墮天使の奴に蹴り落とされたんだ

「ぐあっ!!」

地面に叩きつけられる寸前、なんとか気力で踏みとどまり体勢を立て直す。

ふう、あぶねえあぶねえ、戦闘中に考え事なんてするもんじゃねえや……

けど、今のままじゃ負けることはねえけど時間が掛かっちゃう、それまでアースは保たねえはずだ……

こういう時は超サイヤ人になって一気にカタアつけるんが手っ取り早いんだけど、今のオラじや変身できねえしな……

「こうなりや仕方ねえ…… 界王拳を三倍まで上げるしかねえか」

「何をブツブツ言ってるの?もしかして命乞い?」

墮天使の奴がなんか行っつけど無視だ……

「体もつてくれよ!!界王拳三倍だあああっ!!」

「ッ!!」

【ミシミシツツ】

『Boost!!』

ぐっ! やっぱ三倍だと体への負担がでけえな… だが、コイツ神器のおかげかいつもより力が漲ってくる!

「いくぞ! だりやあああああつ!!」

界王拳を三倍まで引き上げたオラは再度墮天使へと突っ込んでいく。
突如スピードが跳ね上がったオラを見て墮天使は驚きの声尾を上げる。

「なっ!?! スピードが上がって… ツ!」

オラはその隙を見逃さず、一気に奴との距離を詰めると肘内を叩き込む。

「でりやああああ!!」

【ドゴンツ!!】

「かはっ…！」

「づええりやあああ!!」

腹を押さえて蹲る墮天使に渾身の回し蹴りを叩き込む。

「があっ…!!」

勢いよく教会の壁を破壊し、外へと吹き飛んでいく墮天使をオラは追撃をかける為、飛んでいった墮天使の後を追う。

「だあああっ…！んっ!？」

追撃をかけようと外に飛び出たオラの目に入ってきたのは淡く輝くまん丸の満月だった。

やべえ！今日満月じゃねえか！

そう慌てて顔を隠そうとするが一足遅かった…。

オラは月から目が離せなくなりその意識を手放した。

side out

s i d e 界王
ナレーション

「グウウウウウウウウ。グオオオオオオオツツ!!」

満月を見て大猿と化したイツセーが吼える。

だが、その瞳は怒りに満ち溢れており、理性が飛んでいるようであった。

「な…。何よあれ…。まるでバケモノじゃない…。」

イツセーの予想だに違った変化に堕天使レイナーレは恐怖に顔を染める。

「グウウウウツ…。ツ!!」

ゆっくりとした動作でレイナーレの方を見る大猿^{イツセー}。

そしてレイナーレを見つけた途端に怒り狂ったように咆哮を上げた。

「グオオオオオオオオツツ!!」

咆哮と共に堕天使に迫る極太の腕。

「くっ…！」

レイナーレは大猿イッセーの攻撃をなんとか躲し空中へと逃れようとするが…。

「グギャオオオオッ!!」

突如虚空から現れた大猿イッセーがその剛腕を振り下ろしレイナーレを叩き落す。

「なっ?! 回り込まr…があっ!」

【ズガアアアアンツツ】

レイナーレは勢いよく地面に叩きつけられ土煙が濛々と立ち上る。

これを人間がくらえば一溜まりもないだろう…。

しかし、レイナーレはまだ生きており、懸命に傷の治療をしていた。

【ブウウウン…】

しかし、傷があまりにも大きいため中々治りきらないでいた。

「なんで! どうしてよ! 早くしないと!…っ!」

【ズズウウン…】

地響きと共に大猿イッセルが降ってくる。

「グウウウウウウ… ツ!」

ズシンズシンと足音を響かせながらゆっくりとレイナーレの方へと近づいてくる。

「いや… 早く、早く!早く治つてよ!」

恐怖からか顔を涙と鼻水で汚しながら必死に神器を使用するレイナーレ…。

それを関係ないとばかりに近づいてきた大猿イッセルは構わずレイナーレをその巨大な足で踏みつける。

「あ… あがあ… ぐ… るじい… !息が…」

踏みつけられ動けないレイナーレは必死になって逃げようともがくが大きさの所為でまともに動けないでいた…。

大猿イッセルは少しの間踏みつけていると不意に足を上げた…。

「… がはっ!はあっ… たすけ…」

レイナーレがそう口を開いた直後だった。

【プチッ！】

不意に降ろされた足に踏み潰され、まるで虫でも踏み潰すようにレイナーレは絶命した。

そして大猿イツセーが足を退けると、そこには最早原形を留めていない絶命したレイナーレの姿があつた…。

「グオオオオオオオオオオツ!!」

大猿イツセーは興味が失せたのかソレには見向きもせず、月に向け大きく吠えるのであつた…。

side out

side 木場

僕、木場佑斗は目の前の光景を信じられないでいた…。

イツセーくんからアシアさんを頼まれた僕と小猫ちゃんは教会から少し離れた少

し開けた場所にいた。

教会から出た直後は何かがぶつかり合う衝撃音と爆音が響いていた。

だが、少しすると、教会の方から一際大きな獣のような雄たけびが聞こえてきたんだ。

何が起きたのかと慌ててそちらを見ると、そこには見上げるほど巨大な大猿があつた。

天使を相手に暴れ回っていたのだ。

僕は目を疑った…。これは現実なのかもう訳が分からなくなりそうだった…。

アーシアさんの一言を聞くまでは…。

「… イッセー… さん？」

辛そうにしていたアーシアさんがあの大猿を見てそう呟いたので。

それを見て僕は再度大猿の方を見る。

大猿は空を見上げて大きく吠えながらドラミングをしていた…。

アレがイッセー君だということか…？

ふと、そこで僕はイッセーくんと副部長が言っていたことを思い出した。

「イッセーくんはあくまで悪魔に近い人間ということですよ」

「オラはサイヤ人っちゆう種族なんだ！」

イツセーくんの言葉が確かであるなら、サイヤ人と言う種族は何らかの方法であの大猿のような姿になるという事だ。

だが、あの姿では自我は保てない……

あれは見るからに野生の獣そのものだ……

イツセーくんをそのまま放っておけばきつと大変なことになるだろう。

そうなつては大惨事だ……

僕は立ち上がり小猫ちゃんに声をかける。

「小猫ちゃん、少しの間アーシアさんを頼めるかな？」

そう言うと、小猫ちゃんは不審げに眉を顰めて聞いてくる。

「……何をするつもりですか？ 佑斗先輩……まさか」

ははは、気づかれちゃったみたいだね……

「うん、そのまさかだよ、僕はイツセーくんを止めに行く、だからその間に小猫ちゃんはアーシアさんを連れて部屋まで行くんだ」

「…………… 無茶です!あの墮天使があんなあつさりと殺つてしまう相手ですよ?敵うわけないです……………」

小猫ちゃんのいう事はもつともだ、僕自身もあの猿に勝てるとは到底思っていない。

「分かっているよ、でも、あのままイツセーくんを放つておくわけにはいかないからね」
それにきつと何か手はあるはずだ……………。イツセーくんを元の姿に戻す方法が。

僕の決意が変わらないことを悟つたのか、小猫ちゃんは小さくため息を吐いて言った。

「…………… ハア、分かりました、でも無理だけはしないでください、佑斗先輩に何かあったら部長が悲しみます」

「そうだね、分かった。無茶はしないと約束するよ」

その言葉を聞いて小猫ちゃんは小さく頷く。

「……………では、ご武運を」

「あの… イッセーさんを… お願いします…」

「ああ、任せて…」

そうして僕は二人に背を向け、大猿の方へと向かっていくのだった。

「さて、ここからどうしたものか…」

大猿の近くまでやって来た僕は物陰に身を隠し、考えていた。

元に戻そうにも、どうしてあの姿になったのかの原因も分かっていないのだ、対策の練りようがない…。

かといって馬鹿正直に出て行けばあの巨体に踏み潰されてお終いだ。

「困ったな、手の打ちようがない…。」

もういつそのこと特攻でも掛けてみるかと思いだしている僕に不意に頭の中に響いてくる声があった。

『おい貴様!聞こえているか!』

「ツ!?!」

『声を出すんじゃないぞ、そのまま心の中で話すんだ、奴に見つかりたくなかったらな』

（は、はい、それよりあなたは?どうやって話しかけているのですか?）

『フンツ名を名乗るほどのものじゃない、今はお前の心に直接話しかけている…。それよりも貴様はいつを元に戻したいんだつたな?』

やろうとしていたことを見抜かれ僕は内心で驚きながらも答える。

（はい、何か知っているのですか?）

『ああ、アイツを元に戻したければ奴の腰に生えている尻尾を切り落とすんだ、そうすれば奴は元の姿に戻る』

(尻尾を？それだけでいいのですか？)

『そうだ、サイヤ人の力の源は尻尾だ、それさえ切れれば奴はあの状態を維持できん』
尻尾か、あの高さだと中々厳しいけど、やるしかなさそうだ。

(分かりました、やってみます！)

『やるのなら気を付けることだ、大猿になった時のアイツの力は十倍以上だ』
十倍以上…それはあの墮天使が敵うはずないわけだね…。

(そんなに…分かりました忠告ありがとうございます。)

『フンツ健闘を祈る…』

それきり声は聞こえなくなっていました。

それにしても誰だったのだろうか……。

サイヤ人の事をよく知っているような口ぶりだった……もしかしたら、イツセーくんと同じサイヤ人だったりするのかな？

そんなことを考えながらも僕は猿の様子を見計らう。

大猿は僕には気づいていないようですと月を見上げています。

僕は魔剣を一つ作り出し、気配を殺しながら大猿へと近づいて跳び上がった。腰の高さまで跳び上がるとそのまま渾身の力で尻尾に魔剣を振り下ろす。

「ハアアアッ!!」

【ザンツ!!】

勢いよく切り落とされる尻尾……。

「ツ!?グオオオオオオ……!!」

大猿は驚きの表情のままみるみる縮んでいき、やがてもとのイツセー君になった。衣服は巨大化によって破れ去り、生まれたままの姿であった。

「イツセーくん！大丈夫かい!?」

「は、ははは… 悪りい木場… すま… ねえ…」

「ツ！イツセーくん！」

その言葉を最後にイツセーくんは気を失ったように倒れ込んでしまう。
僕は慌てて駆け寄りその体を支えた。

「………」

イツセーくんは死んだように眠っていた。

「無事でよかった…」

助ける方法を教えてくれたあの声の人にも感謝しなくちゃね、僕が内心でそう考えていると…。

「イツセー！祐斗！大丈夫?!」

不意に現れた魔方阵から慌てたようにこちらに走ってくる部長の姿があった。

その後ろには一緒に飛んできたのか、小猫ちゃんと副部長もいた。

「あらあら、教会が瓦礫の山になっていきますわ」

「……………無事でよかったです。佑斗先輩」

「ははは、なんとかかね…。それよりアーシアさんは?」

そう尋ねると小猫ちゃんは俯いて黙りこくつてしまう。

代わりに言うように部長が口を開いた……………。

「残念だけれど、あの子は亡くなったわ……………」

「そう……………ですか……………」

やっぱり、間に合わなかったか……………。

これじゃあイツセーくんに向げできないな……………。

明日から僕はどんな顔をしてイツセーくんに会えばいいんだろう……………。

「そうか悲しい顔をしないで二人とも……。前例はないけれど、これを試してみましよう」

そう言つて部長が取り出したのは残つていた『僧侶』の駒の悪魔の駒だった。

そうか！悪魔として転生させれば彼女は蘇る！

小猫ちゃんがアーシアさんを地面に降ろし寝かせる。

部長がその横に立ち、転生の為の呪文を唱えようとする。

「あ、部長、少し待つてください」

そう言つて僕は墮天使だった血だまりの所に向かった。

血だまりの中には淡く輝くリングがふんわりと浮かんでいた。

僕はそれを手に取りアーシアさんの所まで持つていくと胸元にそつとリングを置いた。

すると、リングはすぐさま反応してアーシアさんの中へと入り込んでいった。

しかし、一度亡くなった命は元には戻らない。

神セイクリッド・ギア器を戻したところでそれは変わらない……。

僕はそつとその場から離れ部長を見て頷く。

部長もそれを確認したのか、今度は悪魔の駒をアーシアさんの胸元に置き、呪文を唱

えようとした時だった…。

【ヒュウーンッ…コロコロ…】

何かが僕たちの前に飛んで飛んできて転がった。

「ッ!?これは、イツセーの…」

そう、イツセーくんの転生の時に出てきたあのオレンジ色の七つの玉だったのだ。

僕たちが驚いていると、七つの玉は強い光を放ちだす。

『ツツ!?』

僕たちが驚いている中、肩を支えていたイツセーくんがフラフラとその球の前に立ち何かを呟いた。

「出でよ神龍シエンロン!そして私の願いを叶えたまえ!」

すると、強い光を放っていた七つの玉から光り輝く龍が飛び出した。

その龍は手乗りサイズではあったが、とても神々しく、神聖な雰囲気醸し出していた。

『さあ、願いを言え、どんな願いも一つだけ叶えてやろう…』

僕たちは何を言えればいいのか分からず黙りこくっている。するとイツセーくんが口を開いた。

「その少女、アーシア・アルジエントを蘇らせてほしい」

その話しかたは普段のイツセーくんからは似ても似つかないしつかりとしたものだった。

龍はその願いを聞いて…。

『容易いことだ…』

【キュウウウン…!!】

龍の両目が紅く輝きすぐに消える…。

もう済んだのかとアーシアさんの方を見ると…。

【パチツムクリ…】

「…あれ？私、生きて…」

アーシアさんが起き上がった。

イツセーくん、なんでか分からないけれどアーシアさんは助かったよ……。
君が命がけで体を這ってくれたおかげでこの子は助けられたんだ。

『願いは叶えてやった、さらばだ!』

龍はそれだけ言うのと光となってイツセーくんの中へと消えていった。
それを最後にイツセー君はまた倒れてしまう。

「……あれが、ドラゴンボールの力……」

その光景を見ていた部長はまるで独り言のようにそう呟いているのだった……。

神龍の秘密！アーシア悪魔に転生!?

sideアーシア

お、おつすアーシアです！

イツセーさんはいつもこんな感じでしけど…はうう…こんな感じでよろしいのでしょうか…。

今はあの夜の一件から翌日の夕方の事です。

私はリアスさんに呼び出されて駒王学園という場所に向かっています。

因みにイツセーさんは一緒にありません。

イツセーさんはあの後^{大痕化}してから今まで目を覚まさないのです…。

お家に連れて帰ってから治療をはしましたがどうにも体の内側に相当な負担をかけていたみたいで私の力では完治させることはできませんでした…。

そう言う訳で私は一人で駒王学園に向かっているのです。

イツセーさんの治療の続きもしないといけませんから早く終わらせましょう！

私はそう心に決め、足を速めたのでした。

学園のに着くと、校門のところで木場さんが待っていました。

「あの、お待たせしました」

私が声をかけると木場さんにはにこやかに微笑んで私を出迎えてくれます。

「大丈夫ですよ、それより部長がお待ちですから案内しますね。こちらへ……」

「は、はい!よろしくお願いします」

木場さんの後に続いて私も学園の中に入っていききました。

中には殆ど人がおらず、部外者の私が入っても気づかれることはありませんでした。

「他の方はいらつしやらないのですか?」

私がそう問いかけると

「今の時間は部活も終わって他の生徒は皆帰宅してるんですよ。だからこそアーシアさんがこうして入れるんですけどね……。と、着きましたよ」

そう言っつて木場さんに案内されたのは校舎の裏手にある少し古びた建物の一室でした。

壁にはオカルト研究部と書かれた板がついています。

「ここにリアスさんがいらっしやるのですか？」

「ええ、それじゃあ入りましょう、どうぞ中へ：： 部長、アーシアさんをお連れしました」

「し、失礼します：：」

木場さんに言われるがまま中へと入っていくと奥の机に優雅に腰掛けるリアスさんの姿がありました。

他にも昨夜会った塔城さんや、姫島さんがソファに腰掛けて寛いでいる姿がありました。

「ありがとう祐斗、そしてよく来てくれたわ、アーシア・アルジェントさん。イツセーの具合はどう?」

リアスさんの問いに私は首を横に振ります…。

「イツセーさんはずっと眠ったままです…私の治療もあまり効果がないみたいで…」
先程も言ったように私のこの力は患部に直接光を当てなければあまり効果を発揮あ
しません。なので体の内側に傷を残しているイツセーさんにはあまり効果を得られま
せん…。

それを聞いたリアスさんは少し悩ましげな表情になりながら言います。

「そう、どうやらイツセーは相当な無理をしていたみたいね…アーシアさん、悪いけれ
どイツセーの治療は任せてもいいかしら?」

「はい!任せてください!イツセーさんは私が責任をもって治します!」

イツセーさんは私の初めてのお友達で大好きな人ですから!

「ありがとう、でもあなたもあまり無理をしては駄目よ?と、そろそろ本題に入らせても

らうわね」

そう言えば用があつて呼ばれてきてたんでした。

私は話を聞くために少し身構えます……。

「単刀直入に言うわね、あなた、悪魔になつてみる気はない？」

「……え？」

予想外な言葉に呆けていると、リアスさんが再度口を開きます。

「あなたの持つその神器、トワイライト・ヒーリング『聖母の微笑』はとても貴重なものなの、人間だけじゃなく、悪魔、天使、墮天使ですら治療できてしまうの……。その力が私は欲しい……。」

「で、ですが私は悪魔になるのは……。」

そんなことをしたら主への背徳行為になつてしまいます……。

「因みにイツセーも少し違うけど悪魔よ？」

「是非私を悪魔にしてください!」

「イツセーさんが悪魔だなんてなんでそのことを早く教えてくれないんですか!それなら悩む必要なんてなかったのに……」

「あらあら、切り替えが早いすわね……」

「シスターがそんなことでいいのかな……」

「…… 背徳シスター」

他の皆さんが何か言ってますけどこの際無視します。

え? 主の教えはどうしたって? イツセーさんと居られるならそんなことどうだつて…… どうだつて…… ううう……

「わ、分かったわ…… それじゃあこの駒を胸の前で持つてじつとしていてちょうだい」
そう言つてリアスさんは懐から小さなチェスの駒を取り出すと差し出してきます。
私は言われた通りに胸の前で駒を持ちます。

「我が名、リアス・グレモリーの名において命ず、汝、アーシア・アルジェントよ今再び魂を帰還せしめ、我が下僕悪魔となれ……。汝、我が僧侶として新たな生に歓喜せよ！」
私は生きているのにどうして魂を呼び戻すなんて言うのでしょうか……？

そんなことをリアスさんお言葉を聞きながら疑問に思っていると、私の手に持っていた駒と足元に魔方阵が描かれ、やがて駒が私の中へと入っていきます。

え？え？これは大丈夫なのでしょう……

そんな不安の覚えている間に周りの魔方阵は消え、駒も完全に私の中へと入ってしまいました。

それを見届けたリアスさんが声をかけてきます。

「どうやらうまくいったようね、アーシアさん、いえ、アーシア。これであなたは私の下僕悪魔となったわ、これからは『僧侶』^{ピシヨップ}として頑張ってもらおうわ、よろしくね」

「よろしくお願いしますわ、アーシアちゃん」

「よろしくね、アーシアさん」

「…… よろしくお願ひします。アーシアさん」

「は、はい!よろしくお願ひします!」

これで私もイツセーさんと同じ悪魔になれたのですね……。

主よ、こんな不道徳な私をお許しください…… はうっ!

痛ったた…… そうでした、主の天敵なのでお祈りは出来ませんよね……。

「それじゃ、アーシアも無事転生できたことだし住む場所とこの学園に通う手続きをしておかないとね」

あ、それでしたら……。

「リアスさん、住むところでしたらイツセーさんお家に住まわせてもらうことになりましたから大丈夫です」

その言葉にリアスさんを含める全員がポカンとしていました。

「いつの間にそんなことが決まっていたの?」

「えっと、イツセーさんが私をお家に連れて行って下さった時にお話をしてくれて……それでイツセーさんのお父様とお母様が快く引き受けてくださいました」

「イツセーだったら、いつの間にもそこまだ話をつけていたなんて……分かったわ、それじゃあ学園に入れるよう私から手続しておくわ……後日制服も渡すからイツセーが目覚ましたら一緒に登校してくること」

「はい！ありがとうございます……リアスさん！」

「いいのよ、あなたはもう私の下僕なのだから。それと、これからは私の事は部長と呼ぶこと、いいわね？」

「は、はい！部長さん！」

「よろしい、それじゃ、今日はもう帰っていいわ、イツセーの事も心配だし……アーシアには引き続きイツセーの治療をお願いね」

私はその言葉に力強く頷きます。

「分かりました、それでは失礼します」

そうして私はオカルト的を後にするのでした。

「ただいま戻りました」

「あら、お帰りなさいアーシアちゃん、用事は済んだの?」

家に帰るとお母様が忙しそうに家事をしながら聞いてきました。

「はい、私もイツセーさんと同じ悪魔になって帰ってきました!」

そう言うとお母様は少し驚いた顔をしましたが、すぐに微笑んで

「そう、それは良かったわね、それにしても、アーシアちゃんは本当にイツセーの事が好

きな のね」

「はうっ！す、好きだなんて… そんな…」

た、確かにイツセーさんの事は大好きですけど… 他の人に言われると恥ずかしいです…。

「あらあら、真っ赤になっちゃって、それよりイツセーの様子を見てきてくれる？ 私は晩御飯の支度をしなくちゃいけないから」

「は、はい！それじゃあ…」

私はその場から逃げるようにイツセーさんの部屋と向かいました。

… お母様の微笑ましいというような視線を受けながら…。

「イツセーさん、入りますね」

イツセーさんのお部屋も前に着いた私は扉をノックして中に入りました。

まだ目を覚ましてはいないのでしようね…と、半ばあきらめ気味に中に入ると…。

「フンツ…！フンツ…！フンツ…！」

寝間着のまま床で腕立て伏せをしているイツセーさんの姿が…。

「い、イツセーさん…？」

え？起きて…え？

私が戸惑っていると、イツセーさんは私に気が付いたのか声をかけてきます。

「ん？おお！アーシアじゃねえか！」

そのいつも通り過ぎるその姿に私は…。

「イツセーさん！」

私は思わず抱き着いてしまいました…。

「おつとおお…痛つてててえ…」

あ、いけない！私つたら…

「すみません！イツセーさん怪我をなさっているのに…」

「は、ははは…でえじようぶさこんくらい、気にしなくていい」

「で、でも…」

「んー…。オラはなんともねえんから気にすんな！」

…
イツセーさんにそこまで言われたらそうするしかないじゃないですか…。

「分かりました、でも！これからは無理はなさらないでくださいね？」

「い…？うーん…出来つかなあ…」

悩み始めるイツセーさん。イツセーさんならそうなるだろうなて思っていましたけど…。

「とにかく、治療しますのでじっとしててくださいいね?」
そうして私は神器でイツセーさんの体の治療を始めるのでした。

side out

イツセーが目を覚ました翌日…。

アーシアの治療とサイヤ人の頑丈な体により傷を感知させたイツセーは学校へと登校していた。

アーシアもリアスの気遣いで今日から駒王学園に入学することとなった。

アーシアの事で悪友の松田と元浜の詰問^{嫉妬の詰問}を難なく躲しぬいたイツセーと男子たちに質問攻めにあっていたアーシアはオカルト研究部へと顔を出していた。

イツセー達の他に木場、塔城、姫島、リアスも来ていた。

「そう言えばイツセーくん、聞きたいことがあるんだけど」

部室でも変わらず筋トレをしているイツセーに木場が声をかける。

「ん？聞きてえこと？なんだ？」

「うん、あのオレンジ色の玉についてなんだけど……」

「オレンジ色の玉？ああ、ドラゴンボールの事か？」

「そう、それなんだけど、アレから出てきたあの龍はいつたい何なのか気になってね」

「あらあら、そのお話は私も興味がありますわね」

「…… 私も気になります」

木場がドラゴンボールから出てきた龍、神龍の話題を出すとそれに食いつくように姫島と塔城も話に入ってきた。

机の所ではリアスも興味深そうに耳を傾けている。

対する神龍の事を聞かれたイツセーは不思議そうに首を傾げている。

「なんでおめえ達が神龍の事を知ってんだ?」

「シエン… ロン?それがあの龍の名前なのかい?」

「あらあら、うふふ、私達が知っているのは少し前にその龍を見たからですわ」

「…… 先輩から出てきたあのオレンジの玉から出てきました」

その言葉にイツセーの雰囲気が変わる…。

「おめえ達ドラゴンボールを使ったんか?」

その問いに部員たちは少し不思議な顔をする答えた。

「私達は使ってはいませんわ」

「うん、僕たちは近くで見えていただけじゃね」

「……使ったのはイツセー先輩です。その龍に『アーシア先輩を蘇らせてくれ』とお願ひしました」

それを聞いたイツセーは驚愕の表情をして言う。

「いいっ!? オラがアーシアを蘇らせたあ!?!」

「うん、龍はその願ひでアーシアさんを蘇らせた後に君の中に消えていったんだ」

「……その時に残ったのがこの石でした」

小猫が飾つてあつた色の落ちた灰色の七つの小さな玉を持つてくる。

「それを見た時から気になつていたのですわ、あの龍は何者なのかと……」

「……教えてください」

「.....」

イツセーは少し考え込むと.....

「分かった、教えてやるこれはリアスにはもう教えたけど、ドラゴンボールは七つ集めてある呪文を唱えると中から神龍が現れて一つだけ願いを叶えてくれるつちゆうモンなんだ」

それを聞いたリアス以外のメンバーは驚きを隠せないでいる。

「それは凄いですわね...」

「そんなものがあつたなんてね...」

「それはいつでも使えるものなんですか?」

「.....」

上から朱乃、木場、アーシアが話す。

小猫とリアスは何かを考え込むように黙り込んでいた。

「いや、そんなにすぐ使えるような物じゃねえ、ドラゴンボールは一度願いをかなえるとその後一年の間はただの石に戻っちまうんだ」

「なんですって!」

その言葉に即座に反応したのは意外にもリアスであった。

部員たちは驚いてリアスを見る。

リアスも自分の行動に気が付いたのだろう、何事も無かったかのように席に着いた。

「でも、そのドラゴンボールが一度使うと一年の間使う事が出来ないというのは本当なの?」

リアスの問いにイツセーは首を縦に振る。

「ああ、神龍だつて万能つて訳じゃねえ、力を蓄えるために一年間は眠りにつくんだ」

「そう...。」

納得しつつかう言うリアスの顔はどこか悔しそうな表情をしていた。

ところで悟空、お前、あのドラゴンボールはあの大きさならばそんなに力はないのじゃろ?元に戻るまでそんなにかかるのか?

(ん?いや、実際にはそんなにかかんねえと思う、多分この大きさなら二カ月もあれば復活すんじゃないかな?)

二カ月?何故それをあやつらに教えないのだ?

(なんでつて界王さまも知ってんだろ?ドラゴンボールは願いを叶える度にマイナスエネルギーが蓄積されちまって邪悪龍が生まれちまうつてことはよ)

う、うむ、それはしっておるが:::

(もしそんなことになったら今のオラじゃこいつらを守ることは出来ねえ、幸い今はオラの中でマイナスエネルギーは浄化できつけど、あまり使われちまうとオラにもどうしようもなくなつちまうかな!)

ほほう、なるほどな:::。そこまで考えてあんなことを言ったのか、お主、本当にあの

悟空か？

（界王さまひつでえなあ！オラだつてたまにはしつかりものくらい考えつぞ！）
ははは！スマンスマン、それじゃあワシはもう戻るぞ？

（ああ！またな！界王さま！）

卒業の二人！使い魔デビューのイツセーとアーシア！

アーシア・アルジェントが悪魔に転生してから二週間ほど時は進み…。

アーシアは立派に悪魔稼業をこなしていた…。イツセーと共に。

悪魔に転生したばかりの彼女はまだ駒王に来たばかりということもあり、イツセーがチラシ配りに同行していた。

今日もその仕事を終え、二人は部室へと戻って来ていた。

「オッス！今けえったぞ！」

「ただいま戻りましたあ」

元気良く帰ってくる二人に他の部員が笑顔で迎える…。

「お帰り、夜のデートは楽しかったかい？」

「はうっ…。デートだなんて…」

顔を真っ赤に染め俯くアーシアだが、かくいうイツセーはというと…。

「何言ってるんだ木場、オラ達チラシ配りに行って来たただぞ？な、アーシア」

「え？はい…ソウデスネ…」

全く意味を理解していないようであった。アーシア… 実に不憫な存在である…。

「あはは… そうだったね（アーシアさん… 強く生きてね…）」

木場もアーシアの事を憐みのこもった眼で見つめている。

「ゴホン… まずはお疲れ様二人とも、それとアーシア、もうチラシ配りはしなくてもいいわ」

「え？もういいのですか？」

「ええ、元々これは使い魔にやらせるべきことだから…。それでね？あなた達にもそろそろ使い魔を持たせてみようと思うの」

「使い魔…ですか?」

「なんだ?使い魔って…それ食えんのか?」

聞きなれない単語に首を傾げる二人。

イツセーはとんでもないことを言うがいつもの事であるので部員はあまり気にしていないようだ。

それを朱乃が説明する。

「使い魔というのは悪魔にとつて基本的なものなのですよ、主に主の手伝いや情報伝達、追跡などにも使えますわね」

「そうなんですか?凄いですね使い魔さんって!」

「???
うーん…」

朱乃の説明で目を輝かせるアーシアとは反対にイツセーはよく理解できていないのかまたも首を傾げている…。

「簡単に言うと僕たちの手伝いをしてくれる便利なペットだよ」

「へえ、修行相手にもなったりするのかな？」

木場がものすごく簡潔に説明によくやくイツセーは理解したようだった。

しかし、考えることは修行のこともようだ…。まさにこの男脳筋である…。

「修行に使えるかは置いておいて、これが私の使い魔よ」

ポンツという音と共にリアスの掌に小さな蝙蝠が出現する。

それに合わせるように他の部員たちも使い魔を出す。

「私のはこの子です」

そう話す朱乃の手には小さな子鬼…。

「……シロです」

言葉少なに話す塔城の腕の中には白い小猫…。

「僕のはこの子だよ」

そう言う木場の肩には小鳥が止まっていた。

「いろんな使い魔さんがいるんですねえ…。皆さんの使い魔さん可愛いです!」

「んー…。でもあれじゃ相手の相手にはならなさそうぞぞ…」

相変わらず脳筋はさておき…。

「それじゃ早速…。と言いたいところだけど、来客のようね」

リアスが何かに気が付き、ドアの方に目を向ける。

するとドアが開き、数人の男女が入ってきた。

「ん?おめえ達は…?」

「彼らはこの学園の生徒会だよ」

「生徒会長の支取蒼那さんの本名はソーナ・シトリー様と言って部長と同じ上級悪魔の

名ですわ、生徒会の方々はソーナ様の眷属なのです」

「そういうことか、だからこいつら感じる気が違ってたんだな」

「…… 気づいてたんですか？」

「まあな…… っても、あんまし気にしてなかったんだけどよ」

などと横でイツセーたちが話しているのを尻目にソーナと呼ばれた女とリアスは話し始める。

「ごきげんようソーナ……。 お揃いでどうかしたの？」

「ごきげんようリアス……。 お互い下僕が増えたことですし、ご挨拶をと思ひまして……。」

「どうやらソーナは新人同士のあいさつのために来たらしい……。」

「そういうことね、それじゃあ紹介するわ、兵士^{ポイン}の兵藤一誠と僧侶^{ビショップ}のアーシア・アルジェ

ントよ、二人とも挨拶を…。」

リアスに促され二人が少し前に出て自己紹介を始める。

「オツス!オラゴ… つとと、違えや、オツス!オラが兵藤一誠でございます」

「い、イツセーさん?え、ええつと… アーシア・アルジエントと申します。宜しくお願
いします」

「では、こちらも…^{ポーン}兵士の匙元士郎です…。

サジ、あなたも挨拶なさい」

「はい…。ども、^{ポーン}兵士の匙元士朗つす…。よろしく」

「へえ、おめえオラと同じ^{ポーン}兵士なんかあ!同じ^{ポーン}兵士同士、仲良くやろうぜ!」
イツセーがいつものように明るく手を差し出すが…。

「俺としては変態三人組の一人と一緒だということに屈辱しか感じないんだがな…」

匙と呼ばれた男はイツセーを見て心底嫌そうな顔をする。

「はははっ！まあいいじゃねえか！よろしくな！」

「ちよっ！おい！」

匙の言葉にイツセーは特に気にした様子もなく匙の手をとり握手する。

「ったく、最近お前だけ問題を起こさなくなったと思えばここまで性格が変わってるとはな…どういふかぜの吹き回しだ？」

「どうって言われてもなあ…まあいいじゃねえか！」

悪気の無いイツセーに毒気を抜かれたのか匙はため息をついて言った。

「分かった分かった、よろしくな…。それと、頼むからあのバカ二人もお前の手で更生させてくれ…。」

「あいつらは無理じゃねえかな…？」

「ふふっお二人とも仲がよろしいんですね!」

開き直って話している匙と特に何の気もなく話すイツセーを見て、アーシアは微笑ましそうに見守っているのだった…。

ソーナ達が帰った後、イツセーはリアス達に連れられてある森に来ていた。

「なあ部長、ここどこだ?」

「暗くて少し怖いです…」

キヨロキヨロ辺りを見回す二人にリアスが説明する。

「ここは使い魔の森よ、私達の使い魔もここで契約したのよ」

「へえ……ここ……ツ!? 誰だ!」

不意にイツセーが近くの木を睨み付け叫ぶ…。

どうやら木で何かを感じ取ったようだ。

すると、その木の枝から謎の男が現れた。

その男はイツセー達を見下ろすと唐突に叫びだした。

「ゲットだぜい!」

その叫びと共にイツセー達の前に降り立った男の格好はランニングに短パン、そして背にバックパックを背負うという珍妙な格好をしていた。

「誰だおめえ…?」

流石のイツセーも困惑しているようだ…。

「そんな格好してたら風邪引くぞ!」

ズゴツ…: そつちは気にせんでもいいってのにもう…。

「はははっ!面白い小僧だぜい、俺は使い魔マスターのザトウージ!使い魔のことなら俺に知らない事はないぜい!」

堂々と言い切るザトウージと自分の事を呼ぶ男…。

そこに、朱乃なら付け加えるように説明がはいる。

「彼は使い魔に関するプロフェッショナルなんですのよ」

その朱乃の言葉にイツセー達は納得したようにザトウージを見ていた。

「んー、今日は絶好の使い魔日和だぜい!

使い魔ゲツトキ最高だぜい!

俺にかかればどんな使い魔でも 即日ゲツトだぜい!

さあーてどんな使い魔をご所望だぜい?強いのか?早いのか?それとも毒持ちとか」

謎のしぐさを交えて話すザトウージ。

イツセーは特に気にせず言葉を交わす。

「そおだなあ、オラ修行の相手になる強えのがいいぞ!」

「強い使い魔か…。ふむふむ、面白いガキだぜい！お前に合った使い魔を探してやるぜい！」

ザトウジを先頭にイツセー達は歩き出すのであった。
先ず最初に来たのは大きな湖だった

s i d e o u t

s i d e イツセー

「この湖にはウンディーネという水の精霊が住み着いているんだぜい」
ザトウジに連れてこられたんは湖だった。

「うんでいーね？水の精霊？ソイツ強いんか？」

「見て見れば分かるぜい、おっウンディーネが姿を現わすぜい」

その言葉にオラは湖面を見る

すると湖面から後ろを向いた青いの女が出てきたんだ!

「あいつがウンディーネなんか…強いんかな?」

そうしてしばらく見ているとその女が振り向きながら

「フンツ!ガアアアツ!」

いいっ!?すげえガチムチじゃねえか!

強そうではあつけど…なんかなあ…?

「……契約しにいかないんですか?」

「強そうなんだけだよ…アイツは止めとくぞ」

出来ればもつと強そうなんがいいしな!

超サイヤ人の攻撃にも耐えられるくれえじゃねえと…!

そうして更に先に進むと、不意にザトウワジが足を止めた。

「ん？待て…見ろ」

ザトウジの言葉に連れられて上を見る……。

そこには小さなドラゴンがいたんだ！

「あれドラゴンなんか？ちつちええなあ…！」

「わああっ！可愛いドラゴンちゃんです！」

スフライト・ドラゴン
「蒼雷龍…青い雷撃を使うドラゴンの子供だぜい」

雷を使う龍なんか…。

「これはかなりの上位クラスですね」

「私も見るのは初めてだわ」

「ゲットするなら今だぜい？成熟したらゲットするのは無理だからな」

ドラゴンって大人になつと捕まえられねえんか、オラガキン時は恐竜と追っかけっこしてたからよくわかねえや!

「イツセーくんは赤龍帝の力を宿していますし、相性はいいんじゃないかしら」

「オラがか? でもアーシアが欲しいんじゃないか? さつき可愛いつて言つてただろ?」

「へ? い、いえ! イツセーさんが契約するなら私は何も言いません!」

「いや、でもオラもつと強そうな奴がいいしよ…アイツ、まだ子どもだろ? 相手になんねえよ…」

「……………どこまでも修行バカですね」

「はははっ! まあ気にすんなって! (ワシワシ)」

「にやう…………急になんですか?」

相変わらず酷つでえなあ小猫は…。
なんとなく小猫を撫でていると

「きゃっ！」

悲鳴が聞こえそちらを見ると

アーシアにスライムのようなものが降ってきていた。

「あらあら…まあ…」

「え？あ、え？」

見ればオラ達の真上に大量のスライムが落ちてきてやがる！

しかも部長達の服を溶かしてんじやねえか!?

こうなったら仕方ねえ！部長達には悪りいけどちつと我慢してもらおうぞ！

「ちつと荒療治になっちまうけど、

みんな！ちつと痛えかもしれねえ我慢してくれよ！

はあああああ！」

俺は気を爆発させ周りに大爆発を起こした

『きやああああああつ!!』

「うわあああああつ!!」

爆煙と気の光が収まるとスライムは跡形もなく消し飛んでいた。

「ふい〜…。これでよし!」

『どこも良くない!』

はははっ! 勢い良く突っ込まれちまった

その後、一緒巻き込まれちまった蒼雷スフライ・ドラゴン龍がオラにビビってアーシアに懐いて、アーシアがラッセーと名付けて契約してたぞ!

こうしてオラ達はアーシアが無事使い魔をゲットしたことで終わりを告げるのだった…。

使い魔にはオラの相手を出来る奴は居なさそうだぞ…。

リアスの乱心！そして現れる謎のメイド！

sideナレーション（界王）

「はあ……」

最近、リアスの様子がおかしい……………。

ここ最近、暇があればこうして溜息を付いては心ここにあらずといった面持ちで何かを考え込んでいる。

部員達もその変化に気が付いてはいたが、誰も声を掛けてはいないようだ……………。

（ただしイツセーは除く）

現在は授業も終わり、オカルト研究部が悪魔稼業をこなすために活動している。

その為、部室にはリアス一人しか姿がなかった……………。

「…………… どうしたらいいの？」

そんなふとした眩きに帰ってくる返事はない。

リアスは一人、静かな部室で何かを考え続けるのだった……………。

視点は変わってイツセーの場面……。

「くあく……ずいぶん遅くなっちゃったなあ、もう眠てえぞ……」

本日の悪魔稼業を終え、アジアと共に帰宅したイツセーは自室へと戻ってきていた。

そして制服から寝間着へと着替えると、そのままベッドに潜り込み、眠りについた。

「あり?なんだこゝろ?」

眠りについたイツセーが次に目を覚ましたのは真っ赤に燃え盛る不思議な空間であつた……。

「……どっち向いても炎ばつかでなんも見えねえぞ……」

『よお、ようやく会えたな相棒……』

と、不意に低い声が聞こえてくる。

「ん!? 誰だ! どこいる!」

イツセーはキョロキョロと辺りを見回すが、周りには誰もいない。

『ここだ、お前の後ろにいるぞ……』

そう言つてイツセーの背後にあつた炎が龍を形作り、赤い龍へと姿を変える。

「ツ! おめえは!」

『フツ……気が付いたか?』

「いってえ誰だ?オラおめえみてえな奴知らねえぞ!」

ズコオツ!悟空!お前はなんでいつもそうなんじゃ!!

(んなこと言ってもよお... 界王様、覚えてねえんだから仕方ねえじゃねえか.....)
お前はもう少し覚えておくという事をするようにせい.....。

(分かってるって...)

本当か?

『.....』

見ろ!ドライブも呆れとるじゃないか!

(はははっ!悪りい悪りい!)

つたくもう… 続けるぞ……………。

『俺か？俺はウエルシユドラゴン…。赤い龍の帝王ドライグ、お前の左手にいる者だ』

「ドライグ？へえ！オラの左手にはおめえがいるんかあ!!……………ん？」

感心したように自身の左腕を見るイツセー。

だが、すぐに違和感があることに気が付いたようだ。

「うーん……………？」

しばし全身を眺める悟空……………。

「いいっ!?なんでオラこの姿になってんだ!？」

『ようやく気が付いたか……………。というより、なんだ今の長い間は……………』

呆れと哀れみの視線を悟空に送るドライグ。

「はははっ!おめえに言われるまで気が付かなかったぞ」

『それはそれでどうなんだ?まあいい、これで思い出したか?俺が誰か……』

「ああ、なんとなくな、おめえずつとめえ前に白い奴と一緒に暴れてた龍だろ?」

『そうだ、そしてお前に二対一で敗北した……な……』

「おめえ達が弱いものいじめなんかしてっからだろ?オラ、あいつらを助けに入っただけだ」

『我等の戦いの邪魔をしたのが悪い、と、この話は置いておくか……』

お前にはリベンジを……といきたいところだが、相棒と戦っても意味がない。

それに、今のお前は弱すぎる……』

「……かもな」

『ほう… やけに素直じゃないか』

「おめえの言う通り、

今のオラじやどんだけ頑張つてもおめえには敵わねえ…。

もしやつてもすぐにやられちまうんは目に見えてる」

『実力の差をよく理解しているようだな…。』

だが相棒であるお前が弱いと俺にも都合が悪い…。

故に、お前を鍛えてやろう』

予想外の提案にさしもの悟空も驚きを隠せない。

「え？ 良いんか？」

『ああ、お前なら放つておいても強くなりそうだが、どうせ強くなるのなら早い方がいいだろう？』

「ああ！ よつしやあー！ これでもた強くなれつぞ！」

ガッツポーズで喜ぶ悟空。

『だが、俺の修行は甘くはないぞ?』

「ああ、望むところだ!」

ドライグの言葉に気合十分といった面持ちで返事をする悟空。

『いい返事だ...。』

そうと決まれば早速... と言いたいところだが、

どうやらお前を起こそうとしている者がいるようだな』

「ん? オラをか?」

その直後、悟空の意識が浮上を始める。

『修行はまた後程だ...。』

お前がまた眠りについた時は今度こそ修行を開始してやる』

浮上する意識の中、そんなドライグの言葉を聞きながら、悟空は目を覚ますのだつ

た…………。

「……きて……きてちようだい………… 起きてちようだいイツセー！」
揺すり動かされてイツセーは目を覚ます。

「ん？あり？部長じゃねえか、こんな時間にどうしたんだ？」

見ると、時刻は夜中の三時過ぎだ。

眠い目を擦りながらイツセーは唐突に訪ねてきたリアスに問いかける。

しかし、次にリアスの口から飛び出したのはとんでもない言葉であった…………。

「あなたにお願いしたいことがあるの、至急私の処女を貰ってちようだい！」

「…………へ？」

イツセーはの返事を聞かずリアスは服を脱ぎ始める。

「なあ、部長、ちよつと聞いていいか」

「……………何かしら?」

リアスの脱衣を平然と眺めていたイツセーが不意に問いかけた。

「部長がなんで服脱いでんのか知らねえけどよ、しよじよつてなんだ?」

【ズッコッ!!】

これには流石のリアスもズッコケる。

おい悟空!これはボケか!?!シャレなのか!?!いくらお前でも知つとるだろ!

(わっかんねえから聞いてんじゃねえか……………)

お前：： 息子をできる前にやることはやらなかったのか？

(悟飯たちが産まれる前？なんもしてねえぞ、いつの間にかチチの腹ん中に出来てたかんなあ)

そうか：：：：。

なんとかその場から起き上がるとリアスは信じられないといった表情で話し出した。

「：：： そこからなの？」

いいわ、時間がないから手短かに説明してあげる。

処女というのは女性の中にある膜のようなものなの。

あなたにはそれをあなたのコレで私のココに入れてそれを破ってもらいたいの」

「うゝん：：？つまりどういうことだ？」

リアスの説明にまだ理解出来ていないらしいイツセー：：：：。

「だから…… もう！なんでもいいから早く私の処女を貰って……【ボウ】……」

リアスがそこまで言いかけた時、部屋に魔方陣が浮かびあがる。

「ん？今度はなんだ？」

「はあ…… 一足遅かったようね……」

イツセーの疑問にリアスの諦めたような言葉……。

浮かび上がった魔方陣はやがて一人のメイドらしき人物を召喚するのであった……。

side out

sideメイド？

サーゼクス様からの依頼で、私は使い魔を使い、リアスお嬢様の動向を探っております。

婚約の話が決まった日から、リアスお嬢様は何かをずっと考え込んでいました。

遂に動きを見せたかと思えば、それは眷属の一人に貞操を捧げるというものでした……。

私は使い魔からそれを聞き、すぐさまリアスお嬢様の元へと転移しました。

転移した先で見たのは、半裸のリアスお嬢様と不思議そうに首を傾げた下級の男性悪魔？でした。

その光景だけを見て私は開口一番に言います。

「このような下賤げせんな輩と……。

旦那様とサーゼクス様が悲しまれます……よ」

しかし、言いながらその男性の顔を見て私は言葉に詰まってしまいました。

別に普段から男性を見て驚いたりしている訳ではありません。

そうであれば、サーゼクス様や他の男性眷属の方々と過ごすことなど出来ませんか
ら…………。

私が驚いたのは目の前の彼の容姿です。

顔や来ている衣服などは違いますが、彼が纏う雰囲気似ていたのです。

そう、数千年前、死にかけていた私を助けてくださり、ずっと探し続けていたあの方に…………。

そして何よりも目を引くものがその髪型でした。

私は今までいろいろな方とお会いしましたが、あの方のような髪型の男性はいらっ
しやいませんでした…………。

ですが彼はその髪型をしていらっしやるのです。

「ツ!?ま、まさか…： 貴方は…：！」

「グレイファイア？」

リアスお嬢様の怪訝そうな声が聞こえます。

いえ、少し落ち着きましょう…： 他人の空似という可能性もありますから…………。

「大丈夫です、お嬢様……………」

失礼ですが、お名前を聞いてもよろしいですか？」
すると彼は私の方に向けて話します。

「オラか？オラ孫g. ……じゃねえや、オラ兵藤一誠だ！」

「っ!!」

間違いありません！この方が……………！

ようやく…… ようやく見つけました！

（孫…… 悟空様……………）

嬉しさあまり、表現のしようがない何かが私の中に溢れ出します。

私はなんとかそれらを押し留めようと思いますが、溢れるその感情にあらがうことはできませんでした……………。

視界が滲み、止めどなく涙が溢れてきます。

その場に膝を付き私は泣き崩れます。

「お、おい…。でえじようぶか?なんで泣いてんだ?オラなんかしちまったか?」
いえ、違うんです…。嬉しくて……………」

そう言いたくても、涙が溢れて返事も出来ません。

そんな私を彼はオロオロと心配そうに見つめているのです。

side out

sideナレーション(界王)

泣き崩れていたメイドがしばらくしてようやく落ち着いたところでメイドが口を開いた。

「先程はお見苦しいものをお見せしてしまい申し訳ありませんでした」

「本当よ、いきなり泣き出すから驚いちゃったわ……………」

慌てて防音結界を張ったわ……………」

「はははっすげえ泣き方だったぞおめえ、オラビックリしちまった」

「………… お恥ずかしい限りです」

顔を真っ赤にして謝るメイド……………。

「はあ… まあいいわ、それよりグレイファイア、あなたが来たということはこれはお父様の意思？それとも… お兄様の意思？」

「………… 全部です」

少し間を開けてそう返すメイド。

「そう、どちらにしろ、一度私の根城に戻りましょう。話はそちらで聞くわ… 朱乃も同伴で良いわよね？」

「『雷の巫女』ですか、構いません、『王』^{キング}たるもの、常に傍に『女王』^{クイーン}を置くのは当然ですの…」

リアスはメイドの言葉に小さく頷くとイツセーの方に歩み寄り、謝罪した。

「ごめんなさい、迷惑を掛けたわね… イッセー」

「オラならでえじようぶだ!それによく分かんなかったしな。けど、部長」

「無理すんじやねえぞ?」

「ツ!ええ、気を付けるわ… お休みなさい」

「… リアスお嬢様を止めていただいてありがとうございます兵藤様… それで
は…」

リアスとメイドはそう言うと言と魔方陣の中へと消えていった。
イッセーはそれを見送って呟く。

「ふあくあ… 寝るかあ…」

そうしてイッセーは再度眠りにつき、精神世界でドライグとの修行に打ち込み始める
のだった。

リアスの婚約者!?ライザー・フェニックス登場!

sideナレーション(界王)

昨晚の一件から時間は飛んで翌日のこと……。

本日の授業を終え、イツセー達は部室へと向かっていた。

「ッ!」

部室に向かう最中、イツセーは何かの気配を感じとりピクリと反応する。

「……イツセー先輩、どうかしましたか?」

それに気づいた小猫が不思議そうに声を掛ける。

「ああ、どうやら誰か部室に来てるみてえだ」

「誰か?部長達じゃないのかい?」

「部長の気も感じっけど、それともう一つ違う気を感じんだ…。コイツはオラも知ってる奴の気だな」

「イツセーくんの知り合いってことかい? うーん、誰だか分からないけど、早めに向かうとしようか」

そうしてイツセー達は部室へと向かう足を早めたのだった……。

部室前までやって来ると、木場が不意にピクリと何かを感じ取ったように反応した。

「この僕がここまで来てようやくさつちでできるなんてね…イツセーくんが言っていたのはこの人のことだね?」

木場の言葉にイツセーは無言で頷く。

木場や他の皆も頷き返し、部室に入っていくのだった。

部室の中へ入るとそこには部長と昨晚イツセーの部屋に来ていたメイドであった。

「やっばしおめえだったんか」

「昨夜ぶりでごさいます…兵藤様…。」

ペコリと礼で返すメイド…。

「…：…：… イツセー先輩、グレイフィア様とお知り合いなんですか？」

「ん？おお、昨日オラの部屋に来てたんだ」

「え？イツセーさんのお部屋に…？」

小猫の問いに答えたイツセーの言葉に、アーシアが不思議そうにする。

それを聞いていたグレイフィアと呼ばれたメイドが割り込むように口を挟む。

「兵藤様、それでは語弊がございます……………」

それよりも、お嬢様、この事は私からお話し致しましょうか？」

そのグレイフィアの言葉にリアスは首を横に振る。

「いえ、私から話すわ…………… 実はね……………」

少し考え込むように間を開けてからリアスが口を開いた直後、魔方陣が現れ、炎と共にホスト崩れの男が姿を現した。

「… フェニックス」

紋様をみてボソリと木場が呟く。

炎が収まると、男はリアスの方を向き、言い放った。

「ふう、人間界は久しぶりだ、さて、会いに来たぜ、愛しのリアス」

「いやあ、やはりリアスの『女王』^{クイーン}が淹れたお茶は最高だな」

「痛み入りますわ……」

ホスト崩れの男の誉め言葉に朱乃はそう返すが、そこにいつものニコニコとした雰囲気はない……。

そんなことは気にしていないとばかりに男はリアスの髪や脚を触っている。

「なあ、アイツいつてえ誰だ？おめえたちの知り合いか？」

その疑問に答えたのはグレイフィアであった。

「兵藤様、この方はライザー・フェニックス様です。」

フェニックス家の御三男であり、グレモリー家次期当主、リアス・グレモリー様の御婚約者であらせられます……。」

「へえ〜……！なあ、もう一個聞いていいか？」

「ごこんやくつて、いったいなんだ?それって食えるんか?」

【ズッコオツツ!!】

いつも通りのイツセーの言葉に、その場にいる全員が盛大にズッコケる…………。

「婚約というのはですね、親しい仲にある男女が結婚の約束をすることでございます。
兵藤様」

「そうなんか?部長、おめえそのへんてこ頭と仲いいんか?」

「へんてこ頭…?」

「「「「ブフツ」」」」

それを聞いたリアスを除く全員が小さく吹き出す。

あのグレイフィアまでもが吹き出してた…………。

「プフツ：： そんな訳ないじゃない、これはお父様達が勝手に決めた話なんだから」

「リアスの父ちゃんたちが決めたんか？ 結婚の相手を勝手に決めちゃうなんて、酷つでえな……」

「…… 高貴な家の方々にはいろいろと事情があるのです…… 兵藤様」

グレイフィアが窘めるように話す。

「そうなんか？ 大変なんだな、高貴な家つてのは…… 好きでもねえこんなヘンテコ頭の奴と結婚させられるなんてよ」

「……」

その言葉にグレイフィアは返事はせず、黙っていた。

終始ヘンテコ頭と言われていたライザーも表情筋がピクピクと動いていたが、辛うじて抑えた様だった。

それを欠き消そうとでもいうかのように、尚もリアスの髪や脚を触り続ける。

それが我慢の限界だったのか、リアスが立ち上がり怒鳴った。

「いい加減にしてちょうだい!ライザー!以前にも言ったはずよ!私はあなたとは結婚しないわ!」

だがライザーはヘラヘラとしながら返す。

「だがな、リアス、そう言う訳にはいかないだろう?キミの所の御家事情は意外に切羽詰まっていると思うんだが?」

「家は潰さないし、婿養子だって迎え入れるつもりよ」

そのリアスの言葉に顔を輝かせるライザー。

「おお!流石リアス!じゃあ早速俺と」

ライザーがそこまですぐ言いかけたところでリアスが遮るように口を挟んだ。

「ライザー、私は私が良いと思った者と結婚する……」

古い家柄の悪魔にだって、その位の権利はあるはずよ」

それを聞いたライザーは少し怒気を吹きませながら話し出した。

「……俺もな、リアス……」

フェニックス家の看板を背負った悪魔んだよ。

この名前に泥をかける訳にはいかないんだ……。

それに、この世界の炎と風は汚い……。

炎と風を司る悪魔としては耐えがたいんだよ！

俺はキミの下僕を燃やし尽くしてでも冥界に連れ帰るぞ」

そう話すライザーとリアスの間で一触即発の空気が包み込む。

その様子を黙って見守っていたグレイファイアが不意に口を挟んだ。

「……お嬢様、ライザー様、これ以上騒ぎ立てるのであれば、私も容赦致しませんが、よろしいですか？」

この一言と共に放たれた軽い殺気で、一触即発だった部室の空気が一瞬で凍り付く。

殺気を直にぶつけられた二人は冷や汗を流し、見ているだけだったメンバー達も動かないでいた。

……ただ一人それをワクワクしながら見ている一人の戦闘民族の『兵士』を除いて……。

「最強の『女王』^{クイーン}と称される貴女に言われたら、流石の俺も怖いよ……」
そう言ってライザーは怒気を引込め、リアスも怒気を収めた。
それを見てグレイフィア自身も殺気を収め、話し出す。

「こうなることは旦那様も予想されていました。」

ですので、『レーティングゲーム』

で決着をつけるのはいかがでしょう?」

驚く二人……。

意味が分かってないのか、コソツと木場にイツセーが耳打ちする。

『なあ、レーティングゲームっていったいなんだ?』

『そっか、イツセー君は知らなかったよね、

(レーティングゲーム)というのはね?』

爵位持ちの悪魔……。

簡単に言えば部長のような上級悪魔達だね。

そんな悪魔たちが下僕を戦わせて競う

チエスに似たゲームだよ』

『チエスつてのが何なのかよく分かんねえけど、戦うゲームつてことだけは分かったぞ』
そう二人が話している間にも話は進んでいく。

「まさか、こんな好機はないわ、

ゲームで決着を付けましょう、ライザー」

「へえ、受けちゃうのか、キミのこの面子で俺に勝てるど？」

例え頑張ったとしても俺達に敵うのなんて精々その『雷の巫女』くらい「そいつはどうかな？」なに？」

ライザーの言葉を遮るように口を挟んだのはイツセーであった。

「おめえが強えのはなんとなく分かった、けどよ、落ちこぼれの下級悪魔だつて必死で努力すりゃ、エリートの上級悪魔を越えることだつてあつかもよ？」

「ほう、なら試してやろう、その落ちこぼれとやらの努力の成果を」

パチンツとライザーが指を鳴らす。

すると、ライザーの背後に複数の魔方陣が現れ、中から数人の女が姿を現した。

「こいつらが俺の下僕たちだ。

さて、ミラ、やれ……」

「はい、ライザー様」

ライザーの眷属の一人であろう小柄な棍を持った少女だった。

ミラと呼ばれた少女は高速でイツセーとの間を詰め、勢いよく棍を突き出し……が……。

「ホッ!」

そんな軽快な掛け声と共にその一撃は容易く止められてしまう。

「なっ!はなっ……せ!」

「へへへっおめえの動き単純だから読みやすかったぞ、よっと！」

掴んだ棒を器用に使い、ミラから棍を奪い取ると、慣れた手つきでクルクルと回し始めるイツセー。

「懐かしいなあ、オラもうんとガキン時にじっちゃんから教わった棒術と如意棒で戦ってたっけなあ……」

「くっ！返せ！」

ミラが棍を奪い返そうと飛び掛かるも、トリツキーな動きで全て裁かれてしまう。

「いいか？棒術つちゆうんはこうやんだ。だりやああああ!!」

先程までクルクルと棍を回していたイツセーが掛け声と共に瞬時に身らに距離を詰め超スピードで四連撃を繰り出す。

「ぐっ……はっ……あぐっ……！」

「終わりだ！でりやあああああつっ！」

【ドゴンツ!!】

止めの鋭い一撃がミラの腹部に叩き込まれる。

「……ッ!かはっ……!」

勢いよく吹き飛ばされ、背中から壁に激突してしまうミラ……………。

「ミラ!?!」

眷属の一人が驚いて、すぐさま駆け寄る。

しかし、当のライザーはと言えば……………。

「へえ、ミラを倒したか、どうやら実力はそれなりにあるらしい」

「まだやるんか?」

根を構えながらライザーを睨みつけるイツセー。

しかしライザーは首を横に振り……………。

「いや、止めておこう、ここでやりあっても意味はないんでね

リアス、ゲームの日程は十日後だ、それまで眷属達を少しでも鍛え上げておくんだな」

「私にハンデを与えようというの!」

「己惚れるなよ、リアス、これは経験者としての忠告だ、ゲームの世界はお前が考えているほど甘くはないんだ……………」

キングが采配を誤れば、それだけで評価は下がる。

いくら下僕が優秀でもな……………」

その事をよく覚えておけ……………」

そう言うライザー達は魔方陣と共に消えていった。

それを見届けた後に、グレイフィアが口を開いた。

「では、ライザー様の言葉通り、ゲームの日程は十日後という事で準備をさせていただき
ます……………」
それと、兵藤様、少しお話がありますので、少しよろしいですか?」

「ん? わかった!」

グレイフィアに呼ばれたイツセーは部屋を出るグレイフィアについていくのだった。

別の部屋へと連れてこられたイツセーは首を傾げていた。
どうして自分が連れてこられたのか分からないようだ……。

「……ようやく、二人きりになりましたね」

「ん? ああ、けどよ、なんでオラに話ってなんだ?」

「それはいずれ……今はこれをお受け取り下さい」

そう言ってグレイフィアが渡してきたのは魔方陣が描かれた紙であった。

「これって……紙だよな?」

「はい、それで兵藤様、今夜はいつであれば御在宅でしょうか？」

「いざいたく？」

「家に帰っているかということですか？」

「ああ、そういうことか！」

うーん……夜中なら帰ってきてつと思うぞ？」

「夜中ですね？ 畏まりました」

ではまた本日の夜中に伺わせてもらいます。

詳しいことはその紙の裏側に書いてありますのでお読みになってください。
それと、この事は誰にも言わないでください……………。

それではまた深夜に……………」

そう言うとうと、グレイフィアは魔方陣を展開すると、その中に消えてしまった。

「……なんだったんだ?」

それを見送ったイツセーはそう呟くと紙をポケットにしまい、部室へと戻っていくのだった。

「グレイファイアの話はなんだったの?」

部室に戻ったイツセーにリアスが聞いてきた。

「いや……それが、言っちゃいけないんだよ」

その言葉を聞いたリアスは少し考え込んでいたが、少しして口を開いた。

「そう、まあグレイファイアなりの考えあつての事でしょうし、これ以上は聞かないわ」

「サンキュー!部長!」

「いいのよ、それじゃあ、あなた達、今日のお仕事を始めるわよ！」

「「「「「はい！（ああ！）」」」」」」

こうして本日の悪魔稼業がスタートするのだった……。

side out

side イッセー

オツス！オライツッセー！

今日の契約取り？を終わらして家に帰ってきたオラ達は飯、風呂、着替えを終えて自室に戻って来てたんだ。

「ふあくああ…早く寝ねえとなあ」

オラがベッドに入ろうとした時だったぞ。

着替えん時になにげなく置いた紙（いつ入れたんかは忘れた）が急に光り出したと思ったら、

中から魔方阵が飛び出してその中からグレイファイアが出てきたんだ。

「先程ぶりですね、兵藤様」

「いいっ!?グレイファイア!どうしたんだ?こんな時間に……………」

「……?先程、深夜に伺うとお伝えしておいたはずですが……………」

それに、紙にも書いておいたのですが……………」

もしかしてお読みになっていないのですか?」

あ…そういうそんなこと言われてたっけな……………」

すっかり忘れちゃってたぞ……………」

「はははっ悪りい悪りい!忘れちゃってたみてえだ!」

「そうでしたか、もう少し分かりやすく表記しておくべきでしたね… 申し訳ごさいま

せん……………」

いいっ!?なんでグレイファイアが謝んだ!?

「い、いや… 悪いんはオラだろ？ 謝るんはオラの方だ… すんません」
こ、これで良いん… だよな？

「ふつつ兵藤様はお優しい方ですね…。

私なら気にしてないので大丈夫です。

それで、用件なのですが…。

貴女にお聞きしたいことがあるのです」

「ん？ オラに聞きたいこと？」

なんだ？ オラ何かしたんか？

「はい、単刀直入にお聞きします。

兵藤様は『孫悟空』という名前に覚えはありませんか？」

「なっ!? なんでおめえがそれを!!」

ど、どうしてこいつがオラのめえの名前前を知ってんだ!?

オラの名前を知ってるんはイツセーと、一星龍たち神龍しか知らねえはずだ!

「やはり、ご存じなのですね?」

……
こうなりや観念するしかねえな。

「ああ、知ってつぞ、というより、オラがその『孫悟空』だ」

その言葉を聞いたグレイファイアはいきなりボロボロと泣き出してオラに抱き締めてきた……。

「いつ?! い、いきなりどうしたんだよグレイファイア!」

「くっ……やつぱり……やつと……やつと見つけました……」

悟空様……この数千年……ずっとお会いしようございました……!」

そう言いながらもボロボロ涙を溢れさせる泣くグレイファイアにオラはどうしたらいいかわかんねえ……。

オラはなんでこうなったのか必死に頭を回転させる。

「うーん……うん？……駄目だ……。全然わかんねえぞ……」
いくら考えても思い出せねえ……。

すると、グレイフィアが不意に離れてオラに言う。

「お忘れですか？ 私は数千年程前、冥界で死にかけていたところを貴方に助けられて不思議な豆を与えられた悪魔です」

数千年前？ 不思議な豆？

ちゆうことはオラがアイツに頼まれる前……だよな？

不思議な豆ってのは多分、仙豆のことだと思っし……。

仙豆を食わして助けたあくま……アクマ……あく魔……？

あっ！もしかして！

「ひよつとしておめえ、あん時仙豆食わせたヤツか？」

するとグレイフィアは更に顔を涙でぐちゃぐちゃにしながら頷いて言った……。

「はいっ……はいっ……そうですっ……ようやく思い出して頂けたのですね……」

「いやー……！ オラすっかり忘れちゃってたぞ、言われなかったら気づかなかったな……。

にしても、よくオラが孫悟空だつて分かつたなあ、オラ今姿も名前も変わっちゃまつてん
のによ」

「すぐに分かりましたよ……」。

纏う雰囲気やその喋り方、それにその特徴的な髪型で……」

そうだったんか? 案外めえん時の名残が残つてるんかもしんねえな……」。

「貴方様に助けられてから数千年……」。

私は探し続けました。

でも『孫悟空』という人物は見つけられませんでした……」。

ですが、探し始めて数千年、ようやく見つけられました……」。

悟空様、私の全ては貴方の物です……」。

もう、離さないでくださいませ……」

ん? なんか今変な言葉が聞こえた気がすつぞ?

「えつとよ……グレイファイア?」

ちつと聞くけれど、さっきなんて言つたんだ?」

「え？ 私の全ては貴方の物です……と、何かありましたでしょうか？」

「うーん……オラに何かをくれるってのはわかったんだけどよ、何をくれんだ？」

「何を……ですか？ 貴方様に捧げるものは私自身です……。」

私の心はあの時から既に悟空様の物なのですから……」

ん……くれる物はグレイファイアなんか？

ちゆううことはだ……。

こいつはあん時のチチと同じ感じかもな！
結婚するまで

「そっか、分かったぞ！」

おめえがおめえくれるってんなら貰うぞ。

けど、一つだけいいか？

オラはもう孫悟空って名じゃねえ、

この町の一人のサイヤ人、兵藤一誠だ。

だからそのごくうさまって呼び方は止めてくれっか？」

「この呼び方を止めてほしいのですか？ 確かに、名前が違うのにこの名前で呼ぶのは変です……。」

では、これからは一誠様と…これならよろしいですか?」

「ああ!バツチリだ!」

「では、改めまして一誠様と呼ばせて頂きます……。

一誠様、不束者ですが、これからよろしくお願い致します……」

「ああ!よくわかんねえけどよろしくな!グレイファイア!

と、そろそろ寝ねえとな、グレイファイアももう遅いから泊まってつてくれ、オラのベッド使つて良いかつさ」

「一誠様のベッドを…?ですが一誠様は何処でお眠りになるのですか?」

「ん?オラか?オラはそこら辺の床で寝るからでえじょうぶだぞ!んじや、オラ、寝るか
らおめえも早く寝ろよ?んじやな」

そうしてオラは床に寝転がりそのまま意識を手放した。

精神世界でドライグと修行をとことんまでやって翌朝起きたらグレイファイアと同じ

ベッドで寝てたなんてことがあったけど……。
オラってそんな寝相悪かったのかな？

十日後に備えろ!イツセー流の山修行!

sideナレーション(界王)

ライザーの一件から翌日……………。

イツセー達オカルト研究部のメンバーは修行のため、リアスの両親が所有する山の別荘に向かうために山登りをしていた。

「あの… 私だけでも降りた方が……………」

「イツセー、本当に大丈夫なの?」

「あらあら、イツセーくんったら力持ちですわね」

そう話すのはリアス、朱乃、アジアである。

三人がどうしてこのような会話をしているのか、それはいたって簡単な理由だ。

現在、イツセー達は別荘に行くために山登りをしている最中なのだが、荷物持ちに木

場、小猫、そしてイツセーが山のような荷物を背負って登っているのだ。

木場や小猫は普通に背負って登っているだけなのだが、イツセーだけは違った。

木場よりも二倍、小猫より倍ほど大きな荷物の上に、更にリアス、朱乃、アーシアが乗っているのだ。

更に更に修行という事もあつてか、いつも着ている重り制服の十倍ほど重いものを着込んでだ……。

それでもイツセーは涼しげな顔で進んでいく。

これも毎晩のようにドライグに鍛えられているおかげだろう。

リアス達の心配そうな声を聞きながら、イツセーは悠々と別荘に向かっていくのだつた。

「おしー着いたぞー！部長ー！」

「ご苦労様、ありがとうございます」

「あらあら、うふふ、ありがとうございます。 イッセーくんのおかげですぐ着いてしまいましたわね」

「ありがとうございますイッセーさん…。 その…。 重くなかったですか?」
イッセーの降ろした荷物から降りてお礼を言ってくる三人。

「ああ、でえじょうぶだったぞ! これもいい修行になるかな!」

「…… 相変わらずの修行馬鹿ですね」

すかさず小猫から毒舌のツツコミが飛んでくる。

「さあ、それじゃあ着替えたらすぐに修業を始めるわ!

今回の修行のコーチ…。 いえ、師匠はイッセー、あなたにお願いするわ」

「ん? オラがか?」

リアスの言葉に首輪傾げるイツセーにリアスは続ける。

「ええ、ライザーの『兵士』^{ポーン}を一撃で倒したその実力、それにあなたなら実戦経験も豊富
そうなものね、ダメかしら？」

「うーん…よし、分かった！」

オラがおめえたちを鍛え上げてやつぞ！

けど、オラの修行は甘くねえぞ？」

イツセーのその返事に、メンバーも表情が引き締まる。

どうやら表情だけでなく、気も引き締まったようだ。

「それじゃあ着替えたら始めましょうか」

リアスの言葉に部員達は屋敷の中へと入っていく。

と、そこでイツセーが思い出したように朱乃を呼び止める。

「朱乃、ちよつといいか？」

「はい?何かしら?イツセーくん」

「おめえに頼みたいことがあんだ、実はよ……………」

そうしてイツセーはその内容を朱乃に説明していく……………。

「そういうことでしたら可能ですわ」

「ホントか!やったあ!んじゃ、そいつを作ってもらえつか?」

「分かりましたわ、少しだけ待っていてね」

そう言つて朱乃は虚空に手を翳す。

すると、何もない場所から不意に巨大な亀の甲羅(背負い紐付き)が複数現れる。

「ふう、こんなもので良いかしら?」

「ああ、ばつちりだ!サンキュー!朱乃!」

「いえいえ、それじゃあ私も着替えてきますね、覗いたら、ダメですよ？うふふ……」
そう言うのと朱乃は屋敷の中へと入っていった。

「はははっオラ、覗きなんかしたことねえぞ」

そう言うのとイツセーも着替えるべく、甲羅を近くの樹の近くに移動させて中へと入っていった。

「お？全員そろってんな？」

イツセーが道着に着替えて戻ると、他の部員たちがもう集まっていた。

「イツセー、あなたその恰好でやるの？」

「ん？ああ、オラ、ジャージよりもこつちの方が落ち着くんだ」

「そう、まあそういうことならいいけれど……」

それで、イッセー師匠、まずは何をすればいいのかしら?」

少し揶揄うような口調でリアスがそう問いかける。

「んだな、まずおめえたちにはこれを背負ってもらおうぞ」

そう言つてイッセーが取り出したのは、先程朱乃に作ってもらつた亀の甲羅であつた。

「亀の甲羅? それを背負えばいいの?」

「ああ、軽めの奴はアーシア、ちよつと重い奴は部長、朱乃、木場、んで、かなり重い奴は小猫、スゲエ重い奴はオラのだ」

そこに補足するように朱乃の説明が入る。

「重量的には、アーシアちゃんものが二十kg、部長、私、祐斗くんものが四十kg、小猫ちゃんものが百五十kg、そしてイッセーくんものは三百kgとなってますわ」

「四十キロってっ…… かなり重いわねっ……！」

「これはっ…… 背負うのだけでもっ…… 大変っ…… だねっ！」

「あらあら…… これはっ…… 思いの外キツイですわね」

「…… 重いです」

「うう…… 重たいですう……」

それぞれ亀の甲羅を背負いながらそれぞれ思った事画を口にする部員たち。

「はははっ本当はもつとじつくりやるもんなんだが、今回は時間がねえ……」。

おめえたちにはこれから十日間、ずっとそれを背負って過ごしてもらおうぞ」

「だからちつとばかり無理してもらおうしかねえんだ。

その重りの重さに慣れたと思ったらすぐに重さを上げていくかな」

「それは分かったけれど、これを背負って私達は何をしたらいいの?」

「まずはその重さに慣れてもらおうためにこの山を走り回るんだ!」

でもただ走り回るわけじゃねえぞ? これを持ちながら走るんだ!」

そう言っつてイッセーが荷物から取り出したのは複数のガラスの瓶であった。

「これに水を入れて十本ずつおめえたちに渡す。

おめえたちはそれを持って山の中を五周走つてきてもらう、

ただし、スキップでだ。

中の水がこぼれたり、瓶を割っちまったりしちやいけねえぞ?

五周し終わつたらその瓶を持ってここに戻つてきてくれ」

「中の水をこぼしたり瓶を割らずにスキップでこの山の中を五周してくればいいんだね?」
けど、それに何か意味があるのかい?」

「ああ、十分に意味がある……。」

「詳しく教えらんねえけどな」

いつになく真面目に木場の問いに答えるイツセー。

「イツセーくんがそこまで言うということは間違いないんだろうね。

これを持っていけばいいのかな？」

そう言つて水の入った瓶の入っている箱を持つ木場。

「ああ、割らねえように気い付けろよ？」

「分かっているよ、じゃあ行つてくるね」

そう言つて木場はスキップをしながら山の中へと消えていった。

それを追うようにしてリアス、朱乃、アーシア、小猫が後に続く。

それを見届けてからイツセーは……。

「さて、オラは部長達が来るまで素振りでもしとくかな」

と言つて、一人亀の甲羅を背負うと、重り制服のまま素振りを開始するのだった。

その後、半日ほど経ってから部長たちが疲労困憊の様子で戻ってくるのだった。

探せ亀石！見つけられなきやぐ飯抜き!?

sideナレーション（界王）

翌日のこと……。

「よし、今日のこの修行はここまでにしよう。おめえたちよくやったな！」

そう言つて一誠はヘトヘトになつているメンバー達に声を掛ける。

それを聞いたメンバー達はその場にへたり込んでしまう。

それもそのはず、今、リアス達が背負っているのは昨日の倍の重さなのだから。へたり込んでいるメンバーに悟空は笑いながら言う。

「なんだおめえたち、そんなんでめえ^{参っ}つてたらアイツ^{ライザー}には勝てねえぞ」

「それは分かっているけれど……想像以上にキツイのよ……」

「そりゃ修行なんだから仕方ねえよ、うーん…。にしても、もう暗くなってきたし、晩メシも作んねえとなあ…。よし、アーシア、おめえ今日はもう修行はいいから晩メシ作ってくれっか?」

「え?私ですか…。?でも、皆さんがやっているのに私だけやめてしまうのは…。」
突然そんなことを言われたアーシアは不思議そうに問い返す。

「しんぺえすんな、おめえはどつちかつちゆうとめえに出て戦うより後ろで仲間を助けるもんだろ?こいつらリアス達はめえ前一に出て戦わなきやなんねえからもつと鍛えねえといけねえし、何よりもメシ作れる奴がいなくなっちゃうんだ」

そう言つて『はははっ!』と笑う一誠にアーシアは納得したように力強くうなずいた。

「分かりました…。私、イツセーさんの期待に応えてみせます!」

「サンキュー!オラも何か手伝えることあつたらやつかな」

「ありがとうございます。でも、イツセーさんはキッチンにははいってこないで入つて

「こないでくださいね」

『それじゃあ、お夕飯の準備をします』とアーシアは屋敷の中へと入っていった。それを見送って、一誠は残った者たちに向き直り再び口を開く。

「アーシアのメシが出来るまで別の修行をすつぞ！」

その言葉に凍り付くメンバーだが、一誠は気にせず近くにあった石を拾い上げて話す。

「これでいいか、なあ、おめえたちペン持つてつか？」

「ペン？それなら…」

ポンツつと朱乃が魔力を使って油性ペンを作り出す。

「これでよろしいかしら？」

「お、サンキューー！」

朱乃から油性ペンを受け取り石に何かを書き記す一誠。

「……………何を書いてるんですか?」

「ん?これさ」

そう言つて一誠は石をメンバー達がよく見えるように見せる。
そこには『亀』と大きく書かれた文字が……………。

「おめえたちこれをよく見て覚えろよ?いいか?覚えたか?」

「え、ええ…覚えたわ」

「しつかりと記憶しましたわ」

「僕も覚えたよ」

「……………私もです。けど、何故ですか?」

小猫がもつともな疑問を投げかける。

「今からコイツを山のどこかに投げ捨てる。

おめえたちはそれを全員で競争してこの石を探してくるんだ

ただし！持ってくるのは一人まで、使い魔を使うのも魔力を使うんもやつちやいけねえぞ？自分の足で探すんだ。

時間は一時間、それまでに石を見つけてきたやつは合格、見つけられなかった奴は罰として晩メシ抜きだ！」

それを聞いて再び全員が固まる。

「晩飯抜き……つまりご飯がなしになるってこと？」

「ああ」

「……………全員が見つけられなかったときはどうなるんですか？」

「ん？そんな時はおめえたち全員、晩メシ抜きだ」

「「「?!?!?
」」」

メンバー全員に緊張が走る。

「そんじゃ始めっぞ!ほっ!」

勢いよく飛びあがる一誠。

ある程度の高さまで跳び上がるとそのまま石を投げ飛ばした。
そのまま地面へと降り立ち、メンバー達に告げる。

「石は投げたから早く見つけて来いよ?今から一時間だかな!」

それを聞いたメンバー達が一斉に立ち上がる。

「こうしてはいられないわ!」

「晩ご飯は渡しませんわよ!」

「なんとしても見つけ出して見せる!」

「…… 晩飯抜き…… 嫌……」

そう言うのと各自一斉に山の中へと駆け出していくのであった。

「さて、誰が最初に見つけてくつかな？」

と、悟空は期待するのだが、結果は全員制限時間内に石は見つけられず、晩ご飯を食べられたのは一誠とアーシアだけになった……。

はてさて、この先グレモリー眷属一行はどこまで強くなれますことやら……。

本格開始! 悟空とやる体術修行!

sideナレーション(界王)

特訓開始から三日後……。

「おーし、おめえたち大分力リキい着いたんじやねえか」

そう言われたメンバー達は自信ありげに笑む。

だが、一誠はそんなメンバー達を追い込むように言葉を放つ。

「これならちつとはええ甲けどオラが鍛えてやってもいいかもしんねえな」

その一言にメンバー達が凍り付く。

「い、イツセー……? 鍛えるって、あなたが直に相手をするという事?」
リアスが恐る恐る尋ねる。

「ああ、鍛えんのはこつからが本番だ！ピシバシいくかな。強くなれよ！おめえたち！」

「「はい！」」

そう言われたメンバー達は先程とは打って変わり、引き締まった表情となるのだった。

小猫との修行の場合……。

「……………えいつ」

「ほっ！とっ！」

パシパシと器用に小猫の攻撃を片手で防いでいく一誠。

そんなやり取りをしばらく続けたところで一誠が跳び上がり小猫との距離を空けた。

「……までだ!おめえの戦い方は大体分かった」

それを聞いて攻撃の体勢に入っていた小猫が構えを解く。

構えが解かれたのを確認してか、一誠は再度口を開く。

「小猫、おめえの攻撃は単純すぎんだ、それじゃあ相手にすぐ読まれて止められちゃう、今のオラみてえにな」

「はあ……はあ……どうすればいいんですか?」

「そうだな、ちつとカウンターでも覚えればいいんじゃないやねえか?それが出来るようになったらオラのとっておきの技を教えてやつぞ」

「……やってみます」

こうして小猫はカウンター等の返し技を覚えることになるのだった。

木場の場合……。

「ハアツ!!」

「……………」

高速で動きまわり、木刀を振り抜き、突きですが、一誠はその場から一步も動かない。それどころか、指二本だけで木場の攻撃すべてを防ぎ切っているのだ……。

「はあっ…はあっ…攻撃が当たらない…」

「木場、これは小猫にも言ったけど、おめえ達、一撃一撃に頼りすぎだ、その所為で攻撃が単純すぎて読みやすいんだ」

「はあ…そんなに読みやすいですか?」

「ああ、だからオラに全部防がれちゃうんだ、もつと相手を攪乱しねえと攻撃が相手に通らなくなつちまうぞ」

「確かに…。それは避けたいところだね…」

「じゃあおめえも別の攻め方を覚えるんだ、相手ならオラがいくらでもしてやつかな
!」

「はは…これは気が抜けないね…」

こうして一誠と木場の一方的な続きを再開するのだった……。

朱乃の場合……。

「雷よー！」

詠唱をしながら手に魔力を集め、雷を落としてくる。

一誠はそれを余裕の表情で猿のように躲わしていく。

「ほっよっはっ……！」

続々と落とされる雷を余裕綽々と躲わしていく一誠に、朱乃は徐々に焦りを表情を見せ始める。

「今度はこつちからいくぞ！だりやりやりや!!」

雷が途切れた隙を見逃さず、一誠は朱乃に気弾を連射する。

「っ!?……くっっ！」

気弾の雨に気が付き、障壁を貼ろうとするが時すでに遅し……。

「ぎゃああああっ!!」

気弾の雨は朱乃目掛けて降り注ぎ、爆煙が辺りに広がる

気弾の雨を喰らった朱乃はその爆煙の塊から落下していく。

「よっ!へへっオラの勝ちだな」

「あらあら…負けてしまいましたわね…」

「朱乃、おめえは気?に頼りすぎだ、だからソイツが切れちまった時に相手の攻撃に何も出来なくなっちゃう」

「そうですね…それじゃあどうすればよろしいのかしら…?」

「接近戦も出来るようになるんがいいけど、おめえは気?の消耗を抑えて溜めの時間を短く出来るようになればいいと思うぞ」

「接近戦と魔力の消耗を抑える戦い方を覚えればいいのですね…やってみますわ…」
こうして朱乃は近接格闘と魔力消耗を抑える修業をし始めるのだった。

リアスの場合……。

「喰らいなさい！」

「ハッ!!」

リアスが放った消滅の魔力弾を一誠はいとも簡単に弾き飛ばしてまう。

「なっ!?!」

「はあっ!!」

一誠の掛け声と共に腕と同等のエネルギー波がリアスに向けて放たれる。

「くっ……」

慌てて障壁を張るリアスだが、障壁を上回る威力のエネルギー波に障壁は容易く破壊されてしまう……。

辺りに広がる気の爆煙。

少しして、爆煙を突き抜けてリアスが落ちてくる。

一誠はそれを受け止めて話す。

「おっと……良く頑張ったなあ部長」

「でも、手も足もでなかったわ……」

悔しそうに俯くリアス……。

「それを今から鍛えてくんじゃねえか、落ち込むことねえさ」

それでも尚も落ち込むリアスに一誠は気を取り直して説明をはじめめる。

「じ、じゃあ部長の戦い方だけど、オラから特に言うことはねえ、強いて言うなら今まで通りあのトレーニングを続けてりやおめえはきつと強くなれる」

「…っ！それじゃあ意味がないのよ！私は何がなんでもライザーに勝たなくちゃならない。その為には少しでも戦えるように強くならなくちゃならないの！」

いきなり激昂するリアスに驚きつつも一誠は生前の経験をいかして話す。

「部長、確かにアイツには勝たなくちゃいけねえかもしれねえ、けどな、それはおめえ一人ではやらないけねえことなんか？」

「それは…」

「オラは一人で戦うのが好きだし、強えやつらと戦えるのも好きだ、けど、とんでもねえ強さのやつらが現れたときはいつも仲間達が力貸してくれたもんだ…。おめえにもいっただろ？朱乃や木場、アーシアに小猫だって、おめえを勝たせたくてこうして強くなるうと必死になつてる…おめえがその事をわかってやらなかったらあいつらが可哀想じゃねえか」

「イツセー…」

「あいつらと一緒に勝つためにも頑張ろうぜ、オラも全力で手伝うかな!」

「ええ!お陰で楽になったわ、ありがとうイツセー」

こうして、メンバー各自は一誠に言われた課題をこなすため各々修業に取りかかりはじめのだった。

そうして一誠はというと、特訓中にこつそりとやってきたグレイファイアとドライグにメンバーが居ない間を塗って激しい修業をもらっているのであった……。

ゲーム当日！リアス VS ライザー！

sideナレーション（界王）

ゲーム当日……。

一誠達は部室にて待機していた。

「うーん……なあ、まだ始まらねえんか？」

「あらあら、もう少しですわよ」

「……………ジツとしてください」

「はは、よっぽど楽しみなんだね、イツセーくん」

「クスツイツセイさん嬉しそうです」

「もう少しだから… 待っていなさい」

「そっか、早く戦いてえなあ…」

そんなやり取りをしていると、何処からともなく魔方阵が現れその中からグレイフィアが姿を現した。

「お待ちせいたしました。皆様、準備が整いました」

「ホントか!やったあ!」

グレイフィアは一誠の言葉を聞いて少し微笑むと、再び口を開いた。

「開始時間になりましたら、この魔方阵から戦闘用フィールドへと転送されます」

「せんとっようふいーるど?」

「ゲーム用に作られる異空間ですわ。」

使い捨ての空間ですからどんなに派手なことをしても大丈夫なんですのよ」

「へえ〜」

「……………先輩、絶対分かってませんね」

朱乃の説明に曖昧な返しをする一誠にすぐさま小猫から鋭いツツコミが飛んでくる。グレイフィアは話を戻すように少し咳ばらいをすると、再び話し出す。

「因みに、この戦いは、魔王ルシファー様もご覧になります」

それを聞いて反応したのはリアスであった。

「そう、お兄様が…」

「へ？おにいさま…？？」

「ああ、イツセーくんは知らなかったね、部長のお兄さんは魔王様なんだよ」

「いっ?まおうさま?」

悟空、あれじゃ、ピッコロ大魔王みたいなものじゃ

(ああ!ああいう奴か!)

「つてことは部長の兄ちゃん悪い奴なんか?」

その一誠の言葉に場の空気が一瞬にして凍り付く。

「兵藤様、どうしてそう思うのですか?」

「だってよ、魔王つてのは世界征服みてえな悪いことする奴だろ?」

「バカ言わないで!お兄様がそんなことをするわけないじゃない!」

それを聞いて声を張り上げたのリアスであった。グレイフィアはその様子を見て止めに入る。

「落ち着いてくださいお嬢様……。兵藤様、魔王ルシファー様はそのようなことは考えたことはございません。日々、冥界を良くしようと日夜頑張っておられます」

「そっか、悪かったな部長」

「いえ、私も冷静じゃなかったわ、ごめんなさい」

そんなやり取りをしていると、魔方陣が一層光を強めて輝きだした。

「そろそろ時間です」

グレイフィアの言葉に全員の表情が引き締まる。

「さあ、みんな、行きましょう」

「「「はい！（ああー）」」」」

こうして一誠たちは魔方陣の中へときえていくのだった。

見せつけろ! イッセーと小猫のコンビネーション!

side ナレーション (界王)

一誠達が魔方陣を潜るとそこは不思議な空間であった。

「あり?ここって部室…だよな?」

飛んだ先の空間に一誠がキョロキョロと辺りを見回す。

「ひよつとしてよお、失敗したんか?」

と、そこで放送が流れる。

『皆様、この度、フェニックス家とグレモリー家の試合に置いて、審判役を任せられました。グレモリー家の使用人、グレイファイアと申します』

「へえー!こいつは驚れえたぞ!グレイファイアが審判なんてよ…」

一誠の驚きを他所に、グレイフィアはアナウンスを続ける。

『この度のレーティングゲームの会場として、リアス・グレモリー様方の通う、駒王学園の校舎を元にしたレプリカを異空間に用意させていただきました』

「ん？なあ、れぶりかって…なんだ？」

「本物そつくりの偽物ってことだよ」

「んー……。オラには良くわかんねえや、ははは！」

木場の説明でも理解できなかったのか、一誠は笑う。

『両陣営、転移された先が「本陣」でございます。リアス様の本陣は旧校舎オカルト研究部部室。ライザー様の本陣は新校舎生徒会室。兵士ポーンの方はプロモーションを行う際、相手本陣の周囲まで赴いてください』

「なあ、ぷろもーしょんってなんだ?」

放送を聞いていた一誠の言葉にメンバー全員が驚愕してずっこける。

「そうね、そういえばあなたには説明していなかったわね、プロモーションというのはね? 簡単に言えば別の役の力を使うことができるのよ、例えるならあなたが佑斗や小猫、それに朱乃やアーシアのようにね」

「いいっ!? オラが木場達みてえになるんか!?!」

「あらあら、イッセーくんが私達の役職になったら敵いそうにありませんわね」

「今の僕でさえ追い付けないのにそんなことになったら…」

「……イッセー先輩は『プロモーション』しなくても大丈夫だと思えます」

驚く一誠にそれぞれの反応をするメンバー達。酷い言われようである……。

『開始のお時間となりました。なお、ゲームの制限時間は人間界の夜明けまでとなりま

す。それでは、ゲームスタートです』

その直後、学校のチャイムが高らかに鳴り響く。

「さあ、作戦会議よ！」

こうして一誠達はどうか攻めるか作戦をたて始めるのだった。

「それじゃあお願いね、二人とも」

「……………はい（ああ！）」

会議の後、大まかな作戦を決めた一誠は小猫と二人、体育館へと向かっていた。

「……………だな…」

「……………中に入りましょう」

体育館へと辿り着いた二人はすぐさま中へと入っていく。中に入ったところで、一誠が何かに気づいたようだ。

「どうやら先を越されたみてえだな…」

「……分かるんですか?先輩」

「ああ、数は四人つてところか…」

そう話していると体育館の中央から別の声が聞こえてくる。

「そこにいるのは分かってるわよ、グレモリーの下僕さん達」

「気づかれてるみてえだな…」

「……行きましょう、イッセー先輩」

「分かった、小猫、おめえも無理すんじゃないぞ?」

「……分かってます、イツセー先輩に鍛えてもらいましたから」

「はははっ！じゃあいくぞ！」

勢い良く飛び出す二人。

「おめえ達はオラが相手になっぞ！」

「私達の獲物はあなた？それじゃあ……」

「解体しまーす♪」

「……ハッ！」

一誠が相手取っている三人は全員兵士^{ポーン}。

一人は以前倒したこともあるあのミラと呼ばれた棍使いの少女であった。

「バラバラバラバラ♪」

二人のチェーンソーを持った少女が、作動したチェーンソーを無造作に振り回して、的確に一誠を狙うが……。

「よっほっはっ!」

何のことはないと身軽に躲わしていく一誠。

そんな一誠を二人のチェーンソー少女と共にミラと呼ばれた少女が攻撃を加えるが……。

「フツツ……!」

「よっ……! はあっ!」

前と同じように棍を奪われて吹き飛ばされてしまう。

「きやつ……!」

吹き飛び床に倒れる少女。

「ミラ!!」

「今度はこつちからいくぞ! はあああああつ!!」

棍を器用に振り回し、瞬時に三人との間合いを積めると三連撃…。

「かはっ…!」

「ぐっ…!」

「うっぐっ…!」

お腹を抑えて蹲る三人。

「終わりだ! はああつ!!」

最後は気功波を放ち三人に止めを指した。

『ライザー・フェニックス様の兵士^{ポーン}三名、先頭^{リタイア}不能』
グレイフィアの声がそうアナウンスしてくる。

「ふう……」

一息をつく一誠、少しして小猫を見ると、そちらももう終わっていた。

「おっ! そつちも終わったみてえだな」

「……はい、そつちも……って言う必要もありませんでしたね」

「ああ! すぐ終わっちゃった……」

「……先輩と対等に戦える人なんてそう居ないと思います」

「そんなことねえと思うけんどなあ……」

そこで不意に通信機からリアスの声が聞こえてきた。

『イッセー、小猫、戦況はどう?』

「あ、ええつと……これ、どうつかんだ？」

「……部長、こっちは無事です二人とも終わりました」

小猫がジト目で一誠を見ながら、リアスの通信に答える。

『そう……。朱乃の準備が整ったわ、すぐにそこから離れて』

リアスの言葉に二人は頷き、体育館から出る。

「逃げる気!!ここは重要拠点のはず……」

敵の戦車^{ルック}が叫ぶ。

「さあ、ソイツはどうかかな？ 答えならすぐに分かると思うぜ？」

それだけ言うと、二人は体育館を後にした。

その直後、体育館に巨大な落雷落ちた……。

小猫散る!?怒りに燃える兵藤一誠!

side 一誠

「へええーこりやすげえなあー!」

オラは燃え盛るたいいくかん?を見て感心する。

すげえ威力だ、朱乃も中々やるじゃねえか!

「………… イッセー先輩もやろうと思えばできるんじゃないですか?」

小猫が無表情で聞いてくつぞ。

「ん?はははっオラがやったらこんなもんじゃ済まねえぞ」

オラがやったらこの辺り一帯も一緒に吹き飛んじまうかなあ…………

「………… 聞くんじゃなかったです。とにかく、次に行きましょう…………」

そう言って歩き出した小猫を突如爆発が襲った。

「なっ?! 小猫!!」

爆発に巻き込まれた小猫が衣服はボロボロになり、傷だらけで倒れ伏していた。

「小猫お!! でえじょうぶか!! しっかり! しろお!!」

オラは急いで小猫のもとに駆け寄る。

「……………ごめんなさい…先輩…私は…ここまでみたいです…」

もつと先輩達のお役に…立ちたかった…です…」

その言葉を最後に小猫は青い光に包まれ消えていった。

『リアス・グレモリー様の戦車ルーク一名、戦闘リタイア不能』

。グレイフィアの実況が聞こえてくる。

誰だ! こんな卑怯なことしやがった奴は!!

「おめえか! 小猫をやったのは!」

「そうよ、それが何だというのかしら? グレモリーの兵士ポーンさん」

「卑怯だぞ! 戦るなら正々堂々闘え!!」

オラは小猫を爆撃した奴を睨んで叫ぶ。

「なにを言っているの? これは死合いよ? ルールに守られた試合じゃない、やるかやられるか... そのどちらかよ」

「ならオラがおめえをぶつ倒す!! はあああああつっ!!」

ドンツ! と、オラが気を解放して奴との距離を詰めようとしていた時だった。

「イツセーくん、ここは私が...」

イツセーくんは祐斗くんのところに向かってください」

「ツ! 朱乃!? だけど...」

「今は感情に左右されているときではありませんわ...」

それに、私だって……」
バチバチと朱乃先輩から雷が迸る。

「仲間をやられて許せるほど優しくくないんですから……」。

……だから、お相手をしてくださる？ライザーの女王さん、
爆発ボム・クイン后と呼んだ方がよかったですか？」

「……その呼び方は好きではないわ」

どうやら、ここは朱乃先輩に任せるしかねえみてえだな……」。

「分かった、朱乃、後は任せろぞ！」

「ええ、お任せください」

それだけ言葉を交わすと、

オラは木場の気を探り瞬間移動するのだった。

s i d e o u t

sideナレーション(界王)

リアスの作戦に従い、何人かのライザーの手下を倒した木場は倉庫に身を潜めていた。

そこへ背後に現れる影があつた。瞬間移動してきた一誠である。

「ツ!!……イツセーくんか……驚いたよ、小猫ちゃんの事は残念だったね」

「すまねえ……オラがもつと早く気づいていりゃあ……」

謝る一誠に木場は首を横に振って否定してくれる。

「いや、イツセーくんのせいじゃないよ、これも敵が一枚上手だったってことなんだろうね……悔しいけど」

そんな事を話していると外から声が聞こえてくる。

「私はライザー様に仕える騎士、カーラマインだ！

コソコソするのはもう飽きた！

だから正々堂々と勝負使用じゃないか！」

その名乗りにも木場がピクリと反応する。

「ふう、名乗られたからには騎士としては出るしかないよね」

「んー……。」

オラには良くわかんねえぞ」

そんなやり取りをしながら外に出る。

建物から出ると一人の甲冑姿の少女が立っていた。

「堂々と出てくるなど正気の沙汰とは思えんな…

だが、私はお前らのようなバカが大好きだ！」

それに合わせるように木場も名乗りをあげる。

「僕はリアス・グレモリー様に仕える騎士^{ナイト}、木場祐斗!

騎士同士の戦い、待ち望んでいたよ!」

「よくぞ言った!リアス・グレモリーの騎士よ!」

そう言つてぶつかり合う二人。

手持無沙汰になつた一誠はというと、傍で戦いを見学していた。

そこへ声を掛ける者が現れる。

「暇そうだな、リアス・グレモリーの兵士^{ボーン}」

「おっ! やっぱしいたんかあ! ラツキイ!」

不意に現れた声の主に一誠は最初から気づいていたとばかりの声を掛ける。

「気づいていたのなら最初から言つてくださらない?」

声の主と共に現れたもう一人の金髪の良く目立つ、縦ロールをした少女であつた。

それにしても、と縦ロールの少女は木場達の戦いをみて呆れたように続ける。

「カーラマインたら…頭の中まで剣、剣、剣で埋め尽くされているんですもの……。駒を犠牲にするのも渋い顔をしてましたし……。

全く泥臭いったら……

しかも折角可愛い娘を見つけたと思ったら…

そちらの方も剣バカだなんて…

全くツイてませんわ……」

「いいじゃねえかオラも戦うんは大好きだから木場の気持ちもわかっぞ」

「はあ…こちらの方もバトルジャンキーでしたか……。

知りませんし、分かりたくもありませんわ……。

それにしても…リアス様ってば、殿方の趣味が悪いのかしら？」

小猫並みに毒舌な少女だなったくもう……。

「さあな、部長の趣味は知らねえよ、それよりやんだろ？どっからでもかかってこい！しかし縦ロールの少女はすました顔でとんでもないことを返してくる。」

「あら、ごめんあそばせ、私は戦いませんの」

「…へ？」

「その代わり…イザベラ」

縦ロールの少女の呼びかけたのは最初に声を掛けてきた仮面に半分顔を隠した女であつた。

「私はイザベラ、ライザー様に仕える戦車だ…：…：…」

ではいくぞー！リアス・グレモリーの兵士よ！ポーン

一気に距離を積み殴りかかってくるイザベラ

一誠はそれを造作なく躲していく。

「つかよお、なんであいつは戦わねえんだ？」

「あー…： 気にしないでくれ。あの子は特殊だから。今回の戦いもほとんど観戦しているだけだ」

「いいっ?!? 見てるだけってなんだそりゃ!!」

「彼女は——いや、あの方はレイヴェル・フェニックス。ライザーさまの妹君だ。特別な方法でライザーさまの眷属悪魔とされてはいるがライザー様の実の妹様だよ」

「…へ? いもうと?」

「ああ、ライザーさま曰く、『妹をハーレムに入れるのは意義がある? ほら、近親相姦っての? 憧れたり、羨ましがる者は多いじゃん? まあ、俺は妹萌えじゃないからカタチとして眷属悪魔ってことで』だそうだ」

「うーうーん……」

「何が言いたいんかさっぱり分かんねえぞ…」

「同感だ、私にもさっぱり分からない。さて無駄話は終わりだ! 本気でやらねば後悔することになるぞ!」

攻撃のスピードが先程よりも増した。

だが、それでも一誠は余裕の表情で淡々と躲していく。

「どうした!おめえの力こんなもんか?

戦車ルつてのも大したことねえな」

「ツ!言ってくれるな...その言葉後悔するなよ!」

その言葉に一段と攻撃速度が上がる...が...。

一誠は放たれる攻撃を弾き、手に気を込め一気に振り抜く!

「いくぞお!超龍激拳!!」

【ドゴオツツ】

勢いよくイザベラに突き刺さる一誠の拳.....。

「...ツ...かふっ!」

「だりやあああつ!!」

更に蹴りを叩き込み、イザベラを宙へと蹴り飛ばす。

「終わりだ! かあ…: めえ…: はあ…: めえ…: つ!」

一誠がかめはめ波の構えを取り、呪文を唱えだす。

すると、一誠の手の中に蒼い光が灯る。

一誠が呪文を唱え終わるころにはその光はその手から溢れ出さんばかりに輝きを増す。

「波ああああああああああああツツ
!!!!!!!」

【ドンツツ】

勢いよく撃ちだされたかめはめ波は真つ直ぐにイザベラの元へと飛んでいき……。

「な、なんだこれは! ああああああつつ!!!」

イザベラは光に呑み込まれ消えさった。

すぐさまアウンスが流れる。

『ライザー様の戦車「ルーク」一名、戦闘「リア」不能』

「イザベラ!？」

「後はおめえだけだぞ、どうすんだ?」

一誠が縦ロールの少女、レイヴエルに声を掛けた時だった。

「ねえ、その兵士さん、あれ、ご覧なさいな」

「ん?あれってなんだ?……ッ!？」

その言葉に新校舎の方を見た一誠は驚きを隠せない

そこにはライザー相手に苦戦をしているリアスの姿があった。

「何やってんだ部長!いくらなんでも無茶だ!」

瞬間移動で行けばすぐなのだが、それでは木場が一人でここをやらねばならなくなってしまう。

だが、このままでは一誠達がやられる前にリアスが倒されてしまう。

「ドライブ！なんか方法はねえんか？」

「ドライブですつて!?!」

驚くライザーの手下達を他所にドライブは一誠に答える。

『やっと使う気になってくれたか相棒……』

「良からう、ならば、その思いを神器にぶつけろ、そうすれば新たな力が発現するはずだ……』」

「思いをぶつけりやいいんだな？そんじやいくぞ！」

「赤龍帝の籠手！オラに力ア貸してくれええええ!!」
ブーステッド・ギア

『Dragon Booster!!』

一度目の機械音声が鳴り響く。

『Dragon Booster!! second Revelation!!』

立て続けに鳴り響いた機械音声に一誠は感覚的に何をすればいいのかを理解したよ
うだ。

木場に向けてあらん限りの声で叫ぶ。

「木場あ!おめえの神器い解放するんだ!」

「え?神器を?」

突然の事に驚く木場に一誠は尚も叫ぶ。

「早くしろ!」

「…… ツ!分かった!魔劍創造!」
ソード・パース

解放された魔劍の神器に一誠は籠手ごと叩き込み叫ぶ。

「やっちまええ!ドライブグ!赤龍帝の贈り物お!!」
ブーステッド・ギア・ギフト

『Transfer!!』

すると、地面から夥しい数の剣が生え、ライザーの眷属達を襲った。

「なっ!?!なんだこれは!」

「「「「「きゃあああああっつっ!!!」」」」」

「くっ…!なんて威力ですの!?!」

次々に光に包まれるライザーの手下達。

レイヴェルもこれには流石に無傷とはいかなかったようだ。身体に炎を纏わせながらその場を離脱していった。

ひとまず、危機は去った。

「やったな!木場!」

「ああ!イツセーくん!」

そうハイタッチをしたその直後だった……。

【ズゴオオオンツ!!】

目の前で木場が爆発したのだ。

「うわあああああつっ!!」

「ツ!!木場あ!」

すぐさま光に包まれ消えていく木場。

その直後、アナウンスが聞こえてくる。

『リアス・グレモリー様の騎士^{ナイト}一名、女王^{クイーン}一名、戦闘^{リタ}不能^{イア}』

「なっ… なんだった…!?」

すると、気配を感じ取ったのか、一誠は空を見上げる。

「おめえの仕業かあ!!」

「だとしたら何だというの？グレモリーの兵士ポーンさん？」

「…… ツツツツツ！！！！
さねえ……」

「…… え？」

「許さねえ…… つ！！よくも…… つ！！よくもお…… つ！！！！
！！！！」

【ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴツツツ】
途端にフィールド全体に地響きが鳴り出す。

「なっ…… なにつ!？」

「……… ゝゝツツツツツ！！！！！！
酷くなつていく地響き………」

それと同時に、一誠の周りの大地が沸騰でもしているかのように浮遊を始めた。

超覚醒！目覚める伝説の最強戦士！

sideサーゼクス

「あれは……！」

私は目の前の映像に目を疑っていた。

それは可愛い妹のリアスとライザーの婚約をかけた非公式の試合のものだ……。

リアスの眷属達が次々とやられていくなか、リアスの唯一の兵士^{ポーン}である兵藤一誠くん。

彼が金色の戦士に姿を変えたのだ。

黒だった髪や眉は金髪となり鋭く反なり立ち、瞳は蒼く、鋭くなっていた。

まるでそれは、あの時の青年そっくりであった。

「兵藤一誠くん……君はいつたい何者なんだ？」

私は映像を見ながら一人眩くのだった。

s i d e o u t

s i d e ナレーション (界王)

【シュインツシュインツシュインツシュインツ】

身体から金色のオーラを立ち上らせながら超^{スーパー}サイヤ人となった一誠がライザールの女王^{クイーン}を睨む。

「な、なに…? いったいなにが起きたと言うの…?」

「……………」

ライザールの女王^{クイーン}が戸惑った声をあげるが、一誠は答えることなく睨み続ける。

「ツ…金色に姿を変えたくらいで調子に乗らないで欲しいわね!」

【ボカアンツツ】

爆発が一誠を包み込む……しかし……。

「なっ……!!」

「……………」

そこには衣服はボロボロだが、大した傷もない一誠の姿があった。

「お、おまえは……いったい……」

「おめえ達だけは許さねえぞ……」

「ひっ……!? こ、来ないで……!!」

あまりの迫力に逃げだそうとする女王^{クイーン}。

だが一誠はそれを許さなかった……。

「だあっ!!」

瞬時に女王クイーンの背後に回り込み、鋭い蹴りを叩き込む。

「がっ……!」

女王クイーンは蹴り飛ばされ、真つ逆さまに急降下していき地面に激突する。

「ぐうう……たすけ……」

「波あああああつ!!」

地面に叩きつけられ、這いずりながらもその場から逃げようとする女王クイーンに一誠はエネルギー波を撃ち込む。

「いやあああああつツ!!」

断末魔の絶叫と共に女王クイーンは消え去った。

直ぐ様アナウンスが流れてくる。

『ライザー様女王クイーン一名、戦闘不能』

「……………」

それを聞いた一誠は徐に指を額に付け、瞬間移動した。

【ピシュンツ】

一誠が瞬間移動した先はリアスのところであった。

「なっ…!? 貴様、どこから現れた!」

「い…イツセー?」

「え…? イツセーさん…なんですか?」

「部長、アーシア、おめえ達は今すぐここから離れんだ」

ライザーの言葉を完全に無視して、一誠はリアス達に言う。

「ツ！出来ないわ、私はキングよ、可愛い下僕を残して下がるなんて私のプライドが許さない！」

「そうです！イツセイさんにだけ戦わせるわけにはいきません！」

そんなリアス達の言葉に遂に一誠が切れた。

「いい加減にしろお！敵いもしねえやつのところに出て行ってポロポロになって勝てればそれでいいんか!!おめえを勝たせるためにやられていったあいつらのことはどうでもいいんか！」

「…っ！でも……」

「おめえ達がいっても邪魔なだけだ！オレの理性があるうちにさっさと行けえ！」

「…っ！行きましょう、部長さん」

「ツ!? アーシア!」

「イツセーさん、信じてます。絶対に勝って帰ってきてください」

「……ああ」

一誠の短い返答を聞いたアーシアはリアスを連れその場を離れていった。

「逃がすと思うか!」

それを逃がすまいとライザーが追おうとする、が……。

「行かせねえよ……」

瞬間にライザーの目の前に移動するとその行く手を阻む。

「ツ!! 貴様……いったいなんなんだ!」

「オレがなにか? もうとづくにご存知のはずだろ?」

オレは貴様を倒すために、人間界からやって来たサイヤ人、穏やかな心を持ちながら、激しい怒りによって目覚めた伝説の戦士……」

「^{スーパー}超サイヤ人、兵藤一誠だ！」

「スーパー……サイヤ人だと……? ふざけるな! たかが金色になっただくらいで! この俺を倒せると思うなよ!」

ライザーが魔力で炎を作り出し、一誠に向けて思いきり射ち放つ。
しかし、一誠は避けようとはせず……。

(バシツ)

まるで物を弾くように炎を払い飛ばした。

「なっ……なんだとお……!?!」

「こんくれえの炎、受け止めるまでもねえ……」

「くっ……！調子に乗るなよ！下級悪魔風情があ!!」

一誠の言葉に激昂し、巨大な火球を作り出すライザ―。

「骨も残らず！塵になれえ!!」

勢いよく放たれる巨大な火球……。

一誠はそれを迎え撃つようにある構えをとる。

「……………かあ……」

「めえ……」

「はあ……」

「めえ……!」

手の中に溢れだす蒼い輝き。

それを一誠は最後の言葉と共に撃ち放った。

「波ああああああああっつっつ!!!」

蒼い閃光は一直線に火球へと飛んでいき、やがて火球を突き抜け、ライザーのもとへと飛んでいった。

「なっ…なぜだあああこの俺がああああああっつっつ!!!」

ライザーは光に飲み込まれ、その姿を消した。

『き…王^{キング}ライザー・フェニックス様^{リタイア}戦闘不能、よってこのゲーム、リアス様の勝利となります』

「…へ…へ…やったぞ…」

変身が解けそのまま気を失う一誠。

「イツセー!!」

「イツセーさん!」

リアスとアーシアがイツセーに駆け寄り心配そうに様子を見ている。

こうして、リアスとライザーによるレーティングゲームは幕を降ろしたのであった
……。

一時の平和、紅髪のお嬢様の決意

sideナレーション（界王）

ライザーとの決戦から翌日……。

一誠の家は賑やかになっていた。

「イツセーと寝るのは私よ!」

そう言うのはオカルト研究部部长であり、グレモリー家次期党首でもある、パジャマ姿のリアス・グレモリー……。

「部長さんには負けません! 私もイツセーさんと寝たいです!」

そう返すのは同じくリアス・グレモリー眷族の僧侶であるパジヤマ姿のアーシア・アルジエント……。

「お二人ともお静かに……時間を考えてください……では、一誠様、共に寝ましょう!」

そう話すのは魔王サーゼクス・ルシファーの眷族である、パジャマ姿のグレイファイア・ルキフグス……。

「なにサラツとイツセーと寝ようとしてるのよグレイファイア！」

「抜け駆けは許しません!!これだけは例え冥界最強のクイーン^女さん^王でも譲れません!!」

「……（クカー）」

そんな中、関心の一誠は立ったまま寝入っていた。

こんなことになるのは昨日のこと……って、これはワシが説明してもいいのか……?

『界王様、その先は私が説明致します……』

おお、それは助かるわい……。それじゃあ、後は頼むぞグレイファイア……。

『承りました……。昨日は……』

回想

一誠様の活躍により、勝利したりアスお嬢様の初めての試合の後、私ことグレイフィアと、主人であるサーゼクス様達は屋敷へと帰ってきていた。

「いや、それにしても見物だったね。非公式の試合で彼処まで楽しめるとは思いもしなかったよ……」

まさかライザー君相手にリアスが勝利するとは思いもしなかったけど……。とサーゼクス様は話ながら苦笑する。

しかし、そんなことを話すサーゼクス様のお顔はとても楽しそうなものだった。しかし……。と、サーゼクス様は続ける。

「あの子の活躍は目を見張るものがあつたね、なんと言つたかな？あのリアスの兵士ポーンの……」

「兵藤一誠様です。サーゼクス様……」

名前が出てこないのか、すかさず私が教えて差し上げる。

「ああ、そうだそうだ！兵藤一誠くん。あの子は凄かつたね、まさかライザーくん相手にあそこまで戦えるなんて……」

当然です！一誠様は……（以前は悟空様でしたが）、私を助けてくださったのですから！
サーゼクス様にそう言われて私は嬉しくなり話します。

「はい、イツセ……コホンツ……兵藤様の活躍はとても見応えがありました……」

危ないところでした……。うっかりサーゼクス様の前で一誠様と呼んでしまうところでした。

しかしサーゼクス様はそれを聞き漏らすはずがなく、目敏く聞いてきました。

「おや？グレイファイア、今なぜ言い直したんだい？何か言い掛けていたじゃないか」

サーゼクス!? どうしてそこを追及してくるのですか!そこは聞き逃すべきところでしよう!

「えっ…? いえ、別に…」

お願いですから諦めてください! そう思いつつ濁すように返す。

しかし、そんなことは露知らずとばかりにサーゼクス様は言及を続けます。

「それに、矢鱈あの子の事を持ち上げるじゃないか。確かに目立ってはいたが他の子達だつて頑張っていただろう?」

「そ、それは……」

言えるわけがない…。大昔に私を助けてくれた恩人だなんて……。

耳が熱くなつていくのを感じる。今私の顔は熟れたとおトマトのようになってい
ことだろう。

「それに、あの子の髪型はグレイファイアが良く話している人物にそっくりじゃないか、グ
レイファイア、ひよつとして…」

「そ、そんな……とは……」

もうどうしたらいいか分からなくなってきた時のことだった。

【スパアアアンツツ】

小気味良い音が響き渡り見ると、巨大なハリセンがサーゼクス様の頭をぶつ叩いていた。

「サーゼクス様、あまりお姉様をからかわないでくださいね？」

そう言っただけで思いっきりサーゼクス様の頬をつねっていたのは、腹違いの妹のサクナであった。

思いっきりサーゼクス様の頬をつねりながら笑っている。

サーゼクス様もサーゼクス様で、『いひやい……いひやいよしやくにや……』などと言いつつ笑っている。

いつもながら思うが魔王様相手に良くやると思う……。

しかし、妹がこんなことをできるのには理由がある。一誠様たちには教えてないが、サクナはサーゼクスの妻なのである。

なので、こんな堂々と魔王様であるサーゼクス様にこんなことが出来るのだ。

流石に公衆の、面前ではそのようなことはしないが……。

そんなことを考えていると、今まで頬を黙ってつねられていたサーゼクス様がこちらに問いかけてきた。

「ふう、さすがにからかい過ぎたね、まあ、冗談はこのくらいにして、グレイファイア」
そういったサーゼクス様の顔に真剣さが宿る。

「本当のところはどうなんだい？彼はキミの探し求めていた人物だったのか？」

そう話すサーゼクス様のお顔は真剣そのものだった。

これは誤魔化しようがありませんね……。

そう悟った私は素直にうなずいた。

「はい、兵藤様……いえ、一誠様は孫悟空様の生まれ変わりでした」

「そうか……やはりそうだったのか……それで？グレイファイア、キミはどうしたい？」

「え……？」

言葉の意図がわからず私は訪ねる。

「どうする……とは……？」

「決まっているじゃないか、キミが彼と一緒にいたいかどうかだよ、グレイファイア。キミがずっと探し続けてきた相手なんだろう？それならば側に居たいと思わないのかい？」

その言葉で、私は納得する。

「わたし……は……」

もちろん一緒に居たいに決まっている。

だが、私はサーゼクス様の女王クイーンであり、グレモリー家のメイドなのだ……。

そう易々と離れられるものじゃない……。

迷いあぐねている私を見て、サクナが私の気持ちを察したのか、口を開いた。

「行ってくださいお姉様」

「え……で、ですが仕事を疎かにする訳には……」

そういう言い掛けた私にサクナは言った。

「見くびらないでくださいお姉様！何のためにお姉様が私を鍛え上げてくれたのですか？全部、お姉様が居ないときのため！こんな時の為ではありませんか！仕事のことも眷族のことも心配いりません！全部このサクナにお任せください！ツ……ケホケホツ……」

「おやおや、大丈夫かい？」

ドンと、胸を叩くサクナ……。

強く叩きすぎて咳き込んでいるけど……。

サクナの背中をさすりながらサーゼクス様が私に声を掛けてくる。

「そういう訳だよグレイフィア、心配はいらない、キミは思う存分、彼との時間を満喫しておいで……」

私はもう涙が止まらなかつた……。

「サーゼクス様……ありがとうございます……」

泣き出しそうになるのを堪えながら言えたのはその一言だけであった……。慈悲深い主人と、姉思いの妹に見送られ、私は彼のもとに行くことを決意するのだ……。

回想終了

『ふう、終わりましたよ……。界王様、後はお願いいたします』

ん？おお、終わったか、うむ、では引き継ごう……。

そうして明くる日、リアス・グレモリーと共にやって来たグレイファイア。

「ん？あり？どうした？二人ともそんな大荷物担いで……。何か用か？あつ！もしかして

「修業か!？」

「いいえ、違うわイツセー。今日からここでお世話になるのよ、ご両親にはもう話は通してあるの」

「なにつ…?」

金髪に染め上げた眉を潜める一誠。

「これからよろしくお願い致します。一誠様」

ペコリと頭を下げるグレイフィア。

「いつ…?ま、いつか!」

驚くものの、何事もなかったように流す一誠、そういうところは実にお前らしいわい……。

とにもかくにも、こうしてリアスとグレイフィアを迎え入れた兵藤家はさらに賑やかになるのであった……。

芽生える憎悪、壊れ始めた日常！

sideナレーション（界王）

グレイフィア達が兵藤家に越してきてから数日経ったある日のこと……。

「ほら、これは皆で海に行った時の写真よ」

「あらあら、裸で海に……」

「母ちゃん、いつてえナ二見してんだ？」

一誠の母親がオカルト研究部のメンバーに一誠が小さい頃のアルバムを見せていた。

ただ、当の本人はもうこの世には居ないのだが……。

そんなことは露知らず、メンバー達はアルバムを見やる。

「リアスやアーシアに至っては……。

「小さい頃のイツセー小さい頃のイツセー小さい頃のイツセー小さい頃のイツセー小さい頃のイツセー……」

「部長さんの気持ち、良くわかります!」

と、目を輝かせながら見ている。

グレイフィアに至っては……。

「クスツ…流石は一誠様、この頃はお盛んだったのですね」

と、何処か勘違いした解釈で微笑ましいものを見るように眺めている

写真の内容はといえば、イツセーがすつぽんぽんで海に入っていたり、砂浜に女性の胸のような大喜な山を二つ作っていたりと、赤っ恥を搔くようなものばかりである。

そんな写真が貼られているとは知らないイツセーは不思議気に首を傾げていたりする。

それをあの世から見ていたイツセーは頭を抱えて悶絶していたという……。

「……イツセー先輩の赤裸々……いえ、意外な過去」

「意外？ いったってえどんな写真見てんだ？ 木場、ちつと見せてくれよ」

と、木場の見ている写真を確認しようとするが……。

「そういつて僕から写真を取るつもりなのかい？ 駄目だよ、もう少し楽しませてね」と言つてサツと逃げてしまう。

「なんだよ……オラ何がなんだかさっぱりだ……」

訳が分からないとばかりに首を捻る一誠。

と、そこで、逃げ回っていた木場が動きを止めた。

「イツセーくん、この写真のこと、覚えてる？」

「ん？ どれのことだ？」

「この写真だよ」

そう言つて木場は一枚の写真を見せてくる。

その写真には、何かの飾りのような物の前に立つて、笑顔を浮かべている二人の子供の姿があつた。

『界王さま！これどうすりゃいいんだ？』

ワシにそんなこと聞くんじやないわい！そうだな、良く覚えてないと誤魔化すのが一番じゃろ……。

『あそつか！サンキュー界王さま！』

こんなときばかり頼ってくるなあ!!

「いつ……うーん……オラ良くわかんねえぞ、その写真がどうかしたんか？」

「そつか、じゃあこの上の剣を見たことは？」

矢鱈と剣を強調してくる木場……。

「劍……んーっ……はははっ、良く覚えてねえや」

そもそもその時はお主じゃないのだから当然じゃ！

『それはそうだけども……ま、いつか！』

お前は相変わらず気楽な奴じゃのう……。

そんなやり取りをしているとは知らない木場は暗い表情で呟く。

「こんなことがあるなんてね、人生何があるか分からないものだね……イツセーくん、これは聖劍だよ」

そう話す木場の顔は憎悪に満ちていた……。

復讐魔木場!イツセーの幼なじみ登場!

sideナレーション(界王)

(パンツ)

乾いた音が部室に響く。

リアスが木場の頬を叩いた音である。

「どう?目は覚めたかしら?」

そう話すリアスの顔は怒りそのもの……。

対する木場はただ無表情で叩かれた頬を抑えているのみ……。

こんなことになるのは数時間前、昼間の球技大会でのこと……。

??????????????

学校全体の行事で、部活動や委員会、倶楽部といった集団で参加する大会でそれは起きた。

球技の内容はドッジボールであり、イツセー達オカルト研メンバーもオカルト研究部という名目で参加していた。

しかし、部活といってもそれは名ばかりの悪魔達の集まり……。

人間ではあり得ない身体能力を發揮して他の生徒達相手に無双していった。

そんな試合中、イツセーは良く狙われていた。

ソレもそのはず、学園で一、二を争う二代お姉様やマスコットキャラやイケメンの所属している部活に在るのだ。

まして、最近は認識を改められつつあるが、それでも以前は性欲の権化として散々悪く見られていたイツセーだ。

その嫉妬の感情を諸にぶつけられる事となる……。

だが、それで倒されるようなイツセーではない。

飛んでくるボールを器用に受け止めると投げた者達に向かい続々と命中させていく……。

そんなことが続き、痺れを切らしたある男子生徒が木場目掛けてボールを投げた。

普段の木場であれば、そんなボール止まって見えるも当然なのだが、今回は違った……。

木場はあの時以来、暇さえあればずっと何かを考え込んでいる。

そんな状態の木場ではボールが迫っている事など気がつけるはずもなく……。

迫りくるボールに直撃しそうなになった時である……。

間一髪で間に入ったイッセーがそのボールを受け止め、その生徒に投げ返した。

そんなこともあり、オカルト研究部は何の苦もなく優勝することができた……。

そして時は最初に遡る。

「今日はすみませんでした……。なんだか調子が悪かったみたいです。……もういいですか？ 僕はこれで失礼します」

それだけを告げ、出ていこうとする木場。

「ちよつと裕斗! まだ話は!」

リアスが引き留めようと声をあげるも木場は話を聞く気は無いというように部室から出ていこうとする。

出ていこうとする木場に今まで筋トレをしていたイッセーが不意に声を掛けた。

「なあ木場、おめえ、何をそんなに焦ってんだ？」

ピクリ…と木場はその言葉に反応して動きを止める。

「焦る？ イッセーくん、僕がそう見えるのかい？」

「ああ、良くわかんねえけど、オラ、同じような目をしてたやつを知ってる…」

「僕のような…ね…君には分かる訳がないよ、僕のこの気持ちなんてね…」
まるで自虐のようにそう呟く木場……。

「ああ、わかんねえ…けど、オラ達仲間だろ？ 話してみりゃいいじゃねえか」

「仲間…か、君は熱いね、僕はそんな風に思ったことはないよ」

「い…？」

「イツセーくん、キミは何のために悪魔になったんだい？」

「ん？何のためって…オラは強え奴等と戦いてえからだぞ」

「戦うか…キミらしいね、僕は違う…僕は復讐の為…。それが僕の悪魔になった理由さ」
ソレだけ告げると木場は今度こそ部室を出ていつてしまった。

「??????????????」

「聖剣計画？」

イツセーの言葉にリアスは頷いて続ける。

「ええ、祐斗はその計画の生き残りなのよ」

「聖剣は悪魔にとって最大の武器。斬られれば消滅させられることもあるわ。」

ただ、聖剣を扱える者はそう多くはない。数十年に一人でるかどうかだと聞くわ…

「そこで行われたのが聖剣計画よ」

紅茶を少し飲み、リアスは尚も続ける。

「祐斗は聖剣、エクスカリバーに適應するために養成を受けたもの一人なの」

「じゃあ、木場の奴は聖剣つちゆう奴を使えんのか？」

イツセーの言葉にリアスは首を横に振る。

「いいえ…祐斗は聖剣に適應出来なかったの。」

「それどころか、養成を受けた者、全員が適應出来なかったそうよ？」

「計画は失敗に終わったの…」

「そ、その被験者の方達は怎么样了のですか…？」

「アーシアの言葉に部長が返答する。」

「適應出来なかったと知った教会関係者は、

祐斗達被験者を不良品と決めつけて、処分に至った」

それを聞いて顔を真っ青に染めるアーシア。

「そ、そんな… 教会がそんなことをしていただなんて…」

「うーん… オラ良くわかんねえぞ… いったえどう言うことなんだ?」

「イッセーさん、後で分かりやすく説明してあげますから待っていてくださいね」

話の意味を良く理解していないイッセーとなんとか元に戻ったアーシアのやり取りを見てからリアスは口を開いた。

「アーシアが知らないのも無理はないわ… この計画は秘密裏に行われていたようだし…」

それに、その計画の責任者は教会を追放されているもの」

「え…? そうなのですか?」

アーシアの言葉にリアスはうなずく。

「何とか生き残った祐斗も私が見つけたときは瀕死の重症だった。

だけど、そんな状態でもあの子は強烈な復讐を誓っていたわ。

聖剣に狂わされた才能だからこそ、

悪魔としての生で有意義に使ってもらいたかったのよ。

祐斗の持つ才能は聖剣にこだわるのはもったいないもの」

「……そうだったのですね」

一名を除き、部室内に重い空気が立ち込める

「あなた達は先に帰っていて……私は少しやることがあるから」

リアスが場の空気を帰るように口を開いた。

「分かった！んじゃオラ達先に帰っとくぞ、よし！アーシア、オラに掴まれ」

「は、はい……！」

アーシアが掴まったのを確認するとイツセイ達は家まで瞬間移動していくのだった。

瞬間移動にて母親の目の前へとやって来た二人……。

「オッス、母ちゃんけえったぞ!」

「ただいま帰りました〜」

母は別段気にした風もなく返す。

「ツ! お帰りなさい、二人とも。」

相変わらずいきなり帰ってくるんだから……。

今お客様が来てるのよ、ご挨拶して」

「ん? おお: : オッス! オライツセーだ!」

「え: : ? えつと: :」

「……」

困惑したように口を開くツインテールの少女と、無言でイツセーを見つめる青髪にメッシュを施した短髪の少女。

アーシアは何かに怯えてイツセーの後ろに隠れている。

「えーつと……とりあえず久しぶり……かな？イツセーくん」

困惑していたツインテールの少女がイツセーに声を掛ける。

「ん？誰だ？おめえ、オラ、おめえのこと奴知らねえぞ？」

「酷くない!?!というか、イツセーくんてそんな喋り方だった!?!っていうか髪もそんなだったっけ!?!」

盛大にツッコミを入れつつ混乱したように頭を抱えるツインテールの少女。

「ほら、前に近所に住んでた紫藤イリナちゃんよ

前は男の子みたいだったけど、

今はこんなに女の子らしくなっちゃって……」

母に言われてイッセーは身体に記憶されている記憶を思い出させる。

しばらく思い起こしていると、何やら該当する記憶を見つけたようだった……。

「いいっ?! おめえ女だったんか?! 男そっくりじゃねえか?!」

イッセーのその言葉にイリナは苦笑しながら口を開いた。

「あはは……あの頃の私ってかなりやんちゃだったもんね……」

それにしても……お互いしばらく会わないうちに変わっちゃった?

いや、イッセーくんは変わりすぎだけど……

まあいいや! でも本当、再会って何が起こるか分からないものだね」

そんな意味深な事を呟いてイリナと呼ばれた少女と青髪メツシユの少女は少し話を
して用があると帰っていくのだった。

その数時間後に、リアスとグレイフィアが真っ青になって帰ってきたのはまた別のお
話……。

他勢力の来訪者！幼馴染は聖剣使い!?

sideナレーション（界王）

イリナが訪問してきた翌日の事。

その日、イツセー達はその日の授業を終えて部室に顔を出すと、昨夜家に訪れていた二人の姿とリアス達、そしてグレイフィアの姿があつた。

「あり？感じた事のある気を感じると思ったらやっぱりおめえ達かあ！」

「はい、悪魔にとつての一大事でするので、参加させていただいております」

イツセーが声に即座に反応を返すグレイフィア。

声とは裏腹にその表情はとても嬉しそうである。

次いでイツセーに気がつき、声を掛けてきたのはツインテールの少女、紫藤イリナであつた。

「やつほー♪イツセーくん。今日は仕事で来てるんだよね」

軽い感じで話すイツセーに対してイリナも軽い話し方で返している。

「い……?仕事?」

不思議そうにするイツセーにイリナは一つ頷く。

「そう、仕事、これからキミの主さんと話をするから聞いてね」

そうして軽くウインクをイツセーに送ると、イリナは表情を真剣に戻してリアスと向かいあった。

剣呑な雰囲気の中、先に口を開いたのは青メツシユの少女であった。

「この度、会談を了承してもらえたこと。感謝する。私はゼノヴィアという者だ」

「紫藤イリナです」

二人の紹介にリアスもそれ相応の紹介を返す。

「私はグレモリー家次期当主、リアス・グレモリーよ。それで、悪魔を嫌っている教会側

の人達が私達悪魔に何の用かしら？会談を求めてくるぐらいだからそれなりのことがあつたのでしょうか？」

「簡潔に言おう。」

「……………教会側が所有しているエクスカリバーが、墮天使たちによつて奪われた」

「「「なつ…!?」」」

「セイケン?」

約一名を除き、場の空気が凍りつく。

ゼノヴィアと名乗つた少女は続ける。

「教会は3つの派閥に分かれていて、所在が不明のエクスカリバーを除いて6本の剣を2つずつ所有していた。その内、3本のエクスカリバーが盗まれた。残っているのは私の持つ破壊エクスカリバー・デストラクションの聖剣と」

「私の持っている擬態エクスカリバー・ミミックの聖剣よ」

と、二人はそれぞれ身に付けていた剣を見せる。

「ですとらしくしょん? みみつく? なんだそれ?」

「一誠様、では、私がご説明致しますね」

見兼ねたのかグレイフィアがイツセーを連れてフェードアウトしていく。

その様子に二人以外の者達が苦笑いをする。

ゼノヴィアは首をかしげ、イリナは盛大に困惑していた。

気を取り直すようにゼノヴィアが再び話し出す。

「我々がこの地に来たのはエクスカリバーを奪った堕天使がこの町に潜伏しているという情報を掴んだからだ。我々はそれを奪取、もしくは破壊するためにここに来た」

「堕天使に奪われるくらいなら、壊した方がマシなもの」

ゼノヴィアの言葉にイリナが続ける。

それを黙って聞いていたリアスはある疑問を投げ掛けた。

「……………それで、盗んだ墮天使の名は？」

ゼノヴィアは表情を少しも変えずにその犯人の名を告げる……。

「神の子^ッを見張る者^リの幹部、コカビエル」

告げられたその名に、部屋にいた者全員が驚きの声をあげる。

「墮天使の幹部が出てくるとはね……。

……………それで、貴方達は私達に何を要求するのかしら？」

「簡単だ。私達の依頼——いや、注文は私達と墮天使のエクスカリバー争奪の戦いに悪魔が介入してこないこと。つまり、今回の事件で悪魔側は関わるということだ」

ゼノヴィアの物言いにリアスの表情が少しばかり険しくなる。

「随分な言い草ね。私達が墮天使と組んで聖剣をどうにかするとでも？」

「悪魔にとつて聖剣は忌むべき物だ。可能性がないわけではないだろう？」

ゼノヴィアの言葉に、遂にリアスの瞳が冷気を帯び始めた。

もはやご機嫌斜めなど優に通りすぎ、絶対零度の不機嫌度合いである……。

それすら気付いていないかのようにゼノヴィアは続ける。

「もし、そちらが墮天使と手を組んでいるなら、私達はあなた達を完全に消滅させる。たとえ、魔王の妹でもね」

「そう。ならば、言わせてもらおうわ。私は墮天使と手を組んだりしない。決してね。グレモリーの名にかけて、魔王の顔に泥を塗るような真似はしないわ」

リアスがそう言い放つ。

それを聞いてゼノヴィアは軽く笑みを溢した。

「それが聞けただけで十分だ。私も魔王の妹がそこまで馬鹿だとは思っていない。今のはあくまで上の意向を伝えただけさ」

その言葉にリアスの険しかった表情が緩くなる。

それを見てか、二人は席から腰をあげる。

「では、本日は面会に応じていただき、感謝する。そろそろおいとまさせてもらうよ」

「そう。お茶は飲んでいかないの?」

「いや、悪魔とそこまでうちとけるわけにもいかないのね」

「ごめんなさいね」

そうやって帰ろうとしたときのことだった。

「お待たせ致しました」

「ふいふ…やつと終わったぞ…やっぱオラ頭使うんは苦手だぞ…」

説明を終えたのか、グレイファイアとイツセーが戻って来た。

「あはは…お帰りイツセーくん、私達の話は理解できた？」

「ん？おお！バツチリだ！おめえ達はその剣をとりけえしに来たってことだろ？んで、その『だてんし？』ってのをぶっ倒しに来たってよ」

イツセーの言葉にイリナは苦笑する。

「うーん…すぐくざつくりな覚え方だけど間違いではないかな？だから私達の仕事の邪魔はしないでね？」

「邪魔なんかしねえさー!けど、その『だてんし』って奴強えんだろ?くうーっ!オラも戦ってみてえぞ!」

お前はどこでも変わらんのう……。

「フツ…墮天使の幹部と戦ってみたいだなんて、変わっているのだな、キミは」
ゼノヴィアがイツセーの様子に反応する。

「そっか?強え奴と戦うのってなんかワクワクしてくんだ!」

「ワクワク…か、面白い事を言うものだ…キミ程度が挑んだところですからすぐに消滅させられてしまうだろうに…」

「そんなのやってみなくちゃわかんねえじゃねえか」

「フツ…確かにそうだな。それより、その金髪の…」

イツセーとの会話を途切り、ゼノヴィアがアジアを見る。

「兵藤一誠の家で出会った時、もしやと思ったが、アーシア・アルジェントか。こんな極東の地で『魔女』に会おうとはな」

ゼノヴィアの言葉にアーシアはピクリと体を震わせる。
イリナもそれに気づいてアーシアを見る。

「へえ、あなたが噂になってた元聖女さん？ 悪魔を癒す力を持っていたから追放されたとは聞いていたけど……まさか、悪魔になっていたとはね」

「あ、あの………私は………」

二人に言い寄られ、対応に困るアーシア。

「安心しろ、このことは上には報告しない——だが、堕ちれば堕ちるものだな。まだ、我らの神を信じているのか？」

「ゼノヴィア。悪魔になった彼女が主を信じているわけないでしょう？」

「いや、背信行為をする者でも罪の意識を感じながら、信仰心を忘れない者がいる。彼女からもそれと同じものが感じられる」

「そうなの? ねえ、アーシアさんは今でも主を信じているのかしら?」

その問いにアーシアは悲しそうな表情で答える。

「……捨てきれないだけです。ずっと、信じてきましたから……」

すると、ゼノヴィアは布に包まれた聖剣を突き出した。

「そうか。ならば、今すぐ私達に斬られるといい。罪深くとも、我らの神ならば救いの手を差し伸べてくださるはずだ」

その時二人の間に割り込む者が……。

それはイツセーであった。

イツセーはゼノヴィアの聖剣を素手で掴むとその剣先を逸らさせる。

「ツ! (う、動かない!何故悪魔が聖剣を掴める!?)」

刀身を平然と掴むイツセーの力と様子に対してゼノヴィアの表情が初めて驚愕する。

「おめえ、なにしてんだ……!」

「そんなモン向けちゃ危ねえだろ！」

【ズッコオツ!!】

その言葉に部屋の全員が盛大にズツ転ける。

「イツセーくん、怒るところはそこじゃないと思う……」

今まで黙りを決め込んでいた木場があまりのことにツツコミをいれる。

ゼノヴィアも起きあがり、気を取り直すように話し出す。

「……兵藤一誠、彼女を庇うのか？」

「ん？何言つてんだおめえ。そんなの決まってるじゃねえか！」

「そうか……彼女はキミの何だ？」

「ん？アーシアはオラの家族で仲間だぞ！もしおめえ達がアーシアに手え出すってんな

「らオラが相手になっぞ!」

「イツセーさん…」

イツセーの言葉になんとも言えない微妙な表情を浮かべるアーシア。
グレイフィアとリアスがそれを慰めるようにして肩に手を置いている。

「ほう…ならばその魔女の代わりに切ってやろう」

「イツセー、お止め」
「丁度良い!それなら僕も相手になろう」
裕斗!

「キミは誰だ?」

「君達の先輩だよ…失敗作だったそうだけどね」

サイヤ人VS聖剣！勝利の女神はどちらに微笑む!!

sideイッサー

オッス、オライツサー！

あの後オラ達はイリナ達と戦う事になったんだ。
んで、学園の運動場に来てんだけど……。

「なあ、木場。おめえホントに大丈夫なんか？」

「何がだい？僕はなんにも問題ないよ、寧ろここで仇が討てるんだ。今ほど気分の良いものはないよ」

木場はそう言うけれど、オラ、そうじゃねえ気がするんだよなあ……。

「ま、いつか！けど、無理すんじゃないぞ」

「分かってるよ、こんなところで消されるわけにはいかないからね
うーん、木場の奴本当に分かってんか？」

そんな不安を持ちつつも、オラは二人へと意識を向けるのだった。

s i d e o u t

s i d e ナレーション (界王)

運動場にて木場と一誠、ゼノヴィアとイリナの双方が対峙する。
ゼノヴィアは木場と、イリナは一誠とそれぞれ対峙する。

「……フフツ」

「……?なぜ笑っている」

ゼノヴィアの手にする聖剣を前に笑う木場にゼノヴィアが疑問を投げ掛ける。

「ああ、目の前に壊したくて仕方なかったものがあるんだからね」

そう告げる木場の足下には無数の魔剣が姿を表している。

「魔剣創造ソード・バースか、思い出したよ。聖剣計画で、処分を免れた被験体がいたと
言う噂を」

対するゼノヴィアも特に驚いた様子もなく淡々と告げる。

場所は変わって、一誠達の方はというと……。

「兵藤一誠くん！再開したら、懐かしの男の子が悪魔だか人間だか分からない存在になっ
ていて、更に私のことも性格も変わっちゃってるなんて、なんて残酷な運命のいた
ずらー！」

「……??何言ってるんだおめえ」

しかしイリナは一誠の言葉など聞こえていないのか一人続ける。

「聖剣の適正を認められ、遙か海外に渡って晴れてお役に立てると思ったのに…ああ！
これも主の試練！これ乗り越えることで、私はまた一歩主の信仰に近づけるんだわ
！」

「…?!なあ、さつきから何言ってるんだ？んなこといいから早く始めようぜ！」
何を言っているのか分かっていない一誠は早くしろと催促を飛ばす。

「さあ、一誠くん！私がこのエクスカリバーで、あなたの罪を裁いてあげるわ！アーメン
！」

未だまともに一誠の話を聞いていないイリナが唐突に一誠へと剣を振り下ろす。
しかし一誠はそれを涼しい顔で難なく回避すると、構えを取る。

「へへっなんだか分かんねえけど、やるってるんだな？オラワクワクしてきたぞ！」
すると、構えをとった一誠の左腕に赤い籠手が装着される。

『相棒、久しぶりだな。戦うんだろ？折角だ、俺を使ってみないか？』

(いつ？ドライブ邪魔しねえでくれよ！今からがいいとこなんだからさあ…)

『邪魔をするつもりはないんだがな…寧ろお前に力を貸してやると言っているんだぞ？』

(ん？力あ貸してくれんのか？どうやってだ？)

『こういう風にだ…見ていろ』

『Boost!!』

すると、籠手からそんな機械音声が流れ、一誠の身体に力が流れ込んでくる。

(ツ！コイツは！)

「ハアツ!!」

驚いている一誠を余所にイリナはもう一度仕掛けて来る。

だが、そんな攻撃では一誠には届かない。

ましてや、神器による恩恵を受けたのなら尚更である。

【ガキインツ】

なんと、振り下ろされる聖剣を一誠は指二本で受け止めていた。

「どうした、そんなもんか?」

その平然とした様子に、対峙するイリナ以外にゼノヴィアや木場も驚愕している。

「つ……なら!これならどう!」

同様に隠すようにイリナは距離を空けると、即座に連撃へと移行した。

四方八方から繰り出される高速の聖剣の剣戟。

だが、一誠は一步も動くことなくその攻撃を指だけで防ぎきっている。

『Boost!!』

二度目の機械音声が聞こえ、一誠の身体にまた力が流れ込む。

(これどうやったら止まんのだ?)

攻撃を防ぎながら一誠はそんなことを考えていた。すると……

『Explosion!!』

そんな聞きなれない機械音声が鳴り響いた。

そんなことは関係ないと攻め続けていたイリナは繰り出す攻撃がごとごとく防がれてしまい肩で息をしていた。

「ハア…ハア…なんで、なんで一撃も当たらないの…?」

「イリナ、おめえはオラには勝てねえ、もう止めとけ」

「くっ…そんなこと、まだやってみなくちゃ分からないわ!」
実力の差を見せつけられ尚挑んでくるイリナ。

「全く仕方ねえな…」

一誠は呆れたようにイリナと向き合う。

「はああああああツ!!」

勢い良く剣を一誠に向け振り抜くイリナ。

だったが、その一誠は剣が直撃する寸前にその姿を消した。

「なっ…!?何処に!」

「こっちだ!だりやああツ!!」

瞬間的に後ろに回り込んでいた一誠に中へと蹴りあげられ、そのまま足を捕まれジャイアントスイングの要領で振り回され投げ飛ばされる。

「いやあああああッ!!」

投げ飛ばされた先には木が生えている。

イリナが木と衝突する寸前、一誠がいきなり現れ、イリナを受け止め激突を阻止した。

「でえじょうぶか? 悪りい悪りい、手加減間違えまった」

「え…? あっ!」

困惑するイリナはその状況が呑み込めないなかあることに気がつく。

自分の持っていた聖剣を落としてしまっていたのだ。

どうやら一誠に蹴りあげられた時に落としたらしい。

それで戦いは終わったも同然であった。

「あはは…私の負けだね…」

「へへへっ！勝っちゃったもんね！」

まるで子供のように喜ぶ一誠にイリナは怒る気にもなれず同じように笑みを浮かべるのであった。

余談ではあるが、木場はやはり通常の思考を出来ず、あっさりとゼノヴィアに敗北していた。

そして二人が帰る去り際に、ゼノヴィアが一誠に意味深な言葉を残していくのだった

『今代の赤龍帝、気を付けることだ。白い龍はもう目覚めているぞ』

しかし、その謎めいた言葉を一誠は首をかしげていたと言う。

聖剣を破壊せよ!悪魔と聖剣使いの共同戦線!

sideナレーション(界王)

「だああああッ!!」

一誠の叫びと共に鋭い正拳突きが放たれる。

「遅い…もつと早くしてみろ…」

「ぐああッ…!!」

対峙するは赤き龍の帝王『ドライグ』……。

そう、現在一誠は神器内でドライグに鍛えてもらっている最中なのである。

「だりやああああッ!!」

「フンツ……!」

腕を振りかぶり、勢いよく突っ込む一誠より早く、ドライグの鋭い尾の一撃が一誠を

吹き飛ばす。

「ぐあああつ……ッ!!」

キーンツ……と勢いよく吹き飛んでいく一誠だったが、気合いでなんとか踏ん張りを利かせて止める。

「ほう、よく耐えたな……」

「へっ……まだまだいくぞお！」

「ドライグの言葉に不適に笑み、一誠は再びドライグへと突っ込んで行くのだった……。」

「ハアツ……ハアツ……ハアツ……やつば強えなあ……ドライグ」

「フハハツ…今のお前ではまだまだオレには届かんさ…だが、良い線はいつているんじゃないか?」

「ホントか!やったあ!」

ドライグの言葉にとても嬉しそうに喜ぶ一誠。

その様子を見ながらドライグはある疑問を投げ掛けてみる。

「ところで相棒、そろそろ起きなくていいのか?いつもならもう起きている頃だろう?」

「へっへっへっー!今日は休みだかな!部活?もねえからこうして修行に集中してられんだ!」

「そういうことか、ならば今日はみっちりとしごいてやるとしよう」

「ああ!」

そんなやり取りをしている間、他の部員が動き出していることを一誠は知る由もない

……。

◆◇◆◇sideout◆◇◆◇

sideグレイファイア

皆様、ご機嫌麗しゆうございます。

一誠様専属のメイド、グレイファイアにございます。

今はお義母様のお願いで街まで買い出しに出しております。

「……………」

「止めてくれえー！離してくれええつ!!」

「あの方達は……………」

確か、リアスお嬢様とソーナ・シトリー様の眷属の方でしたね。何をなさっているのでしょうか……

何故だかソーナ様の眷属の方をリアスお嬢様の眷属の方が雑に引っ付かんでいるのですが……

お嬢様の眷属の方は誰かを探していらっしやるかのように辺りをキョロキョロと見回していますが……。

考えていても仕方ありませんね、とりあえず声を掛けてみましょうか。

「美味しい!日本の料理は、美味しいぞ!!」

「ああ、やっぱりファミレスのメニューこそ私のソウルフード!!」

場所は変わってファミリーストランなる場所で料理にがつつくお二人……。

こんなお店の料理がソウルフードだというのはどうなのでしょうか……

あの後、どうやらお嬢様の眷属…塔城小猫様に声を掛けたところ、協会から使わされたあのお二人を捜しているということで一誠様の後輩ということもあり、私も協力することにしたのです。したのですが……。

☆☆☆☆☆回想☆☆☆☆☆

「えー、迷える子羊にお恵みを〜」

「どうか天の父に代わって哀れな私達にお慈悲をおお!!」

そんなことを叫びながら聖剣使いの片割れ…イリナさんが叫び、もう片方の…ゼノヴィアさんはまるで期待していなさそうな声音と表情で演説?をしていました。

今の時代にそういったものでお布施など貰えるのでしょうか…?

………

いえ、あの様子からして貰えることはないのでしょうね。

二百年ほど前ならばいざ知らず…今の近代化した世の中ではそういった神等の類い

は信じられることはないのですから……。

そんなことで悲しくなってきましたが……。

とりあえず、あの二人をなんとかしないとダメですね……。

そう決心をつけると、私達は何故か大声で口喧嘩を始めてしまった二人に近づき、声をかけるのでした。

「お二方、私達これから食事に向かうところなのですが、良ければご一緒に如何ですか？」

☆☆☆☆回想終了☆☆☆☆

出てきた料理を粗方食べ終え、満足したらしい二人はようやく落ち着いたらしく、私達に問いかけて来ました。

「それで、私達に接触してきた理由はなんだ？」

聖剣使いの片割れ、ゼノヴィア様が疑問を投げ掛けてきます。

私はどうするのかと塔城様を見ます。

すると、塔城様は小さく頷いて用件を話始めました。

「……まどつこしい事は抜きで単刀直入に言います、聖剣の破壊を私達にも手伝わせてください」

その言葉にゼノヴィア様は少しだけ考え込み……

「残念だが、悪魔の手を借りるわけにはいかないのな……」

そう断るゼノヴィア様に、塔城様はまるで予想通りかというように……

「これに許可をくださればイッサー先輩も協力してくれるはずですよ」

それを聞いたゼノヴィア様はピクリと反応し、そしてまた考え出します。

暫し考え込んだ後、ゆっくりと口を開きました。

「…分かった、一本くらいならば任せても良い」

しかしそれに反応したのはもう片割れである紫藤様でした。

「ちよつと！ゼノヴィア！本気なの！悪魔の手を借りるなんて」

その問いにゼノヴィア様はさらりと答えます。

「いや、私が借りるのは赤龍帝の力さ、それにあの者は悪魔ではないんだろう?」
「おや?」一誠様の正体をお気づきになられたようですね。

「……なぜ、そう思ったのですか?」

「彼からは悪魔によく似た気配は感じるがよく感じ取ってみれば根本が違うんだ。
無礼を承知で聞くが、彼ははいったい何者だ?」

「一誠様は悪魔の力を持ったサイヤ人という種族でございます」

「……宇宙に生息する宇宙人です。戦闘民族と言われているようです」
一誠様の説明を小猫がやってくれます。

正直、少し悔しいです……

「なるほどな、それで悪魔に似た気配が感じられるのか、ではそのサイヤ人と赤龍帝の力を借りることにしよう」

「……ありがとうございます。それではもう一人協力者をお呼びしますね」
そうして塔城様は携帯を取り出すと誰かに連絡をかけ始めるのでした。

悪魔vsはぐれ悪魔払い!登場はまだか!兵藤一誠

!

sideナレーション(界王)

「なるほど、でも正直聖剣使いに破壊を承認されるのは遺憾だね」

小猫の連絡で合流した木場は、心底気分が悪いというように顔をしながらそう言いきった。

「ずいぶん物言いだね、君はグレモリー眷属を離れたそうじゃないか……。いまここでお前をはぐれとみなしてこの場で切り捨ててもいいんだぞ」

言われた方のゼノヴィアもこれまた威圧的な態度でそれに答える。

「そう言う考えもあるね..」

木場も負けじと睨み付けてそれに答えようとする。しかし……

「ゼノヴィア様、木場様、双方矛をお納めください…今は仲間内で争っている場合ではないはずです」

そう口を開いたのは今まで静観していたグレイフィアであった。

「…っ…それもそうだな」

「…っ…すみません」

軽く怒気を含んだ視線と声で言われ縮こまるように萎縮する二人。

「木場様、今ここにおられない一誠様の代わりに言わせて貰いますが、これは貴方の為を思つての塔城様のご提案なのです。それが分からないほど、貴方は愚かではないでしょう」

「………はい、すみませんでした」

「謝るのでしたら塔城様になさってください、私は一誠様の代わりにお手伝いをさせていただきます」

「分かりました……ごめんね、小猫ちゃん」

「……大丈夫です」

そう言つて木場が小猫に謝るのを確認してからゼノヴィアが口を開いた。

「……君が聖剣計画を憎む気持ちは理解できるつもりだ、あの計画は私達の間でも最大級に嫌悪されている……。だから、計画の責任者は異端の烙印を押され追放された」

その言葉にイリナが続ける。

「バルパー・ガリレイ、皆殺しの大司教と呼ばれた男よ」

「バルパー、その男が僕の同志を……。情報を提示されたのならこちらも情報を提示しないとね……。昨夜、フリードにあったよ、あの男の手にはエクスカリバーの一本が握られていたよ」

フリードの名前を聞き、二人は顔をしかめる。

「なるほど、奴か」

「知り合いなのですか？」

グレイファイアの問いに二人は小さく頷いて答える。

「ええ。フリード・セルゼンは十三才でエクソシストになった天才よ。多くの悪魔や魔獣を滅して功績を残していったわ」

「だが、奴はやり過ぎた。同胞すらも次々に手をかけていったのだからね。その結果、奴は異端として追放された。……なるほど、教会から追放された者同士が結託することはそう珍しいことでもない。もしかしたら——」

そんな事実が判明し、事態がややこしくなってきた事を理解したところで、小猫がふと口を開いた。

「……とにかく、今は行動しましょう」

その言葉で、聖剣破壊のメンバーは互いに頷き行動を始めるのだった。



その日の夜中、街中に神父のような格好をした若者達数人が街中を徘徊していた。そんな時間に神父が外を出歩くわけがない……。

それもそのはず、この集団は悪魔質なのだから……。

というか、聖剣破壊を目標とする小猫達グレモリー眷属そのものなのである。

何故神父の格好をしているのか…それは協力者のイリナの提案だった。

『フリードは神父を襲ってるんでしょ?なら、神父に変装すればあつちから姿を現してくれるんじゃないかな?』

という理由らしい……。

というか、そんな単純な案で釣れるわけないだろうに……

しかし、それ以外に方法もなさそうなので小猫達も渋々ながら真面目にやっているよ
うだ。

そうして歩いていると、不意に先頭を歩いていたグレイフィアが皆に聞こえるような
声量で声を掛けた。

「皆様、構えてください。強い気配が近づいてきます」

その言葉を聞いた小猫、木場、匙はそれぞれ構えをとり、各々が迎撃の準備をとる。すると、そこに一つの人影が四人の真上に現れ、四人を狙うように何かを振り上げた。

「神父のご一行に加護あれってね！」

降ってくるなり何かをを振り抜いてくるその人影。

四人はサツとその攻撃を躲かし、左右に散らばって距離をとる。

「おやおやあく？神父ご一行かと思つたらクソ悪魔の群れでしたかあく♪なんだなんだよなんですかあく？クソ悪魔がコスプレですかあく？」

そう言つて現れた人影は紛れもなく長い白髪を揺らし、真つ赤な瞳をした少年。

それは紛れもなく、はぐれ悪魔払い、フリード本人だった。

「神父だと思つて襲いかかつたら悪魔だったって……なんですかあく？もしかしてオレを誘つてんのかな？かな？だとしたら笑いものだわ！殺されに来るクソバカだよな！あつそうか、悪魔だからそもそもそんなことも考えられないか！ギャハハツツ!!!……」

はあ」

構える四人を見ながら下卑た笑みを浮かべながらペラペラと話しまくるフリード。だが、すぐに飽きたように溜め息を吐くと、気を取り直すかのように口を開いた。

「さーって…萎えたこのテンション回復のために目の前の悪魔共をチョッパーしますかね!」

そう言うや否や、超スピードで距離を詰めグレイファイアへと攻撃を仕掛けるフリード。

だが、相手は冥界最強の女王^{クイーン}。

例え相手が聖剣だろうとある程度余裕をもって戦う事が出来る。

そして、今この場にいるのはグレイファイアだけではない。

「伸びろ!ラインよ!」

その声と共に伸びた黒い線のような何かはまっすぐにフリードへと伸びていき、その線をフリードの腕へとくっ付けた。

「うぜえっス!」

聖剣で切り払おうとするが、その線は実体がないかのようにすり抜け、フリードの腕

から離れない。

それを出した少年、匙は手の甲にデフォルト化されたトカゲの顔らしきものが現れた神器を着けていた。

「その線はちよつと特殊でな、下手な攻撃じゃ斬れないぜ！これでお前は逃げらねえ！
木場！グレイフィア様

「やっちまつてください！」

「匙様、援護感謝します…木場様、いきましよう」

「はい！」

そうして二人が攻撃を加えようとしたときだった……。

「何をしている？フリード」

不意に声がして四人がはそちらを見やる。

するとそこには、険悪な面の老人が立っていた。

「バルパーのじいさんか…このクソ悪魔達が邪魔しててよお…つつか、このベロが邪魔で戦いづらいんだわ」

「そんな奴らに手子摺るとは……」

お前に渡した因子があるだろう、それを使え。体に流れる聖なる因子をできるだけ聖劍の刀身に込めれば切れ味が増すはずだ。それと、時間迫っている…戻るぞ」

「なるほど…ほらよつとおお！」

先程まで触れもしなかった匙の神器が何の苦もなくあつさりと切り落とされる。

「なっ…!?」

「邪魔なアレもなくなつたし、時間もあれらしいんで、ここは逃げさせてもらいますわ!!」

「逃がすか!」

木場がすかさず攻撃を加えようとするが……

「ハイハイ…んじや、ハイ、チャラバツ!」

直後、フリードが何かを思いきり地面に叩きつけた。

その瞬間、眩い閃光が辺りを包み込んだ。

「なっ…!?」

「くっ…!!」

あまりの眩さに目が眩む四人……。

光が収まり目が見えるようになる頃にはフリードとバルパーの姿は何処にもなかった。

その後すぐ、小猫が連絡をいていたイリナ達が急行し、逃げた二人の後を追っていった。その時に木場も

『僕も追わせてもらおう!』

と言つて駆けていってしまい、残された三人はどうしたものかと困惑していたところに

「つたく、なんなんだよアイツら…」

「本当、なんなのかしらね…あなた達のこれは……」

「サジ、これはいったいどういうことですか?」

何気なしに呟いた匙の呟きに背後から怒気の籠った言葉が聞こえてきた。

その聞き覚えのある声に内二人はギギギとブリキのような仕草でそちらを見る。

そこには黒い笑みを浮かべたリアスとソーナのような何かが立っていた。

「ツ?!?!?部長…」

「お嬢様……」

リアスはまさかの人物に少し信じられない目をして言う。

「グレイフィア、まさかあなたが協力していただなんてね…どういうつもりかしら?」

「私は一誠様の代わりに勤めただけにございます」

「そう…ということとは、これにはイツセーも関わっているというのね?」

「……はい、イツセー先輩は協力してくれています」

何故かグレイファイアの代わりに小猫が答えるというおかしい状況だが、疑問に思う者は誰もいない。

因みに隣では匙がソーナに尻を魔力付きの平手ではたき倒されている。

「いずれにしても、あなた達が無事で良かった…」

そう言つて二人を抱き締めるリアス。

「かいちよおおー！なんかあつちはいい感じに終わってますけどおお!!」

「他所は他所、うちはうちです!」

今尚叩かれている匙が何やら喚いているが、ソーナは気にせず尻叩きを止めない

「さて、小猫？覚悟はいいわね？」

「え…?」

「グレイファイアは…やるわけにはいかないから、また後でイツセーにやるとして、今はあ

なたよ小猫」

「え…許してくれたんじゃない…」

「そんなわけはないでしょう? ソーナのところをやっているのに私のところがお咎めなしというわけにはいかないもの」

ニツコリと笑うリアス。

その日、駒王の街に猫の悲鳴のようなものが響き渡ったという。

迫り来る危機！駒王を護れグレモリー眷属！

sideグレイファイア

「脇が甘いです、一誠様」

「がっ……くうっ……だりやああアツツ!!」

私の攻撃吹き飛ばされる一誠様。ですが気合いでなんとか空中で踏ん張りを利かせて私へと突っ込んでくる。

そう、現在私は一誠様の修行をつけるため、指導している最中なのです。

昨夜、あの後、一誠様に修業の相手を頼まれた私は喜んでその頼みを受けました。

それから丸一日以上、一誠様の修行にお付き合っていると訳です。

ブリーステッド・ギア赤龍帝の籠手に封印されているドラゴン。ドライグ様にも付き合ってもらっているようです。技の精度はやはり乏しいようです。

私はその雑になってしまった攻撃に勢いを乗せるため、技を磨かせることにしました。

と、言っても、一誠は生前……というべきかは分かりませんが、ある方に師事していた

ことがあるらしく、型はかなり出来ています。

このままいけば、後少しで私の修行は終えられそうですね。

ですが、終わりの見えてきているこの修行に寂しい気がしてしまうのは、やはり一誠様が好きだからなのでしょうか……。

そんなことを考えつつも、私は一誠様の修練にお付き合いをしていくのだった。

side out

side ナレーション (界王)

一方その頃……。

リアス率いるグレモリー眷属とソーナ率いるシトリー眷属は駒王学園の前に集結していた。

「リアス先輩。現在、学園を大きな結界で覆っています。これでよほどのことがない限りは外に被害は出ません」

匙が部長に現状報告をしていた。

昨夜の尻叩き影響か、匙の動きが微妙にぎこちない……………。

木場と聖剣使いの二人の姿はない。

聖剣使いの一人であるイリナはフリード達を追っていった先で手酷い傷を負わされ、未だ目を覚ましていない。

「これは飽くまで最小限に抑えるものです。正直言つて、コカビエルが本気を出せば学園どころかこの町ごと崩壊させることも可能でしょう」

ソーナの言葉にリアスは頷き、答える。

「ありがとう、ソーナ。あとは私達がなんとかするわ」

「リアス、相手はケタ違いの化け物なのですよ？今からでもあなたのお兄様を呼んだほうがいい。」

「あなただって、御姉様を呼ばなかったじゃない…」

「それは…家の姉が出てきたらややこしくなるから…！」

そんなことを言い合う二人に朱乃が口を挟む。

「サーゼクス様にはもう打診しました」

その言葉にリアスが目を見開く。

「朱乃! あなた、勝手なことを!」

「リアス、いくら婚約を破談にした後でお兄様に迷惑をかけたくないのは分かるわ、でも今回の相手は私達の手を負える相手じゃないの。…魔王の力を借りましょう、リアス!」

朱乃さんが有無を言わせぬ口調で答える。

その迫力にさしものリアスも引き下がざるを得ない……。

「ハア…分かったわ」

その言葉を聞いた朱乃は、いつものニコニコとした笑顔に戻り、言った。

「魔王様到着の目処ですが、四十分程で到着するそうです」

「四十分…。分かりました。その間、私達シトリーで結界を張り続けて見せます」

ソーナが決意を示す。

すると、匙がふと疑問を投げ掛ける。

「そういえばリアス先輩。兵藤はどうしたんですか？姿が見えないみたいですけど」

その問いにリアスは困ったように顔を背ける。

代わりにと小猫が質問に答えた。

「イツセー先輩は今朝からグレイフィア様と修行に行ったきり帰って来ていません。優斗先輩は匙先輩も知っての通りです」

「はあ？兵藤の奴来ねえのかよ！街が滅びるかも知れないって一大事に何してんだよアイツは！」

まさかの返答に匙が声を荒げて怒る。

「いえ、そういう訳じゃないわ…きつとイツセーはこうなることが分かってたのよ…だからこうしてる今も強くなるために必死になっているの…」

「それで来ないんじゃないや一緒にじゃないですか! 下手したら一人で逃げてる可能性だって!」

その言葉に納得していない匙が尚も声を荒げる。

そこへ突っかかるものがいた、アーシアだ。

「来ます! イツセイさんは必ず来てくれます! 見捨てるなんてことあの人がするはずありません!」

「…そ、そうか…そうだよな、アイツがそんなことするはずないよな」

アーシアの勢いに匙もたじたじで返すしかないようだ……。

「そういうことよ、私達はそれまでコカビエルと戦って時間を稼ぐわ」

「リアス、どうかくれぐれも死なないで…」

「ソーナもね」

こうしてリアス、朱乃、アーシア、小猫の四人は結界の中へと入っていくのだった。

結界内で戦闘が始まってからしばらく……。

戦況は最悪の方向に傾き始めていた。

コカビエルの出してきた手下、地獄の番犬『ケルベロス』相手にグレモリー眷属達は劣性を強いられていた。

途中、アーシアの危機に颯爽と現れた木場とゼノヴィアも参戦したが、それでも状況は変わらず最悪……。

そんななか、バルパーが木場に聖剣計画の詳細を声高に説明し、因子の結晶を用済みだといって投げ渡したところで、木場の神セイクリッド・ギア、魔剣創造が禁手に至り禁手双覇の聖魔剣となり、四本の合体聖剣を破壊しせしめたが、コカビエル相手ではゼノヴィアの解放した武器、デユランダルをもってしても歯が立たなかった。

そんななか、コカビエルがふと思ひ出したように話し出した。

「それにしても、よく主がいけないのに信仰心を持ち続けられるな……」

これまでつまらなさそうにしていたコカビエルが、一層呆れたように言う。

その言葉に即座に反応したのはゼノヴィアであった。

「主がない? どういうことだ! コカビエル!」

「おっと、口が滑ったな。……いや、良く考えてみれば戦争を起こすのだ。黙っている必要もない」

そう言うのと、コカビエルは心底おかしそうに大笑いしながらある衝撃の事実を言い放った。

「先の三つ巴の戦争の時、四大魔王と共に神も死んだのさ!!!」

「「なっ……?!?」」

全員信じられない様子だ。

「神が……死んだ……?」

「神が死んでいた……? そんなこと聞いたことないわ!」

「それはそうだろう、あの戦争で、悪魔は魔王全員と上級悪魔の多くを失った。天使も墮天使も幹部以外の多くを失った。どこの勢力も人間に頼らなければ種の存続が出来ないほど落ちぶれたのだ。だから、三大勢力のトップどもは神を信じる人間を存続させるためにこの事実を隠蔽したのさ」

それを聞いたゼノヴィアが崩れ落ちる。

その表情は見ていられないほど狼狽していた。

「……………ウソだ。……………ウソだ。」

両膝をつき、ウソだとずっと繰り返す。

「そんなことはどうでもいい。問題は神と魔王が死んだ以上、戦争継続は無意味と判断したことだ！ 耐え難い！ 耐え難いんだよ！ 一度振り上げた拳を収めろだど!？」

あのまま戦いが続いていれば俺達が勝てたはずだ！ アザゼルの野郎も『二度目の戦争はない』と宣言する始末だ！ ふざけるなよ！」

尚もコカビエルは続ける。

「おまけに最後に出てきたアイツもそうだ！ 二天龍を沈めたあの人間……。英雄なんて呼ばれているがな！ アイツは邪魔をしたただけだ！ アイツが来なければ戦争はまだ続い

ていた!」

強く持論を語るコカビエルは憤怒の形相となっていた。

アーシアは手で口元を押さえ、目を大きく見開いて、全身を震わせている。

アーシアも事實はかなりの衝撃だったのだろう。

「……………主はいないのですか? では、私達に与えられる愛は……………」

アーシアの疑問にコカビエルはおかしそうに答える。

「ふん。ミカエルは良くやっているよ。神の代わりに天使と人間をまとめているのだから。『システム』さえ機能していれば、神への祈りも祝福も悪魔祓いもある程度は機能するさ」

コカビエルの言葉を聞いてアーシアはその場に崩れ落ちた。

小猫がそれを支えるが、アーシアは気を失っている。

「俺は戦争を始めるツ! お前達の首を土産に戦争を起こす! 俺だけでもあの時の続きをしてやる! 今度はあの人間にも邪魔はさせん!!」

そうして極大の光の槍を作り出し、リアス達に向け、投合する。

それはあまりに大きく、避けることなど不可能な代物だった。

リアス達は死を覚悟した。

しかし、来るはずの痛みも衝撃も一向に来る気配はなく、代わりに聞こえてきたのは……。

【バギンツ!!】

「……何者だ、お前は……」

コカビエルのそんな声と、何か音がたてて破壊される音だった。

それに恐る恐る目を開けるグレモリー眷属達。

そこには……

「……遅くなってすまなかった」

ボサボサの頭に橙色の道着を着込み、腰から猿のような尻尾を生やした少年、兵藤一誠が、グレモリー達を庇うように立っていた。

「……後はオラがなんとかする。おめえ達は離れてんだ」

そう、グレモリー眷属に言う和一誠はコカビエルに向き直り……。

「コカビエル…!おめえだけは許さねえぞ!!」

壮絶バトル開幕！赤龍帝 V S 墮天使幹部！

side 小猫

「…何者だ、お前は」

コカビエルの問いに イッセー先輩は答えません。

先ほどまで睨んでいたコカビエルから視線をアーシア先輩へと変えると崩れているアーシア先輩のところに向かいます。

「アーシア、でえじょうぶか？」

「…イ、イッセーさん…？」

顔色が真っ青なアーシアさんが辛うじてイッセー先輩に気がつき声を掛けました。

「イッセーさん…わたしは…これからどうすればいいのでしょうか…慕うべき主は…既に…亡くなられているなんて…」

「……………」

続けるように問いかけるアーシアさんに答えず、イツセーさんは同じように俯いているゼノヴィアさんに気がついたようです。

ゼノヴィアさんもイツセー先輩が見ている事に気が付き、イツセー先輩の方を見ます。

「ゼノヴィア」

「兵藤一誠…なんだ、慕うべき主を無くした哀れな私を笑いに来たのか?」

いつもの強気な物言いは完全に鳴りを潜め、絶望した表情でゼノヴィアさんはいいいます。

「……………」

それにも答えず、イツセー先輩は少し考えるような素振りを見せると、不意に口を開きます。

「おめえ達何言ってるんだ？神様死んじゃえねえぞ」
心底不思議そうに言ってる首を傾げています。

「「え……？」」

その言葉に今まで崩れていた三人はすつとんきような声をあげ、私を含めた周りの人達全員が驚愕します。

「貴様！今なんと言った!?!神が生きているだと……!?!」

「ああ、今も元気にしてっはずだ、何言ってるんだおめえ？」

同じように驚いているコカビエルに呆れた顔を向けるイツセー先輩。

「……ツ！まあいい、奴が生きているとしてもまた戦争を仕掛けることには変わらない……お前達を殺し、俺はもう一度戦争を起こすんだ！」

「……おめえが何言ってるのか知らねえけど、悪い奴だっことはよくわかったぞ、オラがおめえをぶっ倒してやる！」

それを聞いたコカビエルはその顔を邪悪な笑みに染めます。

「ほう、この俺を倒すだと?面白い、精々足掻いてみせろ!!」

そう言つてコカビエルは極太の光槍を一誠目掛けて投げ放ちます。

あんな攻撃受けたらいくら強いイツセー先輩でも……!

凄いい勢いで迫ってくる光槍にイツセー先輩は……

「だりやああああつ!!」

【バギンツ】

腕を振り抜き粉々に破壊してしまつたのです。

「なっ…!?!」

「今度はこつちからいくぞ!!」

驚いているコカビエル、私達も目を疑います。

しかし次の瞬間、イツセー先輩の姿が欠き消えました。

い、いったい何処に……

「なっ……どこだ!」

慌ててコカビエルが辺りを見回します。すると……

「こつちだ! だりやあああつ!!」

「ツ!? ……くっ!」

突如コカビエルの頭上に現れたイツセー先輩が現れたのです。

それに気付いたコカビエルも即座に反応してその攻撃を防いでいます。

「へえ、やるじゃねえか、けど、オラこんなもんじゃねえぞ!」

「ほぎくな! 人間の分際でえええ!!」

二人はそれだけ言葉を交わすと再度ぶつかり合います。

しかしその様子はよくわかりません……。

二人の動きが早すぎて目が追いつかないのです。

見えるのは空中に響く衝撃波のようなものだけ……。

「い、いったい何が……」

「あらあら、早すぎて何も分かりませんわ……」

「騎士ナイトの僕にも捉え切れないなんて……なんて戦いだ……」

「イツセーさん……」

「兵藤一誠……」

優斗先輩にも見えないなんて……二人のどんな次元の戦いをしているんでしょう……。その直後、地面に何かが落ちてきました。

「いっちち……中々強えな……」

それは少し傷を負ったイツセー先輩でした。

「イツセー!?大丈夫なの!」

その様を見たリアス部長が驚いて声を掛けます。

「ん?でえじようぶだ!オラもそろそろちつと本気出させてもらうか!」

すると、イツセー先輩の左腕に赤い籠手が現れました。

イツセー先輩の神器である赤龍帝の籠手ブーステッド・ギアです。

「ドライブ、いけっか?」

イツセー先輩が籠手に話しかけると、籠手の宝玉が返答するように何度か点滅します。

「おし!じゃあいくぞ!勝負はこれからだ!」

そう言うときイツセー先輩は再度コカビエルに向かっていくのでした。

side out

sideナレーション(界王)

神器を解放させたイツセーとコカビエルが再度激突する。

あまりの衝撃波の余波で辺りの地面は抉れ、校舎は最早原型を留めていない。

「だりやつでりやりやりやつ!!」

「うおおおおおつ!!」

イツセーの連撃にも負けじとコカビエルも反撃していく。

だが、神器を解き放ったイツセーには敵うはずもなく、徐々に倍加で強くなっていく
イツセーに押され始める。

「遅せえぞ!でりやあああッ!!」

「いっふっ…!!」

隙をついたイツセーの鋭い一撃がコカビエルに突き刺さる。

身体をくの字に折り曲げて地面へと叩きつけられるコカビエル。

「クソがああああつ!!俺は墮天使幹部だぞ!!こんな奴に負けて良いはずがない!!」
直ぐ様立ち上がったコカビエルが今までにない程巨大な光槍を作り始める。

それを見たイツセーも空中で両腕を揃え、その腕を腰まで持つていきあの技の準備を始める。

「かあ……」

「めえ……」

「はあ……」

「めえ……」

そこまで言ったところでイツセーの腕の中に青く光る球が形成されていく。

球は次第に大きくなり、やがて手では押さえきれないほど大きくなっていく。

そうこうしているうちに、コカビエルの方も準備を終えたらしい。

超極太の光槍がコカビエルの腕の中で輝いていた。

「これで消し飛ばええええええつっ!!」

その叫びと共に光槍をイツセー目掛けて投合する。

猛スピードで迫る光槍に対抗するようにイツセーもあの技を叫ぶ。

「波ああああああああっつ!!」

突き出された両手から極太の青い閃光が迸る。

コカビエル目掛けて放たれたソレは、コカビエルの光槍を意図も容易く呑み込み、そのままコカビエルを呑み込む。

「なっ……く……そ……この……オレがあああ……」

青い光の奔流に呑まれ、コカビエルはその身体を消滅させていくのだった。

二天龍の会合！

side 界王（ナレーション）

「なっ……くっ……そおっ……このっ……オレっ……がああ……ッ!!」

蒼い閃光がコカビエルを呑み込みそのまま天高く登っていく。
その閃光は空の彼方まで飛んでいき、やがて見えなくなった。

「……やったの？」

あまりに呆気ない最後に、理解が追いつかないリアスが口を開く。

そう言ってしまうのも当然だろう。つい先程までリアス達に猛威を振るっていたコカビエルの重圧は嘘のように消えている。

「まさか……本当にコカビエルを倒してしまうなんて……」

その事実がリアスを震え上がらせた。

一度は聖書にも書かれたほどの実力の持ち主を、彼は一人で倒してしまったのだ。

この時ほど、彼が私達の味方で本当に良かったと心から思わないことはない……。敵になった時のことなど考えたくもなかった。

「……………」

コカビエルを消し去ったというのに、一誠はまだ空を見上げていた。

「イツセーくん……?」

その様子に不審に思った朱乃が声を掛けるが、一誠はそれには答えない。やがて空を見詰めて一人呟いた。

「そこにいんだろ? いつまでも見てねえで出てこいよ」

「イツセー? いったい何を…… ツ!!」

リアスがそこまで言いかけたところでその者は姿を現した。

その者は全身をフルプレートタイプの銀色に輝く鎧を身に纏っていた。

しかし、その鎧は所々に損傷が見受けられ、何かあったことはすぐに窺えた。

『くっ… 攻撃された上に気付かれていたとは…』

そう発する鎧の人物から聞こえてきた声は男のものだった。

「そんだけの気だ。おめえなら避けられると思ったが、そうはいかなかったみてえだな」
一誠の言葉に男は辛そうながらも苦笑するかのように肩を竦めて言った。

「そこまで読んでの上でやっていたとは… 正直、驚愕を禁じ得ないな…。これは、是非とも挑ませてもらいたい…。」

だが、と、鎧の人物は続ける。

「生憎こんな有様だ…。これでは戦えそうもない、なので今回は役割を果たすとしてよう」

そう言うのと地面に落ちていた。黒い羽を一枚拾い、背中から翼を展開する。

「今日のところは引かせてもらうよ、またいつか、キミに挑ませてもらうぞ。今代の赤龍帝」

「…… ああ、楽しみにしてっぜ」

「フツ…… ではまた会おう」

そう言つて男が飛び去ろうとした時、不意に赤い籠手からドライグの声が響き渡つた。

『久しぶりの再開だというのに無視か？ 白いの』

その言葉に呼応するように、別の機械音声にも似た声が響く。

『…… 起きていたのか、赤いの』

『こうして相見えたというのに、こんな状況ではな……』

『フツ…… 何も焦ることはない、時間はまだあるのだから。そんなことより、何時もの殺気が段違いに薄いじゃないか、赤いの』

『ハツ…… なに、お前以上に興味深い奴がいるだけのことだ。まあ、それはお前も同じなようだが……』

『お前の意見になど同意したくないが、そうだな……。今はお前などに構っている暇はない』

『それはこちらと同じだ……だが、いずれ決着はつけるぞ』

『望むところだ。ではな……』

二匹の会話が途切れると、鎧の男は今度こそ夜の闇に紛れるように消えていくのだった。

戻ってきた平和。保護者グレイファイアの授業参観!

side 一誠 (孫悟空)

オツス、オラ悟空! っとと… 違った違った…。

オライツセーだ!! そろそろ間違えねえようにしねえと一誠の奴に怒られちゃうな!
コカビエルっちゅう墮天使との戦いが終わってからしばらく経った。

今オラの住んでる駒王町は夏になったぞ!

そういや、あん時、なんでか知らねえけどコカビエルとの戦いが終わった時に…。

『さあ、イツセー、祐斗、お尻を出しなさい。覚悟は… 出来ているわね?』
つて言われて千回くねえケツひつ叩かれたんだ…。

あれは痛かったぞ… オラなんで叩かれたのか分かんなかったんで、小猫やグレイ
ファイアに聞いてみたんだが、二人ともなんか気まずそうに目を逸らしてたんだよな…。

オラ、一体なんでケツ叩かれたんだ?

んなこともあったけど、今はそんなことよりも…。

「あら、アーシアのお肌は綺麗ね。羨ましいわ」

「そ、そんな… 部長さんのお肌の方が白くて決めが細かいと思います」

「あら、うふふ、嬉しいことを言ってくれるわね」

「なあ、おめえ達オラもう出ちやダメか？」

そんな会話をしながらオラの目の前で身体を洗いあつてる二人を見ながら声をかける。

なんでこんな事になつてんのかつて言うよと……

オラがいつもみてえに風呂に入ろうとして風呂場に行ったら着替え中のアーシアと出くわしちまってよ、アーシアが入るのかと思つて出ようとした所で今度はリアスが入つてきてこう言つたんだ。

『イツセーもお風呂？ あら、アーシアも？』

オラは入れねえなら後でいいと出ようとしたんだけどさ……

『二人待ちもなんだから、三人で入った方が早いわね』

つってオラ達を風呂に押し込まれたんだ。

そんでさっきのの通りだ。オラもなんでこんなことになってんのかってサツパリだ……

ちゆうかよ、年頃の女つて裸とか見られんの嫌いじゃなかったんか？

孫悟空だった

オラ生きてた頃は風呂上がりブルマとかち合っちゃまって、ブルマやベジータにスゲエ怒られたもんだけどなあ……

なのにコイツら、なんでオラがいんのに裸で恥ずかしくねえんだ？

チチが見たら張り倒されそうだから、オラもう出てえんだけど……

「二度イツセーとこんな風にお風呂に入りたかったのよね。だから、まだ出ちやダメよ？」

つていつてオラを出させてくんねえんだ。

オマケに身体をくつつけてなんかしてんだよなあ

なんでこんなことすんのかオラ、よく分かんねえぞ……

「ねえ、イツセー… 私を襲…」

身体をくつつけててきたリアスが言いかけた時だった。

ドボン！と大きな音を立ててオラに何かを抱きついてくる。

何かと思いつちを見ればそこに居たのは今まで身体を洗っていたアーシアだった。

「仲間外れは嫌です！わ、私だって一緒にお風呂に入りたいのに!!」

そんなことを叫んでリアスに怒るアーシア。

そんなアーシアに今度はリアスも怒り始めやがった……………。

「ちよつとアーシアこの際だから言っておくけど、この子は私のなの。私の眷属で、私の下僕。私のイツセーなの。わかる？」

オラ、別にリアスのモンじゃねえんだけどな……………。

「それを言うなら私はイツセーさんの… し、し、所有物です!!私の所有者であるイツセーさんが私を好きにするのは当然です！」

所有物って… オラ別にアーシアを持つてる訳じゃねえぞ……………。

なんでアーシアもリアスもそんな訳のわかんねえこと言ってるんだ？

「なんですって：：？あなたは私の眷属でしょう！」

「確かに眷属です。けど、私の心はイツセーさんのものなんです!!」

オラ、もう何がなんだかわかんなくなってきたぞ……

そんなふう二人の言い争いが苛烈になってきたその時だった。

「お二人共：：私の一誠様の前で、何をなさっているのですか：：？」

「ひっ：：!!」

鬼みてえな顔したグレイフィアが現れた。

「ち、違うのよグレイフィア：：私はただ、時間を短縮しようよね：：？ね？アーシア？」

「そ、そそそうですう！イツセーさん達をお待たせするのも悪いので一緒に入ろっ

て……」

「……言い残すことは、それだけでですか？」

急にあたふたしだした二人の言葉をグレイフィアはバツサリ切り捨てていた。

そして二人を両手で軽々とつまみ上げて……

「お話はお部屋でじっくりと聞かせてもらいます。一誠様。大変失礼致しました……。」

「ひっ…… イッセーたすけ……」

「……… (ガタガタガタガタ)」

リアスの言葉が最後まで聞こえないで風呂のドアが閉まった。

「ホントに…… なんだったんだ？」

一人残されたオラは訳が分からず首を傾げるしかなかった。

◆◇◆◇◆ side Change ◆◇◆◇◆

そんなハチャメチャな騒動から翌日の夜のこと……

孫悟空こと兵藤一誠は夜の街を走っていた。

悪魔としての仕事をするためだ。

武空術を使ってさっさといけばいいのだが、修行も兼ねてと一誠は走っている。

「……ん？おっ！アレだな？」

猛スピードで走る一誠だが、視界に目的地の家を捉えると徐々に速度を落とし、やがてある家の前で立ち止まった。

玄関の前に立ち、呼鈴を鳴らす。

呼び鈴を鳴らして少しして玄関の戸が開き黒髪のワルそうな風貌の男が姿を現した。

「よおー、悪魔くん。いつも悪いな」

依頼者の男は一誠に気づくと面白そうに声を掛けてくる。

「オツス、おっちゃん！また来たぞ！」

「おお、相変わらず元気だな悪魔くんは… とりあえず、中に入ってくれ」

「ああ！」

そんな簡単なやり取りをした後、二人は家の中へと入っていったのだった。



「悪魔くん、今日はゲームでもやらないか？昼間にレースゲームを買ったんだ。相手が
いなくて寂しくてな」

「いいっ!?!ゲ、ゲームウツツ!!?オラやったことねえぞ…」
などと宣う男にさしもの一誠も驚きの声を上げる。

「なんだ、悪魔くんはやったことないのか。じゃあどんなゲームならやれるんだ？」

「いやあ、オラゲームをやったこと無くてさ……」

「ん？ゲームしたことない？こりやまた珍しい悪魔もいたもんだ。見たところ学生みただってのに、じゃあ普段何をしてるんだ？」

「ん？そうだなあ、暇な時は大体修行だな!!」

その言葉を聞いた男は目を丸くする。

「修行……？筋トレでもしてるのか？」

「ああ、筋トレもすつけど、素振りとか仲間と組手なんかもしてっかな」

その言葉に感心したように更に目を丸くする男。

「驚いたな……。今時そんなことをしてる奴がいるなんて思わなかったぞ」

「そうか？オラできんならおつちゃんとも一度戦つて見てえんだけだな」
知れつとそんなことを言う一誠に、男の顔が一気に険しくなる。

「お前、気づいてたのか…？いつからだ」

「ん？いつからって、おつちゃんがオラを呼んだ時からだ」

「最初からじゃねえか…なんで今まで黙ってたんだ？」

「黙ってたつちゆうか、オラを呼ん出んのはおつちゃんだろ？ならおつちゃん願ひ聞かなきやリアスに怒られつちまうかな」

これも一応仕事らしいからな！と一誠は特に気にした様子もなく言い切る。

「…はあ、最初つから気づかれてた上に完全にお客扱いされてたわけね…まあいいか、じゃあとりあえず自己紹介しておくでしょうか」

そう言う男はその背に六対の漆黒の翼を展開した。

「俺はアザゼル。神の子を見張る者の頂点。墮天使共の総督やってる」

「アザゼルのおっちゃんだな？オラ、孫…いや、赤龍帝でサイヤ人の兵藤一誠だ!!」
こうして赤龍帝と墮天使の総督は意外な会合を果たす……………。



「冗談じゃないわー!」

あの会合から少し、部室へと戻ってきた一誠は目の前のリアスの様子に首を傾げていた。
た。

どうしてリアスが起こっているのか訳が分からないのだろう。

「確かに悪魔、天使、墮天使の三竦みのトップ会談が執り行われるとはいえ、突然墮天使の総督が私の縄張りに侵入し、営業妨害していたなんて……………!」

全身をプルプルと小刻みに震わせ、リアスは怒りをあらわにする。

そう、リアスの言葉通り、駒王町では近いうちに三大勢力によるトップ会談が行われようとしていた。

原因は、以前のココビエル襲撃の件である。

「しかも私の可愛いイツセーにまで手を出そうだなんて、万死に値するわ！アザゼルはセイクリッド・ギア神器に強い興味を持っていると聞いたことがあるわ。きっと私のイツセーがブーステッド・ギア赤龍帝の籠手を持っているから接触してきたのね……。大丈夫よ、イツセー。私がイツセーを絶対に守って見せるわ」

「ん？オラリアスに守られるほど弱くねえぞ」

これ見よがしに抱き着こうとしたリアスの言葉を一誠は見事にそれをぶち壊した。

「それによ、なんでリアスはそんなにアザゼルのおっちゃんの事をそんな風に言うんだ？おっちゃんは別に悪い奴じゃねえよ」

「イツセー……そういう問題じゃないのよ……これはね」

リアスがそう口を開いた時であった。

「アザゼルは昔からああいう男だよ、リアス」

ふと、別の声が聞こえてきてその説明を遮った。

その声にはリアスが振り向き驚きの声を上げる。

「お、お、お、おお兄様!!!!?」

そう、そこにはリアス!・グレモリーの兄であり、現魔王のサーゼクス・ルシファーが立っているのだった。



「寛いでくれたまえ今日はプライベート出来ているんだ」

「すげえ気だ……。オッス! いっちょオラと闘わねえか?」

一誠の言葉に部室中の空気が凍りつく。

「ちよ、ちよつとイツセー!!失礼でしょ!」

「いや、構わないよリアス。君は、たしか兵藤一誠くん、だったね」

リアスが慌てて口開くが、サーゼクスは気にしたこともないように笑顔で口を開く

「ああ、オラがゴ……イツセーだ」

「キミの話は(グレイファイアから)聞いているよ、一度話してみたかった」

「……?オラとか?」

「ああ、ライザーを一人で倒せるほどの実力者だ。一度、この目で見ておきたくてね」

「……?」

その様子では忘れておるな? 悟空よ、ライザーは前にお主がゲームで戦った相手

じゃ。超^{スーパー}サイヤ人に覚醒した時のアイツだ。

『超^{スーパー}サイヤ人に? ああー!! あん時の奴か!!』

思いついたならさっさと返事をしろ。いつまでも黙ったままでおるでない!

『わ、分かったよ……』

「アイツはオラの仲間傷つけやがったんだ。だからぶっ倒した」

「そうか、ふむ…… どうやらリアスはとても良い眷属を手に入れたようだね」
爽やかに微笑むと、サーゼクスはそつと右手を差し出す。

「まだ未熟な妹だが、妹の事、よろしく頼むよ」

「…… ああ! 任されたぞ、リアスの兄ちゃん!!」

そして二人は熱い握手を交わすのだった。



「そ、それよりお兄さまは、どうしてここに……？」

唐突にやってきたリアスの兄、サーゼクスの来訪に、リアスは恐る恐るといった様子で尋ねる。

するとサーゼクスは真剣な表情である単語を言い放った。

「なにを言っているんだいリアス。授業参観が近いのだろうか？ 私も参加しようと思っていてね。是非とも妹が勉学に励む姿を間近で見たいものだ」

その言葉にリアスはハツとした表情になり、グレイフィアの方を見る。

「ぐ、グレイフィアね？ お兄様に伝えたのは……」

その問いに対し、グレイフィアは平然と頷く。

「はい、学園からの報告はグレモリー眷属のスケジュールを任されている私の元へ届きます。無論、私はサーゼクス様の女王クイーンでもありませんので、主へ報告も致しました」

「これに関しては大丈夫だと何度も伝えているのだけどね……」

その言葉にサーゼクスが苦笑しながらも補足を入れてくれる。

「まあ、そういう訳で、報告を受けた私は魔王色が激務であろうと、休暇を入れてでも妹の授業参観に参加したかったのだよ。ああ、安心しなさい、父上もちゃんとお越しになれる」

まさかの返答に、リアスは慌てた様に返す。

「そ、そうではありません！お兄様は魔王なのですよ？仕事をほっぽり出してくるなんて！魔王が一悪魔を特別視されてはいけませんわ！」

そんな兄妹の話を差し置いて、グレイフィアは一誠を連れその場を離れていく。

「一誠様、少しこちらへ……」

「ん？おう」

誘われるがままについていく一誠。

部屋を出ると、グレイフィアは立ち止まり、一誠の方に振り返る。

「一誠様。先程のお話は聞いていましたね？」

「さつき？さつきのつてジユギヨなんたらつて奴のことか？」

「はい、授業参観です。一誠様。その事ですが、その日は私が一誠様の保護者として、授業参観に参りますね」

「ん？おめえ、オラんとこ？くんのか？」

「は」

「そつか、つていいいい……っ
!!!!?」

悟空よ、
どうやらその日はお主も大変そうだな……

始まる授業参加！魔王少女との初会合？

sideナレーション（界王）

「イツセー、アーシアちゃん。後でお父さんと一緒に行くからね」

「その時は私も同行いたします。一誠様、楽しみにしててくださいませ」

学校に向かう前から気合十分な様子の兵藤母とグレイファイア。

それほどまでに今回の授業参観が楽しみのようだ。

かく言う一誠たちはというと……………

「ああ！じゃ！いつてくる！」

「はい！行ってきます！お母様！グレイファイア様！」

二人も気合十分な様子で返事をしている。

あれから数日、今日は授業参観の日。

この数日間も、一誠たちに新たな仲間が出来たりと色々動き回っていたが、そこは割愛しよう。

話を戻して、駒王学園の授業参観は、言ってしまうえば公開授業のようなものだ。

親が子の授業風景を見にくるのは当然だが、今日に限っては中等部の学生も見学可能になっている。

その親も同伴であれば、同じく見学が可能なフリーダムなスタイルのようだ。

そんないつものとは違う日でも、一誠たちは変わらず進んでいく。

「……気乗りしないわね」

一誠達と共に来ていたリアスがため息を吐いて呟く。

今日の授業参観がそれほどに嫌らしい……

「あはは……頑張ってください部長さん」

いつも一誠を取り合っているアーシアもさすがに可哀そうに思ったのか励ましの言葉をかけていた。

その後、玄関口でリアスと別れた一誠たちはじぶんたちの教室へと向かっていくの

だった。



「よお、イツセーんところは両親来るのか?」

一誠が席に着くと、先に来ていた松田と元浜が気が付き、声を掛けてくる。

「オツス! ああ、後で父ちゃんたち連れてくるって言ってたぞ」

「? 達ってどういうことだよ?」

「グレイファイアも見に来るって言ってたからさあ」

「いや誰だよそのグレイファイアって...」

知らない名前が出てきたことに元浜が訪ねる。

「ん?グレイフィアか?オラの家族だ」

それを聞いた松田と元浜はとりあえず納得したようにうなずいた。そしてそこにまた一人近づいてくる物が一人いた。

「イツセー」

「ん?よおつ!ゼノヴィア!」

声を掛けてきたのは、少し前に新たに仲間に加わったゼノヴィアだ。

一誠もそれに気が付きゼノヴィアに向けて挨拶をする。

「ああ、先日は突然あんなことを言ってしまったって申し訳なかった」

唐突に謝罪を口にするゼノヴィア。

この先日とは数日間の間で起きた一件の事なので割愛させてもらおう。

そうして、またひと悶着ほどあったが一誠がぶち壊したとだけ言っておこう……。

「む、難しいです…。」

コネコネと粘土をいじり出す二人を見て周りの生徒は唾然としている。

「レッツトライ!」

それを見た教師の言葉に、他の生徒も渋々といったように紙粘土をこね始めた。

◆◆◆ sideChange ◆◆◆

「アーシアちゃん、ファイトよ!」

「アーシアちゃん、かわいいぞお!」

そんな声にオラが振り向くと、そこには母ちゃんと父ちゃんがアーシアに声援を送っていたんだ。

アーシアも振り向いて嬉しそうだ。よかったなアーシア!

オラもなんか作らねえと…と、作業に取り掛かろうとしたところで覚えのある気

が近づいてくるのを感じた。

その直後、周りからどよめきが聞こえてくる。なんだ？

振り向いてみるとそこには銀髪の女が立ってたんだ。

よくよく気配を探ってみたらあの女、グレイフィアじゃねえか！いつもの服じゃねえから気が付かなかつたぞ……………。

なんだろう…グレイフィアじゃねえみてえだ。

そしたら、オラが見てるのに気が付いたグレイフィアが微笑んで手を振ってきた。

オラも軽く振り返してみる。

そしたら周りの奴らがすつげえ顔してオラを見てくんだけど…なんでだ？

アーシアだけは悔しそうにグレイフィアを見てたけど……………。

そんなことに不思議になりながらもオラは何を作るか考える。

そんななか浮かんできたのはベジータのやつだった。

なんでか分かんねえけど超サイヤ人4の姿だ。

懐かしいなあ、ベジータ。また戦いてえ……………。

そんなことを考えていたら急に声がかけられた。

「ひよ、兵藤くん……………」

振り向いてみたらそこにいたんは先生だった。

なんかよく分かんねえけど驚いて身体を震わしてる?どうしたんだ?

不思議の思いつつも捏ねていた粘土に目を移したらオラも驚れ

ちまった。

なんてたつてそこには見事な構えをとるベジータ(SS4)の姿があつたんだから……

「ひえっ……!?!こ、これオラが作つたんか……!!!?」

オラが驚く横で先生が感激したように話す。

「す、素晴らしい……。兵藤くん。キミにこれほどまでの才能があつたなんて……。やはりこの授業は正解だった。また一人、生徒に隠された能力を私は引き出したのです……」

「流石は一誠様です。私も鼻が高いですね……」

そんな風に先生が感激してる横で、オラの耳にはグレイフィアのそんな言葉が聞こえてた……。

◆◆◆ side change ◆◆◆

お昼休み、飲み物を買うために教室を後にした一誠とアーシアは自販機の前でリアスと朱乃の二人に出会っていた。

「本当によく出来ているわね」

リアスが珍しそうに粘土で出来たベジータ（SS4）を見ている

「本当… よく出来ていますわね、少し… いえ、だいぶ情熱的な格好をしていますけれど…」

朱乃も珍しそうに、だが、少し恥ずかしそうにそのフィギュアを眺めている。

「凄いですねえ…。でも、この方はいったい何方なのですか？」

アーシアは疑問に思ったのか一誠に問いを投げかける。

「へ?うーん.: 今のオラになる前のオラのライバルだ、強くってなあ.:」
そんなことを懐かしそうに話す一誠達のところに、見知った人物が通りかかる。

「あら、佑斗。お茶?」

リアスの声に気がついた木場は足を止めそれに答える。

「いえ、何やら魔女っ子が撮影会をしていると聞いたのでちよつと見に行こうかと思いまして」

その木場の言葉に一誠達は首を傾げるが、気になるので共に向かうことにしたのだった。

魅惑の魔法少女!?!その名はマジカル★レヴィアたん!

sideナレーション(界王)

一誠達がやってくると、廊下の一角には人だかりが出来ていた。

その殆んどが、カメラを構え、フラッシュをたきながら何かを撮影している。

その何かは何なのかは分からないが、恐らく木場の言っていた魔女っ子だろうと推測できる。

「うっひゃあー!!すげえ人がいっぞー!」

さしもの一誠も、その光景に驚きの声を上げる。

しかし驚きつつも、一誠達はその人だかりの中をかき分け進んでいく。

「わりいわりい!ちつと通してくれ」

周りの人間に謝りながら人込みをくぐった先にいたのはアニメでやっている。魔法

「なっ……」

隣のリアスは何か別の事に気が付いたらしく、珍しく狼狽している。

そんななか撮影会の中へと割って入ってくる生徒が一人。

生徒は魔法少女の前に立つとカメラ小僧たちに向け言い放つ。

「おーおー、天下の往来で撮影会たあ、いいご身分だぜー」

その言葉にカメラ小僧たちの手が止まる。しかしその生徒は構わず続ける。

「ほらほら、散った散った！解散解散！今日は公開授業の日だぜ？こんなところで勝手に騒ぎを作るな！」

その言葉を最後に、人だかりは雲の子を散らすように消えていく。

残ったのは魔法少女とその生徒。そして一誠たちだけとなった。

「やるじゃねえか、匙の奴」

そういう一誠は素直に感心している。その横で、生徒、匙は魔法少女にも注意するために声を掛ける。

「あんたもそんな格好しないでくれ。って、誰かの親御さんですか? そうだとしても、場に合う衣装つてもものがあるでしょう困りますよ」

「えー?これが私の正装だもん☆」

しかし、匙の言葉に少女はポーピングを取り聞く耳を持たない。

顔を引きつらせ、頬を引く突かせる匙は、リアスを見つけると、頭を下げた。

「これはリアス先輩。今魔王さまと先輩のお父さんを案内していた所なんですよ」

そう言って匙が後ろを見ると、そこにはソーナ・シトリーを先頭に、紅髪の男が二人歩いて来ていた。

「何事ですか、サジ。問題は簡潔に解決なさいといつも言ってる——」

「ソーナちゃん!見つけた☆」

ソーナの言葉を遮るように声をあげる者が一人、あのコスプレ魔法少女であった。魔法少女はソーナを見つめるなり嬉しそうに抱きついていく。

「ん？ソーナおめえ、ソイツと知り合いか？つーか、おめえ達そっくりじゃねえか!!」

「つ…ひ、兵藤くん…？そ、それは…」

そこにソーナの後ろを着いてきていたサーゼクスが口を開いた。

「ああ、セラフォルーか。キミもここへ来ていたんだな。兵藤くん、彼女達が似ているのはね、二人が姉妹だからなんだ」

「それとあの方はお兄様と同じく魔王のお一人よ、セラフォルー・レヴィアタンさま。ソーナのお姉様にしてレヴィアタンの名を継ぎし魔王様よ」

サーゼクスの説明に補足するようにリアスが更に説明を入れる。

そしてそれを聞いていた一誠は……

「へえ…!!なら、やつぱアイツ強えんか…」

戦闘民族ならではの戦闘意欲が高まり無礼にも程があることを言つてのけている。

幸い、当の本人は妹のソーナに夢中で気がついていないが……

その言葉にリアスは汗を垂らし、宥めるように話す。

「イツセー?ソレはあの方の前では言ってはダメよ...?敬意を払ってお話してね?」

「へっ...?ああ、分かった!!」

「...本当に分かっておるのかお前...」

(でえじょうぶだつて界王さま!!ビルスさまの時みてえにすりや良いんだろ?)

「...お主の場合それが一番心配なんだがな...」

「そんな一誠を置いて、リアスはセラフオールと名乗った魔法少女ならぬ、魔王少女に話しかける。」

「お久しぶりです。セラフオールさま」

「あら、リアスちゃん☆おひさ☆☆元気になりましたか?」

「なんとも魔王らしくない口調で返すセラフオール・レヴィアタン」

「リアスも困惑したように返す。」

リアスの言葉を止めると、セラフオルーはニコリと笑みを浮かべて言った。

「キミが噂の兵士ポーンくんだよね? いいよ、その勝負受けてあげるんだから☆」

.....えっ...??

下級V S魔王!! 氷の魔王セラフオールレヴィアタン!!

sideナレーション（界王）

「誠様、そして御二方…… 武舞台の準備が整いました……」

あの後、何処からともなく現れたグレイフィアがサーゼクスから指示を受け、戦闘用バトルフィールドを亜空間に急遽創り出していた。

「ああ、サンキューグレイフィア!!」

「ありがと☆グレイフィアちゃん♪」

そして二人はそれぞれグレイフィアに例を述べるとそのままフィールドへと転移していつてしまった。

「…… 大丈夫でしょうか、本当にこのままやらせてしまって……」

それを外から眺めるリアス達は同じく眺めているサーゼクスに問いかける。

「大丈夫だろう、一誠くんは単身でライザーを撃破出来る実力の持ち主だ。それにセラフォルも、手加減が出来ない程弱くはない、そこまで心配はいらないだろう」

「けど、相手は魔王様です！いくらイツセーが強くて…!!」

「リアス、眷属を信じてあげるのも、主としての役目だよ？」

「っ……」

「部長、イツセーくんを信じてみましょう」

「祐斗…… 分かったわ……」

そうしてリアス達は二人の戦いに目を向けるのだった。



「さて、じゃあ始めよつか☆赤龍帝の兵士ポーンくん☆」

「ああ、オラワクワクワクしてきたぞ!!おしっ!」

そう言つて準備運動を始める一誠。殺し合いなどではないからかセラフオルーはそれをニコニコとしたまま見守っている。

「おーしー!んじゃ、始めつか!!」

そうして構えを取る一誠、対するセラフオルーもアニメからの受け売りか、可愛らしいポーズで相對する。

「……………」

暫し動かず、相手の出方を伺っていた二人だったが、戦局は唐突に動き出す。

「でりゃああああああつ…!!」

先に動き出したのは一誠だった。勢いよく地を蹴り、高速でセラフオルーとの距離を

詰め、殴り掛かる。

「っ…！ハッ！」

しかしセラフォルーも魔王の一人である。

一誠の攻撃を持つていたステッキで受け、すかさず一誠に鋭い蹴りを叩き込まれる。

「っ…カハッ!!…ッ!!」

あまりの威力に少し体勢を崩す一誠。だが、すぐさま立て直し消えるように高速移動して背後に回り…

「だりやあああッ!!」

「きやつ…!!」

勢いよく殴り斜め上へと吹き飛ばした。

「だりやつ!!」

「くうっ…!!」

吹っ飛んでいくセラフォル。だが、今度はに現れた一誠が後方から蹴りを叩き込み真上に吹き飛ばす。

「だあつ…!!」

「ああつ…!!」

そして上空に打ち上げられたセラフォルの背後に再び現れた一誠は渾身の力を込めてアームハンマーを叩き込んだ

「だつりやあああツ!!」

「きやあああつ…!!」

勢いよく急降下していくセラフォル。地面に叩きつけられ物凄い土煙を上げる

「……………っ!」

追い討ちをかけるように両手を合わせ、内側に気を集め、かめはめ波のような気弾を溜める一誠。

「痛ったたた：：っ!!」

しかし、地面に叩きつけられたセラフォルーはまるで何事も無かったように立ち上がり、一誠がやろうとしていることに気が付く。

「波アアアアアッ!!」

「させないよ☆えーい!!」

放たれる気功波に向けて、セラフォルーもステッキから巨大な魔力砲を撃ち放つ。その二つの攻撃がぶつかり合い、爆発を起こす。

「：：っ!」

眩しさに目を庇う一誠、そこに再び蹴りが迫り、一誠の頬を蹴り飛ばす。

「ぐあっ：：!!」

すぐさま体勢を整える一誠だったがそこに極太の魔力砲が迫りくる。

「ッ!!だああ!!」

「残念♪そっちは囧なの☆」

気合で魔力砲を弾き飛ばした一誠を接近していたセラフオルーが張り倒す。

連続で繰り出される攻撃に一誠も防戦に徹する一誠だったが、ほんの一瞬の隙に攻撃を叩き込んでセラフオルーの攻撃を止めた。

「でえりゃッ!!」

そして瞬間的に気弾を手の中に作りだし、セラフオルーに叩き込み吹き飛ばす。

しかしセラフオルーもタダではやられない、吹き飛ばされながら魔力弾を撃つてくる。

「はあああああッ!!だだだだだだだだだッ!!」

その尽くを一誠は弾き飛ばし、セラフオルーに接近する

「っ…っ…こんのっ…!!」

接近させまいと魔力の斬撃を飛ばすセラフオルー。

一誠はそれらを高速移動で躲して急接近していく……

「だああありやあああああ!!」

渾身の力を込めて腕を振りぬくが、それはセラフォルレーに届くことは無かつた……。

攻撃が届く直前、セラフォルレーは天高くまで転移していた。

「……うーん、予想以上に強いなあ☆これはもう本気の一撃を見せちゃおうかな」
そして魔力を収束させていくセラフォルレー。

「……ッ!!」

悟空もソレに勘づいたのか、動きを止める……。

「アイツはやべえな……オラも本気でいかねえとかな? はあッ!!」

^{スパー}超サイヤ人へと変身し、再び両腕を腰の当たりに持つていき構えを取る。
そして唱えるあの言葉……

「かあ……っ!」

「めえ… つ… !!」

「はあ… つ… !!」

「めえ… つ!!!」

腕の中に灯る青い光……。

「セルシウス・クロス・トリガー
零と雫の霧雪!!」

「波あああああツツ!!!」

セラフオルーから放たれる極大の魔術が放たれるのと、一誠から極太の蒼い閃光が迸ったのはほぼ同時だった。

ぶつかり合う蒼い閃光と氷の魔術……。

暫し拮抗していた二つだったが、やがて爆発し空間そのものを揺るがし破壊していく。

「…………… つ!!」

大技を撃った反動か、動きが鈍いセラフォルの真後ろで空間の崩壊が起こり、セラフォルが落ちかけている。

「……!!あぶねえ!!!」

咄嗟に瞬間移動を使った一誠はセラフォルを抱き抱えようと、すぐさま他の気を探り瞬間移動でワールドから消え去った。

こうして、魔王と下級悪魔最強の戦いは幕を下ろしたのであった……

授業参観終了！そしてやってくる紅髪の家族！

sideナレーション（界王）

「いや〜負けちゃった？強いんだね〜ドライグくんってば？」

「はははっ、まあな！」

その後、無事に学園へと戻ってきた二人は皆に出迎えられた。

「まさか、お姉様に勝ってしまうなんて…リアス、一誠君の強さはどれほどの…？」

「……………分からないわ、あの子の強さは未知数なのよ…。」

「…^{キング}王のあなたでも分からないなんて…あの子はどれ程の実力を……………」
そんな二人を後目に場面は進んでいく。

「お疲れ様でした一誠様……。見事な戦いぶりでしたね、私は初めから貴方が勝つと信じておりましたよ」

そう言つて微笑むグレイファイアに一誠も無邪気に笑みを返す。

「サンキュー!グレイファイア!けど、セラフオールも強かつたかな!オラ久しぶりにワクワクしたぞ!!」

そんな一誠の言葉に、グレイファイアは微笑ましそうに笑みを浮かべる。

それを見ていたセラフオールは不意に口を開く。

「ねえねえ、もしかしてドライグくとグレイファイアちゃんて、付き合つたりしちゃうの?」

「へっ……?」

「えっ……。い、いえ……。私はそのようなこと……」

少しだけ頬を染め、やんわりと否定するグレイファイアに、セラフオールはにこやかな

笑みを浮かべて……

「そうなんだ☆じゃあドライグくんは私が貰っちゃおっかな☆」

その一言でその場の空気が一気に凍る。

「……………ん？」

唯一分かっていなさそうな一誠だけがキョトンと首を傾げている。

「ドライグくんのこと気に入っちゃったんだ☆まだ誰も相手いなさそうだし、私が彼女になってもいいかなって☆」

その言葉に意外にも嘸み付いたのはリアスであった。

「お、お待ちくださいセラフォル様!!お言葉ですが、イツセーは私の眷属です!流石に他の者の眷属をお相手にするというのは如何なものかと……」

「そう?じゃあリアスちゃん、ドライグくんちょうだい☆」

「そ、それは……」

まさかの要求にしどろもどろになるリアス。しかし助け舟は意外なところから出された。

「まあまあセラフオルー殿、そこまで急がなくても良いでしょう。イツセーくんも貴女を知ったばかりでは何も言えないでしょう、お互いに相手のことを深く知ってからでも遅くはないと思います、どうかね?」

「ジオテイクス様……うーん、言われてみれば確かにそうかも……分かったわ☆ドライグくん、また今度デートしようね☆ソーたあああん!待ってえええええ!!」

「くっ!!『たん』付けはお止めになつてくださいとあれほど……!!」

そう言うのと、シレッと離脱を測っていたソーナを追って走り出していくのだった。

それを見てサーゼクスが一言……

「うむ、今日もシトリー家は平和だ。そう思うだろうか?リーアたん」

「お兄さま、私の愛称を『たん』付けで呼ばないでください……。」
まさかの返答だったのか、サーゼクスが打ちひしがれたように呟く……。

「そんな……。リーアたん。昔はお兄さまお兄さまといつも私の後ろを着いてきていたのに……。これが反抗期か……。」

そんな様を見ていた一誠は笑いながら言った。

「はははっ！リアスんとこの父ちゃんも兄ちゃんも面白えなあ!!」

「この方達はいつもこのような感じでございます。一誠様……。」

その後、一誠の両親も合流し、雑談をした後、互いの両親が話をしに行き、リアス達もサーゼクスに呼ばれてどこかへと行ってしまい、仕方なく教室へと戻ることになる一誠達なのであった。



「あら、アーシアちゃん、よく映ってるわ」

その晩、兵藤家では何故か授業参観の鑑賞会が行われていた。

「ハハハハ！やはり娘の晴れ姿を視聴するのは親の務めです！」

酒が入り、昼間のダンディな渋さが微塵も消え去ったりアスの父が豪快に笑う。

参加しているのは兵藤父、母、グレモリー父、兄、そしてグレイフィアにリアスや一誠といった数名である。

「父ちゃん母ちゃん：オラのこんな姿撮ったって面白くねえだろ：？」

そんな検討違いなことをいう一誠の横で、目を輝かせてそれを見ているのはグレイフィア嬢である。

さらにその横では顔を俯かせてプルプルと震えているリアスの姿もあった。

そしてさらに酒が入り、テンションが上がったサーゼクスによってリアスの授業風景の解説までがされ始め、限界となったリアスが部屋に閉じこもってしまった。

それを気にしたアーシアが後を追って出ていくも、しばらく一誠は親たちの話に付き合っている姿がグレイフィアによって目撃されたとかされなかったとか……

もう1人の僧侶！目覚めよ眷族一の稼ぎ頭！

sideナレーション（界王）

「ふう、妹の晴れ舞台を楽しむのはこれくらいにして、そろそろ本題に入らないとね、グレイファイア」

「はい…」

先程までテレビに映る一誠の姿に目を輝かせていたグレイファイアだったが、途端にその表情が変わり、引き締まったものへと変化し立ち上がる。

「あら、サーゼクスさん、もうよろしいんですか？」

その様子に兵藤母が不思議そうに問いかけるとサーゼクスはニコリと一つ笑みを作り……

「ええ、妹やその後輩の子たちの学ぶ姿を見られて、大変満足ですよ。少し、妹達と話があるので失礼します。一誠くん、アーシアさん。君達も来てくれるかな? 大事なことなんだ」

「ん? 分かった!! じゃあ行くか!!」

「あ、はい!」

「一誠、サーゼクスさんに失礼のないようにね?」

「分かってるって母ちゃん! んじゃな!」

そうして三人はその場を後にし、リアスが逃げた二階へと向かうのだった。



二階へ登ると、廊下で壁にもたれているリアスを見つけた。
サーゼクスがそれを見て妹に声をかける。

「こんな所にいたのか、リアス。ちょうどよかった、話があるんだ、昼間の話の続きだ」

「!..... 分かりました」

「ならよ、オラの部屋くるか？まあまあ広いから狭くはなんねえと思う」

サーゼクスの言葉を聞き、神妙な顔つきで返事をしたリアスに、軽いノリで提案した一誠の言葉。

「いいのかい？なら、そうだね、なら、一誠さんの部屋を貸してもらおうとしようか」
こうして場を決めた四人は話し合いの場である一誠の部屋へと向かうのだった。



部屋へと戻ってきたオラ達は各々が好きなどに座ってサーゼクス……さまの話を聞いた。

部屋の中でサーゼクスさまが話したことはリアスのもう一人のびしよつぶ?とかいうやつの事だった。

なんでも、リアスたちも大分チカラを付けて来たからそのびしよつぶを解放する許可が出たらしい……

それだけ話すと、サーゼクス達は再び母ちゃんたちの元へ戻っていつちまった。

それから一晩が経って次の日の夕方……

オラ達は旧校舎のある部屋の前にやってきてんだ。

「ここか?リアス、おめえのもう一人の眷属がいるってのは」

その扉には厳重な封印がされているらしい……

らしいってのは、オラが見てもよく分かんねえからだけどな!

「ええ、その子の能力が強すぎるために私では扱いきれないと考えたお兄様の指示で、ここに封印していたの。普段は深夜に封印が解けて出られるようにしてあるのだけ

ど……」

ん？それって封印になるんか？解けちゃう封印でなんて意味ねえような気がすんだけど……」

普通、壁を隔てても気を感じつかから分かるはずだよな？

けど、この扉の先からはそんなのは全然感じねえ……

何か特別な力が効いてるんかな？

にしても、このびしょぶつちゆうんはそんなに強えんかな？強いんならオラソイツと戦ってみてえなあー!!!

「くーッ！ワクワクすんぞー！いったいどんなやつなんかな？」

「もう、イツセーさんはそんなことばかり言うんですから……でも、私も少し楽しみです。私と同じ僧侶ビショップさん。まだあったことないですけど仲良くなれるでしょうか……」

ん？ああ……。そっか！そーいやアーシアもソイツと同じ僧侶なんだもんな、でもきつと大丈夫さ！
でえじょうぶ

「でえじようぶ、アーシアならきつと仲良くなれるさ!リアスが選んだ奴に悪い奴はいねえかな」

「そうですね!部長さんが選んだ人ですもの!大丈夫ですよね!!」

「……二人とも、あまり、プレッシャーをかけないでほしいのだけど……。そろそろ開けるわよ」

そうして扉を開け放ち、リアスと朱乃が中に入ってしまったその時だった……

「イヤアアアアアアアアアアアアツ!!!!」

大絶叫が旧校舎中に響き渡った

新戦力は女装っ子？・戦力強化だグレモリー眷属！

sideナレーション（界王）

『ごきげんよう。元気そうで良かったわ』

大絶叫の後、中へと入っていったリアスの声が 聞こえてくる。

『な、な、何事なんですかあああ!?!』

それに対するように別の声が聞こえてきた。声からして、先程の絶叫の主のようだ。何事ですか、つてそれはこっちのセリフだと思いがそれは言うまい……。

『あらあら、封印が解けたのですよ？ もうお外に出られるのです。さあ、私達と一緒にここを出しましょう?!』

いたわりを感じられる朱乃の声。どうやら相当気を遣って話し掛けていらっしゃるらしいことが伺えてくる声音だ。

『いやですうううー!ここがいいですううう!お外怖いいいい!!』

そして帰ってきたのは泣き声にも近い拒否の言葉……………。

一誠よ、これは相当クセものだぞ……………

(はははっ!面白くていいじゃねえか界王さま!オラ、こんな奴初めてあったぞ!!)
……………お前はそういう奴だったな……………

そんなやり取りを聞きつつ、一誠たちは続くようにその部屋の中へと入っていく。

中は薄暗いが、可愛らしく装飾されている小さな部屋であった。

中にはぬいぐるみやクッションなども置いてあり、女子高生風な内装になっている。

おかしな点と言えば部屋の隅にある棺桶くらいだろう。

部屋を見回した一誠たちは、不思議そうにリアスの方をみる。

そんなリアス達の傍にいたのは、金髪に赤い相貌をした人形のような美少女のようだった。

アーシアやゼノヴィアが見惚れる中、一誠は不思議そうにその少女?に声を掛けた。

「なあ、おめえなんで女みてえな格好してんだ?おめえ男だろ?」

その発言に、場の空気が凍りつく……………。

というより、全員が驚いたように一誠を見る。

「い、イツセーさん、なにを言ってるんですか？この子… どう見たって…」

「そうだぞイツセー、あの子はどう見ても女じゃないか」

アーシアやゼノヴィアの問いに、しかし一誠は不思議そうに答える。

「何言ってるんだおめえたち… コイツ見た目は女みてえだけど感じる気は男のもんだぞ…？」

それを聞いてリアスが関心したように口を開いた。

「さすがねイツセー。やつぱり気功術に長けていると分かっってしまうわよね」

その言葉を聞いた二人は驚愕の表情でリアスを見る。

それを補足するように朱乃が話し出す。

「ええ、流石はイツセーくんですわね。アーシアちゃんにゼノヴィアさん。この子がなぜこんな格好をしているのか…。それはね？この子、女装趣味があるのですよ」

そしてまたも驚愕の表情を浮かべる二人。

今度は驚きすぎて固まってしまったようだ……。

そしてその正体を見破った当の一誠も……

「いいっ……!?!おめえ女の服着るんが好きなんか!?!男なのになんでだ?!

「だって……女の子の服の方が可愛いんだもん……」

「へっ……?そうなんか?」

「えっ……あ、うん……そう……です……」

「変わった奴だなあ……。けど……ま、いつか!!」

ズゴオツ……と音を立てて周りの全員が一気に転ける。

「……分かってはいたけど、やっぱりそうなるのねあなたは……」

「あらあら、うふふ……。私は一誠くんらしくていいと思いますわ」
何とか起き上がった二人が少し呆れたように言う。

それを後目に一誠はその少女？少年に近づき、目の前にしゃがみ込むと言った。

「オッス！オラ、兵藤一誠ってんだ！よろしくな!!びしょつぶし!!」
と、太陽のような暖かな笑みを浮かべ手を差し出していた。

後輩を知れ!ギヤスパーの持つ神器の力!

sideナレーション(界王)

「え、えつと… ひようどう… いっせい… さん?ですかあ… ?ぶ、部長… ここ、この方達は… ?」

一誠の自己紹介に困惑したように返しながら、女装少年はリアスに問い掛ける。

「あなたがここに居る間に増えた眷属よ。『兵士』^{ポーン}の兵藤一誠、『騎士』^{ナイト}のゼノヴィア、そしてあなたと同じ『僧侶』^{レベリオン}のアーシア」

他の二人もリアスの紹介の後、簡単に挨拶をするが、少年は……

「ヒイイイツ!!人がいっぱい増えてる!!」

…と、こんな有様である……

「お願いだから、外に出ましよう？ね？もうあなたは封印されなくてもいいのよ？」
気を遣うようにリアスが優しく声をかけるが……

「嫌ですうううう!!僕に外の世界なんて無理なんだああああつ!!怖い!お外怖い!!どうせ僕が出てつても迷惑をかけるだけだよおおおつ!!」

ううむ……これは相当難儀な性格をしておるなあ……

と、そこに……?

「何言つてんだおめえ、外は怖くなんかねえさーホラ、オラと一緒に行くこうぜ?」

そう言つて一誠がなんの前触れもなく少年に近づきその肩に触れた時だった。

「ヒイヒイイツ……!!」

少年の悲鳴に近い絶叫と共に、時が止まった……

周囲は時間が止まったようにモノクロの風景となり、部屋の中ほぼ全員の動きが完全に停止させられる。

見れば、部屋にあつた時計の針も止まっているではないか。

その止まった時の中で、それをした張本人は震えながら部屋の片隅に逃げようと歩き

出そうとするが……

「ん?おめえどこ行くんだ」

そう言つて肩を掴む者が一人いた。

そう、我らがヒーロー。兵藤一誠その人である。

「ツツツ!?ヒツ…!!ヒギヤアアアアツ…!!」

それに寄生を上げ、音速に近い速度で部屋の隅へと逃げた女装少年。

それと同時に時が動き出したのか、リアス達が一誠たちを見ている。

「やつぱり、あなたにはこの子の能力は効かないようね。この子はイツセーと同じ神器持ちよ。——フォービトウン・パロール・ビュイ停止世界の邪眼。視界に映した全ての物の時間を停止させることができるの。まあ、停止の対象が強い場合は効果が薄いようだけど」

リアスが何かを察したように話し出す。

「おかしいです。何か今一瞬……」

「……………何かされたのは確かだね」

動き出した時の中でアーシアとゼノヴィアが驚き、朱乃と木場、小猫も事情を知っているからか小さくため息を吐いている。

「怒らないで！　怒らないで！　ぶたないでくださいあああいつ!!」

「だから何言ってるんだおめえ…　別にぶちやしねえよ……………」

流石の一誠も少しばかり困惑しているようだ……………。

そうしていると、朱乃がよく分かってない一誠たちに説明をしてくれる。

「その子は興奮すると、視界…　目に映るものの全ての時間を一定時間停止させることが出来る神セイクリッド・ギア 器を宿しているのです」

「じかんでいしって…　時をとめれっちゃうんか!?おめえ…　?!すげえ力持ってたなあ…!!」

「ヒイツ…!!」

一誠の驚きの言葉に少年はビクリと肩を震わせるだけ……。
そこに朱乃が補足の説明を入れてくれる。

「彼は神セイクリッド・ギア器を制御出来ないため、大公及び、魔王サーゼクスさまの命でここに封じられていたのです」

「へえ…。良くわかんねえけど、すげえんだなおめえ…。」

よく分かっていなかったのかお主は……

その言葉を聞きながら、リアスは少年を背中から優しく抱きしめながら口を開く。

「この子はギャスパー・ヴラディ。私の眷属の『僧侶』ビシヨツプ。一応、駒王学園の一年生なの。――
―そして、転生前は人間と吸血鬼ヴァンパイアのハーフよ」

リアスの口から出てきた言葉はとんでもないものであった……。



「ほら、走れ！ 逃げなければデユランダルの餌食になるぞ！」

「ひいひいひいひい!! デユランダルを振り回しながら追いかけてこないでええええ!!
一狩りされちゃうううう!!! ハントされるううう!!!」

聖剣デユランダルを手に、新たに出来た後輩を相手にゼノヴィアが活き活きとした顔でギヤスパーを追いかけている光景が繰り広げられている……

こうなったのは少し前のこと……

リアスと朱乃から、ギヤスパーの力やその体質、そして転生に使った駒の説明を受けた一誠たちは、現在、夕方に差しかかった時間帯に旧校舎の前で繰り広げていた……

リアスと朱乃、そして木場は現在魔王に呼び出されていて不在だ。

ギヤスパーも必死に逃げており、鬼気迫る泣き顔でデユランダルから逃げ回っていた。

ゼノヴィア曰く『健全な精神は健全な肉体から』とのことらしいが、アレはどう見ても自身が楽しんでおるようにしか見えない……

そして事の発端は、一誠の『とりあえず外に慣れるために修行だな!!』という案から

始まったものであったりする……………。

「私と同じ『僧侶』^{ビシヨッフ}さんにお会いして光栄でしたのに、目も合わせて貰えませんでした……………グスツ」

そう涙ぐみながら話しているのは、同じ僧侶^{ビシヨッフ}のアーシアである。

前々から良く『もう一人の僧侶^{ビシヨッフ}に会いたい』と言っていたのに、それがこんな極度の人見知り……………というより人間嫌いではこうなっても仕方があるまい……………。

その眼前では小猫がニンニクを手に持ち、ゼノヴィアと共にギャスパーを追いかけ回していた。

そして肝心の一誠だが……………

「あいつら張り切ってんなあ〜!!なんだかんだ言って修行好きなんだな!!」

「はい、一誠様……………ですがそろそろ止めてあげた方が良いかと……………」

と、別の方向で関心しているところを、何故か後から来たグレイファイアに窘められていた……………。

「おつ、やってんな？」

その声と共に現れたのは生徒会メンバーの匙であった。

「ん？匙じゃねえか、オツス！」

「おう、兵藤。解禁されたっていう引きこもり眷属がいると聞いてちよつと見に来たぜ」
その顔には興味津々といった様子がありありと浮かんでいる。

「はははつ、おめえもか？ギヤスパアの奴ならそこにいるぞ？あの逃げ回ってる奴がそ
うだ」

「おいおい：：ゼノヴィア嬢、伝説の聖剣を随分豪快に振り回してんな：：。いいの
かアレ：：？つてか、女の子じゃん！しかも金髪!!」
ギヤスパアの姿を見て嬉しそうな匙だったが：：：。

「ははつ、おめえも騙されてんなあ：：。アイツ、あんな格好してつけど実は男だぞ？」

「なん……だと……!?お前……アレで女装つてそりや詐欺だろ……!!どう見ても女の子にしかみえねえよ……誰かに見せるためにするための女装を引きこもりがしてると……矛盾だらけじゃねえか……」

一誠の言葉にガツクリと膝を着き嘆く匙……。

そこへ更に掛けられる声があつた。

「へー、魔王眷属の悪魔の皆さん方はここで集まってお遊戯をしてるわけか」
そんな渋めの声に一誠以外の全員がそちらを見る。

「オッス!アザゼルのおつちゃん!」

「よー、赤龍帝、久しぶりだな。あの時の夜以来か?」

『アザゼル……!?』

一誠とグレイファイア以外の全員が一斉に臨戦態勢に入る。

それを見たアザゼルと名乗った青年は不敵に笑みを作り……

「やめとけ、お前たちじゃ俺には敵わんさ……。その赤龍帝と女王クイーンなら話は別かもしれんが」

「へへへっ！なんなら試してみつか？」

一誠も負けじと不敵に笑みを受かべ、そうアザゼルに告げる。

「いや、遠慮しておく。今日は散歩ついでにあの聖魔剣使いを見に来ただけなんでね、でも姿が見えないようだが？」

「木場様でしたら今は不在です。魔王様に呼ばれておりますので……」

グレイフィアの言葉を聞いたアザゼルは少し肩を落とす。

「そうか、そいつは残念だ。それはそうとお前……」

「ヒイイツ……!!」

そう言つてアザゼルはギヤスパーの方を見て話す……。

『オービドゥン・バロール・レユ』

『停止世界の邪眼』か。そいつは使いこなせないと害悪になる代物だ。神器の補助

具で不足している要素を補えばいいと思うが……。そういや、悪魔は神器の研究が進

んでいなかったな。五感から発動する神器は、持ち主のキャパシティが足りないと自然に動きだして危険極まりない」

その次に匙を見て言う。

「そつちのお前は『黒い龍脈』の所有者か?」

「…… だつたらなんだ!!」

目を付けられたと思つた匙が身構える。

どうしても戦闘態勢を取つてしまう辺り、アザゼルへの恐怖心があるのだろう。

別に、そんな警戒するような男には見えんが……

「丁度良い。そのヴァンパイアの神器を練習させるならおまえさんが適役だ。ヴァンパイアにラインを接続して余分なパワーを吸い取りつつ発動させれば、暴走も少なく済むだろうさ」

そして尚も続ける。

「だが、神器上達の一番の近道は赤龍帝を宿した者の血を飲む事だ。ヴァンパイアなん

だし、一度やってみるといい」

「……随分、セイクリッド・ギア神器にお詳しいんですね」

「…なに、ただ趣味で調べていたから分かったただけだ…信じるも信じないもお前たち次第だな……」

それだけを告げ、アザゼルその場から去っていくのだった

心の壁をぶち破れ! 物語る銀髪従者

sideナレーション(界王)

翌日の事……

一誠はいつもの如く悪魔稼業に勤しんでいた。

どうやら依然として、魔法陣からの転移は出来ないようで、修行代わりにと徒歩で向かっている。

しかし今日は何やらダンボールが背負われているようだ。

だが一誠よ、三勢力の会談が近いというのにこんなことをしていいのか？

(それがよ……リアスの奴、こんな時だからこそしつかりと仕事はしないとならないって言ってるよ。オラもよく分かんねえし、やれと言われるならやるだけさ)

ううむ…… 案外上手いこと使われておるんだなお主……

と、そんなことをしている間に一誠が依頼人の家に着いたようだ。一誠が片手で簡単に戸を叩くと、扉が開き、中から住人らしき男が出てきた。

「おつ、今日はイツセーくんなのか、待ってたよ、さ、入って入って」

「オッス、久しぶりだな森澤のおっちゃん」

招かれるままに一誠はダンボール片手に家の中へと入っていった。



「それで、気になってたんだけど…その箱は何…？」

森澤と呼ばれた男の視線が一誠の持ち込んだ箱へと向けられる。

「ん？コレか？えつとな？コイツが入ってたんだ」

無造作に箱を置き。パカリと蓋を開ける一誠。

そして頭になる中身に入っていたのは駒王学園のセーラー服に身を包んだ金髪の女装少年であった……。

「んっ…？んん…？」
この男の反応も間違いでは決してない……………。



「ギヤスパー、出てきてちょうだい。無理して小猫に連れて行かせた私が悪かったわ」
昨夜の一件の後、ギヤスパーはまた引きこもってしまった……………。

あの後、女装少年と知ったあの青年が暴走し、ギヤスパーを怖がらせてしまったのだ……………。

暴走する青年を恐怖で停めてしまい、こうして再び引きこもってしまったという訳だ。
元々人見知りを拗らせているのにそんなことになれば嫌にもなる……………。

「眷属の誰かと一緒に行けば、あなたの為になると思ったのだけれど……………」

『ふええええええええええええええええんっつ!!』

リアスの謝罪の言葉にも耳を貸す気配はなく、ただただギヤスパーは泣き続ける。

極度の人見知りに、自分が神器を使いこなせずに迷惑をかけている、ギヤスパーが抱える問題は結構複雑なようだ……………。

「リアス、教えてくれ…ギヤスパーの奴、なんでこんな風になっちゃったんだ？」

「……………そうね、一誠には話しておいた方がいいわね」

その後、リアスはギヤスパーの事情を話してくれた。

リアス曰く、ギヤスパーは名門の吸血鬼のを父親に持っていたが、人間の妾との間に生まれたハーフであり純血ではなかった。

吸血鬼という種は、悪魔以上に純血かそうでないかを意識するという、父や兄弟達ですら、ギヤスパーを軽視し、侮蔑してきたと言う。

更には、類稀なる吸血鬼の才能を持ちながら特殊な神器を宿してしまっていたため友達もできなかつたらしい

仲良くしようとしても、ちよつとした事で相手を停めてしまう。

『ぼ、僕は……こんな神器なんていらぬ!! だ、だって皆停まっちゃうんだ!! 皆、僕を嫌がる!! 僕だって嫌だ!! もう友達を停めたくないよお……!! 停まった大切な人の顔を見るのは……もう嫌なんだ……』

ギヤスパーは家から追い出された後、人間と吸血鬼、どちらの世界でも生きていけずに路頭に迷った。

そして、ヴァンパイアハンターに命を狙われ、落命ところをリアスが拾い、保護したということだった。

「困ったわ……。この子をまた引きこもらせてしまうなんて……」
『^{キング}王』失格ね」

と、リアスは肩を落とし落ち込む。

しかし、この件に関して、リアスに落ち度はない、件のギヤスパーにもだ……。

こうなってしまったのは子供のことをちゃんと見ずに頑固な考えでしかものを考えられなかった親たちの責任だろう……。

一誠の顔も心做しか、顔が顰め面に変わっている

「リアス、ここはオラはオラがなんとかする。部長はサーゼクスとの約束があんだろ?」

突然の一誠の言葉にリアス顔を上げる。

「でも…」

尚も心配そうにするリアス。

「でえじようぶさ!!オラに任してくれ!!いざとなりやドラゴンボールがある!!」

それはそれで問題ではないか……? ?

リアスは少し考え込む

「分かったわ、それじゃあギヤスパーのこと、お願いするわね… くれぐれも変なことはしないでね?」

ここで、時間を取られては打ち合わせに間に合わなくなると判断したのだろう。

サーゼクス達魔王も忙しいのだろう、時間を延ばしてもらおう訳にもいかないだろう……

「ああ!オラに任しとけ」

リアスは尚も心配そうにギヤスパーの部屋を一瞥すると、魔法陣で転移していった。

「さて… ああ言ったけど… どうすつかないかな…」

決めてなかったのか…

(ははは… なんとかかなると思つててき、特に何か考えてた訳じゃねえんだ)
良くそれであそこまで自信満々に言えたもんじゃ…

とりあえずと、一誠はギヤスパアの部屋の前に座り、何やらを考え始めるのだった。

◆◆◆ S I D E C H A N G E ◆◆◆

「うーん… どうすりゃいいのかな…」

私がそんな一誠様を見掛けたのは偶然でした。

たまたまその場を通り掛かった私は、一誠様が新たな眷属… ギヤスパア様の部屋の前に座り考え続けているのを見つけたのです。

中からはギヤスパア様の泣き声も聞こえて来ます…

… どういう状況なのでしょう

私は話を聞いてみようと一誠様に近寄ります。

「一誠様、如何なされましたか？」

私の声に一誠様が気が付き振り向かれました。

「ん？グレイファイアじゃねえか、それがよ……中の奴をどうにかしてえんだけど……どうすりゃいいか分かんなくてよ……」

なるほど……それでこんな所で悩んでおられたのですね。

それならば一誠様の従者であるこの私の出番でしょう……。

「一誠様、その役目、私にお任せくださいませんか？」

「いっ……？」

私の言葉に一誠様が不思議そうな顔をなさいますが、ここは続けましょう。

「一誠様、人には向き、不向きという言葉があります。今の事態が正しくそれに近いものです。一誠様にはこういったことには不向き……そして私はこういった事には少し

ばかり心得がございます。ですのでここは私にお任せくださいませか…?」

「お、おう… なら、おめえに任せていいか…?」

「はい、一誠様は修業に専念なさってください」

「ああ、んじゃ、後は頼む…」

そうして一誠様はその場を離れて言ってしまった。

「さて…」

まずはこの泣き続けるギヤスパー様をどうにかしなければなりませんね…。



それからしばらくの時間がたった頃。

扉の奥はしんと静まり返っていました……。

私はそつと口を開きます。

「ギヤスパー様、そんなにご自身力を使うのが怖いですか？」

扉の奥から返事はありません。ですが、もぞもぞと音はするので聞いてはいるようです。……。

私はそのまま続けます。

「ギヤスパー様。貴方は、神龍を知っていますか？」

『……え？』

反応がありましたね…… 続けましょう

「あの古の大戦に出てくる伝説の龍の事なのですが……」

『はい、知っています……。二天龍を相手に一人で戦い、圧倒的な実力差で鉄槌を降し、姿を消した、黄金の龍の姿をした青年…… ですよ』

漸く返答が帰ってきました。もう少し押してみましよう……。

「その通りです。その後の神龍の話をご存知ですか？」

『……？いえ、続きがあるんですか……？』

「はい、あの青年は……五十年後の冥界へと姿を表したのです」

『未来の……冥界に……？』

ギヤスパー様の問いかけに私は小さく頷き、続けます。

「青年はある少女と出会いました。しかし少女は敵に追われ、傷ついていました。敵に追いつかれ絶体絶命の境地に立たされたのです」

『……』

「青年はそれに気が付き、追ってきた敵を難なく倒してしまいました。そして、少女にこういったのです。『困ってる奴を助けるのは当然……』と」

『!!……………』

「驚きですよ、悪魔は基本、自分の欲望に忠実です。それをただ相手が困っているからと無償で手を差し伸べる事が出来たのですから」

『そ、それで……神龍は……』

「……………残念ながら、名前だけを名乗って消えてしまったそうです……。その後、彼がどこで何をしていたのかは分かりません……」

『凄いですね……。二天龍を降しただけでもすごいのに、そのうえ、無償で人助けをできるなんて……』

「これはある方から聞いた話ですが、かの神龍も、最初から強くはなかったそうですよ」

『えっ…??』

「勝つよりも、負けることの方が多かったそうです」

ですが、と私は続けざまに……………。

「いつだって諦めず、必死に努力して強くなろうと我武者羅に努力した。『世界でいつとー強くなろうって修行してきた』と仰っていました」

『…………… 僕にも、出来るでしょうか……………』

扉が少し開き、ギヤスパー様が顔を出してくれました。

「えっ…?」

「僕も、神龍みたいに必死で努力したら、強くなれるでしょうか?」

そうですね、それならば自信を持って肯定出来ます。

「はい、絶対に……あの方があそこまで強くなれたのです。貴方もきつと強くなれます。この私が保証してあげましょう」

その言葉を聞いた瞬間、ギヤスパイ様の顔がパアツ！と明るくなりました。

「ぼ、僕！頑張ります！！神龍の！！憧れの人に近づけるように！！」

その顔には決意が満ち溢れています。

この分なら、もう大丈夫でしょう………。

「そんなあなたに良いことを教えてあげましょう。神龍は今、私達の近くにいますよ」

「ええっ……!?だ、誰ですかあ!!」

「クスッ……それは、自分で探してみることです。きっと貴方なら分かるでしょう」

「！はい!!ぼ、僕、頑張つて見つけますう……!!」

私に出来ることはここまでです。一誠様、後はお願いしますね

長年越しの再会!一誠と天使長!

sideナレーション(界王)

翌休日……。

一誠は一人、ある場所へ向けて歩いていった。

なぜ一人かと問われれば、呼び出されたからだ……。

その人物から場所を聞き、気を頼りに進む一誠。

そうして進んだ先にあつたものは……一件の神社だった……。



「お待ちしておりましたよ、イツセーくん」

そうやって一誠を出迎えたのは、オカルト研究部の副部長であり、グレモリー眷属の

女王クイーンの姫島 朱乃その人であった。

その朱乃だが、今は駒王学園の制服ではなく、巫女服を纏っている……………。

「オッス、朱乃。呼ばれたから来たぞ！」

そんな朱乃の出迎えに、一誠はいつものように応じる。

オリジナルの兵藤一誠であればその新鮮さにドギマギするのだろうが、この一誠には通用しない。

「急に呼び出したのに、来てくれてありがとう、嬉しいわ」

巫女服の朱乃は普段通りの柔らかな笑顔を向けて話す。

「呼んでくれたんなら行くさ、んで、オラは何したらいいんだ？」

「ええ、こちらへどうぞ…。あなたに会いたいという方が来ているの」

そんな一誠の言葉朱乃もにこやかに答えて中へと誘う。

一誠も後を追って平然と入っていく……………。

そう言って朱乃は、辿り着いた神社の本殿の戸を開く、その中にいたのは……。

「彼が、赤龍帝ですか？」

そう話し、一誠を待っていたのは輝くまでに金色の翼に、豪華な白ローブを着た、端正な顔立ちの青年だった。

極めつけはその頭上に漂う、金色の輪つかだ……。

「！おめえは……!？」

一誠が何かをおどろいた顔をする。

そんな一誠の反応に二人もなにか身構える……が

「えっと……誰だっけ……？」

……
「ε:」
ズコー!!

盛大にズッコケた……。

「はは… 中々愉快的な子だ… 今代の赤龍帝は面白い子に宿ったらしい。しかし… このオーラの質、まさしくドライブですね。懐かしい限りです」
なにやら懐かしんでいる謎の青年……………。

「なあ、それよりおめえ… いったえ誰なんだ?」

そんな不審人物にも物怖じせず問いかける一誠は流石であろう……………。

「ああ、これは失礼、自己紹介がまだでしたね。初めまして、『赤龍帝』兵藤 一誠くん。私はミカエル。天使の長をしております」

青年が名乗った名前は、とんでもない大物であった……………。



「なあ、朱乃… てんしのおき… ってなんだ?」

「……………」

「い、イツセーくんそれは：：コホンツ：：兵藤くん、天使というのはですね：：」
すぐ複雑そうなミカエルを後目に、朱乃は背中にうすら寒いものを感じながら、一誠にも分かるように天使の説明をし始めるのだった。



「と、言うのが天使なのですよ？」

「へえ〜：：そんな奴がいんのかあ：：おめえスゲえんだな！」

暫し、朱乃の天使についての（囁み砕かれた）説明を聞き、漸く理解した一誠だったが、やはりその態度は変わらなかつた。

そんな尚も変わることに無い一誠の態度にミカエルはなにやら勘づいたような顔をする。

「!!………… え、ええ、今回あなたに来てもらったのはコレを授けようかと思いでね」

しかし、直ぐに気を取り直したように返すミカエルがある方向を指し示す。その先にあったものは、虚空を浮遊している剣だった。

そしてその剣からは、聖なるオーラが溢れ出ている。紛れもない、聖剣だ…………。

「これはゲオルギウス——聖ジョージ。いえ、大昔に生きていた人間の英雄…………と言えは分かりますか? その英雄が持っていた竜殺し《ドラゴン・スレイヤー》の『アスカロン』です」

先程のイツセーくんの様子を察して、かなり噛み砕いた説明をしてくれるミカエル。アレだけを見てすぐに適応してくれる辺り、その器の広さを物語っている…………。

その説明を受けても首を傾げて不思議そうにしている一誠。そこへ…………。

『有名な竜ドラゴン・スレイヤー殺しだ。と言つてもお前には知りもしないものだろうがな』

事情をよく知るドライグが口を挟んでくる。

(ああ、全然わかんねえぞ。… なんなんだそのどんぶりスライダーってよ?)

『ドラゴン・スレイヤー』
「竜 殺しだ……。 竜を殺すことを生業にしている輩——及びそれに関連した武具の総称だ」

（へえ〜。よく分かんねえけどスゲえヤツなんだな？）

『……………その認識でまあ間違いはない』

ドライグの説明会も、虚しく、一誠は残念な認識しかされなかった……………。

「コレがスゲえモンってことは分かったけど…。 なんだオラにこんなくれるっつーんだ？」

一誠の問いにミカエルは微笑み答える。

「大戦後、大きな争いは無くなりましたが、ご存じのように三大勢力の間で小規模な鏖迫り合いがいまだに続いています。この状態が続けばいずれ皆滅ぶ。いえ、その前に横合いから他の勢力が攻め込んで来るかもしれません…。」

尚もミカエルは続ける。

「過去の大戦の時、三大勢力が手を取り合ったことがありました。赤と白の龍が戦場をかき乱した時です。あの時のように再び手を取り合うことを願って、あなたに——赤龍帝に言わば願をかけたのですよ」

そう言つてミカエルは話を終える。

…… どうするのだ? 悟空よ?

(界王さま、オラには今の話あんましよくわかんなかったけど、大事な話だつてことは分かった…… けど、オラもう決めてる……)

そうか…… ならば、お主が思うように進め……。

(ああ! サンキュな、界王さま!!)

そんなやり取りの後、一誠は真剣な顔で口を開いた。

「ありがてえ話だけど、これはオラは受け取れねえ……」

「!? い、イツセーくん……? 」

「……理由を聞かせて貰えますか？」

驚く朱乃に、なにやら落ち着いているミカエル。

「ああ、ミカエルがオラになんかを期待してるってのは分かった……けど、オラは戦いは武器は使いたくねえ、この拳で、強え奴らと……もつとワクワクして楽しんで戦いてえんだ！だから、コイツは受け取れねえ……すまねえな」

そう言うミカエルは納得したように微笑み、確信したように一つ頷いた。

「——やはり、貴方は本物だ……。しかしまさか、こんな所で貴方会えるとは思っていませんでしたよ……。神龍」

そう話すミカエルはその後、ならば後日別の物を贈らせて欲しいと一度天へと帰って言ったのだった。

そして帰り際に……

「そういえば、ガブリエルが貴方に逢いたがっていました……。今度の会談で顔を出す予定ですので挨拶をして差しあげてください」

そんな少しばかり不穏になりそうなことを告げて……

三会谈開始!!動き出す影の組織!!

sideナレーション(界王)

ミカエルが帰った後、一誠はそのまま神社にてもてなされていた。

「はい、お茶ですわ」

「おつ、サンキュー」

グイツと飲み干す一誠だったが、すぐに顔を青くし……

「うぐつ……!……つ……ぷはあつ……につげえなコレ……お茶ってこんな苦いもんだったか?」

「うふふ、一誠くんは抹茶を飲むのは初めてかしら?」

そう言うてにこやかに微笑む朱乃。

「はあっ……ふうっ……ビックリしたぞ……。わところでよ、朱乃、ちつと聞きてえことがあんだけどいいか？」

「ええ、もちろんですわ」

一誠の問いに朱乃は快く答えてくれる。

「グレイフィアから聞いたんだけどさ、おめえ、ただの悪魔じゃねえんだよな、えっと……なんつったか……ナントカの……」

「……： 墮天使の幹部の一人、バラキエルですわ、イツセーくん」

「ああ！それだ！ソイツの子供なんだろう？強えのか？」

その言葉に朱乃は表情を少し困ったようにしながら話した。

「一誠くんに比べたら、強いかどうかは分かりませんが、そう、もともと私は、墮天使幹部バラキエルと人間の間に産まれた者……」

そのまま朱乃はポツリポツリと話し始めた。

母が神社の娘だったこと……。父、バラキエルとの出逢い、そして朱乃自身の誕生……。

「穢れた翼……。悪魔の翼と墮天使の翼、私はその両方を持っています」

そう言つて、いつの間にもやら展開していた一対の羽の片翼から落ちた羽根を憎々しげに掴み、言つた。

「この羽が嫌で、私はリアスと出会い悪魔となつたの。——でも、生まれたのは墮天使と悪魔の……。両方の翼を持つたもつとおぞましい生き物になつた。ふふ、汚れた血を身に宿す私にはお似合いかもしれません……」

そう言つて自嘲する朱乃……。

「…… それを知つて、イツセーくんはどう感じます？ 墮天使は嫌いよね？ あなたとアーシアちゃんを一度殺し、この街を破壊しようとした墮天使にいい思いを持つはずがないものね」

そんな朱乃の言葉に一誠は躊躇うことなく口を開いた。

「何言つてんだおめえ、オラ別に墮天使つて奴らのこと嫌いじゃねえぞ」

「えっ……？」

朱乃が不思議そうな顔で一誠を見る。

「そりゃ、オラやアーシアを殺した奴らはきれえさ……^嫌。けど、アイツらにも良い奴はいるんだ、アザゼルのおっちゃんとかな!!それに、朱乃だつて、良い奴だ!!オラはおめえのこと好きだぞ!!」

「……っ! 殺し文句、言われちゃいましたわね…… そんなこと言われたら…… 本当の本当の本気になっちゃうじゃないの……」

そう言つて朱乃は泣いていた

「いいっ……!?!な、なんで泣いてんだ!!お、おい…… オラ、何かしちまったんか!?!」

「ううん、違うの…… 嬉しくて…… そんなこと、男の子に言われたこと、なかったから……」

そう言うと朱乃は涙を拭い、笑顔で言った。

「決めましたわ、私、決めました。ねえ、イツセーくん」

「ん…？」

「三、いいえ、四番目でいいですわ。だからね、イツセーくん…いいえ、一誠くん、私と浮気…してみない？」

衝撃的な爆弾を放り投げて来た朱乃は妖艶に微笑んでいるのだった。

その後、何故か朱乃に渾名を付けて欲しいと迫られ、一誠が頭を搾って捻り出したのは朱ちゃんというものだった…。

朱乃は大層その渾名を気に入り、一誠に抱きついていた所をリアスと共に来ていたグレイフィアにみつきり、一誠は連行されて行くのだった…。



「——さて、行きましようか」

部屋に集まるオカルト研究部の面々がリアスの言葉に頷く。

そう、今日は三勢力の会談の日当日……………。

外には学園全体を覆う協力的な結界が張られている。

更には悪魔、天使、墮天使の軍も各々が学園前に待機しており、今にも戦争が勃発し

そうな雰囲気だ……………。

そうなれば嬉嬉としてアイツ悟空は出ていくのだろうか……………

「ふええ… 部長に師匠お…、どこ行くんですかあ…？」

準備を進める一誠達にギヤスパーが不安そうな声をあげる。

「ギヤスパー、今日の会談は大事な物なの。時間停止の神器を制御できない貴方は参加することはできないの。ごめんなさいね…」

リアスが優しい声音でギヤスパーに告げる。

今回の会談に、ギヤスパーは不参加のようだ。

神器を制御出来ないギヤスパーを連れていくのは悪手だとリアスが判断したのだ。

もし、何かのショックで会谈中に発動してしまっただけなので今回は不参加らしい。

「ギヤスパ、オラがいなくてもしつかり修行すんだぞ? どんなどきも強くなりたいなら修行しかねえんだ」

「は、はい!! 頑張りますう!! 師匠お!!」

ビシッと敬礼をするギヤスパ。

一誠に師事し、少しずつ根性がついてきたようだ……。

「…… 皆さま、そろそろ時間になります」

同じく待機していたグレイフィアがそう告げる。

「分かったわ。それじゃあ皆、行きましょう」

「はい!! (ああ!!)」

そうして、一誠達は部室を後にするのだった。

◆◆◆ S I D E C H A N G E ◆◆◆

会談当日……。

私達は駒王学園の会議室にて待機していた。

私の他にいるのは……。

魔王、サーゼクス・ルシファー、セラフォル・レヴィアタン。

墮天使総督……アザゼル、白龍皇ヴァーリ。

私こと、天使長ミカエル、熾天使のガブリエルの六人です。

それぞれのトップたちは揃っている……。

後は、あの事件を取めた者たちが来れば全員ですね……。

彼は、来てくれるでしょうか、いえ、彼は確実に来てくれますね。あの時のお礼も渡

せていない、会談の後にでも渡してあげたいものです……。

【コンコンコンツ】

おや、来たようですね……

「失礼します……」

ノックの後に件の者たちが入ってきました。

……彼もいるようですね

その中にはあの少年の姿もありました。

「オッスー！サーゼクスにアザゼルのおっちゃん!!久しぶりだな!!」

部屋に入ってきた少年、兵藤一誠くんはサーゼクスやアザゼルを見つけ、まるで友人と話すかのように声をかけています。

彼らとも知り合いだったんですね……

サーゼクスはともかく、アザゼルまでとは、彼の人脈はどこまで……
対するサーゼクス達も特に気にする様子もなく返します……

「やあ、イツセーくん。よく来てくれたね。元気そうで何よりだよ」

「よお、赤龍帝。あの時以来か？久しぶりだな。つていうか、そのおっちゃんつて呼び方止めろ……」

などと挨拶を交わしています……………。

「……………あの方は……………」

不意に、ガブリエルがハツとしたように呟く。

「どうかしましたか？ガブリエル」

「え？いえ、なんでもありません……」

…………… どうやら、彼女も彼の違和感に気づき始めたようですね
そう話すガブリエルですが、視線はまた兵藤くんを見えています。
さて、ガブリエルは彼に気づけるでしょうかね……………

「さて、そろそろ始めようか……」

おっと、考え込んでいる間に始まってしまったようですね。

では、会谈に集中しましょうか……。

◆◆◆ S I D E C H A N G E ◆◆◆

会谈が始まり、サーゼクスが口を開く。

「この会谈の前提条件として、この場にいる者達は『神の不在』を認知している」

サーゼクスはそう言って周りを見渡す。

特に返事がないのは言うまでもなく全員が周知しているからだろう。

「では、それを認知しているものとして、話を進めよう」

サーゼクスのその一言で三大勢力のトップ会谈の幕が開けた。

すると、その一誠の足を思いつき踏みつける者がいた

「…………… フンッ」

静かに、だが勢い良く足を踏み付ける小猫

「いつ——!!!?!?
!!!おー… いちちち… ん?」

「ふん……………」

足を抱えて跳び回る一誠を見て、アザゼルのが大爆笑している。

「だっははははははっ!!会谈中に大鼾かいて寝るとは大したもんだな赤龍帝!!」

「ははは、イツセーくんらしくていいじゃないか。それじゃアリス、報告の続きを頼めるかな?」

「は、はい… (大事なところなのに… イツセーのばかあ… !!)」

顔を真っ赤にしながらもリアスが報告を再開するのを一誠はは足をさすりながら聞いているのだった。

「——以上が私、リアス・グレモリーと、その眷属悪魔が関与した事件となります」

「ありがとう、リアス。それでアザゼル。この報告を受けて、墮天使総督の意見を聞きたい」

その言葉に全員の視線がアザゼルに集中する、するとアザゼルは不敵な笑みを浮かべて話し始めた。

「先日的事件は我が墮天使中枢組織『神の子を見張る者グリゴリ』の幹部コカビエルが単独で起こしたものだ。奴の処理は赤龍帝が行った。アイツ、バカだったからその赤龍帝に完膚なきまでにやられて、挙句消し飛ばされて骨すらも残ってない状態だったかな。その辺りの説明はこの間転送した資料にすべて書いてあったろう？それで全部だ」

アザゼルの報告にミカエルが嘆息しつつ話す。

「説明としては最低の部類ですね。しかし、あなた個人が我々と大きな事を構えたくな

いという話は知っています。それは本当なのでしょう…?」

「ああ、俺は戦争になんて興味ない。コカビエルも俺のことをこきおろしていたと、そちらでも報告があつたじゃないか」

アザゼルの言葉にサーゼクスとミカエルが頷く。

「それで、俺も一つ聞きたいことがある。少し話が脱線することになるが許してくれ」

「まあ、内容にもよりますが…」

「ああ、アザゼル、言ってみてくれ」

「ああ… 赤龍帝、おまえは何者だ?」

ん?ここで一誠に話が振られるのか…?

おい、呼ばれておるぞ悟空

(ん…? オラがか…? なんだろ…)

「ヴァーリから話は聞いた。いや、聞かずともコカビエルのあの状態を見れば分かる。コカビエルをああも簡単に消し飛ばす奴なんざそうはいない」

「そうですね。私も報告を聞いて驚きました。いくら赤龍帝の力を宿しているとはいえ、下級悪魔がコカビエルを倒すとは思いませんでした。兵藤一誠くん、あなたはいつたい……」

正体知らないアザゼルと、正体を知りつつ乗ってくるミカエルが話を振ってくる。そして、この部屋にいる全員の視線が一誠に集中する。

「先に謝っておく。悪いが、会談にあたり、おまえさんのことは少し調べさせてもらった。おまえは悪魔に転生するまでは普通の高校生だったはずだ。親も普通の人間。先祖に魔術や超常の存在と接触した者はいない。それに、おまえは禁手すら使わずに俺達ですら未知の不可思議な力を使ってな……。それもコカビエルを倒すレベルだ……。おまえはどうやって、そこまでの力を手にいれた？」

「どう……って言われてもな……」

そう言つて少し考え込む一誠。

だが、少し考えて出てきた言葉は……

「強くなるために修行を続けてた……くれえかな？」

そんな一誠の言葉にアザゼルは顔を顰める。

「修業をして手に入るような力か？それは」

アザゼルの言葉に一誠は力強く頷く

「ああ、誰だつて強くなれる!!オラがなれたんだ、おめえ達もなれつき!!」

「……………」

しばしの無言が辺りを包む。

「分かった。とりあえずはお前の言葉を信じとくぜ」

アザゼルは嘆息しながらそう話す。

「ああ！サンキュアザゼルのおっちゃん！」

「……だからおっちゃん言うなつての」

と、そこで口を挟んでくる者がいた。サーゼクスだ……

「イツセーくん、良い機会だし、もうあの事を話してもいいんじゃないかな？」

「あのこと？……って何かあったか？」

そう言われ一誠は何事かと考え込む。

すると、横からグレイフィアがこそつと耳打ちをして教えてくれた。

『一誠様、貴方が神龍の生まれ変わりであるということです。』

「へっ……？ああ!!そのことか!!」

「分かった！サーゼクス、おめえがそう言うんなら話すぞ。先に確認すつけど、おめえ達

は神龍のこと知ってるのか?」

一誠の言葉にその場の全員が首を縦に振る。

「知ってるも何も、目の前で見ましたし、命を助けられましたから」

「あの時の事はいまだに忘れられねえな……」

「二天龍を圧倒的な力でねじせた伝説の龍の話だろうか?当然知っている。というか、この世界で知らない者はいないだろう」

上からミカエル、アザゼル、ヴァーリが話す。

「というか、未だに乗ってくれているミカエルは案外ノリのいい奴なのかもしれない……」

「知ってる奴は知ってると思うけど、神龍つてのはオラなんだ」

その瞬間、その場にいる全員（一部例外あり）の顔が驚愕に染まった。

「正確にはその神龍の生まれ変わりだ。オラが生まれ変わる前の名は……」

——孫悟空——

その言葉に更に困惑が混じる。

「ちよつと待て、つてことはお前は鬪戦勝仏と同姓同名の生まれ変わりだつていうのか？」

（なあ、界王さま、なんだ？とーせんしょーぶつつてよ？）

物語に出てくる石ザルだ……

（へえ〜!!そんなオラと同じ名前のやつがいるんか!!知らなかったぞ!!）

ともかく今はそっちに集中せんか!!

（わ、わかったよ……）

「そのとうななんとかってのが誰か知らねえけど、オラは神龍だ、あん時の記憶も全部持つてる」

「……はは……まさか、こんな所であの神龍に会えるなんてな。面白いこともあるもんだ。しかも赤龍帝だなんてよ。胃がが痛くなりそうだ……」

本気で胃が痛そうなアザゼルを差し置いて、ミカエルがサーゼクスに問いかける。

「……サーゼクス、貴方はこのことを知っていたのですか？」

「そうだね、だけど下手に公表するわけにもいかなかったのですね、隠させてもらったのよ」

「なるほど……」

ミカエルは訳知り顔で、アザゼルは胃が痛そうな表情かおをしている。

そこに追い打ちをかけるようにサーゼクスが言う。

「ちなみに、イツセーくんは神龍だった頃より戦闘力は落ちてはいるが、それでも私を超える実力はあるだろう、そうだろう？兵藤一誠くん」

「ああ、随分上だと思う」

その言葉に一番反応したのは他でもないヴァーリだった。

「!!: : それは本当か？」

その瞳は期待と闘志が入り交じった熱いものが宿っている。
その時だった。

一誠達を不思議な感覚が襲った。

時が止まった時のような……………

ふと、一誠が時計を見ると……………。

そこにはやはり、時が止まっていた。

最悪の襲撃!テロ集団禍の団!!

sideナレーション(界王)

「ん…?」

「おつ、やっぱり赤龍帝は止まらなかったか」

「やっぱりつてことは何かあったんだな?」

「周り見てみる…」

そう言われ、一誠は会議室の時計を見る。

見ると秒針は動いておらず止まったままだ…。。。

部屋を見渡すと、動いている者と止まっている者に分かれていた。

サーゼクス セラフォルー グレイフィア アザゼル ミカエル
そしてヴァーリ

は動いているようだ。

部員はというと……

「眷属で動けるのは私とイツセー、祐斗とゼノヴィアだけね」

リアスの言う通り、アーシアと朱乃、会長と副会長も停止していた。

「上位の力を持った俺たちはともかく、リアス・グレモリーの騎士は聖剣が停止の力を防いだのだろう。そして、リアス・グレモリーが動けるのは止まる瞬間に赤龍帝に触れていたからだろうな」

アザゼルが状況を見て説明してくれる。

窓の外を見ると黒いローブを着こんだ魔術師みたいな奴等が次々と現れ、外で止まっている警備の人や施設に攻撃を仕掛けてきた。

「これで大丈夫、校舎には被害がでないだろう」

サーゼクスが一誠たちのいる新校舎に結界を張る。

これなら攻撃を受けてもよほどのことがない限り大丈夫だろう。

「さて、今の状況だが見ての通り俺達は攻撃を受けている。所謂テロって奴だ、時間を停止させられ外にいる警備の奴らも全滅だ。そして、時間を停止する能力を持つ奴は少ない。そう考えると……………」

「ツ!! ……まさか、ギヤスパーがテロに利用されているというの!?!」
リアスが驚いたようにアザゼルに問う。

「そうなるだろうな……………」

「こりや、奴等に先を越されちまったか……………」

アザゼルの言葉にサーゼクスが聞き返す。

「アザゼル、奴等とは一体誰のことなんだ?」

「奴等つてのは俺が神器を集めていた理由の原因だ……………」

その奴等の名は禍カオスブリゲードの団……………テロリストだ」

そう、深刻な顔でアザゼルが告げる。

「なんてこと…!! ギャスパ…私の可愛い下僕が旧校舎でテロリストに使われるなんて…万死に値するわ!!」

「リアス、オラギャスパを助けに行ってくる」

一誠がそつと額に手を当て、ギャスパの気配を探ろうとしたとき……

「待て、赤龍帝 仲間を助けに行くんなら、その前にこれを持っていけ」

そう言つてアザゼルは一誠に謎のリングを二つ投げ渡す。

「…ん?なんだ?これ」

「それは神器の力の暴走を抑える腕輪だ。禁手の代償にもなってくれる お前には必要ないだろうが一応持っていけ」

「サンキュー!!おつちゃん!!んじゃ、行ってくる!!」

「話を聞け!!一個はお前の奴だが もう一つはあの小僧に付けてやれ多少なりとも力の制御に役立つだろう」

「わ、分かった!!行ってくる!!」

「ちよつ…待ちなさいイツセ…」

リアスが言いかけた時には既に一誠の姿はなかった。

反旗の白龍！赤VS白！

sideナレーション（界王）

一誠がギヤスパアの気配を辿り、瞬間移動した先には、椅子に縛り付けられ、紙袋の破片切れ端を頭部につけたギヤスパアがあった。

「で^大え^女じ^夫ょう^夫ぶか？ギヤスパア」

「!!:.:. しっ:.:. 師匠!!ど、どうして:.:」

「オラが来るまでよく耐えたな:.:. 待つてろよ？今助けてやる:.:」

そうして一誠は難なくギヤスパアを拘束していた縄を引きちぎり、ギヤスパアを解放する。

「し、師匠:.:. どうして:.:. 今は会談に行ってるはずじゃ:.:」

「おめえを助けに来たんだ、弟子を助けに来ねえ師匠なんて師匠じゃねえ」

「: : つ!!」

ギヤスパーが驚愕をしているのを他所に、一誠は彼をこうしたのであろう下手人を見ていた。

「おめえたちか、ギヤスパーをこんなふうにしやがったんは: : :」

鋭くなった視線はしっかりと下手人達に向いている。

「フン、だとしたらどうだというんだ? そんな雑魚一匹、利用した程度で」

「雑魚: : ? ギヤスパーが雑魚だと: : ? つく: : ゆるさんぞ: : つ!! 貴様

らああ: : ツ!!」

一誠がそう叫んだ直後、彼の姿がブレ、一瞬の好きに掻き消える。

「なつ: : !? 消え: : ガツ: : !!」

魔術師の一人がそう言いかけていきなり倒れ伏す。

「んなつ!? どうし…ぐあつ…!!」

「ちよつ…あぐつ…!!」

全てをしつかりと言い終えることなく倒れていく魔術師達…。

他の魔術師達も同様に訳の分からないまま倒れていき、やがてそこには一誠とギヤスパー意外、誰も立ち上がるものはいなかった。



「す、すごい…」

ギヤスパーは次々と魔術師達を倒していく一誠に見惚れていた。

(僕も…あんなふうになれたら…きっとみんなを守れるのかな…)

そんな思いが胸に競り上がってくる。

(一誠先輩…いえ、師匠は僕もきつと強くなれるって言ってくれた…なら、僕もなれ

るよね…。いつか、師匠みたい強く…。」

そんな決意を新たにしてしていると、一誠が近づいてきた。

「ギヤスパー、怪我はねえか？」

その身体には傷一つなく、埃がすこし付いている程度だ。

「はい、師匠のおかげです!!」

「いや、おめえが頑張らなきゃ間に合わなかった…。ありがとな」

そうやってポンとギヤスパーの頭を撫でる一誠。

「えへへ、師匠…。」

「ん? どうした？」

「僕も、いつか師匠みたいに強くなれますかね?」

決意はしたものの、やはり心根はまだ未熟なままのギヤスパーには不安がある。それ

を消すためかどうかは分からないが、ギヤスパーは、師と呼び慕う一誠にそう問いかける。

「ああ、おめえはきつと強くなれるさ、もしかしたらオラを超えちまうかもな!!」

一誠はそんなギヤスパーの言葉にカラカラと笑いながらそう答える。

まるで、本当にそう思っているかのような言葉だ……。

「!…! 僕、頑張ります!!」

「いい返事だ、よし、みんなも心配してる。そろそろ帰るか」

「はい!!」

そうして二人が帰ろうとした時だった。

「それは、少し待ってもらえないか? 兵藤一誠」

そんな声が掛けられ、一誠が上を見る。

その視線の先には銀色の鎧を纏った青年がいた。

「おめえ… たしかさつき会場のところにいた…」

「ああ、紹介が遅れたな… 俺はヴァーリ、ヴァーリ・ルシファー『白龍皇』だ。あの時に話しただろう?」

そう話す、自身をヴァーリと呼ぶ青年。

「そういうことか、だから感じたことのある気だった訳か……」

感心したように一誠が呟く。

「けど、おめえはさつきまで外で戦ってたはずだ、オラ、おめえの気が膨れ上がってんのをずっと感じてたかな」

「… そこまでお見通しとはな、だが残念… 俺は最初からこっち側だよ」

「……… なんだって?」

一瞬で辺りの空気が冷え込む。

「以前君と話した時に勧誘を受けてね、強いやつらと戦えると聞いて、誘いに乗ったんだよ、まさか、こんな早くに大きな願いを叶えられる日が来るとは……」

「願う？」

「君と戦うことさ、兵藤一誠……いや、神龍」

「……？」

「俺は、ずっと強者と戦うことを夢見てきた。その一つには、神龍……君と戦い、倒す事……。遥かな昔、二天龍を圧倒的な力で振じ伏せ、三勢力を救った英雄に……」

「…… おっちゃんはどうぞすんだ？おめえの仲間だろ？」

「おっちゃん？ああ、アザゼルのことか…… 彼はもう敵だよ、いずれは倒す相手だ」

「どうやっても戦うしかねえみてえだな、いいぜ?おめえをぶっ倒す!!」

「そう来なくては面白くない!! 赤と白の対決をここで決めようじゃないか!!」
銀色の翼を広げ飛び上がっていく。

「つと、そうだった、ギヤスパー、おめえにコレを渡せって言われてんだ」

そう言つて一誠はギヤスパーに腕輪を渡す。

「し、師匠…これは?」

「オラもよくわかんねえけど、アザゼルのおっちゃんがおめえに渡しとけてよ、腕にこ
うやってつけてりゃいいらしい」

「こ、こうですか?」

一誠の見様見真似で腕輪を装着するギヤスパー。

「よし、じゃ、行ってくる!!」

「はい!! 師匠、負けないで!!」

「ああ!!」

そのやり取りを最後に、一誠も大空へと飛び上がった。



「ようやく来たか」

「ああ、待たせちゃまったか?」

上空で待ち構えていたヴァーリが一誠が来るのを見てそう呟く。

「いや、この程度これから戦える楽しみに比べればなんてことはない、さあ、始めようか!! 宿命の決着を...!!」

「フツ ああ、やろうぜ… けど、おめえはオラには勝てねえ」
その言葉を皮切りに、二人が激突した。
最初に動いたのは一誠だった。

「だりやつ!!だりやりやりやりやつ!!」

瞬時に間を詰め、怒涛のラツシユを繰り出す

「遅いな、こんなものか!!」

『Divide!!』

そんな音声が響いた直後、一誠の身体に異変が起きる。

「なっ!?!力が…!?!」

体に力が入らなくなったのだ。

「隙を見せたな…!?!」

「があっ…!!」

突っ込んで来たヴァーリの蹴りを喰らい、一誠は吹き飛ばされていく……。

『気をつける相棒、奴の能力は半減だ、だが、それ以上に厄介な他の能力がある』

「?…：…なんだ?ドライブ」

『奴は、相手の力を半減し、減らした分の力を自分に加算する。つまり、お前の力を奪い、自分の力にしようとしている。スタミナの回復は出来ないがな。あくまでパワーのみだ』

「…：…：…なら、奴に力を使われなきやいいんだな?」

『そういわれればその通りだが…：…できるのか?』

「ああ、オラもまだまだ本気じゃねえ。ちつとばつか本気でやるか!!ドライブ、チカラ貸

してくれ」

『……まさか、こんなことできるといえるのか?』

「分からねえ、けどやってみなきゃ分からねえかな!!」

『つくづくお前は面白いやつだ、よし、やってやろう!!』

一誠がドライブと会話を終え、ヴァーリのもとに戻ると、ヴァーリは呆れたように眩
いた。

「こんなものなのか? 神龍の実力は…詰まらないな…。もっと期待していたんだ
が……」

「へへっ、けどオラ、まだ少しも本気を見せちやいねえぞ?」

その言葉にヴァーリが少し反応が少し変わった。

「なら、見せてくれないか? 君の本気を」

「ああ、今から見せてやるよオラ達の本気を!! つあッ!!」

ボッ!!

『Welsh Dragon Over Booster!!』

一誠の力の解放に呼応するように、セイクリッド・ギア神器から真つ赤で強大なオーラが解き放たれる。

アザゼルから貰った腕輪の作用か、一誠の身体を赤い鎧が包み込んだ…かに見えた。

「…?…?… なっ!?!」

ヴァーリがそれを見て驚きの声を上げる。

そんなヴァーリの視線の先には、鎧ではなく…金赤色の髪に金赤色のオーラが立ち昇る。

「これが超^{スーパー}サイヤ人とドライグの力を掛け合わせたオレたちのチカラ…
ブレードギア・ドラグオーラメール
赤龍帝の龍気鎧だ!!」

「龍ドラクオーラメイユル氣 鎧：．．．やはり凄いな君は、新たな力を造り出してみせるとは．．．!!これでこそ俺の倒すべき目標だ!!」

「．．．．．いくぞ!!」

言つて一瞬で肉薄してくるヴァーリ。

だが、一誠はその攻撃を容易く受け止める。

「触れたな？」

『Divide Divide Divide Divide Divide Divide Divide Divide Divide Divide Divide Divide Divide Divide Divide!!』

ヴァーリの神器から連続で先程の音が流れてくるが、一誠は構わず、受け止めた腕を引き込んで思いきり蹴り上げた。

「——ッ!?!かっ．．．はっ．．．!!」

凄まじい勢いで飛んでいくヴァーリを、一誠は追撃をかけるために飛ばされた先に現

れ、更に吹き飛ばす。

「だりやあつ…!!」

更に飛んでいくヴァーリ先回りし蹴り飛ばし、更に先回りしては殴り飛ばす。

「がはっ…!!」

飛んでいった先に再び回り込んだ一誠は、両腕を前に組み、それを腰まで持っていき、力を溜めた気の塊を、飛んでくるヴァーリ目掛けて撃ち放った。

「かめはめ波あー!」

そこまで溜めてはないので、消し飛ぶほどの威力はねえが相当のダメージかあるはずだ。

「ぐはあ… ツ!!」

かめはめ波を、諸に受けたヴァーリは勢いよく地面に叩きつけられる。

「はあっ…!!はあっ…!!さすがに強いな….:.:. アルビオン、こうなれば覇龍を使

うぞー!」

『止めろヴァーリ!!死にたいのか!!』

「構うものか!!」

我、目覚めるは覇の理に全てを奪われし二天龍なり…
何やら詠唱を始めるヴァーリ。

「無限を妬み夢幻を想う…」

「我、白き龍の覇道を極め…」

「汝を無垢の極限へと誘おう!!!」

『Jaguar Note Drive!!!』

すると、ヴァーリの体が一際大きく巨大化していき…

白い鎧を身体の内側に纏わせたその姿は、白き龍を連想させるのだった。

「これが俺の奥の手、覇龍だ……。さて、君はどう戦う？兵藤一誠!!」

「すげえ気だ……。だが、《オレ》たちには勝てねえ」

「なら、試してみるか!!」

そう言うのとヴァーリは一瞬でに肉薄し、半減の力を込めた攻撃を仕掛けてくる、
が……………。

「……………。パシパシパシッ シュシュシュッ!!」

対する一誠に全てを止められるか、躲かされている。

「何故だ!? 何故当たらない!! 半減が効いていないのか!!」

「おめえの力はオレたちには効かねえ、いくぞ!! どりゃああああッ!!」

「なにつ!? があつ……!!」

またしても吹き飛ばされるヴァーリ。

「遊びは終わりだ、だりやあああ!!!!」

驚愕しているヴァーリにオレたちは回り込み、一撃を叩き込む。

「いっふっ…!!」

その一撃を受けた箇所の鎧は砕け、ヴァーリはまた勢いよく吹っ飛んで行く……。

「何故だ!!何故勝てない!!二天龍では神龍には届き得ないということか!!」

ヴァーリの悲痛な叫びに答えたのはドライグだった。

『そういうことだ、いくら覇龍を使おうが、それは生前の俺達が使っていたもの。俺達が二人がかりでも手も足も出なかった奴に人間が……ましてや片割れの二天龍如きが敵うはずない……』

「そういうことだ。おめえじゃオラには勝てねえ……。これで終わりだ!!」

ヴァーリは超かめはめ波に呑み込まれ、姿を消した……かに見えた……が。
光が収まると、そこには鎧は愚か、着ていた服が危ないところを残して消し飛んで倒れているヴァーリの姿があった……。

「俺は…… 敗けたのか……」

「……………」

倒れたヴァーリの言葉に、一誠はなにも答えず、全ての変身を解く…………。

「やはり、二天龍如きでは神龍には敵わないんだな……………」

「…………… おめえは今まで必死で努力したことがあつか?」

「…… ん?」

ヴァーリが疑問を浮かべた顔で一誠を見てくる。

「オラもな、最初から強かったわけじゃねえ、ちっせえ時から前みてえな力は出せた訳

じゃねえんだ。でもな、この世界にも強いやつがいるって知ったらよ!! オラ、ワクワクしちまつて修行したんだ。なあ、ヴァーリ。オラはサイヤ人だけど、強くなるのはサイヤ人じゃなくても出来るんだ。人間だって、他のやつだってそうだ、だからよ、おめえも頑張ってみねえか? おめえが目一杯修行してまた強くなったら、また相手してやる。オラももつともつと強くなって待ってつかんな!!」

そう言うヴァーリはフツと笑って…。

「修行… 努力… か、そうだな… 次に会うときは君を倒せるくらいには強くなって戻ってくるでしょう」

「ははっ!! 楽しみにしてっぞ!! オラも負けねえかな!!」

「フツ… ハハハハハッ!!」

「ははははははっ!!」

二人して二通り笑ったところで、一誠はある一点を見て声をかけた。

「なあ、そこのおめえ。そろそろ出てきてもいいいんじやねえんか?」

すると、虚空から猿のような男が出てきた。

「つたく… 気付かれちまつたのかよ…。さすが、神龍様は違うねい…。」

猿男は頭を掻きながら言う。

「はははっ!! 気配を消すんならもつと気配を殺さねえとな!!」

「あちやあ… こりや手厳しいねい…。」

残念… とばかりに顔に手をあてる猿男。

「美猴か… 何の用だ?」

「その言い方は酷いんじゃないかい? 相方がピンチだつーから助けに着たのによ。それにしても、おまえがそこまでやられる相手がいたなんて想像できなかったぜい…。つてかその服装は完全にアウトだな…。」

「ああ。彼、赤龍帝が俺の予想を遥かに越えていてな。今回の勝負は俺の負けだ」

「負けたわりには清々しい顔をしてるな」

「ああ、最高の戦いだつたよ」

ヴァーリとのやり取りからこの猿男はヴァーリの連れのようだ。

「そういえばよ、おめえいったい誰だ？」

そこにかいつの間にか隣にやって来たグレイファイアがゴソツと説明してくれる。

「一誠様、この方は以前お話ししていた闘戦勝仏の末裔です……」

「とーせん……？なんだっけ……？」

「最遊記という物語の主人公の話です」

グレイファイアのとてつても簡潔な説明でも分かるかどうかだが……。

「んん…?よくわかんねえけど、すげえやつなんだな?」

「あー… まあ、そんなとこだ。まあ俺たちは仏になった初代とは違って自由にいきるんだぜい。よろしくな、赤龍帝… いや、神龍」

「ああ、よろしくな!!」

挨拶を返すと美猴は満足げに頷いてヴァーリのもとまで行き、棍を地面に突き立てた。

すると、二人のところに黒い闇のようなものが展開される。

（あれ!?アレってオラが昔持ってた如意棒だ!!こっちにもあったんかあ… 懐かしいぞ）

懐かしんどうる場合かー!!

「そんじゃ、俺っち達は他の予定があつからまたな!!」

「また会おう。： 兵藤一誠。： 次はもつと。： 強くなって。：」

それだけ言い残すと、二人は闇の中へと消えていくのだった。

結んだ平和と新たな来訪者!

side Narration (界王)

美猴たちが去った後、一誠達は再び校庭へと戻ってきていた。

そこでは、三大勢力の軍勢が戦闘後の後処理を行っていた。

倒した魔術師の死体を運んだり、壊れた建造物などを修復したりなど、慌ただしく動き回っていた。

一誠たちはその中を進み、中央まで行くと、そこにはサーゼクスやセラフオール。そしてミカエルの姿があった。

それぞれが指示を飛ばしている。

その最中、サーゼクスが一誠たちの姿を捉え、手を上げた。

「無事だったか、良かった…。——アザゼル、その腕はどうした？」

共に来たアザゼルの腕を見てサーゼクスが問い掛ける。

そう聞きつつ、サーゼクスはアーシアに手を向け、何かの指示を出す。

アーシアはそれに気づいたようで急いでアザゼルの腕を治療し始めた。

治療を終えたアザゼルはゆっくりと語り出す。

「カテリアに捕まって自爆されそうになつてな。仕方なく切り落とした」

「どうやら、一誠がヴァーリと戦っている間に、アザゼルは別の敵と戦っていたようだ。」

「そうか、彼女の件は悪魔側に問題があつた。その傷に関しては……」

「そう言いかけたサーゼクスに、アザゼルは「知らない」という意思表示を手でして見せた。」

「俺も……ヴァーリが迷惑かけた」

「……彼は裏切つたか」

「その言葉にアザゼルは小さく頷き……」

「元々、力にのみ興味を注いでいたやつだ。結果から見れば簡単に納得出来る。——だが、それを未然に防げなかったのは俺の過失だ」

「そう話すアザゼルの瞳はどこか寂しげだ、ヴァーリとの間に何かを感じていたのかも
しれない。」

その間にミカエルが入り、話し出す。

「さて、私は一度天界に戻り、和平の件と『禍カオス・ブリゲードの団』についての対策を講じてきます」

「すまないな、今回このようなことになって。会場の場をセッティングした我々としては不甲斐なさを感じている……」

それをミカエルは笑って許していた。

アザゼルが時折皮肉を混ぜるが、その後も軽く話し合いをした後、ミカエルは天界へと帰っていった。

……一誠に怪しげな笑みを見せて……

そうして、三勢力会談は終わりを告げたのだった……



そんなこんなで騒動も終わりを告げ、一誠は再び日常へと戻ってきていた。

「んん… 終わったぞお… なげえこと話聞くのつて眠くなるなあ…」

大欠伸をかいとる場合か!!!

(おおっ!? なんだよ界王様急に…)

お前、気が付いておらんのか? あの会談のときにずっとお前を見ていた奴がいただろ
う

(んん? そんな奴いたか?)

ミカエルの近くにいた金髪の女天使がおっただらう…

(ん…??)

分からのならいいわい…

そんな一誠が大欠伸をかいているのには理由がある。

今日は駒王学園の終業式だったのだ。

その行事も終わり、一誠が家で寛いでいた時だった。

家に来客がきたようで、一誠がその応対に出ていた。

来ていたのは、グレモリー眷属の朱乃とゼノヴィアだった。

「こんにちは」

「どうしたんだおめえ達、そんな大荷物持って……」

「や、今日からお邪魔するよ」

そういうゼノヴィア、よく見れば、二人の後ろには大荷物が置いてある。すると、朱乃は一誠を確認するなり……。

「イツセーくん!」

唐突に一誠に抱き着く朱乃。

「おおっ!? ふいいい…… あぶねえあぶねえ」

勢いで倒れそうになるのを、一誠は自身の体幹で耐えきる。

肝心の朱乃はと言うと……。

「朱乃、只今貴方のもとに到着いたしました……」

一誠にピタリとくつつき、嬉しそうにそんなことを言っている。

「朱乃様、いったい何をしているのですか…?」

ふと、そんな低めのトーンの声が背後から聞こえる……………。

「ヒツ…!?!」

それに気がついた朱乃が顔を真っ青にし始める……………。

「?…: お、おい? 朱乃? どうかしたんか?」

一誠は気付いていないのか不思議そうである……………。

「これは、じつくりと話を聞かせていただかなければならないようですね」

「ヒイツ!! イ、イツセーくん… たすけ…!」

朱乃は般若となったメイドのグレイフィアに連れ去られていった……………。

「…………… (朱乃、ご愁傷さま……………)」

リアスはその光景を見て、朱乃が連れていかれた方向に合掌していた。過去に似たようなこと経験があるからこそその同情だろう……。

「…… はは、これは、容易にイツセーを口説いたりは出来そうにないな……」
やれやれと肩を竦めるゼノヴィア。それを口に出すあたり流石である……。
しかし、一誠は気にした様子もなく

「ゼノヴィアと朱乃がここに住むんか？ オラン家部屋空いてたか……？」

「そうね、この家も随分と狭くなってきたものね。丁度良い機会だし、これを気に改築を頼んでおきましょうか……」

リアスがそんなことを言い出した。

「ぞうちく……？」

「家を大きくすることだよ、イツセー」

ゼノヴィアが教えてくれる。

「へ？ 家が大きくなんのか？ そんなことできんのか？ リアス」

「ええ、まあ私がやる訳では無いのだけれど、お兄様に頼んで依頼をもらおうから」

「へー…」

よく分かっておらんだろお前……。

（はははっ、バレちまったか…）

「んじゃ、オラちよつと出かけてくる!!」

「え？ いきなり何処に行くのイツセー」

「修行さ、オラもつともつと強くならねえとなんねえ」

「そう、行つてらっしゃい」

リアスの見送りで一誠は出かけて行つた。



その日も一誠が修行を終え、自身の部屋のベットに入り込んでいた。

限界まで身体を追い込み、眠そうに身体を横たわらせている。

同居人達が潜り込んでくることはないのかと言う疑問もあるが、それはない……。

なぜなら冥界最強の女王クイーンによって護られているからである。

他の同居人は逆らうことはできずに、泣く泣く自身の割り当てられた部屋で寝ているようだ……。

『誰がイツセーと一緒に寝るか』

などと、一時期言い争いをして、グレイフィアに連行されてからは大人しく自室で寝るようになったのだ。

そんなことがあつつも翌朝、一誠が目を覚ますと……。

「……なんか部屋広くないか？」

そう、一誠が寝た時と、明らかに部屋の広さが変わっているのだ

凡そその二倍程に……。

あまりにも急展開すぎて理解が追いついてない一誠。

しかし、とりあえず今一誠が言えること、それは……

「いいっ……!? なっ…… なんでこんなに部屋が広くなっただ!?」

鈍い一誠ですら気がつく程に部屋は広くなっていた。



「いやあく、悪魔の技術つてすごいのねえ……。一晩で改築を済ませてしまうなんて!!」

一誠の母が上機嫌で話している。

これにはさすがの一誠も驚きを隠せなかったのだから尚更だ。

「地上六階・地下三階、空中庭園に大浴場。トレーニングルームにその他オプション付きという大豪邸にリフォームしたらしいわ。後、イツセーが以前話していた重力室も取り

付けてくれたそうよ」

そう話すのはそれを依頼したりアスだ。

重力室：： お前、そんなものを頼んでおったのか

(ん：：？オラ別に頼んでねえよ？ そんな話を前にした：： っけか?)

よかったじゃないか。あの部屋はよくベジータが使っておった気がするが：：：：

(まあな、オラもあるなら使いてえ)

そんなものか：：：： ふむ

「でも、まだ作りたてで動かすのは危険だから使うなら明日以降がいいとも言っていたわ」

確実な保証はないということか：：：：

「そうなんか?ならしかたねえか。なら、また修行に行つてくつぞ!!」

そう言つて、一誠は今日も家を飛びだしていくのだった。



しばらく走っていると、ふいに声が掛けられる。

「?? ドライグ、ドライグ…? 久しい…」

そんな声が聞こえ振り返る。するとそこにはゴスロリ?のような衣服を着込んだ少女が立っていた。

一誠もその少女の気配を感じ取り表情を引き締める。

「すげえ気を感じる。おめえいつたい…」

疑問をそのまま少女に問いかける。

「ん、我、オフィス。ドライグから感じる力、何? 我、知らない」

このオフィスと名乗った少女は、どうやら気力のことには気がついてるようだ。

「オラのコレか? こいつは気だ」

「キ…? キ、なに…?」

「オラが使ってるチカラだ。たしか、誰でも使えるはずだし、おめえもやってみれば使えんじゃねえか?」

それよりも…と、一誠は逆に問いかける。

「オーフィスはオラに何か用か…?」

オーフィスはコクリと頷き、話し出す。

「ん、ドライグ。我と一緒に、グレードレッドを倒してほしい」

「……………ん?なんだそれ上手いのか?」

なあ、界王さま。グレイプジュースってなにか知ってつか?

グレードレッドだ…ワシが知るわけなからう……………。

『相棒、グレードレッドというのは、次元の狭間に生息している最強のドラゴンのことだ。因みに今日の前にいる奴もそれに並ぶ龍神だ……………』

(ひえっ……………!!!?こんなカツコして龍なんか!!!?)

驚く一誠だが、一つの疑問が一誠浮かび上がる。

「けどよ、そのグレープフルーツを倒しておめえは何をしてえんだ？」

「グレープフルーツ……？ 我、静寂を求める、でもグレードレッドがいて住めない……」

静寂が欲しいと話す龍神少女。変わった完成を持っているようだ

「なあ、オフィス、それって楽しいか？」

「…… 楽しい？」

首を傾げながら聞き返してくる少女。どうやら意味を理解していないらしい

「ああ、一人じゃ何も出来ねえだろ？ セイジャク…… ってなんにも出来ねえんだろ？ そんなんじゃない？ つまんねえじゃねえか」

「楽しい…… つまんねえ？ 分からない」

少し頭を抱え考え込む少女、どうやら本気で分からないらしい…………。

「分からねえのか? うくん…。じゃあオラが教えてやる!!」

そう言う不思議そうな顔で一誠を見やるオーフィス。

「楽しい、ドライブ、教える?」

「ああ、一人じゃ出来ねえおもしれえこと沢山教えてやつぞ」

「ん、分かった、我、ドライブに教えてもらう…………」

そんなこんなで、一誠が龍神少女のオーフィスに『楽しい』を教えることになるのだった。

「そんじゃ、とりあえずオラんどこに来つか?」

しかし、オーフィスは首を横に振り…………

「いい…。我、帰る場所ある」

どうやら帰る場所はちゃんと確保できているそうだ、なら少し安心である。

「そっか、んじゃまた来いよ!! いつでも待ってっかんない!!」

「ん、また来る…」

そう言うとおーフィスは風のように消えていってしまったのだった。

「おし、ドライグ、いつものところに着いたらまた修行してくれ」

『………… 夢幻の龍神にあったというのにお前は相変わらずだな』

「アイツは強えけど、別に変なところなかつかん」

『そういうことでは… まあいい』

ドライグよ、コイツはこういうやつだ… 気にするだけ無駄だ…………

冥界の夏休み!!修行は後だ!!

sideナレーション(界王)

オーフィスという龍神に遭遇とのからその翌日の学校での事。

何時ものように授業が終わり、一誠が部室に顔を出していると……

「よお、赤神龍!!」

なぜか墮天使総督のアザゼルのいた。



「それで、どうしてアザゼルがこんなところにいるのかしら?」

そう聞くのは、一誠よりも後からきた部長のリアスだ。

あの後、来た部員達(一誠以外)は揃って呆けた顔をしていた。

「なに、セラフオールの妹に頼んだらこの役職だ。まあ俺は知的でチヨイケメンだからモテるぜ？　この女子生徒でも食いながら楽しくやらせてもらおうさ」
などと宣う墮天使総督……………。

「アザゼルのおっちゃん、女は食っちゃいけねえぞ？　食いもんじゃないかな」

「いや、お前そういうことじゃ…　はあ、まあいいや」

まさかの一誠の発言にアザゼルはなんとも言えなくなり果ては話すことを諦めた……………。



「つゝ…」

朝、自室のベッドで眠る一誠が何やら寝づらそうにしていた。

よく見ると、一誠の被る布団がモゾモゾと不自然に動いている。

「ふっ!!」

余りの寝ずらさに、一誠が目を覚まし、そして布団の違和感に気がついた。タオルケツトの中で動く何かは徐々に胸のところまで上がって来て――

「とちやく♪」

そこに現れたのは、昨日の今日で再び現れた朱乃であった。

その光景に一誠は首を不思議そうに首を傾げて問いを投げた。

「んん…?? なんでおめえがここに?」

しかも朱乃の姿は、一糸纏わぬ生まれたままの姿だった。

そんな姿の朱乃は妖艶に微笑み答える。

「うふふ♪昨日はグレイフィア様に邪魔されてしまいましたからこうして攻めてみたのですわ」

この副部長、最強の女王の折檻をもともしていない……

「なんてカッコしてんだ… 服着ねえと風邪引くぞ!!」

「えっ…?」

まさか、そんな風に言われるとは思ってなかったのか困惑したような声をあげる……。

後ろに近づくその気配の主にも気が付かず……

「姫島サマ? いったいナニをしているのですか…?」

背後には般若が立っていた。

「ヒッ…!?!」

再びその顔を青ざめさせる朱乃……。

「話は私の部屋で聞かせてもらいますね… こちらへ…」

有無を言わさぬその口調で猫のように朱乃を掴むグレイファイア。

「一誠様、朝から失礼致しました……」

その顔は何事も無かったように笑顔で……一誠に一礼をしてそのまま出ていった。
朱乃を掴んだまま……。

「…………… あ、あの…… お手柔らかに……？」

「…………… あれは手加減など微塵もする気はないだろうな……………
それをただ見守っていた一誠は一人つぶやく。

「…………… 風邪引かなきやいいけんど」
今はそこではないだろうお前……!?



それとはまた別の日……………。

「ん……？リアス、冥界うちに帰るんか？」

一誠達の学校は近く夏休みに入ろうとしていた。

「ええ、そうなの。毎年、夏には冥界に帰っているのよ。グレイフィア達も帰るでしょう？」

リアスの問いにグレイフィアは頷く。

「はい、あまり主の元を離れているわけいかなくはなりませんから」

「そういうええ忘れそうだったが、グレイフィアは魔王サーゼクス・ルシファアの眷属であつたな……。」

「そうなんか？　じゃあ、オラは修行しとくぞ!!　重力室も使えるようになったし、存分に鍛えるとすつか!!」

「そう言うと、リアスは呆れたように言った。」

「何言ってるのよイツセー。あなたにもついてきてもらおうのよ?」

「へっ…？オラもか…？」

そんなリアスの言葉に、一誠はキョトンとする。

「というより、冥界に帰るときは眷属の皆にはついてきてもらうことになっているのよ」

「そうだったんか、知らなかったぞ…」

「ああ、あなたには伝えてなかったわね…。とにかく、出発は明日よそれまでに準備はしておいてちょうだい」

「分かった！」

「一誠様、くれぐれもサーゼクス様達にご迷惑をお掛けしないようお願い致します」

「お、おお… わかったよ…」

余程心配されているのだな……



その日の放課後。自室にて……

「そんでオラも冥界に行くことになっちまって驚れえちまったよ……」
仲間たちに朝のことを話していた。

「はは、イツセーくんは相変わらずだね……」

「…………… 相変わらずの戦闘バカですね」

「でも、それが師匠のいいところだと僕は思いますう！」

木場は苦笑し、小猫は辛辣な言葉を投げ、ギヤスパーは師のフォローに回っている。

と、そんなことを話していると……。また一人、部屋に入ってくる者がいた。

「俺も冥界に行くぜ!!」

それは学園に教師としてやってきたアザゼルであった。

「アザゼル!! いつの間に来たの?」

「ついさっきだ、普通に玄関から入ってきたぜ? 気がつかなかったのか?? まあ、その赤神龍は勘づいてたみたいだがな……」

「おお、気配で分かるかな!!」

「気配も消してたはずなんだが……。まあいい、いつかお前にも悟らせずに近づいてみせるや」

そういつて、一つ咳払いをした後……

「ともかく、俺もおまえらと一緒に冥界に行くからよろしくな」

と、そんな感じでアザゼルの冥界行きが決定した。



翌日、一誠たち一行は駅のあるエレベーターの前に来ていた。

「ここから下に降りていくのよ」

リアスがそう言うと、一誠がそれを見て疑問を呟く。

「なありアス、このエレベーター上にしかいかねえって書いてあんど？ どうやって降りんだ？」

するとリアスは小さくウインクをして悪戯っぽく話す。

「まあ、見ていてちょうだい」

そう言うとリアスはエレベーターのボタンのしたの方にある絵をタッチした。

すると、どうだろう……。ポオンツ!!という音と共にエレベーターが開いたのだ。驚く一誠にリアスは悪戯が成功したように笑い

「驚いた? さあ、これで行けるわ、皆行くわよ」

『はい!』

そのまま一行はエレベーターに乗り込み、下へと降りていった。



暫く降りたところで、エレベーターが停止し、扉が開く。

外にあったのはやたらと広い人工的な空間であった

地下の大空洞というのはいかようなことを言うのかもしれない……。

まさか、この町の地下にこんながあるとは思えない……。

「それじゃあ、三番ホームまで行くわよ」

リアスの案内に従い、ホームまで歩いて行くが、これらを初めて見る一誠には、視界に映るもの全てが新鮮で驚きだった。

「これよ、さあ、乗ってちょうだい」

そして案内された先にあつたものは一台の機関車だった。

列車にはグレモリー所有とデカデカと書かれている。

「ひえっ……でっけえ!!」

一誠が驚いていると、グレイフィアが近づき教えてくれる。

「一誠様、この列車はグレモリー家が所有している物です。グレモリー領は広いですから、こうして移動しているのです」

「へえ〜 リアスの父ちゃん達はすげえんだな!!」

まるでブルマやミスター・サタンみてえだ……と関心する一誠に、仲間たちは知らない名前に疑問符を浮かべている。

その後、一誠たち一行は、列車に乗り込み冥界へと旅立つのだった。

冥界にきたぞ! どこでも変わらない兵藤一誠

side界王(ナレーション)

列車が走り出して少し、列車が暗がりの中を進む。

その列車の通路で、一誠が指で逆立ちしながら腕立て伏せをしている。

「ふっ…! ふっ…!! ふっ…!!!」

「あのお、イツセーさん? ここでも修行ですか?」

それを見ているアジアが不思議そうに問いかける。

「ああ、ふっ… 重力室は使えねえけど、修行は続けねえとな」

「あらあら、うふふ、イツセー君はどこにいても変わりませんわね」

それを聞いた朱乃が一誠を見て微笑む。

「…： そういえば、冥界にはどのくらいで着くんですか？」

不思議そうに一誠を見ていたアーシアが不意にそう聞く。

「一時間ほどで到着します。アーシア様」

「この列車は次元の壁を正式な形で通過して、冥界にたどり着けるようになっていきますから」

グレイフィアの補足をするように朱乃がそう説明を入れる。

「そうなんです!!」

その話をしている間も、一誠はただひたすらに筋トレを続けていた。



「列車が緩やかに速度を落とし、静かに停止したのを見てリアスたちが立ち上がる。

「一誠様、到着しましたので降りますよ」

「おっ? もう着いたんか? 分かった!」

そうして一誠が立ち上がると、アザゼルは立つ様子が見られない。

「ん? おっちゃんは降りねえのか?」

「ああ、俺はこのままグレモリー領を抜けて、魔王領の方へと行く予定だ。サーゼクス達と会談があるからな。いわゆる『およばれ』だ。終わったらグレモリー本邸に向かうから、先に言って挨拶を済ませてこい」

「どうやらトツプらしく忙しいらしい……。」

「わかった、んじゃまたなおっちゃん!!」

「お兄様によろしくね、アザゼル」

「ああ、それとイツセー、おっちゃんいうな」

改めて先生を抜かしたメンバーで駅のホームに降りた瞬間――

『お帰りなさいませ、リアスお嬢様!』

『そして、ようこそお越しくださいました神龍様!!』

怒号のような声とともに花火が幾つも打ちあがり、銃を持った者たちが空に向けて一斉に放つたり、楽隊の者たちが楽器を高らかにならし始める。

「ありがとう、みんな。ただいま、帰ってきたわ」

その間にグレイフィアは馬車の準備をしていた。

「皆様、馬車の準備が整いました。こちらにお乗りください」

「一誠様、ここからは馬車での移動になります…。複数台用意しましたので、一誠様は私と乗りましょう」

「グレイファイアとか? わかった!!」

その提案に異議を唱える者はいなかったが、全員が悔しそうに一誠を見ていた。

そうして全員を乗せた馬車が、グレモリー本邸へとむかって動き始めたのだった。

謎のちびっこミリキヤス、リアス母親に挨拶だ！

sideナレーション（界王）

馬車に乗られてしばらく揺られていると、外に建造物が見え始める。

「おつ、見えてきたぞ!! でっけえ!! あの城なんだ?」

「アレがグレモリー本邸です。一誠様」

グレイフィアの説明がはいり、建物が近づいてくる。

少しして、建物の前へと馬車が止まり、ドアを開けられ一誠達が降車する。

時を同じくしてリアス達も降りてきた。

降りた先にあつたのは、道の両脇にズラリと並んだグレモリー家の使用人が整列して
いて、足元にはレッドカーペットが敷かれている。

「お嬢様、一誠様、皆様、どうぞ、お入りください」

グレイフィアに促され、一誠達は屋敷に入っていった時だった。小さな人影が現れ、部長のほうへと駆け込んでいく。

「リアスお姉さま!! おかえりなさい!!」

紅髪のかわいらしい少年がリアスに駆け寄り抱きつく。

「ミリキヤス!! ただいま。大きくなったわね」

リアスもその少年を抱き締めていた。

「部長さん、その子は？」

アーシアが聞くと、リアスその少年を紹介してくれた。

「この子はミリキヤス・グレモリー。お兄様、サーゼクス・ルシファー様の子供なの」

ミリキヤスと呼ばれた少年はサーゼクスの息子であるらしい。

「ほら、ミリキヤス。挨拶をして」

「はい、ミリキヤス・グレモリーです。よろしくお願いします」

「ん？ サーゼクスの名前ってルシファーだよな？ なんてリアスと同じ名前なんだ？」

『それはな相棒、悪魔には襲名制度がある。だから、父の旧姓を使っているのさ』

「へえ、そんでグレモリーか!! おつす、オラ、兵藤一誠。リアスの仲間だ。よろしくな
ミリキヤス!!」

一誠が自己紹介をすると、ミリキヤスは驚きながらも目をキラキラとさせた。

「どうかしたんか？」

一誠が首を傾げていると、ミリキヤスは興奮した様子で話始めた。

「あ、あなたがあの神龍様なんですか!?! お会いできて光栄です!!」

どうやらこんな子供にまであの時の噂は広まっているらしいな、悟空よ

『そうっばいな... そんなに有名なんかなオラ...』

「おめえ達にも知ってもらえてオラも嬉しいぞ、ありがとな」

一誠が軽く頭を撫でると、嬉しそうに撫で受けている

「リアスお姉さま!! 僕、神龍様に頭を撫でてもらいました!!」

「良かったわね、ミリキヤス」

そうして先に進んだところで階段が見えてきた

「あら、リアス。帰って来てたのね」

そんな声がかから聞こえ、上を見る。

すると、階段を上りきったところに二人の女性がいた。

一人はリアスに良く似た顔とスタイル。唯一違うところと言えば、亜麻色の髪に、リアスより少し目つきが鋭いところだろう。

もう一人はグレイフィアによく似た銀髪にそっくりの顔。そしてメイド服を身にまとっている。

どこから見てもグレイフィアそっくりな人物だ

唯一違うところは、優しそうに微笑んでるところか

「ただいま戻りました。お母様、お義姉様」

リアスがとんでもないことを言う。

「いいっ!? おめえ達のどつちかが、リアスの母ちゃんなんか!? 若すぎねえか?」

「ちよつとイツセー!! 失礼よ!!」

驚く一誠に慌てたリアスが慌てて止めに入る……が

「あら、若いだなんて、うれしいことを仰りますのね、神龍様……」

「へっ……? お、お母様?」

「リアス、その方は私たち悪魔……いいえ、世界を救ってくれたのです。その御恩に比べたら、私への不敬など大したことではありませんよ」

亜麻色の髪の方の女性がそう言うと、リアスは何も言わなくなってしまうた。

それを横で見て微笑んでいた女性が口を開く。

「ようこそいらつしやいましたね、神龍様。お会いできて光栄ですわ、私はサクナ。：。サクナ・ルキフグスと申します」

「あ、ど、どうも。：。オラ、兵藤一誠だ。：。です!」

「クス 気を使わなくていいのですよ、貴方の話しやすい方でお話ください」

「お義姉様!」

「いいんか? ならサクナって呼ばせてもらおうぞ! オラ兵藤一誠だ、よろしくな!!」

「ふふ、その方があなたらしいですね、お姉様もそんなあなたに惹かれたんでしようから」

そう言つてサクナは優しく微笑む。

「私からも。：。初めまして。リアスの新しい眷属の皆さんに神龍様。リアスの母のヴェネラナ・グレモリーです。それと、よく帰ってきたわね。：。：。グレイファイア」

「ご無沙汰しております…。ヴェネラナ様…。サクナ……………」

少しそうして言葉を交わすと、ヴェネラナは一誠の方を見て声を掛ける。

「こうして言葉を交わすのは初めてですわね、サーゼクスからよく話は聞いていましたが、話通りで逞しい体をしているのね」

「サーゼクスがオラのこと話してたんか？」

「ええ、神龍様と腕くらべしたことや、力の制御の方法を教わったと…。それに、ライザー戦も拝見しました。なにより、あなたは冥界でも有名人なのよ？」

「へっ…。？有名人？」

一誠の不思議そうな言葉に、ヴェネラナは近くにいた召使いに何かを持ってこさせた。

召使いがとって来きたのは新聞だった。

ヴェネラナは新聞を広げて一誠に見せる。

「ほら、この記事にあなたのことが書かれていますわ

『三大勢力トップ会談、和平の立役者はリアス・グレモリーの兵士であり、兵藤一誠!!!』つて」

「あのコカビエルを倒し、歴代最強と称される白龍皇を倒してテロを防いだあなたの武勇は今や冥界全体に広まっていますわ」

「へえ〜………つて………」

一誠が少し見たあと………

「なっ………なんじやこりやあああああつ………」

本邸中に一誠の叫びが響き渡ったのだった。

!!!!!!
」

ヴェネラナの特訓!! マナーを覚えよ兵藤一誠!!

sideナレーション(界王)

先の新聞騒動から、一誠達は一度部屋を案内され、現在夕食の最中だった。

「……っ! うめえなこれ! こいつもうめえぞ!!」

ガツガツと一誠が用意された食卓に並べられた物凄い勢いで平らげていく。

その様子を見てリアス、朱乃、裕斗、小猫、アーシア、ゼノヴィアが唾然としながら一誠を見ている。

オマケにヴェネラナ、ミリキヤス、サクナ、リアスの父、ジオテイクスが、そして使用人達も唾然としている。

グレイフィアだけはそんな一誠をにこやかに見ている。

「と、もっと料理を持ってきてくれ、足りなくなりそうだ」

我に返ったジオティクスが使用人たちに慌てて追加の料理を頼む。

そうして指示を飛ばし、ひとつ咳払いをすると、朗らかに話し出す。

「うむ。リアスの眷属諸君、そして神龍殿、ここを我が家と思ってくれればいい。冥界に
来たばかりで勝手がわからないだろう。欲しいものがあつたら、遠慮なくメイドに言っ
てくれたまえ。すぐに用意しよう」

そんなことをにこやかに言うと、再び一誠の方を見て話し出す。

「ところで、神龍殿。いや、兵藤一誠君」

「バクバクバクツ!! ん? んむむ? (なんだ?)」

「一誠様、口の中のものがなくなってからお話してください」

グレイフィアの言葉に一つ頷き、ゴクンツと嚙んでいたものを飲み込み話し出す。

「いやー悪い悪い、で、なんだ？リアスの父ちゃん」

「うむ、ご両親はお変わりないかな？」

「父ちゃんたちか？ ああ、元気にしてっぞ？ めえにリアスの家に行くつつたらお土産頼まれちまつたくれえだ!! 後でつけえ家にリフォームしてくれてありがとうつてよ」

「ふむ。お土産か。なるほど」

「うむ、兵藤一誠君の御両親宛てに城を一つ用意しろ」

「旦那様、御用でしょうか？」

「うむ、兵藤一誠君の御両親宛てに城を一つ用意しろ」

等ととんでもないことを言い出した。

「はっ。西洋式でしょうか、それとも和式でしょうか」

執事も普通に答えている。これにはさすがに一誠も……

「いいっ!? いや、リアスの父ちゃん。そんなんもらつてもオラたち困っちゃうよ」

一誠が慌てて止め、ヴェネラナも話に入ってくる。

「あなた、日本は領土が狭いのですから、平民が白持つなんて不可能ですわ」

そう言つてジオテイクスを止めてくれる。

「なんと、日本は確かに狭かったな。ふーむ、城がだめならば何が良いのだろうか……」

「いいんだつてリアスの父ちゃん。父ちゃん達には菓子みたいなやつのかき混ぜとかでいい」

「なるほど」と、納得を見せるジオテイクス。とりあえず、城の進呈は免れたらしい。

「そうそう。兵藤一誠君。私もイツセー君と呼びたいのだがいいかね？」

ジオテイクスが不意にそんな話をし始めた

「ん？ 別にいいぞ？ オラ皆から言われてるかな」

確かに、悟空、お主サーゼクス達魔王にもそう呼ばれておるからな。

『はははっ、まあな!!』

一誠がそう答えると、ジオテイクスとヴェネラナは凄く喜んでいた。

「では、イツセー君。君が冥界で話題となっているのは知っているかな？」

「… ああ、まさかあんなことになってるとは思ってたぞ……」

そう、一誠はなぜか神龍悟空としての影響か、冥界でも有名人となっていた。

新聞だけでなく、冥界のテレビ番組でも三大勢力の和平と共に一誠、そして世界を救った英雄、神龍のことについて語られていた。

一誠とヴァーリが戦っている映像が流され、テロを防ぎ和平を無事に成立させた立役者としてニュースキャスターが紹介されていた

中々の目立ちっぷりである……。

そしてその原因の犯人もわかっている

テレビに出演していたサーゼクスとセラフオルード。

魔王二人が会談に出席した代表者として、語っていたんだけど、その時に一誠のことをそれは良く話していたらしい。

それがテレビや新聞で大きく取り上げられて、今に至るといのが、事の顛末であった。

「オラのことをまさか話してたとは思わなかったぞ……なんでオラが神龍なのを知ってんのか不思議だったんだ」

「いやいや、これは当然の結果だと私は思う。実際、君の活躍はかなりのものだ。イツセーくんとしても神龍としても……。」

ジオテイクスさんの言葉に全員がうんうんと頷く。

一誠だけはよく分かってないのか首傾げている

「オラは許せねえ奴がいてそいつらを倒さねえとヤバいと思ったから倒しただけだ、そいつらとの戦いも楽しかったしな!!」

それを聞いてジオテイクスは満足そうに頷いて

「イツセー君、これからもリアスヤグレイフィアのこと、よろしく頼む」

「ああ、リアスもグレイフィアも、仲間達もオラが守ってみせつき」

一誠がそう答えるとジオテイクスとヴェネラナは満足気な笑みを深めた。
顔を真っ赤にしたリアスと顔を逸らしたグレイフィアを除いて…………。

リアスの実家に到着した翌日のこと

「つまり、上級悪魔にとって社交界とは——」

一誠は朝から悪魔社会、特に貴族が何たるかについて勉強させられていた。
ヴェネラナが用意した学びの場なのだが…………

なぜか一誠一人のみ。

冥界について何も知らないのは事実なのでいい機会なのだが…………

一誠は元から勉強というものが苦手である、故にノートは愚か、話を聞くだけで精一

杯であつた。

隣の席にはミリキヤスもおり、一緒に勉強している。

小さいのに真面目に授業を受けておる。

因みに、他のメンバーはグレモリー領の観光に行っている。

「神龍様、悪魔の文字はご存じでしょうか？」

「へっ? いや、知ら…ないです」

「なるほど。では、わかりやすい様に教えていきますので、もう少し頑張ってください」

「お、おう…」

そう。

来た時から、グレモリーのメイドや執事、それにこの教育係の人まで俺のことを『神龍様』と呼ぶ。

「——と、ここでこうなって…。と、大丈夫でしょうか神龍様」

一誠は限界そうだ……。

ガチャリとドアを開けて入ってきたのはヴェネラナだった。

「おばあさま!」

ミリキヤスがヴェネラナに気づいて嬉しそうに声を上げる

傍から見れば祖母と孫ではなく、姉と弟にしか見えない。

しかし、それは悟空も同じことであつた故に一誠は驚かない。

「二人とも勉強は捗っている? って、イツセーくんはダメそうね!」

机に突つ伏しかけている一誠をみて困つたように笑いながら問いかける。

「あらあら、如何に世界を救つた英雄様でも苦手なことがあるみたい……。ですが、それでも一生懸命に覚えようとする姿勢と覚悟は見てとれます」

そう言うのと、ヴェネラナはお茶を淹れる。

一誠はそれを美味しそうに飲んでゐる

「もうすぐリアス様が帰ってきます。今日は若手悪魔の交流会の日ですから」

聞き覚えのない言葉に一誠が茶を飲む手を止める。

それを見たヴェネラナは快く説明をしてくれる

若手悪魔会合とはリアスと同世代の若手悪魔が一堂に会するらしい。

全員が名門、旧家といった由緒ある貴族の跡取りが上のもとに集まって挨拶をすると説明してくれた。

その会合には主だけでなく、眷属も参加しなければならないそう
勉強に会合、それから修業……。

悟空よ、冥界に来てから忙しそうだな。

!!
若手悪魔会合!! リアスの従兄弟サイラオーグ・バアル

sideナレーション（界王）

リアスたちがグレモリー領の観光から戻ってきてすぐ、一誠達は例の列車に再び乗り込み魔王領へと移動していた。

その道中、何度か長距離ジャンプ用の魔法陣を潜り抜けつつ、なんとかたどり着いた。三時間ほど電車に揺られ、ようやくたどり着いた魔王領の首都、『ルシファード』にて、一誠達は、地下鉄に乗り換えるため、駅のホームに降り立った時だった。

「キヤーツ!! リアス姫さまあああつ!!」

「おお……あれが古の英雄、『神龍様』の生まれ変わり……………」
「なんと立派な出立だ……。威厳があるな……………」

リアスを見て向けられる黄色い声援と、一誠に向けての感嘆と尊敬の声が投げられる……。

「あらあら、今回は部長だけじゃないんですね、イツセイ君、人気者のようですね」
「そうみてえだ。オラ、こんなに知られてるなんて知らなかったぞ……」

『神龍様』は冥界に限らず有名だからね。古の大戦時に強大な二天竜を圧倒的実力で倒し、三勢力を助けた、たった一人の最強の英雄……。僕もこういう形でなければ一目見た
いと思うよ」

一誠の言葉に木場が説明してくれる。

「困ったわね、騒ぎになる前に、急いで地下の列車に乗りましょう。専用の列車は用意してあるのよね?」

そうリアスが黒服の連れ添いの男に尋ねる。

「はい、どうぞでいちららこ」

そうして黒服の案内で一誠達一行は別の列車へと乗り込んだ。

リアスに対する黄色い悲鳴と一誠に対する感嘆や有難がる声を背に受けながら一誠たちの乗った地下鉄は走り出すのだった。



地下鉄を乗り換え、揺られること五分……。

一誠達が降り立ったのは都市内の一番大きな建造物の地下のホームであった。

どうやら若手悪魔、旧家、上級悪魔の上役などが集まる会場がこころしい

ボディーガードの黒服たちはエレベーター前までしか随行出来ないようそこで待機となった。

リアス先導の、エレベーターに乗り込んでいく。

「皆、もう一度確認するわ。何が起こっても平常心でいること。何を言われても手を出さないこと。——上にいるのは将来の私たちのライバルたちよ。無様な姿は見せられ

ない。得にイツセー、あなたはきつと楽しくなってしまうかもしれないけれど、間違っても喧嘩は売らないで」

リアスが切実にイツセーに懇願する。

「わかってつき、大人しくしてるって…」

「私もあちらに着き次第、離れないとなりません…：どうかくれぐれもお願いします。」
二人からの念押しだが、はたして一誠が大人しくしてるかどうか…：…。

と、そこでエレベーターが停止し、扉が開き、リアス達はエレベーターを出る。
その先では使用人らしき人物がおり、一誠達に会釈する。

「ようこそ、グレモリー様、そして神龍様、お待ちしております。こちらへどうぞ」
そう告げ、歩き出す使用人の後を追って一誠達も歩き出す。

「では、皆さま、私はここで一度別れます」

「ああ、またな!! グレイファイア!!」

「一誠様、間違つてもここで暴れないでくださいね? あなたの力なら一撃で崩れ去つてしまうので」

そこでグレイファイアが離脱していく。

最後まで一誠を心配しながら離れて行くあたり、相当心配していると見える……。少し進むと、通路の先の一角に複数人の人影が――。

「サイラオーグ!!」

どうやら知り合いがいたらしいリアスが、その内の一人だろう名前を呼ぶ。

呼ばれた本人も、リアスのことに気がついたのか、リアスの元へと近づいてきた。

黒髪で短髪。プロレスラーのように筋肉質な体付きの、野性的な風貌の青年だ。

その風貌はどこことなく魔王サーゼクスを彷彿とさせる

「アイツ強えな… すぐえ気を感じる…」

一誠はその気配を感じとったのか、その瞳に闘志の炎が宿り始める。

「久しぶりだな、リアス」

そう言つてサイラオーグと呼ばれた青年はにこやかにリアスと握手を交わす。

「ええ、懐かしいわ。変わりないようで何よりよ。初めての者もいるわね。彼はサイラオーグ。私の母方の従兄弟でもあるの」

「俺はサイラオーグ・バアル。バアル家の次期当主だ。お会い出来て光栄です。神龍殿」

「あれ? オラのこと知ってんのか?」

「ああ、貴方のことを冥界で知らない者はいないさ、何せ、伝説の神龍殿なのだから」
「どうやら一誠のことは冥界中に広まっているようだ。」

「ははっ、そっか!! オッス!! オラは…じゃねえや、はじめまして…ワタシは、兵藤一誠だ…です」

ヴェネラナ達からの特訓が少しは効いているらしい一誠がたどたどしく挨拶する。

「ははは、そんな畏まらないでくれ、神龍殿はこの冥界の誰よりも上なんだ、そう畏まられると俺達が困ってしまう」

「そうか？　なら普通にいかせてもらおうぞ!!　サンキュー!!」

そう話す二人の横でリアスが頭を抱えている。

「ああ、それでこそ神龍殿だ。いずれは貴方にも挑んでみたいものだ」

「オラもだ!!　グレイファイアやリアスにとめられてなかったら戦いを申し込んでたかもしんねえ」

「ははははっ!!　そうかそうか、かの伝説の神龍殿にそう言ってもらえるとは、俺も捨てたものではないらしい」

嬉しそうに笑うサイラオーグに、漸く立ち直ったリアスが話題を帰るように問いかける。

「そ、それで……こんな通路で何をしていたの？」

「ああ、くだらんから出てきただけだ」

「……くだらない？ 他のメンバーも来ているの？」

「アガレスもアスタロトも既に来ている。挙句、ゼファードルだ。着いて早々ゼファードルとアガレスがやり合い始めてな」

心底嫌そうに、ウンザリした顔でサイラオーグがそう話す。

リアス達が疑問符を浮かべていると、不意に轟音と共に建物が大きく揺れる。

リアスは気になったのか、躊躇いもなく音の大きな扉へと向かう。

「まったく、だから開始前の会合などいらないと進言したんだ」

サイラオーグも大きく嘆息しながら自身の眷属を連れ、リアスの後に続く。

そして二人と眷属達が、開かれた扉の向こうで見たのは衝撃の光景であった。

「おめえ達!! ダメじゃねえかこんなところで暴れんのは!!」

そこには先程まで共に居たはずの一誠が、ヤンキーのような男と、眼鏡を掛けた女性とその眷属の者達の一触即発の間に入って止めていた。

「ああ!?　なんだてめえ!!　邪魔するんじゃねえ、ぶつ殺すぞ」

「やめとけ、おめえはオラには勝てねえ」

「!!　ふぎけんなあ…　っ!!」

一誠目掛け飛びかかってくるヤンキー男

対する一誠は、スツと男に手を向け……

「ハッ!!」

ドオツ!!　と風の吹き荒れ、ヤンキー男が吹き飛んでいく。

吹っ飛んだヤンキーは壁に勢いよく激突して動かない。

どうやら気合砲の衝撃で気絶したらしい。

「おのれ!!」

「飛び入りのくせに!!」

ヤンキー男たちの眷属達が飛び出しそうになるが……

「まずはアイツを運んでやれ、ここで喧嘩するんがやるべき事じゃねえだろ、それでもやるってんなら…… おめえ達もぶっ倒すぞ」

その一言で眷属達は動きを止め、気絶したヤンキー男を運んでいった

「凄いな……。まさか、ここで神龍殿の力を見られるとは……」

サイラオーグがその様を見て関心する。

「まさか手も触れずにゼファードルを無力化するとは、俺にはまだ難しい領域だ……」

そう話すサイラオーグの瞳には先程の一誠と同じように闘志の炎がやどっていた

一誠大絶賛!! ソーナの夢と悪魔の学校

あの後、気を失ったゼファードルを除いた各家同士の挨拶が終わった後、一誠含むグレモリー眷属一行使用人に案内され、場所を移していた。

一行が案内されたところは異様な雰囲気の会場だった。

一誠達眷属悪魔は主を先頭にして一列に並んでいる。

暫くすると、老齢の悪魔の一人が威圧的な声音で話し始めた。

「よくぞ集まってくれた、次世代を若き悪魔たちよ。この場を設けたのは一度、この顔合わせで互いの存在の確認、更には将来を競う者の存在を認知するためだ」

「早速やつてくれたようだがな」

老人風の悪魔がそう言った後、その隣に座る別の悪魔が悪魔が皮肉を言う。

その言葉を聞いてから、サーゼクスが口を開く。

「君たちは家柄も実力も共に申し分ない。だからこそ、デビュー前に互いに競い合い、力を高めてもらいたいと考えている」

そんなサーゼクスの言葉を聞き、サイラオーグが拳手し問いかける。

「我々、若手悪魔もいずれば禍カオス・ブリゲートの団との戦に投入されるのでしょうか？」
等と直球な質問を投げかけている。

「私達としては、できるだけ君たちを戦に巻き込みたくはないと思っている」

その言葉にサーゼクスはそう答える。

だがサイラオーグはその答えに納得がいかないようでさらに問いかける。

「なぜです？ この場にはテロ組織と戦い、生きて帰った者達もいます。我らとて悪魔の一端を担うもの。冥界のため、尽力を尽くしたいと…。」

「サイラオーグ。君のその勇氣は認めよう。しかし、無謀だ。なにより、君達ほどの有望な若手を失うのは冥界にとって大きな損失となるだろう。理解してほしい。君達は我々にとって宝なのだ。だからこそ、じっくりと段階を踏んで成長してほしいと思っ
ている」

この言葉にサイラオーグはと洩々ながらも一応の納得はしたらしく、「分かりました」

と引き下がった。



その後、悪魔達の長話や魔王からの今後のゲームについての話が続けられた。

余り関係のない一誠にとっては理解不能な話ばかりだったからか終始眠そうにしていた。

「さて、長話に付き合わせてしまって申し訳なかった。なに、それだけ君達に夢を見ているのだよ。最後に君たちの目標を聞かせてくれないだろうか？」

サーゼクスの不意の問いかけに最初に答えたのはサイラオーグさん。

「俺は魔王になることが夢です」

「またも堂々と言い切るサイラオーグ」

「老齢の悪魔達も彼の言葉に感嘆の声を漏らしている。」

「大王家から魔王が出るとしたら前代未聞だな」

一人の悪魔がそう言う。

「俺が魔王になるに相応しいと冥界の民が感じれば、そうなるでしょう」

もう何度目かの堂々とした言葉

こやつは中々度胸あるようだな……

次にリアスが答える。

「私はグレモリーの次期当主として生き、レーティングゲームの覇者となる。それが現在の、近い未来の目標ですわ」

初めて明かしたリアスの目標はゲームの覇者らしい。

その後も若手の人が目標を口にし、最後にソーナの番が回ってきた。

「私の目標は冥界にレーティングゲームの学校を建てることです」

その言葉を聞いた悪魔達は眉をひそめていた。

「レーティングゲームを学ぶ学校ならば、すでにあるはずだが？」

「それは上級悪魔や特例の悪魔のための学校です。私が建てたいのは平民、下級悪魔、転生悪魔、全ての悪魔が平等に学ぶことのできる学校です」
眷属である匙も、誇らしげにソーナの夢に聞き入っている。

「いいじゃねえか!! 色んな奴が学べる学校だろ? 流石ソーナだな!!」
そう声を上げたのはほかでもない一誠だ。

「うんうん!! ソーナちゃんは天才なんだから!!」
セラフオールも大絶賛で大喜びである。

「う、うむ… 神龍殿が言うのだ、とても立派な目標だ…」
と、老齢の悪魔達も苦い顔をしながらなんとか言葉を送っている。
どうやら余程英雄の怒りは買いたくないようだ、賢明な判断である……………。

「よし、ではゲームをしよう。もちろん若手同士のだ」
そうしているとサーゼクスが不意に口を開いた。

その言葉に皆が注目する。

「リアス、ソーナ、戦ってみないか？」

その言葉に眷属たちが驚愕する。

「……………」

「……………」

リアスとソーナも顔を合わせて目をぱちくりさせているが、サーゼクスは構わず続ける。

「元々、近日中にリアスのゲームをする予定だったアザゼルが各勢力のレーティングゲームファンを集めてデビュー前の若手の試合を観戦させる名目もあったものだからね。だからこそ、ちょうどいい。リアスとソーナでゲーム執り行ってみようではないか」

それを聞いたリアスとソーナは互いに挑戦的な笑みを浮かべる。

「公式ではないとはいえ、私にとっての初のレーティングゲームのあいだがあなただなんて……運命を感じてしまうわね、リアス」

「競う以上は負けないわ、ソーナ」

その後、戦いの日付も決まり、一誠達は会場を後にしたのだった。

出発の際、セラフオルーから……

「ドライグくん、また今度アートのしようね☆」

と、セラフオルーからの爆弾を投下されたりする場面もあつたりしたとかしないとか……

修行だグレモリー! 亀仙流修行の開始!!

sideナレーション (界王)

「そうか、初戦はシトリー家か」

グレモリー家本邸に戻ってきた一誠たちは、同じく戻ってきていたアザゼルとそう話していた。

広いリビングに集合し、アザゼルとともに一誠たちは先程の会合の話聞いていた。

「対戦まで約二十日間ってどこか…。」

話をしながらアザゼルが何やら計算を始める。

「なあ、修業すんのか?」

一誠の問いにアザゼルはああ、と眩き頷く。

「今回のゲームのこともあるが、禍カオス・ブリゲードの団のこともある。サーゼクスは若手を巻き込みたくないと言ったそうだな。これには俺も賛同している。……だが、敵さんにとってはそのようなものは関係ないからな」

アザゼルの言う通り、禍カオス・ブリゲードの団にとってはグレモリー達が若手だろうがなんだろうが関係はない。

いつ襲ってくるか分からない以上、戦いに備えるのは大事なことだ。お主も気を抜くなよ悟空

『ああ、そうだな、分かっているさ界王様！』

「修業は明日から始めるぞ。修行については一一誠、お前が見ろ」

アザゼルの言葉に一誠に皆の視線が集まる。

「へっ？ オラがか？」

「俺が見るよりお前が見たほうが適任だろう」

それを聞いて、木場がアザゼルに尋ねる。

「僕達としては願ったり叶ったりですけど、それでは相手側からしたら不公平なのでは？」

だが、アザゼルは「いや」と首を横に振る。

「それくらい別にいいだろ。一誠はリアスの眷属なんだし、俺は悪魔側に研究のデータも渡してる。それに、天使側もバックアップ体制をしているって話だ。あとは若手悪魔連中がどれだけ自分を高めるか、その心次第だ」

それに、とアザゼルは続ける。

「他のやつらは俺と副総督のシエムハザも各家にアドバイザーを与えからな。もしかしたらお前たちよりも俺たちのアドバイザーの方が役に立つかもな! ハハハハ!」
「どうやら顧問のアザゼルは敵側に回るらしい。」

一誠が修行を見るなら当然の対応だろう……。

「まあ、そういうことだ。修業は明日から。今日は全員のんびりしてろ」

アザゼルのこの言葉で今日のミーティングはお開きとなった。

『なあ界王様、オラが修業を見るってどうすりやいいんだ?』

ん? そんなものお主がいつもしている重りの服と組み手すればいいだろう

『あそつか! さすが界王様!!』

ただし手加減はするのだぞ?

『そのくらい分かかってっさ...』

などと話していたらそこへグレイファイアが現れ言った。

「皆様、温泉のご用意が出来ました...。」

どうやら入浴の時間のようだ。

「それと、一誠様はお待ちください」

「へっ.....」

キョトンとする一誠にグレイファイアはただ小さく笑むだけであった。



「なんでオラだけ一人なんだ？」

あの後、リアスたちが風呂から上がった後、ようやく一誠の番が来た
広い浴場に一人、一誠が頭を洗っていると……

カララ…。と扉を開ける音がした。

(ん？ 誰が入ってきたんか？)

と頭を洗いながら気配を探る一誠。すると……

「一誠様、お背中をお流しいたします」

そう背後から声をかけたのは、一誠の入浴を止めた張本人、グレイフィアであった。

「いつ…？ グレイフィアか？ いいよ別に、オラ自分で洗えっからさ」

「遠慮なさらないでください。私の心は既に一誠様だけのもの…。それに、私がそうしたいのです」

「ええ…… 仕方ねえなあ、分かったよ」

澁々ながら一誠が出した許可にグレイフィアはわかりやすく顔を明るくする。

「ありがとうございます一誠様。それでは失礼いたします。」

そう言つて一誠の背中を擦りだすグレイフィア

ムニユンムニユンと時折一誠の背中に二つの双眸が当たるも気にした様子もなく、いや、敢えて当てているようにその背中や体を洗つていく。

「なあ、おめえそんなに乳当てなくてもいいんじゃないか？」

「この方がよく洗えるかと思ひまして、ハツ…… 一誠様はこういうのはお嫌いですか？」

「ん？ 別に嫌いっちゆうわけでもねえけどよ……」

「良かった…… では続けていきますね」

それからしばらくグレイフィアの体密着洗身は続き、一誠は困惑しながら入浴を済ませるのだった

その様子を遠く天より見ていた本物の一誠は悔しそうにしていたとかなんとか……



翌日のこと

リアスを含めた眷属達はグレモリー家にある広い庭に集まっていた。

一誠による修行内容を聞くためだ。

昨日の件で眷属の女子達は不満そうな顔をしているが……

そんなことつゆ知らず、メンバーが揃ったことを確認した一誠が口を開く。

「よし、全員揃ったみてえだな。今から修行を始めろぞ!!」

「よろしくお願いするわ、イツセー。ところで何をするの?」

リアスが修行の内容を聞いている。

「今回は二十日くれえしか時間がねえかな、おめえたちにはオラがいつも着てるみてえな重りをつけてオラと組手だ」

それを聞いて全員の顔が引き攣る……………

「イツセー君と組手か…」

「ああ、これは地獄になりそうな予感しかないな…」

「私、もつともつと強くなります!!!!」

「師匠と戦うなんて…ボク、頑張りますう!!」

「あらあら、昨日の頼み事はこのためだったんですね」

「嫌な予感しかしないけれど、よろしく願いますわイツセー」

各々が覚悟を決める中……………

それは地響きを鳴らしながら一誠の目の前に降り立った。そこに降り立ったのはドラゴンだった。

「アザゼル、よくもまあ悪魔の領土に堂々と入れたものだな」

「ハッ、ちゃんと魔王様直々の許可を貰って堂々と入国したぜ？ 文句でもあるのか、タンニーン」

「どうやらアザゼルとこのタンニーンと呼ばれたドラゴンは知り合いのようだ」

「ふん。まあいい。サーゼクスの頼みだと言うから特別に来てやったんだ。その辺を忘れるなよ、墮天使の総督殿」

「へいへい。——てなわけで、イツセー。コイツがお前の修行相手だ」

「お初にお目にかかる、神龍殿、俺は元『六大龍王』の一匹、名をタンニーンという」
「オッス、オラー誠だ、よろしくな!! タンニーンのおっちゃん」

「フツ おっちゃんか、神龍殿に呼ばれるなら悪くは無いな、ドライグを宿すものを鍛えるのははじめてだ。お手柔らかに頼むぞ?」

そこにアザゼルが口を挟む。

「イツセーを鍛えるのはタンニーンだけじゃない」

「へっ…?」

「なあ? 冥界最強の女王さんよ」

その言葉に一誠が振り向くとそこには…。

そこには何時もの柔らかな雰囲気は也を潜め、臨戦態勢に入っているグレイファイアの姿があった。

「グレイファイアもオラの修行に付き合ってくれんのか?」

「はい、微力ながら、私も一誠様のお手伝いを致したく、アザゼル様にお願ひしました……」

「どうやら一誠には元龍王と冥界最強のクイーンが修行相手となるらしい」

「一誠は全員の修行の後、二人との修行に励んでもらう」

「ああ、ならおめえ達からだな!!　まずは朱乃から重りになってる服を貰って着替えてきてくれ」

「「「「はい!!」」」」

一誠の言葉にリアス達は動き出す。

「では、俺達はまた時間を置いてこよう」

「すまねえな、タンニーンのおっちゃん、また後で頼むぞ!!」

「俺も他のところを回ってくる、あとは頼んだぞイッセー」
そうして飛び立つアザゼル。

「リアス嬢、あの山を借りてもよろしいか？」
タンニーンが向こうの山を指差してリアスに問う。

「そうね。好きに使ってちょうだい」

「では、修行が終わり次第あそこに向かおう」

「ああ、よろしくな!!」

「では、私も頃合いを見て顔を出します」

そうしてグレイフィアもその場を離れていった。

こうして、一誠とグレモリー眷属との地獄の組手修行が行われようとしてい
た……。

昼は先生！夜は修行！兵藤先生は大忙し！

sideナレーション（界王）

一誠による組手修業が始まって数日……。

木場の場合……

「ハアツ……!!」

気合いの乗った声とともに木場が素早い動きで肉薄し、鋭い斬撃を繰り出す。

しかし一誠はその場から動かさず、指一本のみで防ぎきる。

木場も防がれたとみるや否や、高速で姿を消し、今度はあらゆる角度から攻め始める。

だが、またも一誠はその場から動くことはなくその剣戟全てを指を動かすのみで防ぐ。

「っ！ 魔剣」

ソード
魔剣

「ほいっと、終わりだ」

神器を解放しようとした木場だったが、振り上げた剣を止められ、額に重ためのデコピンを入れられ気絶した。

「さっきの動きはなかなかよかったぞ、オラもちつとヒヤツとしたぞ」

ゼノヴィアの場合……

「おめえ、そいつを振り回してるだけじゃ届かねえぞ」

聖剣デュランダルを手に、懸命に一誠に攻めかかるが魔剣の制御が儘ならないためか、先程から一誠に躲されてばかりである。

「くっ… ハアアツ!!!」

攻めきれずにいることに焦れたのか聖剣の力を解放しようとする。

「そりゃ駄目だゼノヴィア、そこは敵に隙を見せちまう。こんな風にな! よつと!」

そんな指摘とともに目前に現れた一誠に足払いをされ体勢を崩したところを勢い良

く振り回され倒れるのだった。

ギヤスパーの場合……

「ひいっ……!! お外こわいよお……服も重いですう……!!」

「おめえなあ……そんなんじや強くなれねえぞ、よし、おめえはそれ着て外を走り回れるようになるそこからだな」

アーシアの場合……

「ふう……。行きます!」

ダンツと力強踏み込み、一誠目掛けて突っ込み、体重の乗った鋭い突きを繰り出す。

「よっつー!」

しかしその一撃は難なく躲かれてしまう。

だが、そこで攻めの手を止めることなくアーシアは一誠仕込みのラツシュを叩き込む。

「いいぞアーシア! その攻めはいい感じだ」

一誠もその攻撃を受け流し、時には防ぎながら言葉をかけていく。

しばらくの後、アーシアの息が上がったところに組手は終了した。

「いい動きだったぞアーシア。おめえは回復がその役目だが、もしおめえが狙われ夕時の自衛の手段も持つとかねえとな」

「ハア::: ハア::: は、はい!!」

朱乃の場合:::...

「喰らいなさいっ:::!!」

雷を纏った拳で距離を詰め、一誠にラッシュを仕掛ける
しかし一誠はその攻めをヒョイヒョイと躲して、距離をとる

「その距離は私のテリトリーですわ!!」

雷の魔術を追い討ちに一誠めがけて落とす。

だが一誠はその場にはおらず、少し離れた所に降りたつ

「おお、あぶねえあぶねえ...」

「... そういう割には余裕そうですね!!」

そう言いつつ再びラッシュを仕掛ける朱乃だったが.....

「ここまでだ、朱乃」

そうして朱乃との組手は終わった

終わった後のこと.....

「なあ、朱乃おめえ、まだ力隠してんじゃねえか？
強くなりてえんなら、雷を纏った攻

撃に活かせばもっと強くなれんじゃねえか?」

というアドバイスがあつたという

リアスの場合……

「行くわよイツセー!!」

瞬時に肉薄し、一誠にラツシユを仕掛ける

ほかの三人と同じく防いだり、捌いたりしていく一誠だが、今回はそれだけではなかつた

攻撃の中に消滅の魔力を絡めて撃つて来るので、その都度避けたり弾いたりしてゐる。

「はあっ……!!」

しばらくそんな攻防が続いたが、終わりは一誠の気合砲でリアスが飛ばされたところであつさりと終了した

一誠は殴りあっていたグレイフィアを投げ飛ばす

「後ろがから空きだぞ!! 一誠!!」

タンニーンが火球ブレスを吐き

「おつとおつ!! プロモーション!! 騎士^{ナイト}!!」

一誠はプロモーションにて騎士になり、速度を上げブレスを躲す。

しかし、躲した先に今度はグレイフィアが迫りくる

「そこ!!隙あります!!」

魔術弾を打ちながら距離を詰め再び殴り合いになる

しかしそこは歴戦の猛者である一誠。

一誠の姿がボヤけ、グレイフィアの攻撃で消える。

「なっ…消えた!?!」

「ソイツは残像だ、でりやあああああつ!!」

一瞬で背後に現れた一誠が拳を振り抜く。

「っ!?!… くっ…!!」

驚愕するグレイフィアも咄嗟に防御の構えをとるが……………。

【ペシッ!!】

しかし拳のスピードを落とすとグレイフィアの額を軽い力で裏拳した。

「あう… えっ?」

突然の事に事態を把握しきれていないのか不思議そうな顔をしているグレイフィア……………。

「はははっ!! オラの勝ちだな」

「俺のことを忘れていないか…?」

「直後、一誠の真上に巨大な拳が迫り、踏みつける。」

「ふんっ…!!! んぐぐぐぐっ…!!! でりやあああつっ…!!!」
受け止めた一誠が全力でタンニーンを逆に振り回す。

「ぬおおおっ!?!」

「だああありやあああああつ!!!」

その勢いのまま思いつきり、その巨体を投げ飛ばす。

しかし、ドラゴン故にあっさり空中で体勢を立て直されてしまう。

「いくぞ!!プロモーション戦車!!」
ルーク

ルークにプロモーションし、素の力にさらに上乗せしてタンニーンとの距離を一瞬で詰めると連打を叩き込む。

「でりやりやりやりやりやりやりやりやりやりやりやりやりやりやっ!!!」

「グオツ！ アガツ！！ ヌオオオツ！！」

そこでとどめとばかりに背後に回り込んだ一誠がスレッジハンマーを叩き込む。

「だりやあああつ！！！！」

「グオオオオツ！！」

勢いよく地面に叩きつけられる元龍王……………。

一誠は降り立ちタンニーンに近寄る。

「わりいわりい、大丈夫か？おっちゃん」

「ああ、平気だ…。だが、さすがに今のは効いたぞ…。まさか素の力に戦車ルックのプロモーションだけでここまで力が跳ね上がるとは…。元の強さが如何に化け物か分からなくなるな……………」

「へへへっ！！」

「ですが、まだあの変身はお使いになれませんでしたね」

グレイフィアの言葉に一誠は小さく頷き言う。

「まあな、あの姿は気の消耗が激しいんだ。超^{スーパー}サイヤ人みてえに体に慣らすのもつても中々できなくてよ……」

「なるほど、ここぞというときに使う切り札になるのですね……」

「まあ、あの変身で相手されたら命が幾つあつても足りん……。なんと死を覚悟したか分からんぞ……」

「はははっ!! そっか? もう一辺くれえやってみようと思つてただけだな」

「やめろ……。メイドとドラゴンの死体が出来上がるぞ……」

「そんなことしねえさ……。ひっでえなあ……」

そんな風に話しつつ、その夜は老けて行くのだった